

平成 25 年度社会調査実習報告書
高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査



平成 26 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施する市民意識調査である。この調査の実施も平成 25 年度で、はや 3 回目を迎えた。これまでの調査を簡単に振り返ると、まず、平成 23 年度に実施された第 1 回調査では、地域と格差、高槻市民の家族関係、高槻市民とインターネットという 3 つのテーマから調査と分析が行われている。これらのテーマは、その年の 3 月に起きた東日本大震災を受けて、地域でのつながり、家族との絆、そしてインターネットによる情報の発信・共有の重要性が再認識されたその頃の状況と重なり、いわば当時の社会的テーマでもあった。

第 2 回調査では、前回の調査実績を踏まえて、家族との接触や、家庭における子どもの存在、夫婦の関係など、家族関係をより深く分析するミクロなテーマに加え、文化財や公共掲示物に対する市民意識などマクロな視点も取り入れ、高槻市民の意識を多次元で映し出している。

そして第 3 回目となる今回、調査テーマを「地域とコミュニティに関する調査」とし、これまで実施された 2 回の調査に関連する項目とともに、地域コミュニティにおける対人意識や地域活動、地域への社会貢献やボランティア活動、さらに人とのかかわりを促す地域づくりなどが質問項目に盛り込まれ、人々の信頼関係や結びつきを促す、いわゆる地域的ソーシャル・キャピタルをテーマとして取り込んだところに、本調査の特徴がある。たとえば、地域における子育ての助け合いや、近隣の人々との接触、公共空間におけるマナーなど、分析者はそれぞれの指標を用いて、様々な角度から個人と地域の関係を分析し、ともすれば内向きになりがちな地域コミュニティの在り方をデータを提示して問題化させている。これらの研究は、将来的な災害を視野に入れた自治体の防災対策として、特に地域コミュニティにおける人々の連携の重要性が見直されている現在、高槻市民の地域連携意識を身近に読み取ることのできる希少な機会ともなるだろう。

本調査では、過去 2 回の調査と同様、回収率が 60%を超える質の高いデータを得ることができた。この成果は何よりもまず、調査対象となった高槻市民のご協力のおかげである。この場をお借りして、ご協力いただいた高槻市民のみなさまに心より感謝申し上げたい。

また、高槻市と共同で調査を行うに当たり、高槻市広報広聴課の方々には様々なご協力をいただいた。さらに、松本渉先生には通年授業の実習として多方面に渡るご指導をいただいた。松本先生の的確なアドバイスがなければ、調査票の作成から報告書の執筆に至る一連のプロセスを学生とともに確実にこなすことはできなかっただろう。また、授業におけるティーチング・アシスタントの吉崎雅基さん、スチューデント・アシスタントの和田元貴さんと田中崇士さんには、授業を円滑に進めるにあたって臨機応変にさまざまな形でご尽力いただいた。そして何より、社会調査実習の授業に参加し、時には授業後に夜遅くまで作業を続けた学生のみなさんの一生懸命な努力がなければ、本調査もやり遂げることができなかった。ここで厚くお礼申し上げたい。

2014 年 3 月

関西大学総合情報学部「社会調査実習」担当講師 李 容玲

目次

はじめに		i
------	--	---

【本調査について】

第1章	調査の概要	李容玲・松本渉	1
第2章	調査結果	吉崎雅基・受講生一同	8

【地域活動への参加とコミュニティ満足度】

第3章	生活満足度とその要因	木村 太一	92
第4章	住民の地域社会に対する印象と社会貢献との 関係性	藤原 邦彦	96
第5章	地域のボランティア活動と収入等複数要因との関連	壺井 章賀	102
第6章	高槻市民の高槻まつりに対する関心度	千貫 綾佳	106
第7章	高槻市内で行われるイベント参加と近所づきあいの 関係	吉井 実南	112
第8章	高槻市民満足度に関する分析	細見 晶歩	122
第9章	大学の地域に対する貢献について	宮本 明実	128
第10章	高槻市の住みやすさとコミュニティ満足度	竹田 友香	134
第11章	高槻市のイメージ形成要因についての分析	岡本 香帆里	138

【地域コミュニティと家族】

第12章	子育てしやすい社会環境に関する分析	中村 佳世	143
第13章	子育ての環境についての分析	高宮 智仁	151
第14章	子育てしやすい社会環境についての研究	木村 イチン	155
第15章	子どもの人数と生活	勝又 隆行	159
第16章	夫婦の会話時間に影響を及ぼす要因とは	篠原 舞	165
第17章	新たな性別役割分業意識に関する分析	田中 隆介	169
第18章	商店街のイメージに関する調査	鄭 秀慧	174
第19章	商店街発展における少子高齢化と近所づきあいの 関連性	北口 亜梨沙	181
第20章	高槻市民の近隣住民との関わり合いについて	大谷 優奈	186

【地域ネットワークと市民生活】

第 21 章	在宅型テレワーク志向とパソコン熟練度	藤田 和夫	191
第 22 章	世代別のコミュニケーション意識について	田和 あかり	195
第 23 章	高槻市内における違法駐輪の影響とその対策の 必要性	竹田 幹	201
第 24 章	学生のバスのマナーとバスの満足感について	上田 規子	206
第 25 章	地域づくりと地域への愛着	松田 孝紀	214
第 26 章	政治への関心を持つ人の特性について	位田 智也	220
第 27 章	政治意識と市民生活の関連性	川合 智大	225
第 28 章	高槻市営バスの利用要因	川口 千里	231
第 29 章	高槻市営バスの満足度に関する要因についての 分析	下仲 悠希	236
	資料		241
	予告ハガキ		243
	調査票		245

第 1 章 調査の概要

李容玲・松本涉

1. 調査の概要とスケジュール

「高槻市と関西大学による市民意識調査」は、平成 25 年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、前期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、後期にはデータの打ち込み、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
前期	4/9	「社会調査実習」前期授業開講	
	4/16～5/14	基礎的な分析方法の習得	高槻市と関西大学の 打ち合わせ(随時)
	5/21～7/23	調査票の作成	
夏休み	7/23～8/6		調査票印刷
	8/7	調査票発送準備作業	
	7/31		サンプリング
	8/20		予告はがき発送
	8/22		調査票発送
	10/8		返送締切日
後期	9/24	「社会調査実習」後期授業開講	
	10/1～10/29	データの打ち込み・読み合わせ	
	11/5～12/3		データクリーニング
	11/5～	応用的な分析方法の習得	
	12/17	中間レポートの提出	速報版報告書執筆
	1/21	最終授業	
	1/25	最終レポートの提出	報告書執筆
2月～3月上旬		報告書編集	

2. サンプリング

調査対象者： 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民(1928 年 8 月 1 日～1993 年 7 月 31 日出生)

抽出名簿： 住民基本台帳（平成 25 年 7 月 31 日現在）

標本抽出法：層化抽出法

（具体的な手順）

1. 平成 25 年 6 月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された 12 の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本 2,000 を各層に割り当てる(表 2)。

表 2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	平成 25 年 6 月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
20 代	17,571	17,936	35,507	124	127	251
30 代	24,058	24,714	48,772	170	174	344
40 代	26,629	26,664	53,293	188	188	376
50 代	18,422	19,805	38,227	130	140	270
60 代	24,397	28,740	53,137	172	203	375
70 代以上	24,857	29,430	54,287	176	208	384
合計	135,934	147,289	283,223	960	1,040	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の 2 日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の 2 点)にとどめた。今回は、勤め人の夏休みなどを避けるため、お盆休みが確実に終わったと考えられる 8 月 20 日(火)のタイミングで予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、お盆が終わってから最初の木曜日である平成 24 年 8 月 22 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、うす水色(なお前年は浅黄[薄い青緑]色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は1ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの3点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4サイズ8ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字のMSゴシック、選択肢をMS明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角2サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角2サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

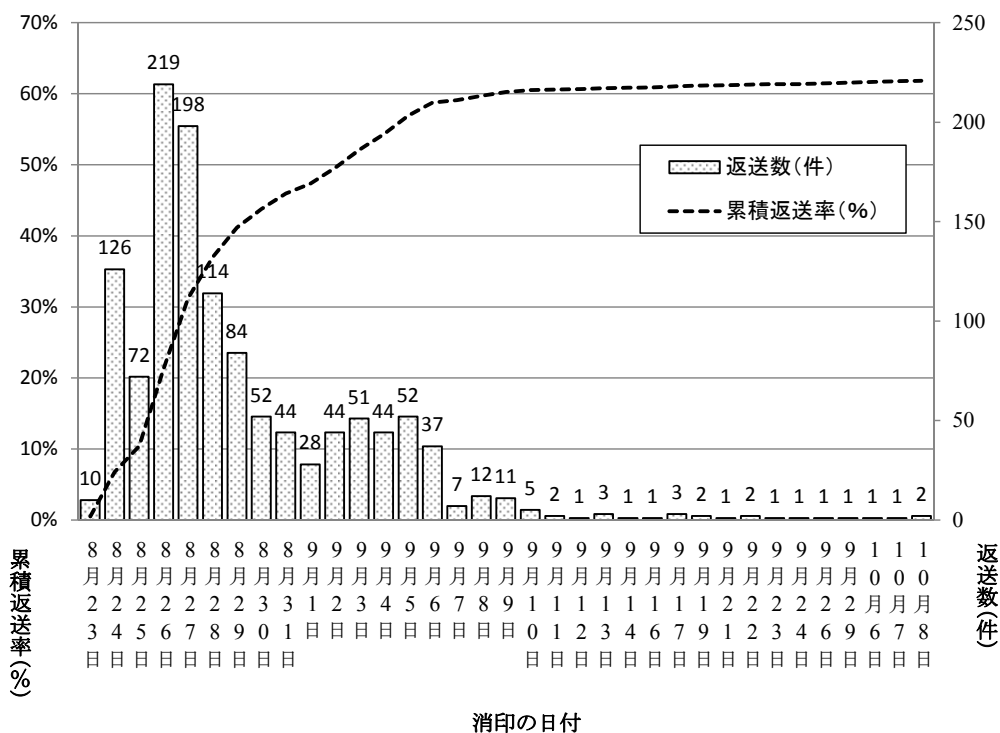
催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

4. 調査票の回収状況

4.1 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図1は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。最も早い消印は翌23日(金)である。昨年度の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第1の山は、返送数が126の8月24日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第2の山は返送数が219で最大の返送数を記録している8月26日(月)と、その翌日で返送数が198となる8月27日(火)の二日間である。調査票受領後にすぐにおとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえるが、それが二日間に渡っているのは、週末の天気の影響であろう。大阪府地域では、当年の8月24日(土)から25日(日)にかけての週末の天気は雨であったことから、天気の回復まで投函を延期した調査票があったものと考えられる。さらに、9月2日(月)も同様に週末直後の返送ピークを示すところであるが、直前の週末から一週間続いた断続的な雨の影響で、前年度に見られたような二回目の週末直後の山が現れなかったと推測される。



(注1) 返送数とは、回投票の返送日ごとの件数(日付は消印による)。
(注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。

図1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2 . 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月6日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月8日(火)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,234件であったが、1件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,233件、回収率を61.7%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	13	(0.65%)
	未返送	753	(37.65%)
	無効調査票	1	(0.05%)
	計	767	(38.35%)
2. 有効回答票		1,233	(61.65%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	(100.00%)

4.3 . 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性55.5%、女性65.4%となり、女性の方が10%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で72.9%、60代が77.9%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代では33.9%にまで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

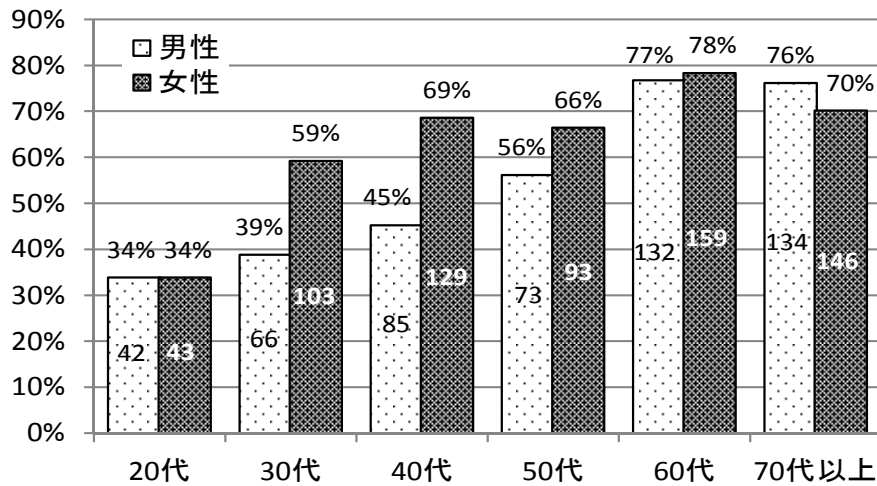
	男性	女性	不明	合計
回収標本	533	680	20	1,233
計画標本	960	1,040	—	2,000
回収率(%)	55.5%	65.4%	—	61.7%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分20件が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	85	169	214	167	292	280	26	1,233
計画標本	251	344	376	270	375	384	—	2,000
回収率(%)	33.9%	49.1%	56.9%	61.9%	77.9%	72.9%	—	61.7%

(注) 年齢層別の回収率の計算には、不明分26件が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。
(注3) 男女別・年齢層別のいずれかで不明となった分は含まれていない。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代、30代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、男性60代以上、女性40代以上といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布に当てはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、平成25年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。dfは、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。pは、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度dfから計算されている。

表6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	H25年 6月末人口	%
男性	20代	42	(3%)	17,571	(6%)
男性	30代	66	(5%)	24,058	(8%)
男性	40代	85	(7%)	26,629	(9%)
男性	50代	73	(6%)	18,422	(7%)
男性	60代	132	(11%)	24,397	(9%)
男性	70～84	134	(11%)	24,857	(9%)
女性	20代	43	(4%)	17,936	(6%)
女性	30代	103	(9%)	24,714	(9%)
女性	40代	129	(11%)	26,664	(9%)
女性	50代	93	(8%)	19,805	(7%)
女性	60代	159	(13%)	28,740	(10%)
女性	70～84	146	(12%)	29,430	(10%)
		1,205	(100%)	283,223	(100%)

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分28件が含まれていない。

(注2) 表右側はH25年6月末の高槻市全体の人口である。

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_h25/index.html) 参照。

(適合度検定) $\chi^2=82.0112$, $df=11$, $p=0.0000$

表7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	H25年6月末 世帯人員別人口	%
1人	108	8.8%	52,482	14.7%
2人	393	31.9%	91,988	25.8%
3人	273	22.1%	83,346	23.4%
4人	234	19.0%	91,196	25.6%
5人	76	6.2%	30,180	8.5%
6人	21	1.7%	5,694	1.6%
7人	6	0.5%	1,351	0.4%
8人	0	0.0%	296	0.1%
9人	0	0.0%	99	0.0%
10人	0	0.0%	20	0.0%
11人以上	0	0.0%	11	0.0%
無回答	122	9.9%	—	—
合計	1,233	100.0%	356,663	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_h25/1365985881749.html)

から算出した。ただし、回収標本が20～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=78.7834$, $df=10$, $p=0.0000$

第2章 調査結果

吉崎雅基・受講生一同

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

回答者の性別は男性が533人で女性が680人であり女性の方が多い(図1)。年齢は60代と70代以上は2割以上と多く、20代は6.9%と最も少ない(図2)。男女別に年齢を確認しても同様の分布をしている(図3)。

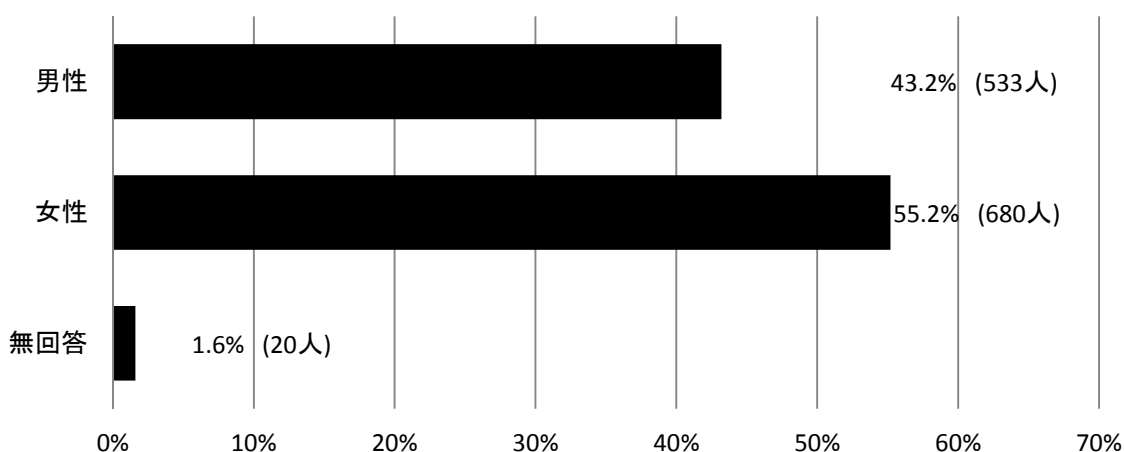


図1 Q64 性別

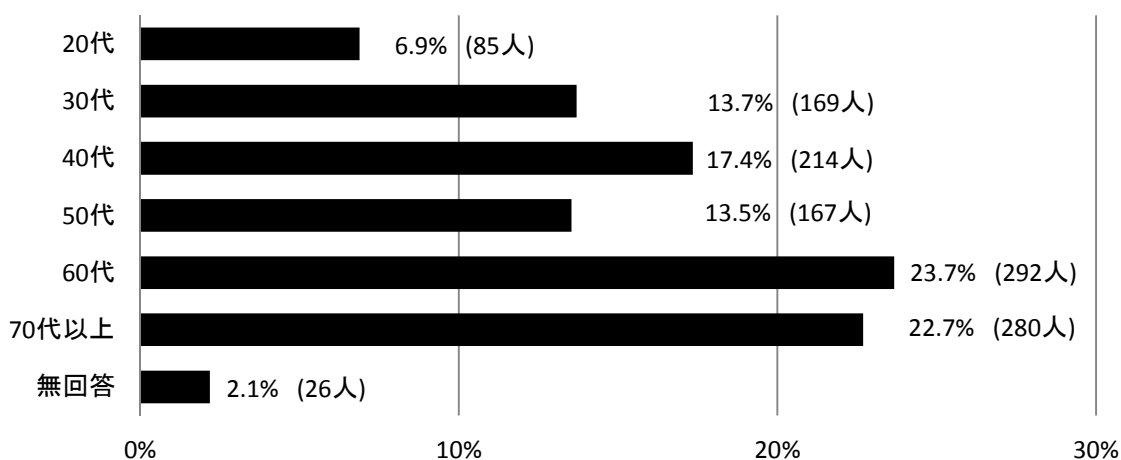


図2 Q65 年齢

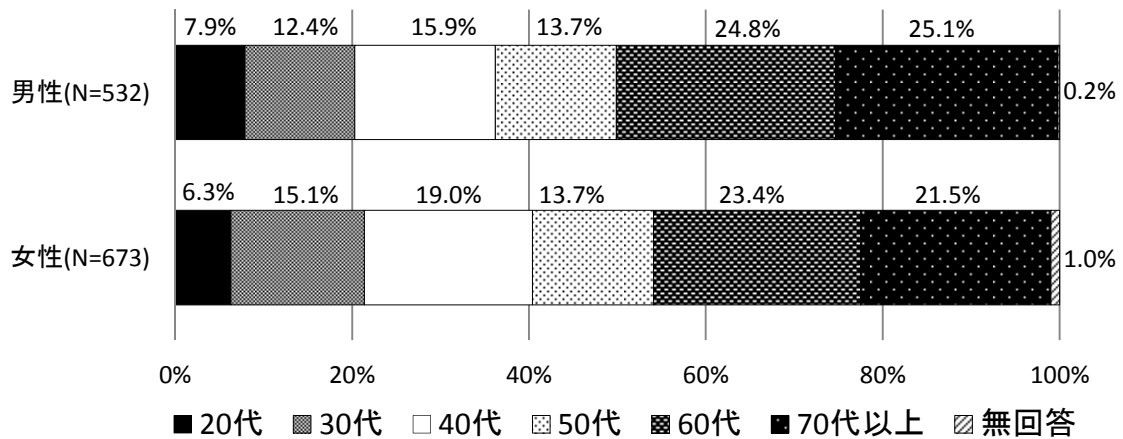


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、その項目の対象外である非該当者は分析から除外している。本調査の全回答者数は1,233人であり、性別・年齢の項目に回答があった対象者については図1と図2を参照のこと。

職業は、全体を見ると無職が27.2%と最も多く、次いで常時雇用者が多い。男性では常時雇用者が37.1%と最も多く、女性では家事専業が29.1%と最も多い。年代別で見ると、60代を超えると常時雇用者が大きく減少し、無職者が増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した者は40代で23.8%と全年代中最も高い割合である(表1)。

表 1 Q66 職業

		常時雇用の 勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
合計 (N=1233)		26.0	14.9	4.1	2.1	2.1	16.2	1.2	27.2	3.6	2.7
男女別	男性 (N=533)	37.1	8.4	8.1	0.8	3.6	0.4	1.3	34.9	4.5	0.9
	女性 (N=680)	17.8	20.4	1.0	3.2	1.0	29.1	1.2	21.8	2.6	1.8
年代別	20代 (N=85)	47.1	16.5	0.0	2.4	3.5	8.2	16.5	3.5	1.2	1.2
	30代 (N=169)	46.7	21.3	5.9	2.4	0.6	13.6	0.0	5.3	3.6	0.6
	40代 (N=214)	48.6	23.8	3.7	2.8	3.3	13.1	0.5	3.7	0.5	0.0
	50代 (N=167)	38.3	21.0	7.2	1.8	1.8	17.4	0.0	8.4	4.2	0.0
	60代 (N=292)	9.9	14.0	4.8	2.4	3.4	22.6	0.0	37.3	3.8	1.7
	70代以上 (N=280)	1.1	2.1	1.8	1.1	0.7	16.1	0.0	67.9	5.7	3.6

労働日数は、全体を見ると0日と5日が30%前後とほぼ同じ割合である。女性では5日が25.7%と全体や男性に比べて少ない。20代～50代では50%前後が5日と回答している。60代以上になるとその割合は減少し、一方で0日が60代で44.2%、70代以上で57.1%と増加している。1～2日と6～7日は、70代以上を除いてどの年代でも1割程度である(図4)。

最終学歴は、男性では「大学・大学院」が42.8%と最も多いのに対し女性では17.4%と男性よりも少なく、高校が37.9%と最も多い。年代別に見ると、20代では「大学・大学院」が56.5%であるが徐々に減少し、70代以上では15.0%と少なくなっている。「専門学校」も同様の傾向にある。反対に、20代では「高校」が11.8%であるが徐々に増加し、70代以上では51.4%と多くなっている。「中学」も同様の傾向にある(図5)。

居住地に関しては榎田地区が0人であったため、それ以外の地区のみを提示している。ここでの地区とは小学校の校区を参考にしている。各地区と該当小学校区は高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)、高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)、五領地区(五領・上牧小学校)、高槻西地区(群家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)、如是・富田地区(芝生・丸橋・寿永・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)、三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)である(図6)。

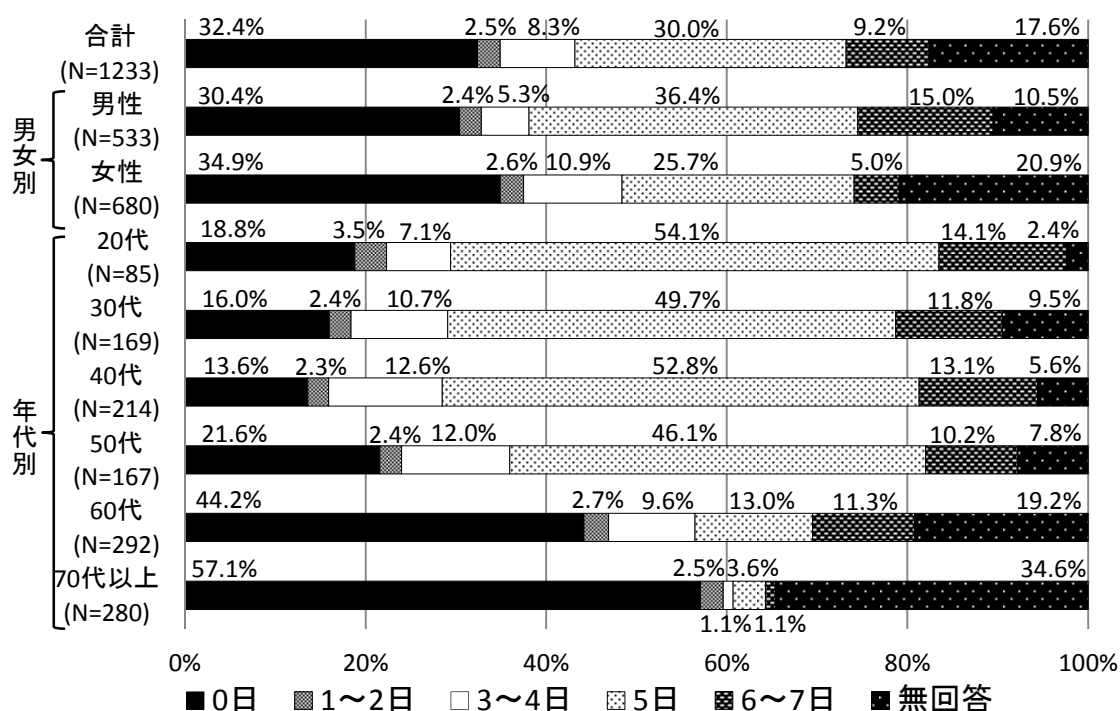


図4 Q68 週あたりの労働日数

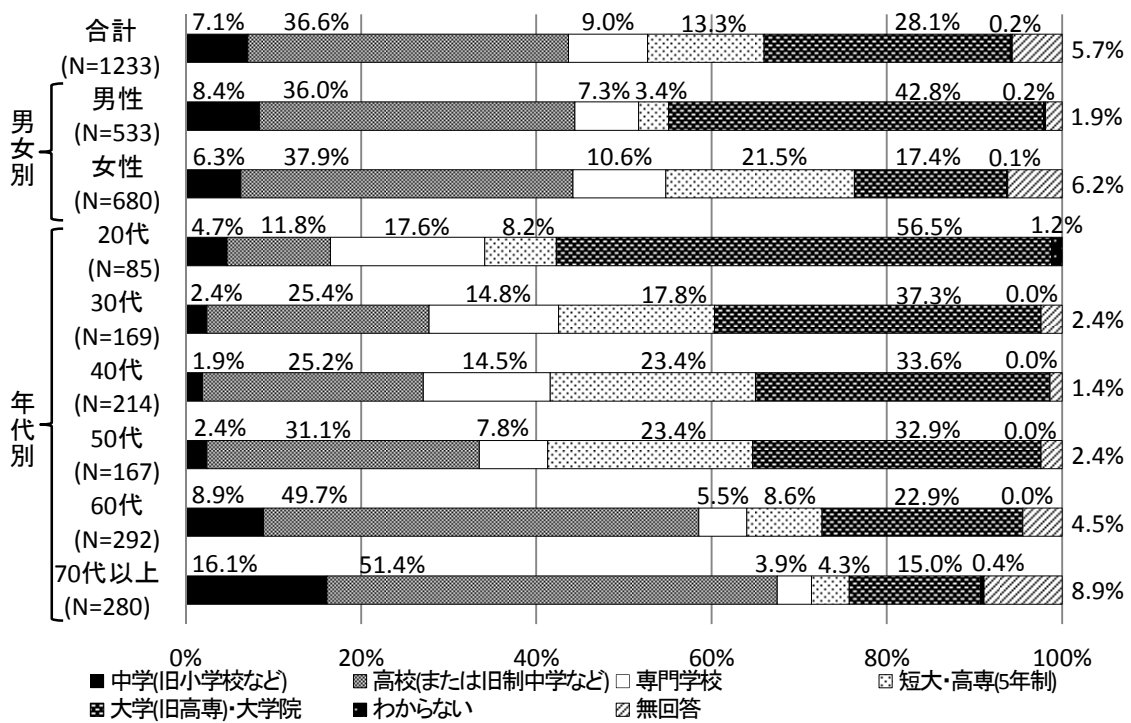


図 5 Q69 最終学歴

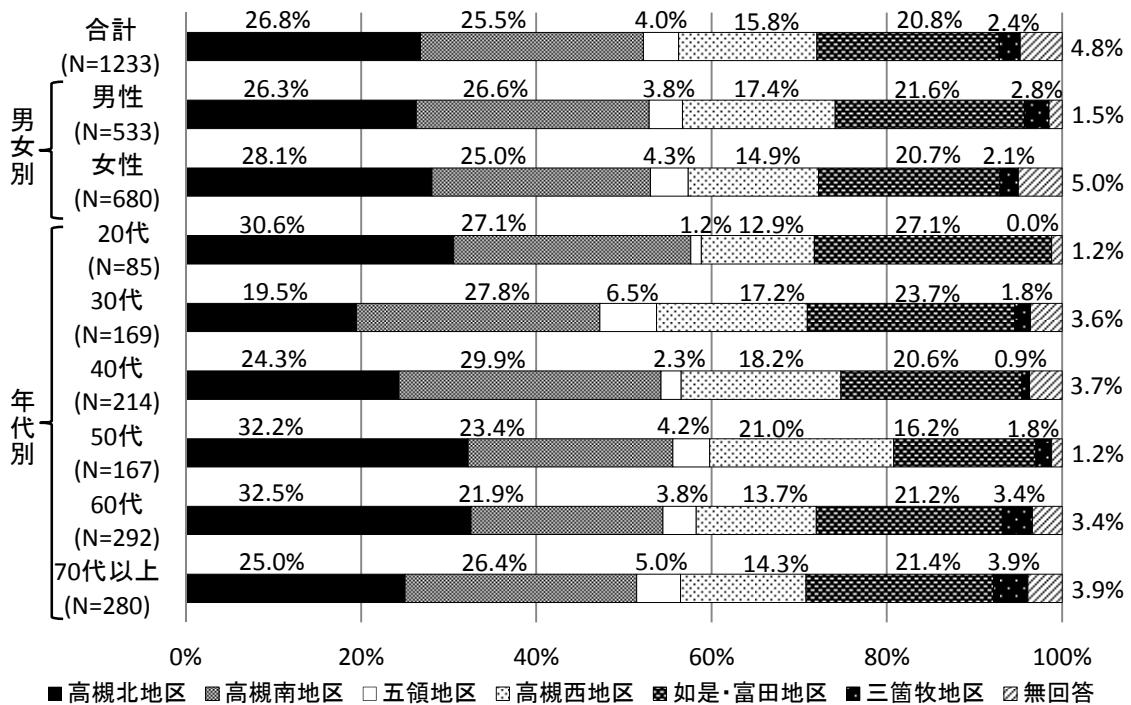


図 6 Q70 居住地域

高槻市内での居住年数に関しては、全体の8割以上が10年以上市内に居住していることが分かる。大きな男女差は見られない。年代別で見ると、20代では「20年以上30年未満」が63.5%と最も多く、子どものころから市内に居住していることが分かる。70代以上では「40年以上50年未満」が48.2%と最も多い(表2)。

市民の住居は、男女別・年代別のどの層でも「一戸建て」の方が多い。全体および男女ともに非常に類似した割合であるが、年代別で見ると、年代が上がるごとに「一戸建て」の割合が徐々に増加している(図7)。

居住形態は、男女別・年代別のどの層でも「持ち家」が60%以上や70%以上と最も高い割合である。20代では「民間の賃貸住宅」も25.9%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少している。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」は、男女別・年代別のどの層でも5%から10%近く存在する(図8)。

表2 Q71 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
合計 (N=1233)		1.7	3.2	3.2	6.8	13.5	17.4	22.5	21.9	8.4	1.5
男女別	男性 (N=533)	1.9	3.4	3.0	7.3	15.4	16.5	20.5	22.5	8.8	0.8
	女性 (N=680)	1.6	3.2	3.2	6.5	12.4	18.5	24.3	22.1	7.9	0.3
年代別	20代 (N=85)	5.9	10.6	4.7	4.7	10.6	63.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代 (N=169)	3.0	10.7	8.3	17.8	16.6	8.3	35.5	0.0	0.0	0.0
	40代 (N=214)	0.9	4.2	5.6	12.1	26.6	11.2	17.8	20.6	0.5	0.5
	50代 (N=167)	2.4	1.8	2.4	4.8	16.8	25.1	18.6	13.8	14.4	0.0
	60代 (N=292)	0.7	0.3	1.0	2.4	10.6	17.1	32.9	22.9	11.3	0.7
	70代以上 (N=280)	1.1	0.0	0.4	2.9	3.9	9.6	17.9	48.2	15.0	1.1

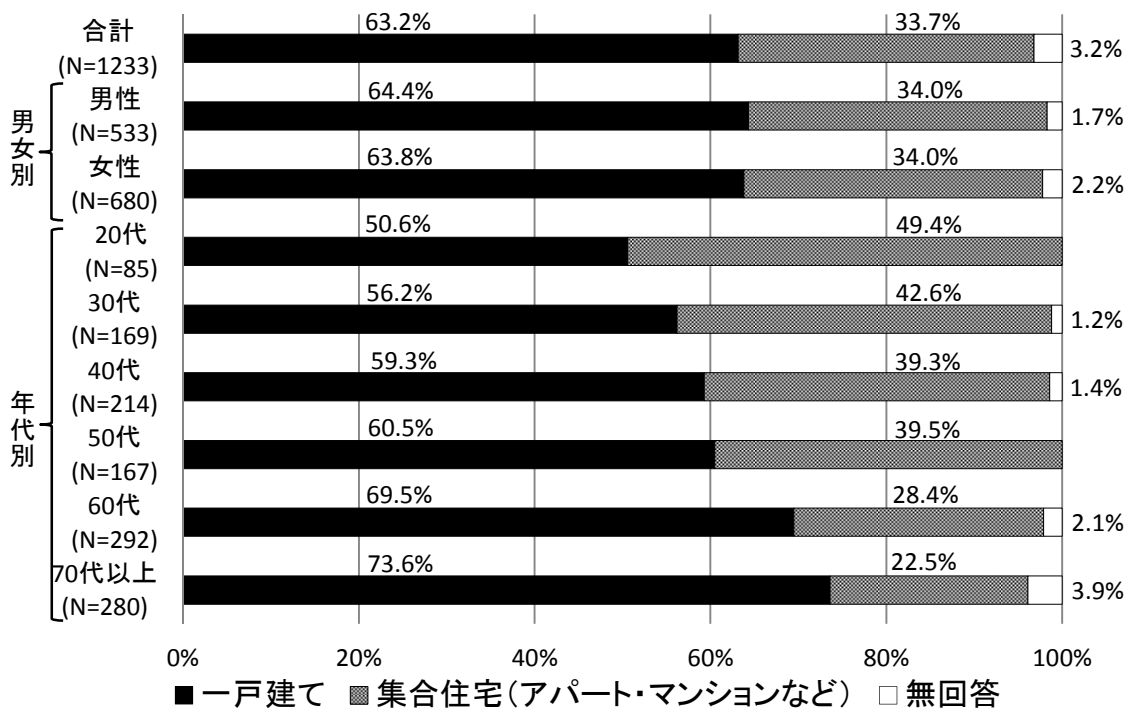


図 7 Q72 住居

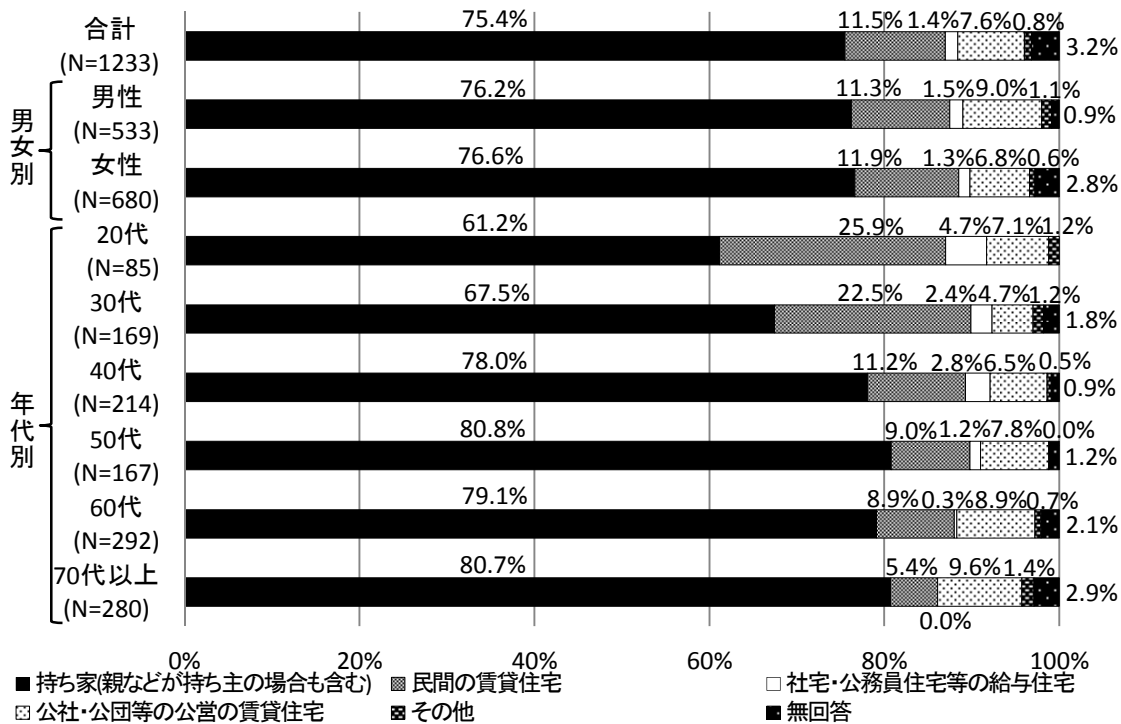


図 8 Q73 居住形態

世帯人数に関して、その多くは2～4人世帯である。20代から40代では「4人」が最も多く、50代以上では「2人」が最も多い。60代以上では特に2人世帯が4割以上を占めている(表3)。

表3 Q63 世帯人数

									(%)
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	無回答
合計 (N=1233)		8.8	31.9	22.1	19.0	6.2	1.7	0.5	9.9
男女別	男性 (N=533)	7.7	32.5	23.3	19.5	5.3	1.7	0.8	9.4
	女性 (N=680)	9.4	31.5	21.6	18.8	6.9	1.8	0.3	9.7
年代別	20代 (N=85)	9.4	22.4	17.6	32.9	11.8	3.5	2.4	0.0
	30代 (N=169)	5.9	16.0	30.8	33.7	4.7	3.6	1.2	4.1
	40代 (N=214)	6.1	14.5	26.6	31.3	11.7	2.3	0.0	7.5
	50代 (N=167)	6.0	27.5	24.0	24.0	11.4	1.2	0.0	6.0
	60代 (N=292)	10.3	42.5	22.9	10.3	1.7	1.0	0.3	11.0
	70代以上 (N=280)	12.1	50.0	13.2	3.2	2.9	0.7	0.4	17.5

世帯収入は、全体および男女別に見た場合では「200～400万円未満」が最も多い。年代別に見ると、20代では「200万円～400万円未満」が24.7%と最も多いが、30代では「400万円～600万円未満」、40代では「400万円～600万円未満」と「600万円～800万円未満」、50代では「800万円～1,000万円未満」と、年代が上がるごとに最も割合が高い収入が高額になっている。ただし60代以上では「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q74 世帯収入

		(%)									
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
合計 (N=1233)		5.1	8.3	26.5	17.1	11.5	6.9	5.4	2.0	6.1	11.0
男女別	男性 (N=533)	2.8	7.7	30.2	19.9	12.6	7.3	5.6	3.0	5.4	5.4
	女性 (N=680)	6.9	9.0	24.4	15.4	11.0	6.8	5.3	1.3	6.6	13.2
年代別	20代 (N=85)	5.9	4.7	24.7	15.3	5.9	9.4	5.9	2.4	16.5	9.4
	30代 (N=169)	4.1	6.5	17.2	24.3	18.3	5.9	4.1	1.2	8.9	9.5
	40代 (N=214)	3.7	5.1	14.0	22.0	22.0	10.7	8.9	2.3	5.1	6.1
	50代 (N=167)	4.8	4.8	16.8	16.2	16.2	16.8	10.8	4.2	3.6	6.0
	60代 (N=292)	7.9	11.3	32.2	15.4	5.5	3.8	4.1	3.1	4.5	12.3
	70代以上 (N=280)	3.6	12.5	44.3	13.2	5.7	1.8	2.1	0.0	5.0	11.8

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけではなく、意識や行動などの項目について結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を用い、非該当者は分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については8ページの図1と図2を参照のこと。

ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

Q1の生活満足度について見ると、男女別・年代別のどの層でも半数以上が「満足」もしくは「やや満足」という肯定的な意見であることが分かる。なお「満足」と回答した人の割合は70代以上が最も高く、反対に50代が最も低いという結果である(図9)。

Q2の居住地域の暮らしやすさについては、男女別・年代別のどの層でも「非常によい」もしくは「まあよい」と回答した人が8割以上である。20代では「非常によい」の割合が25.9%と特に高い(図10)。

Q3の地域にどれくらい住み続けたいかについて見ると、20代で「ずっと住み続けたい」と回答した人の割合は10.6%であるのに対して、70代以上では33.6%であり、年代によって大きな差があることがわかる。男女別では差はほとんど見られない(図11)。

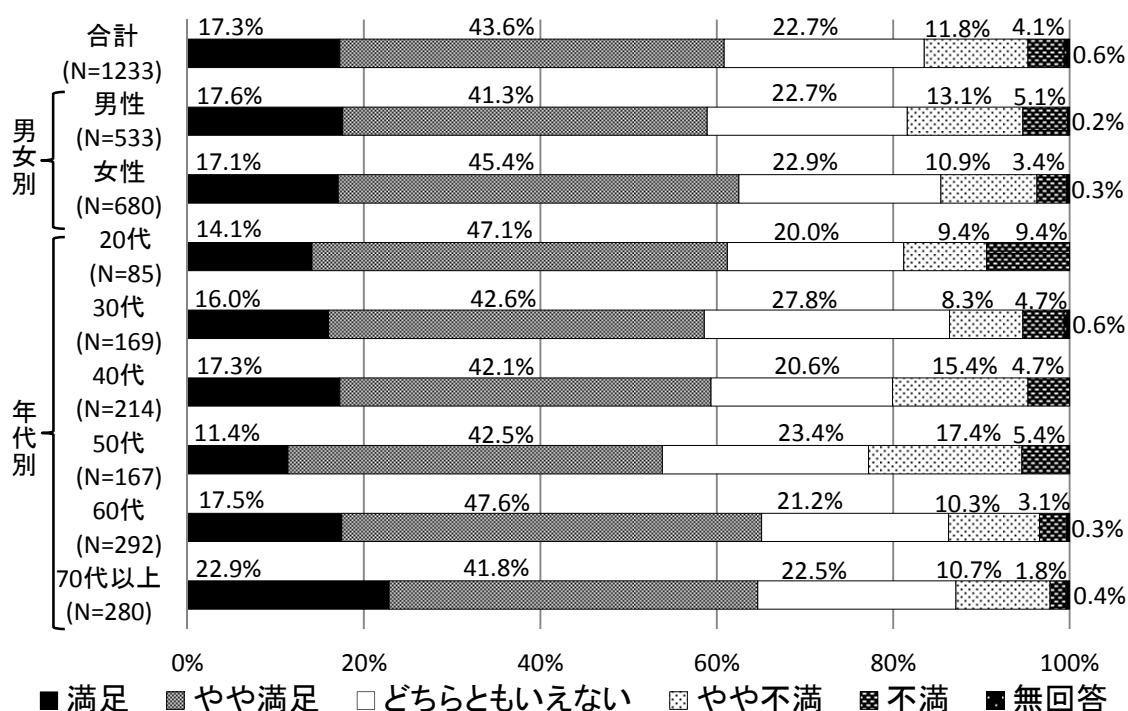


図9 Q1 生活満足度

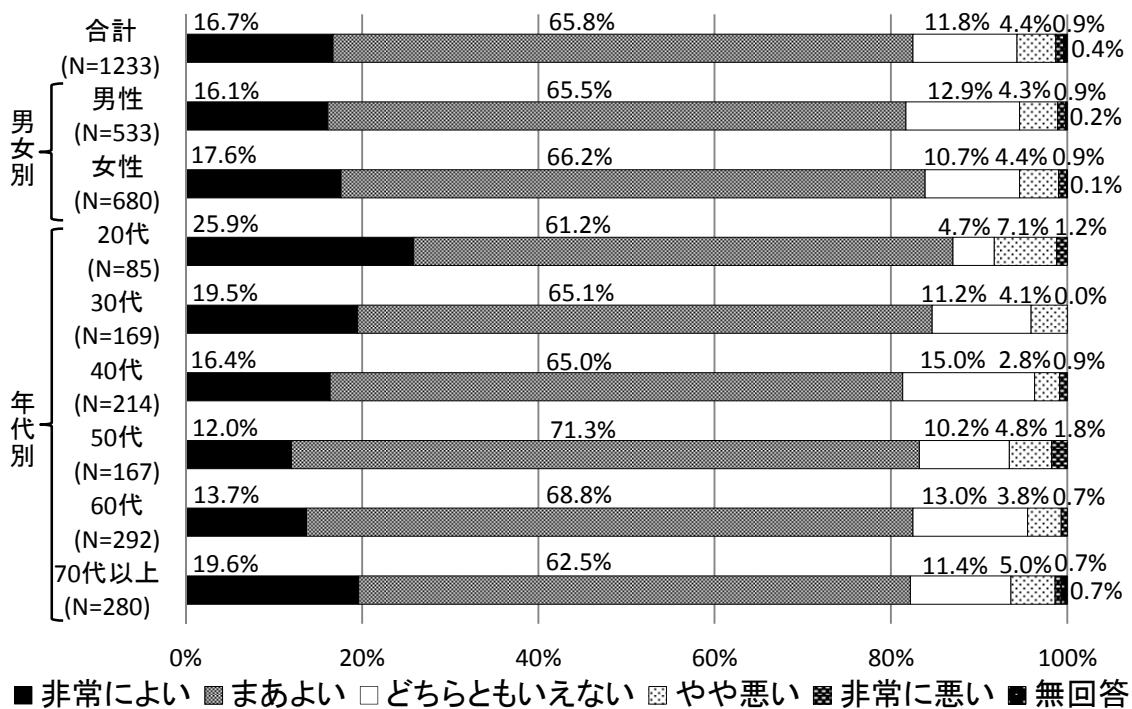


図 10 Q2 地域の暮らしやすさ

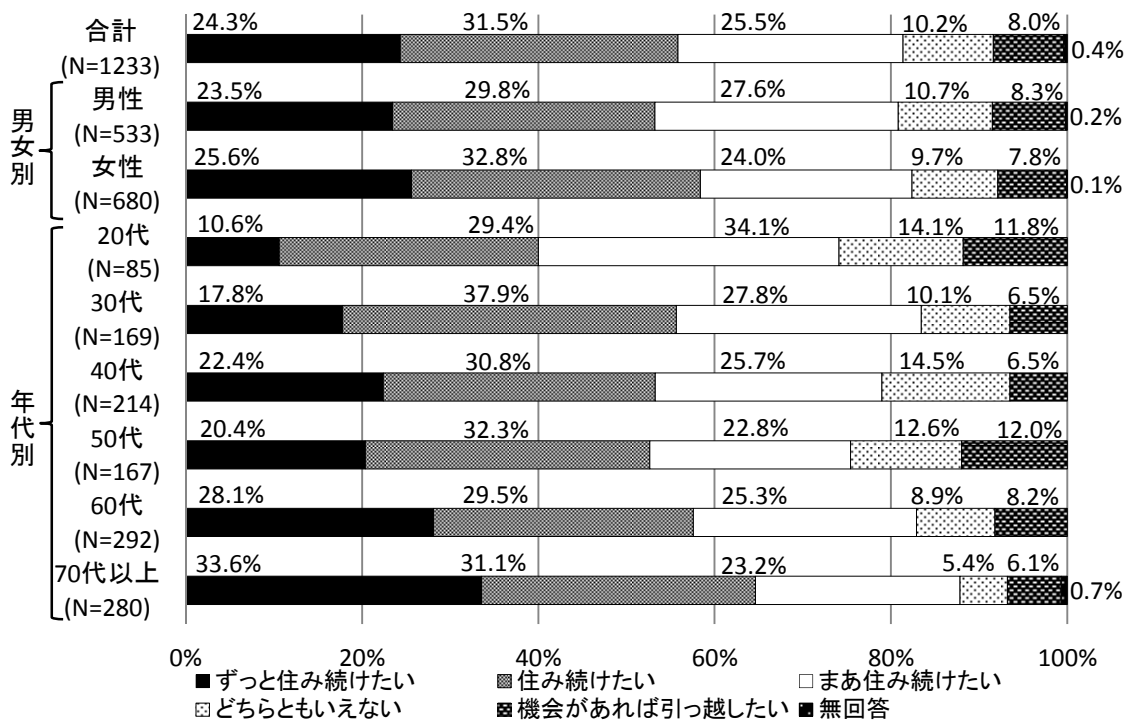


図 11 Q3 地域にどれくらい住み続けたいか

Q4の地域のために役に立ちたいかについて見ると、男女別・年代別のどの層でも「ややそう思う」の割合が最も高い。年代が上がるにつれて「そう思う」の割合が増加している。反対に「あまりそう思わない」と「そう思わない」の割合は男女別・年代別のどの層でも低い(図12)。

Q5の近所の人たちとどの程度世間話をするかに関しては、女性と60代以上を除いて「ほとんどない」の割合が最も高く、「週に1~2日」と「月に1~2日」が同程度の割合である。女性と60代以上では「週に1~2日」の割合が最も高い(図13)。

Q6の近所づきあいを増やしたいかに関しては、男女別・年代別のどの層でも「どちらともいえない」の割合が6割~7割と最も高い(図14)。

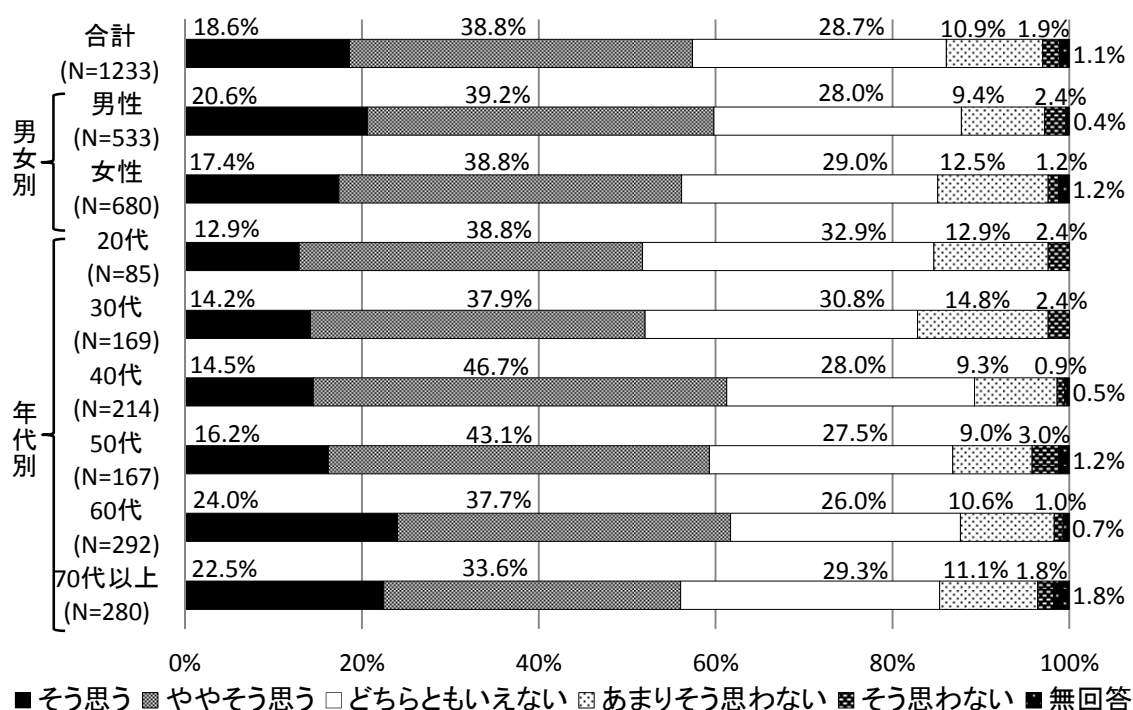


図12 Q4 地域のために役に立ちたいか

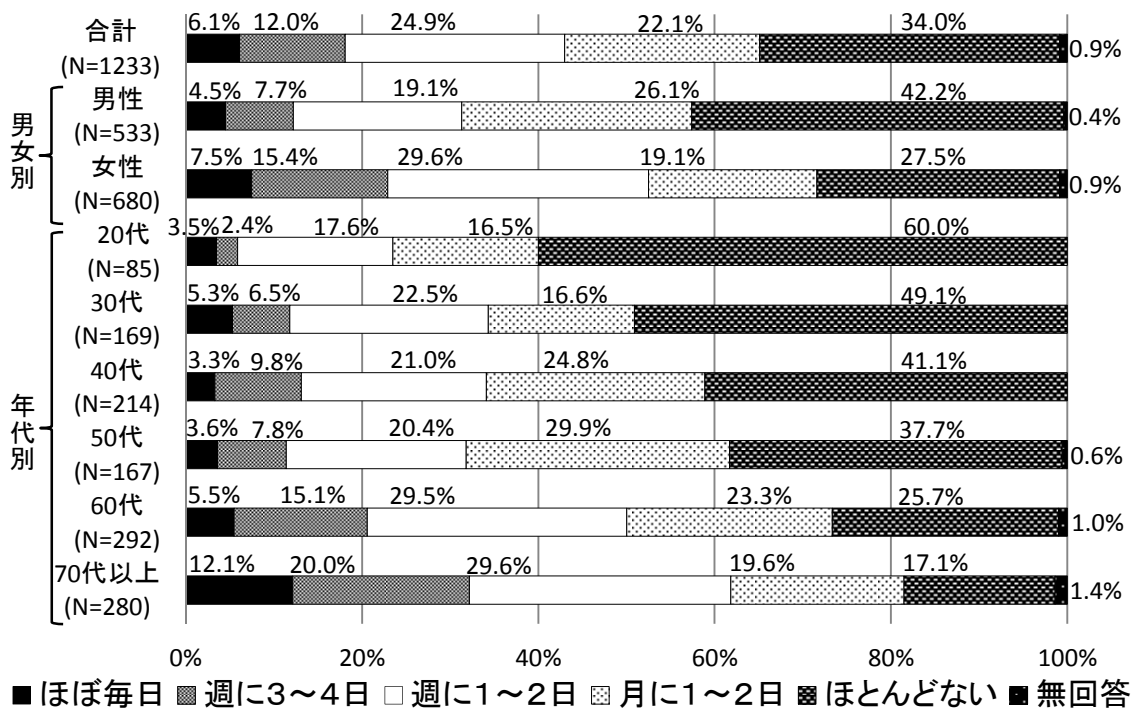


図 13 Q5 近所の人たちとどの程度世間話をするか

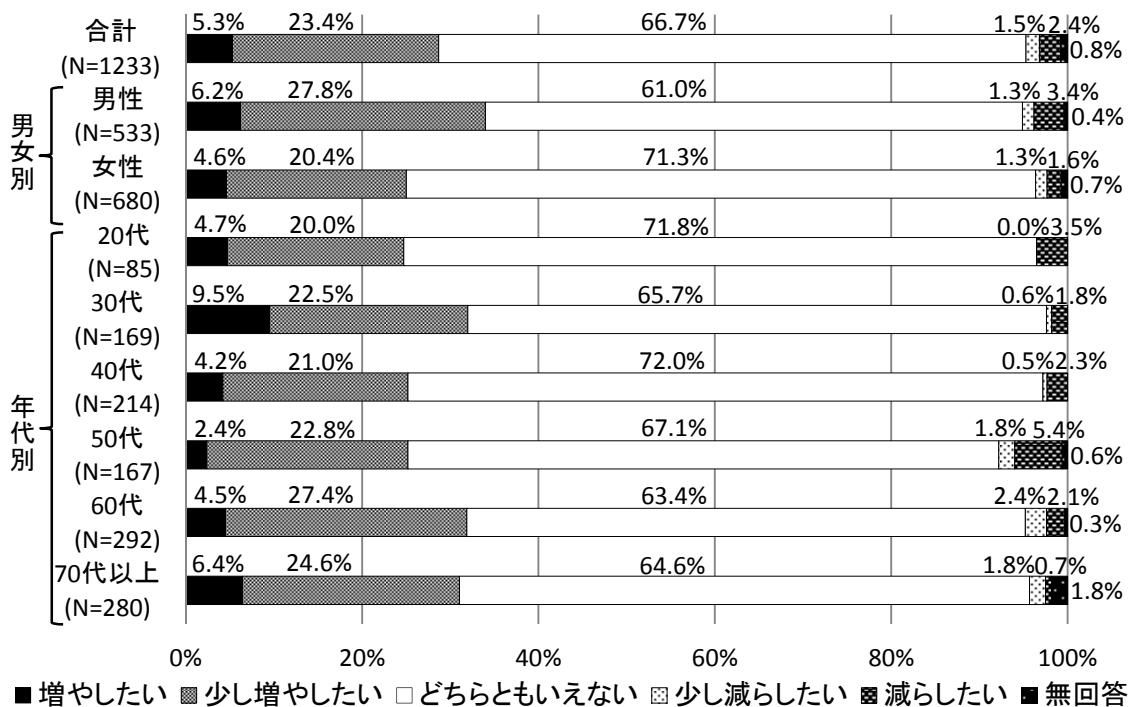


図 14 Q6 近所づきあいを増やしたいか

Q7の地域で親しくしている人は多いかについては、70代以上では「やや少ない」、70代以上を除くすべての年代と男性・女性では「少ない」の割合が最も高い。「多い」と「やや多い」を合わせた割合は男女別・年代別のどの層でも2割前後である(図15)。

Q8の高槻市のイメージについて見ると、男女別での違いはほとんど無いことがわかる。男女別・年代別のどの層でも7割程度の回答者が高槻市に対して肯定的なイメージを持っている。特に20代では「良い」の割合が他の年代に比べて10ポイントほど高い(図16)。

Q9の交通や施設の満足度について、Q9Aの電車に対する満足度では、男女別・年代別のどの層でも「満足」の割合が最も高く、「やや満足」と合わせた割合が8割程度である(図17)。

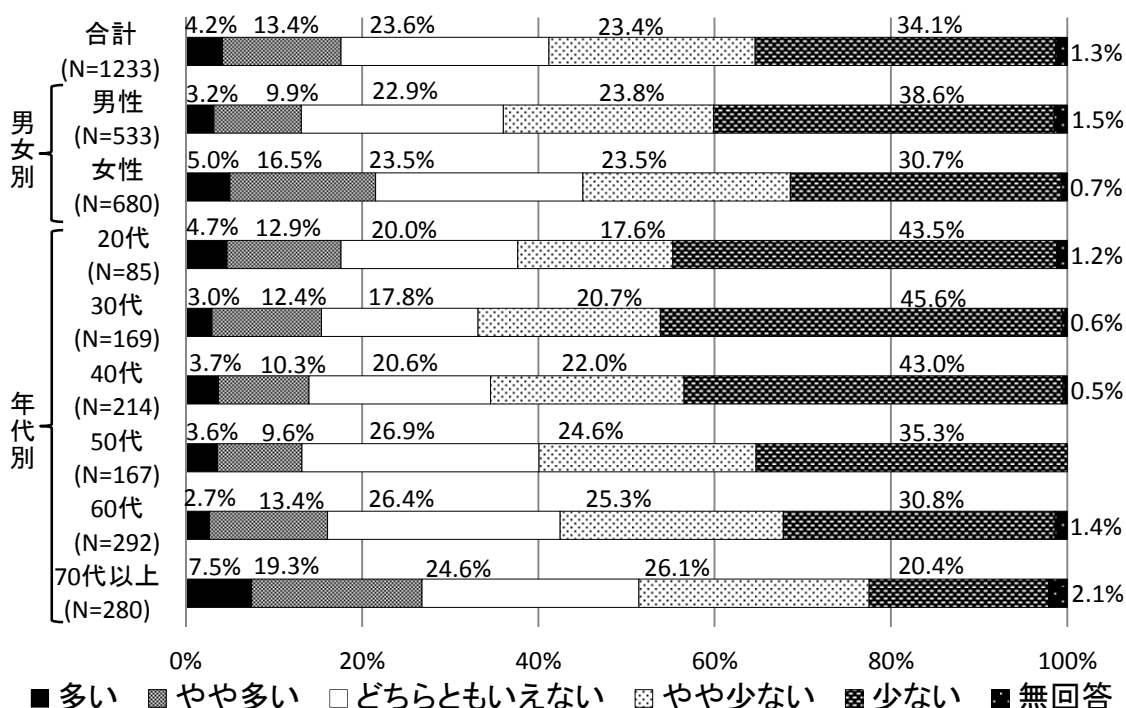


図15 Q7 地域で親しくしている人は多いか

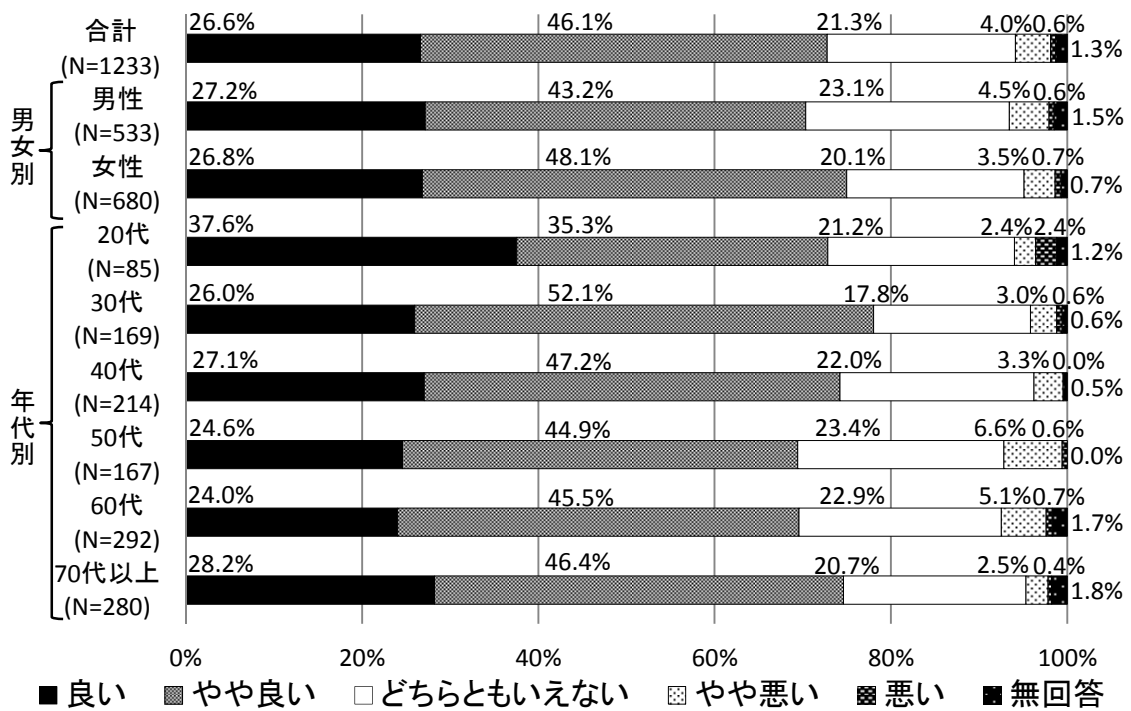


図 16 Q8 高槻市のイメージ

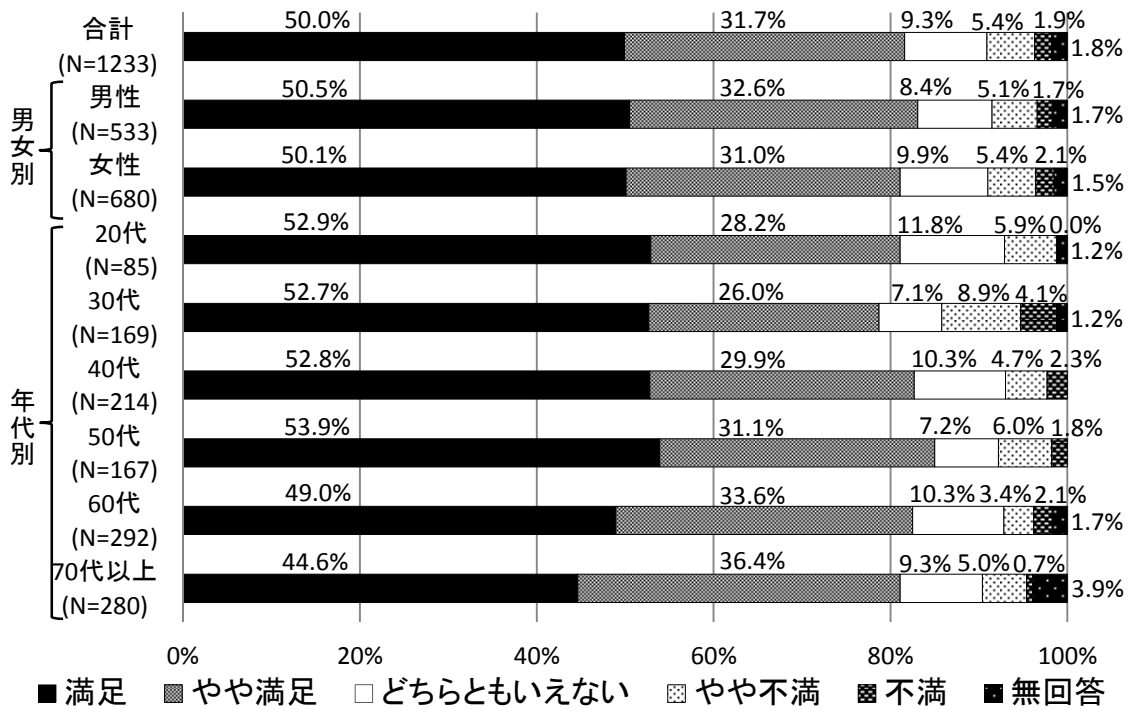


図 17 Q9A 交通や施設の満足度（電車）

Q9Bのバスに対する満足度では、70代以上での「満足」と「やや満足」を合わせた割合が72.9%と特に高い(図18)。

Q9Cの医療機関に対する満足度では、男女別・年代別のどの層でも「やや満足」の割合が最も高く、次いで「満足」の割合が高い(図19)。

Q9Dの図書館に対する満足度では、男女別・年代別のどの層でも5割以上の回答者が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。しかし、男性と20代と50代と70代以上では「どちらともいえない」の割合が最も高い(図20)。

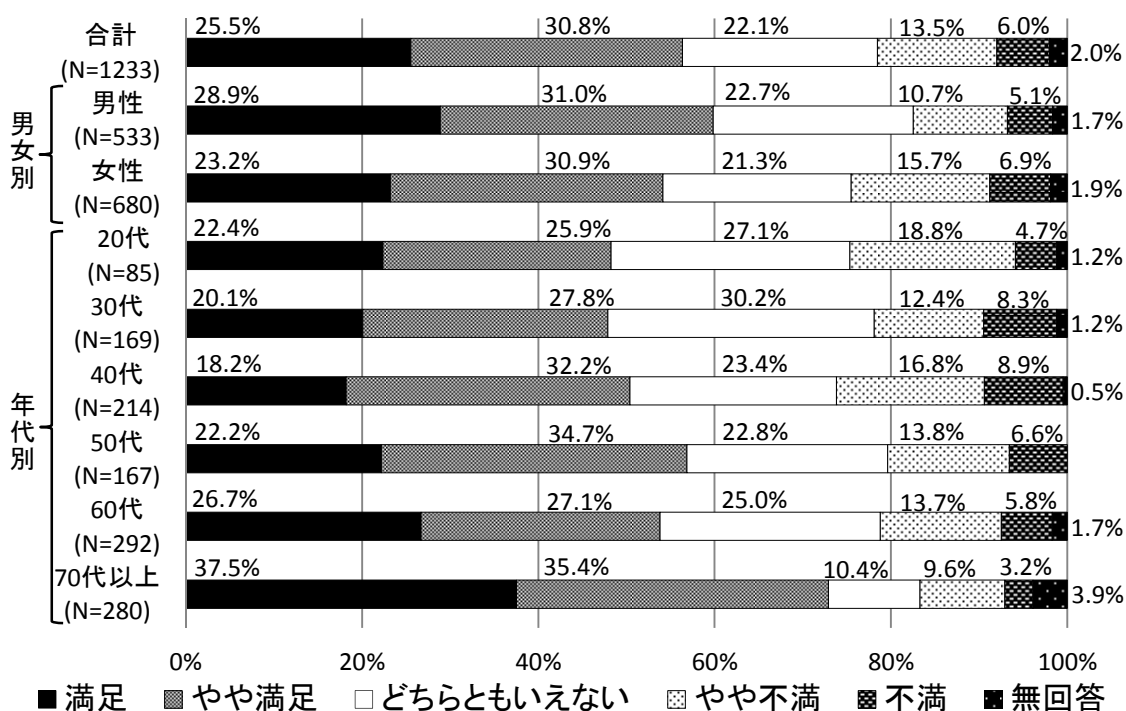


図18 Q9B 交通や施設の満足度(バス)

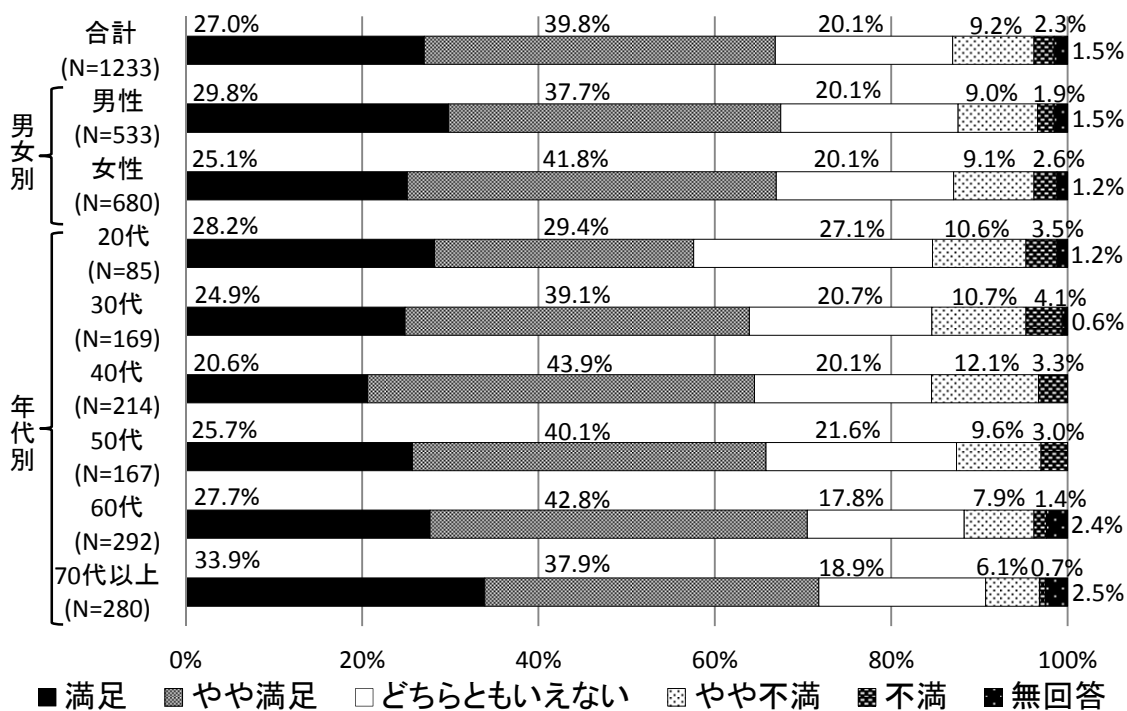


図 19 Q9C 交通や施設の満足度（医療機関）

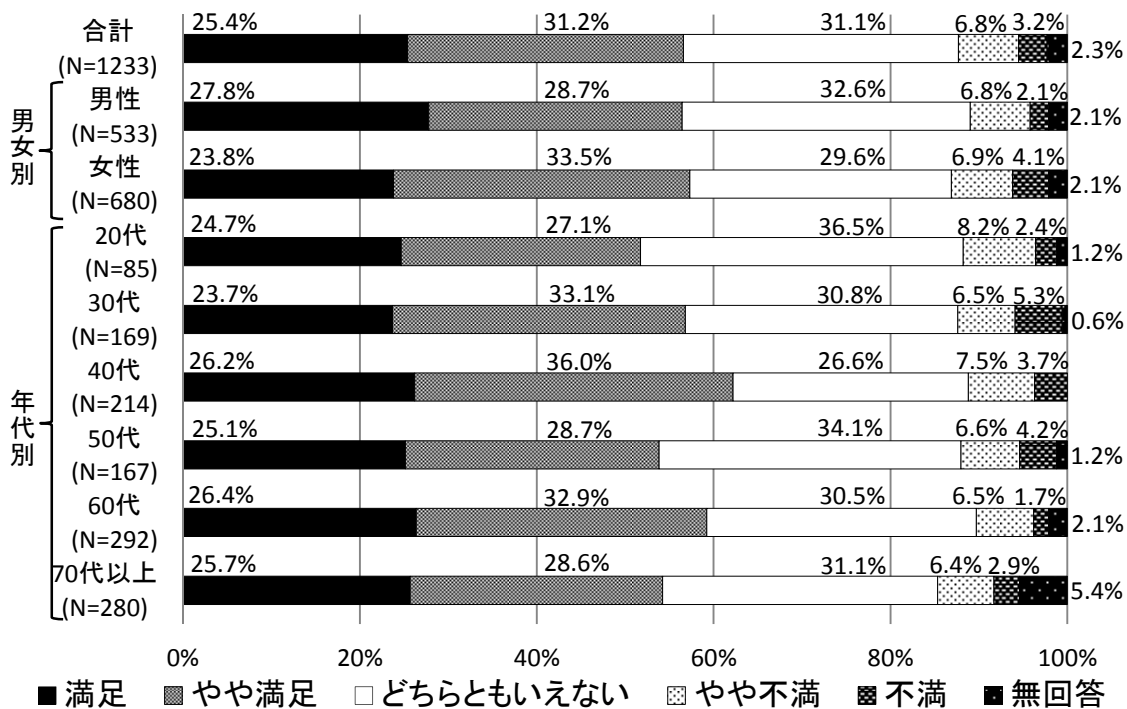


図 20 Q9D 交通や施設の満足度（図書館）

Q9E の市役所に対する満足度では、すべての年代で半分程度が「満足」または「やや満足」と回答している。70代以上ではその割合が6割以上であり特に高い(図21)。

Q9F の商店街に対する満足度では、70代以上を除くすべての年代と男性・女性で「どちらともいえない」の割合が最も高く、「満足」と「やや満足」を合わせて半分程度の割合である。70代以上では「やや満足」の割合が最も高いため、「満足」と「やや満足」を合わせると6割近くになる(図22)。

Q10 の高槻市営バスの運行本数の満足度については、60代以上を除くすべての年代と男性・女性で「どちらともいえない」の割合が最も高い。年代別で見ると「満足」と「やや満足」を合わせた割合が徐々に増加しており、70代以上では6割近くを占めている。70代以上を除くすべての年代と男性・女性で「知らない」の割合が1割から2割程度ある(図23)。

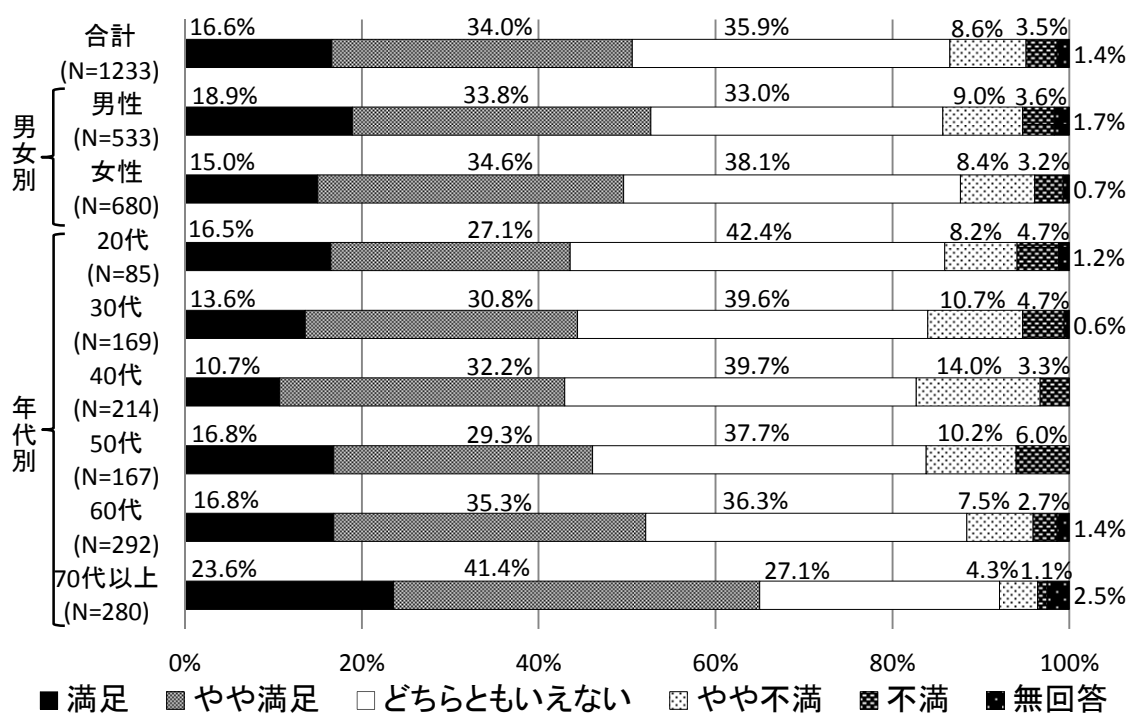


図 21 Q9E 交通や施設の満足度(市役所)

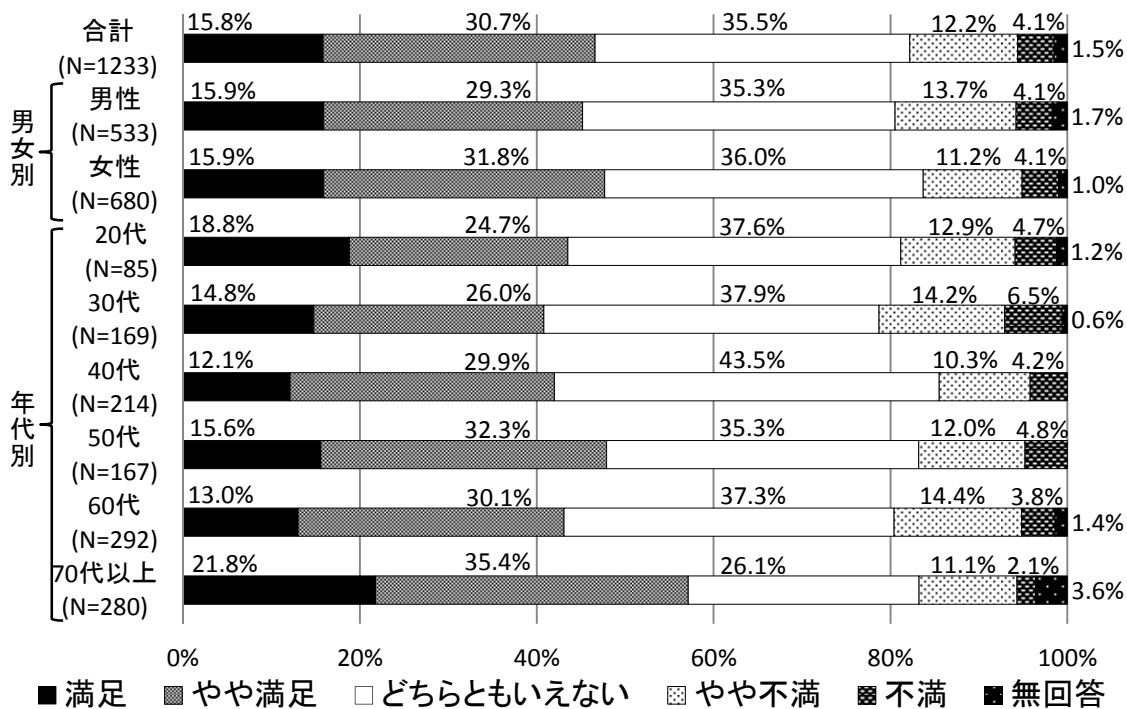


図 22 Q9F 交通や施設の満足度（商店街）

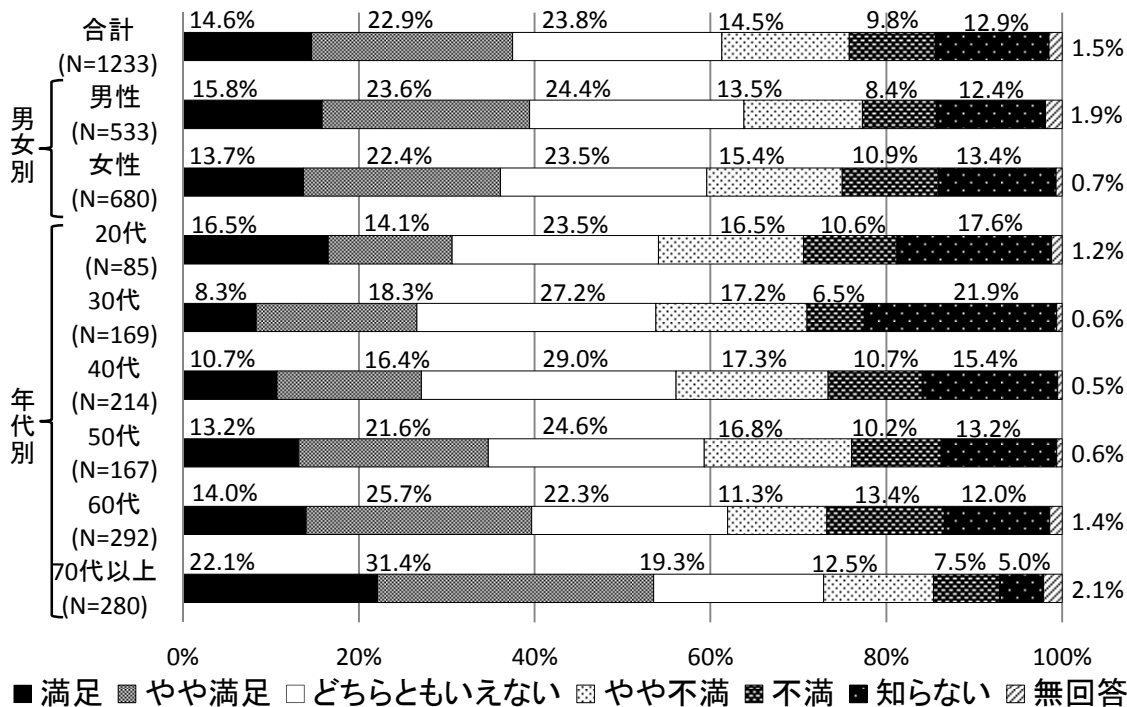


図 23 Q10 高槻市営バスの運行本数の満足度

Q11 の高槻市内でバスを利用する頻度については、年代別で見ると「月に1～2日」にあまり変化はないが、「週に1～2日」は年代が上がるほど割合が増加しており、特に70代以上で大きく増加している。また、70代以上を除くすべての年代と男性・女性で「利用しない」が2割以上いる。男女間であまり差は見られない(図24)。

Q12 の生徒や学生はバス内でマナーを守っているかについては、「そう思う」と「ややそう思う」の割合が20代で最も高い。30代で大きく減少するが、年代が上がるにつれて再び増加している。20代と60代以上を除いて「どちらともいえない」の割合が最も高い(図25)。

Q13 の生徒や学生以外はバス内でマナーを守っているかについては、全体で見ると生徒や学生のマナーに対する意見から大きくは変化していない。年代別に見ると、20代以外のすべての年代で生徒や学生のマナーに対してよりも「そう思う」と「ややそう思う」の割合が高い(図25, 図26)。

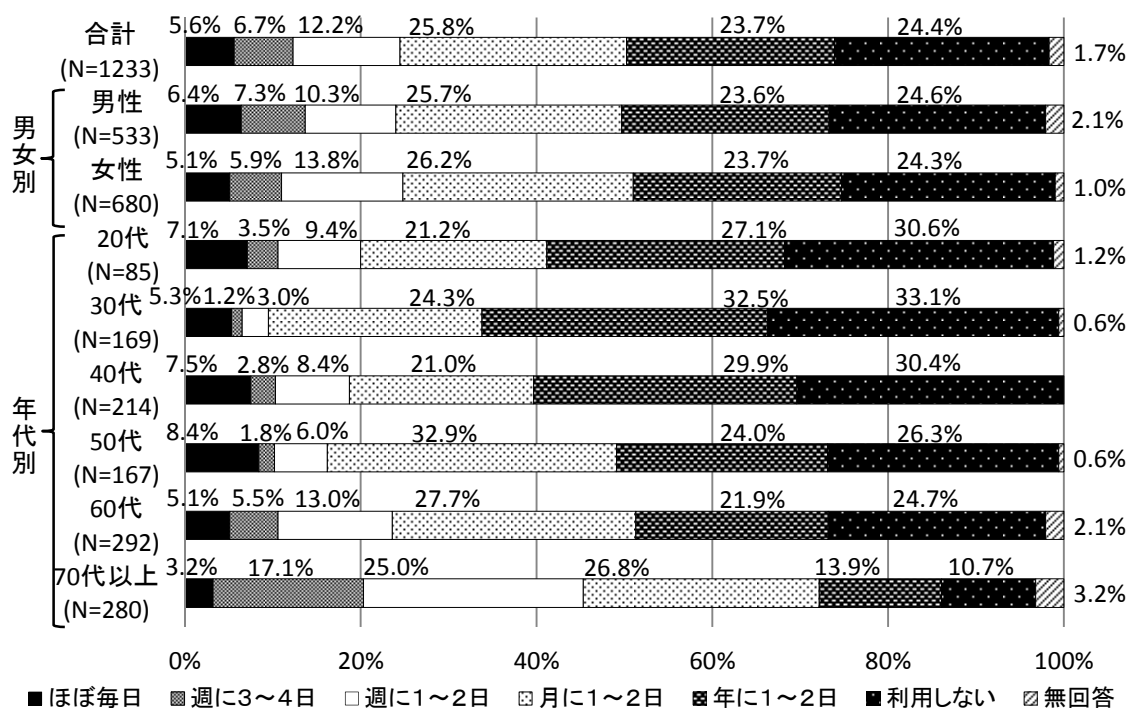


図24 Q11 高槻市内でバスを利用する頻度

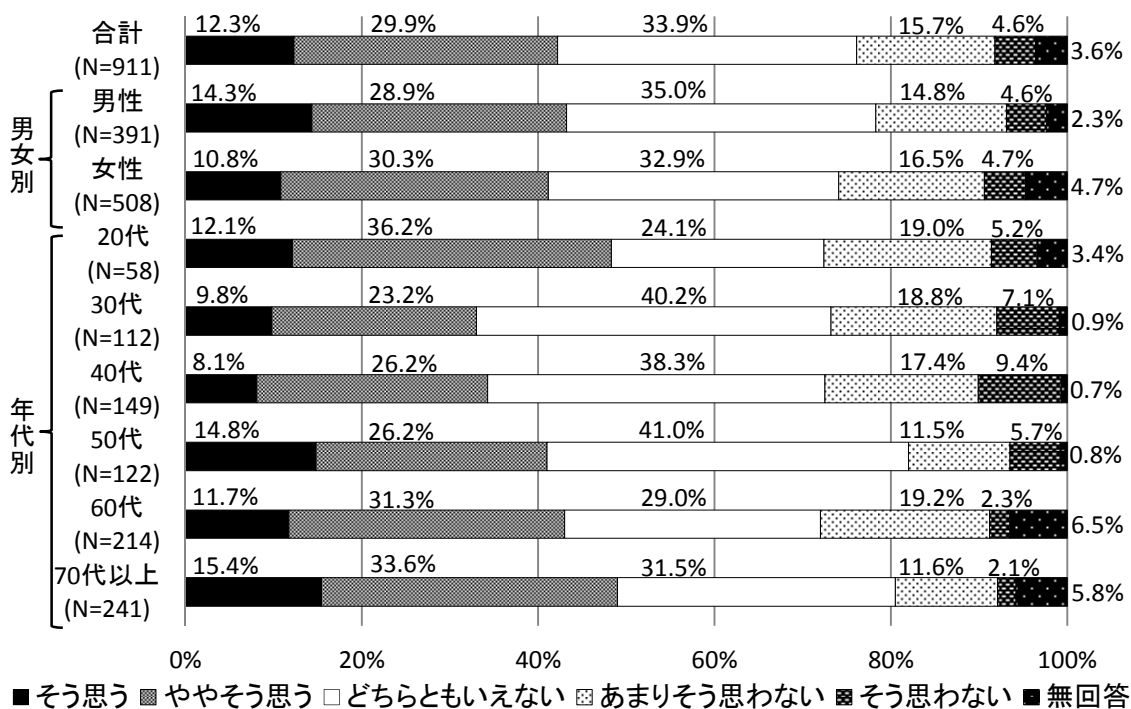


図 25 Q12 生徒や学生はバス内でマナーを守っているか

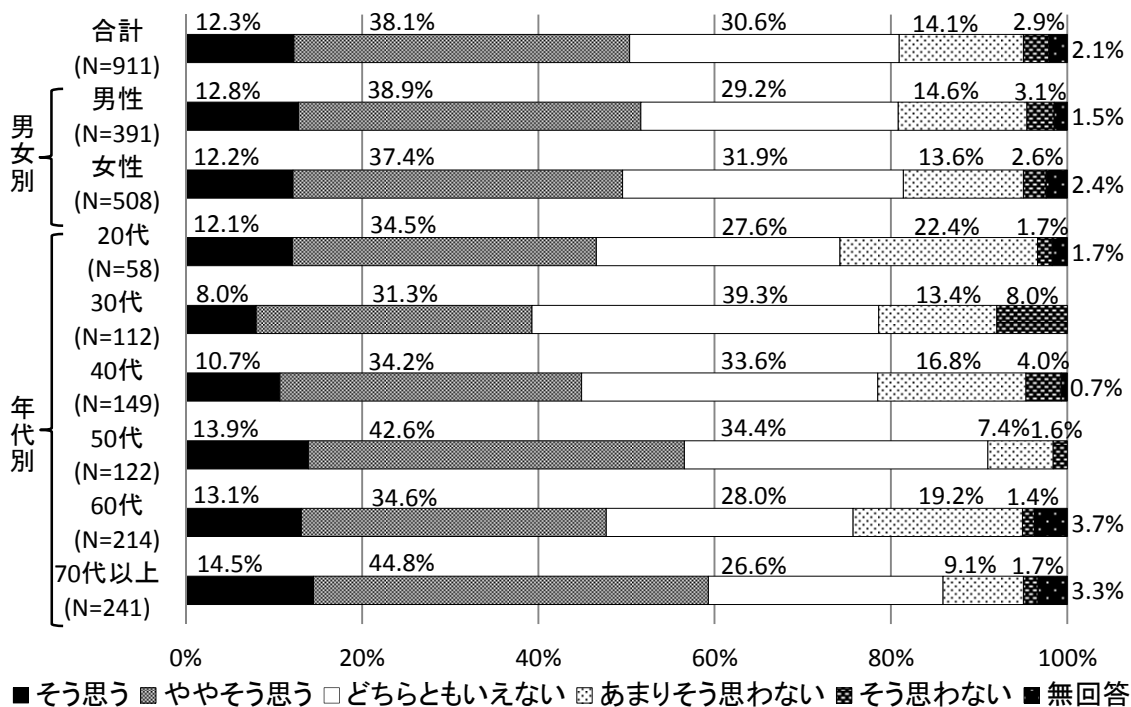


図 26 Q13 生徒や学生以外はバス内でマナーを守っているか

Q14 の最寄りの商店街のイメージについては、男女別・年代別のどの層でも「やや良い」が3割前後、「どちらともいえない」が4割前後である（図27）。

Q15 の最寄りの商店街での買い物の頻度については、「ほぼ毎日」と「週に2～3日程度」を合わせた割合が男性に比べて女性は10ポイント以上高い。年代別で見ると、その割合は年代が上がるごとに増加しており、20代で1割以下なのに対して70代以上では5割以上であり、大きく変化している（図28）。

Q16 の最寄りの商店街までの距離については、男女別・年代別のどの層でも「普通」の割合が3割～4割程度と最も高い。また、「近い」の割合よりも「遠い」の割合の方が高い（図29）。

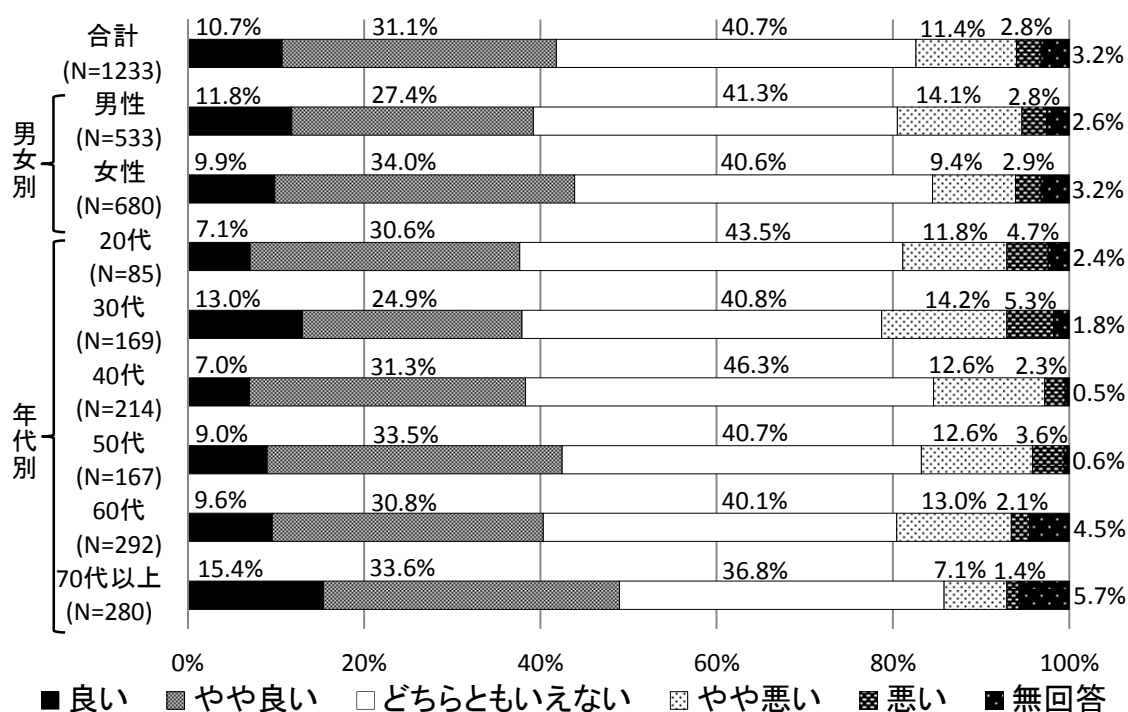


図 27 Q14 最寄りの商店街のイメージ

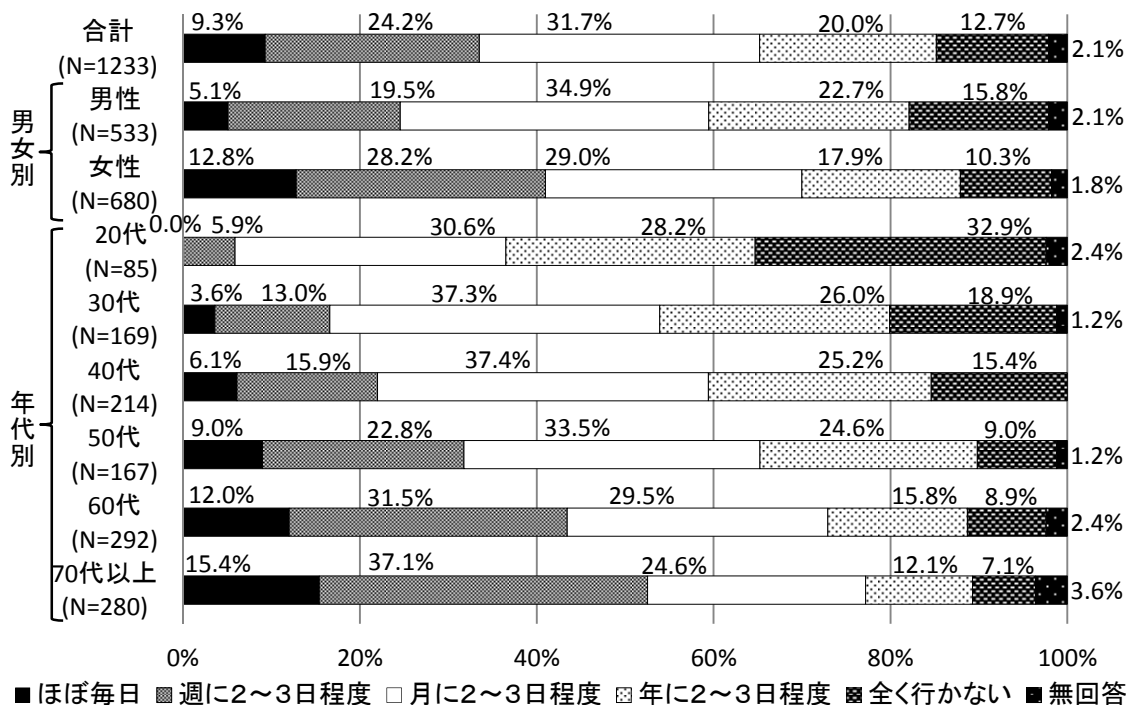


図 28 Q15 最寄りの商店街での買い物の頻度

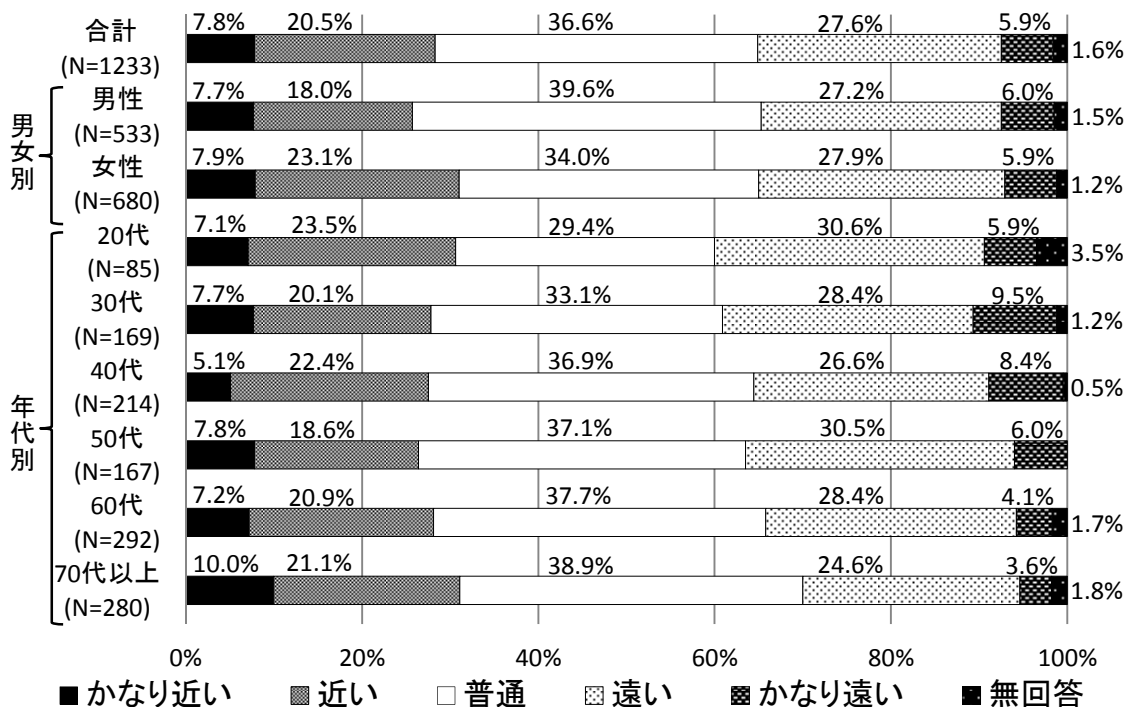


図 29 Q16 最寄りの商店街までの距離

Q17の路上駐輪の影響について、Q17Aの交通の妨げになるかと、Q17Bの美観を損なうかに関しては、男女別・年代別のどの層でも「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が7割程度であり、特に50代では「そう思う」の割合が4割以上である（図30、図31）。

Q17Cの高槻市のイメージを下げるかについても同様の傾向であるが、20代のみ「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が6割以下である（図32）。

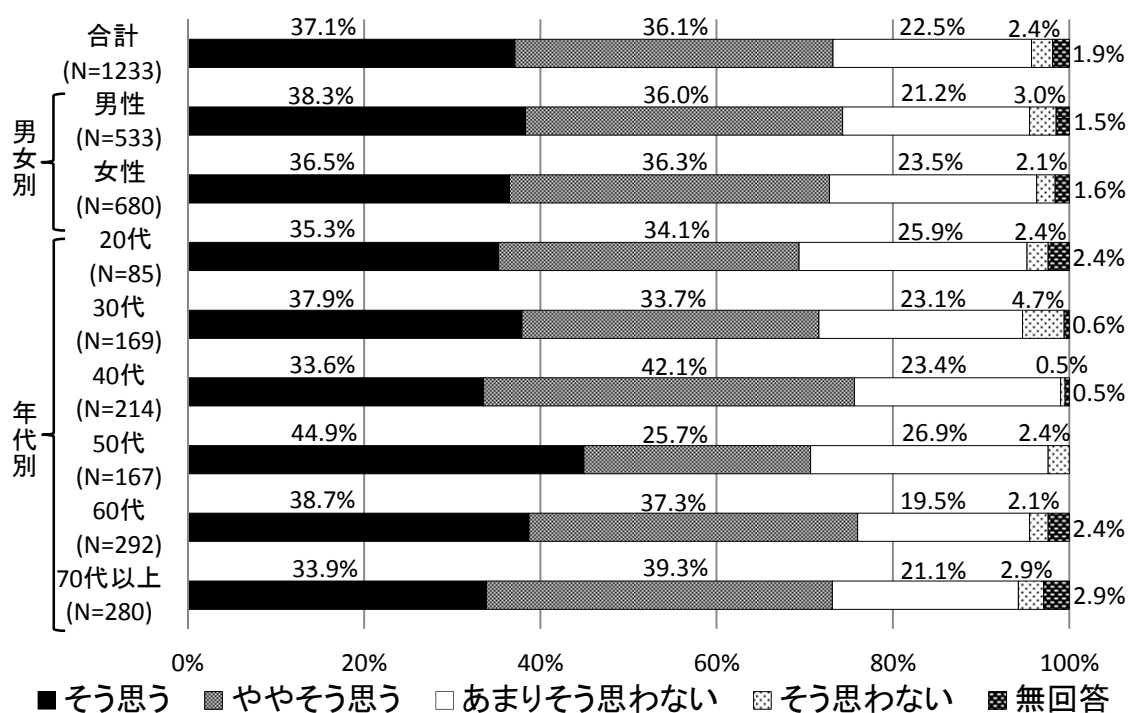


図30 Q17A 路上駐輪の影響（交通の妨げになる）

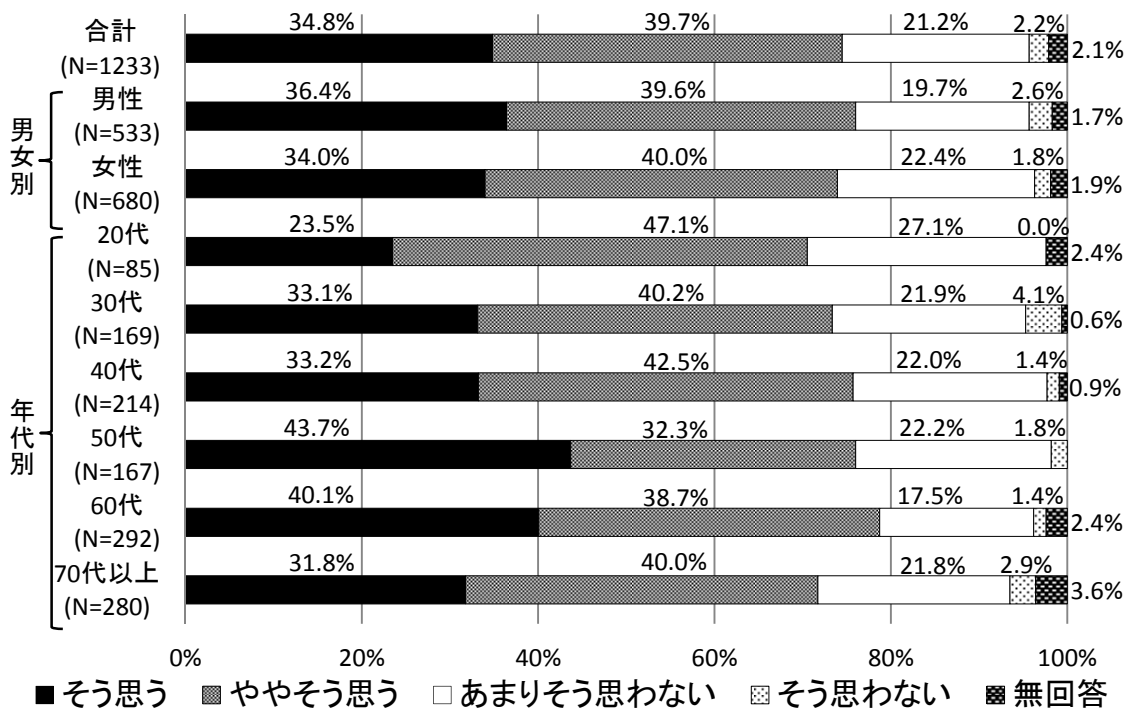


図 31 Q17B 路上駐輪の影響（美観を損なう）

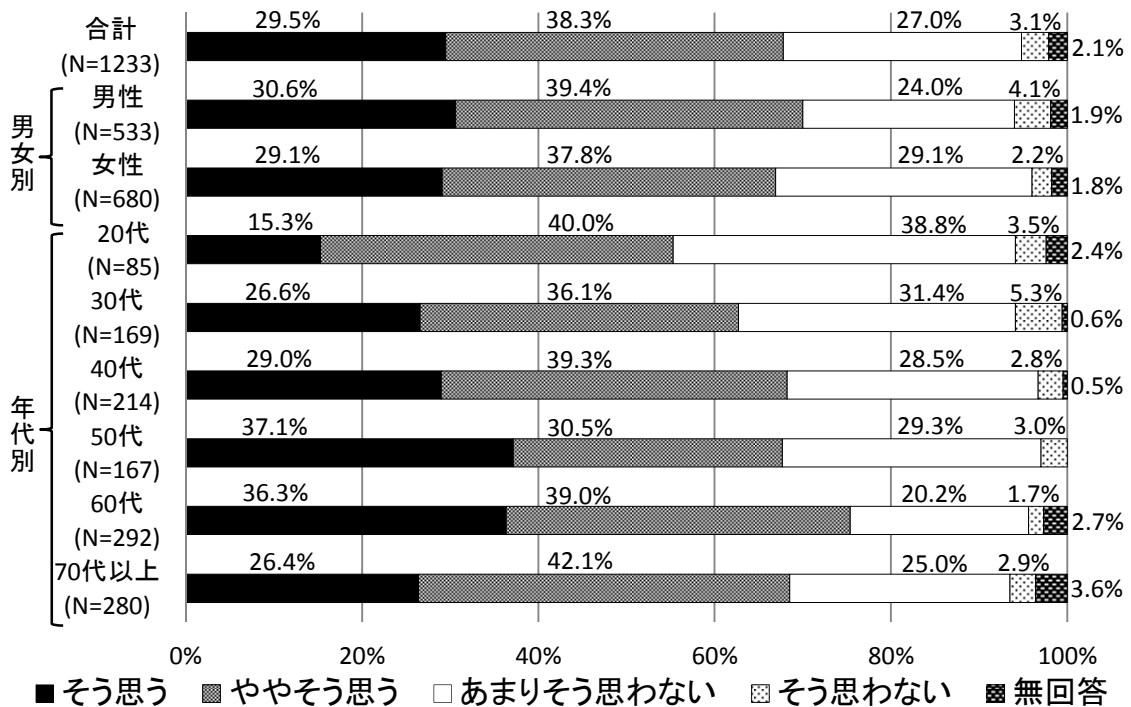


図 32 Q17C 路上駐輪の影響（高槻市のイメージが下がる）

Q18の路上駐輪への規制の強化が必要かについては、60代と70代以上では「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が7割以上であるが、20代では5割に満たない(図33)。

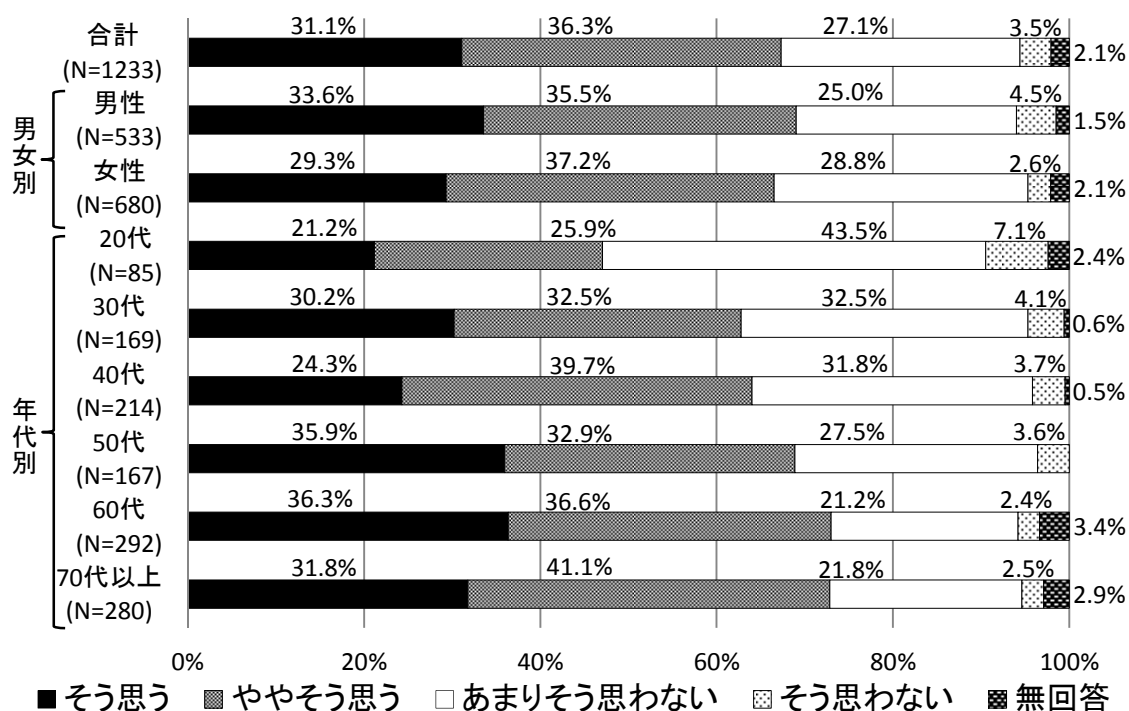


図 33 Q18 路上駐輪への規制の強化が必要か

Q19の看板と風景が調和していないと感じるかについては、20代と30代を除くすべての年代と男性・女性で「どちらともいえない」が最も多い。男女差は見られないが、年代別で見ると、20代から40代では「よく感じる」と「やや感じる」を合わせた割合が2割以下で、50代以上ではその割合が3割前後である(図34)。

Q20の看板が風景に調和していないと感じる理由については、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「看板を設置している場所・位置」、「看板の大きさ」、「看板の色」の順に割合が高い(図35)。

Q20を男女別で見ると、「看板の色」の割合が男性よりも女性の方が16ポイント以上高く、「看板の大きさ」も男性より女性の方が9ポイント以上高い(図36)。

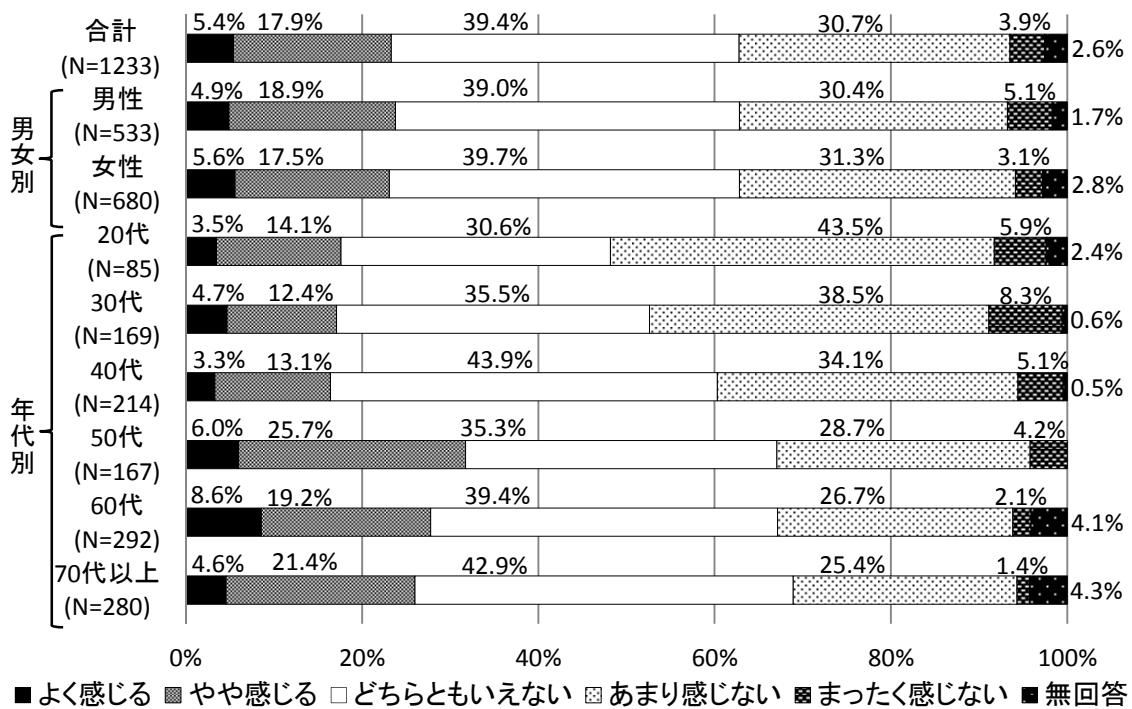


図 34 Q19 看板と風景が調和していないと感じるか

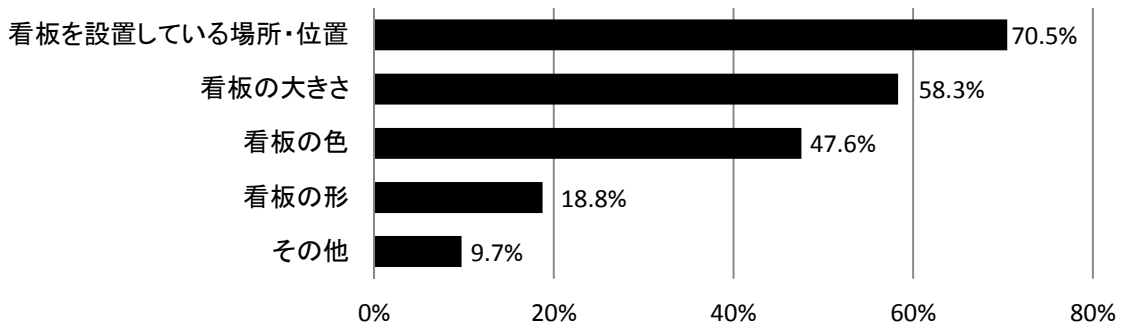


図 35 Q20 看板が風景に調和していないと感じる理由 (全体 N=288)

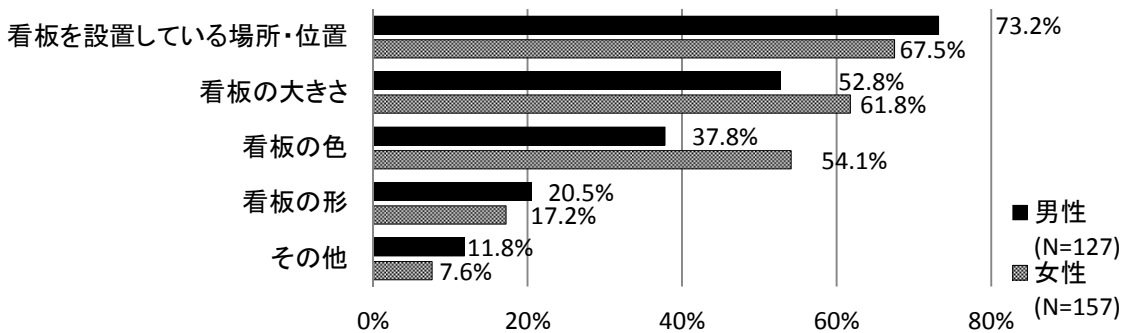


図 36 Q20 看板が風景に調和していないと感じる理由 (男女別)

Q20 を年齢別で見ると、「看板を設置している場所・位置」では 60 代、「看板の大きさ」では 30 代の割合が 8 割以上である（図 37）。

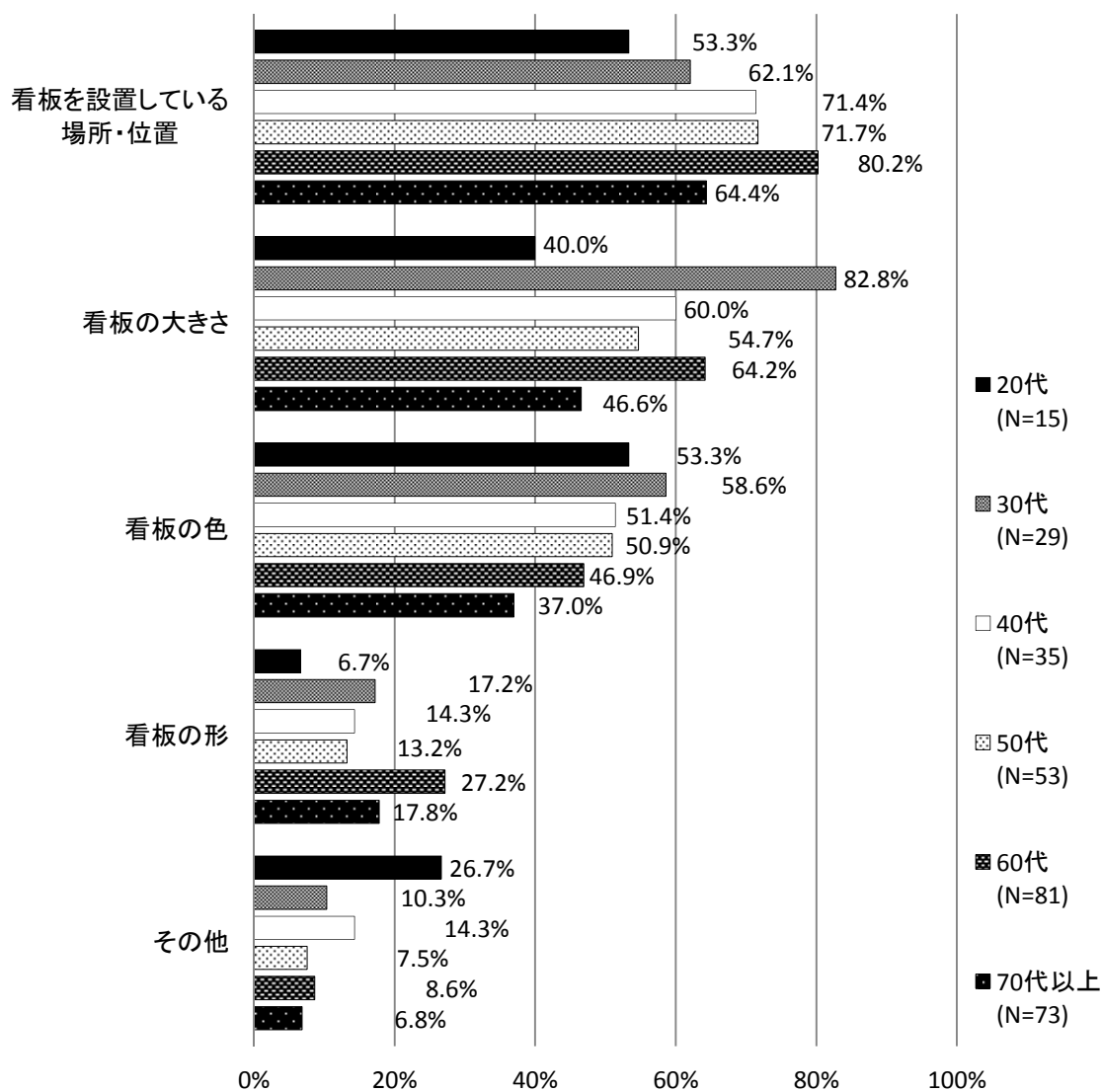


図 37 Q20 看板が風景に調和していないと感じる理由（年齢別）

Q21 の高槻市内の行事への参加について、Q21A の高槻シティハーフマラソンに関しては、男女別・年代別のどの層でも「ない」の割合が 9 割前後である。ただし 40 代のみ「ある」の割合が 1 割以上ある（図 38）。

Q21B の高槻まつりに関しては、70 代を除くすべての年代と男性・女性で「ある」の割合の方が高い。特に 20 代と 30 代では 7 割以上である（図 39）。

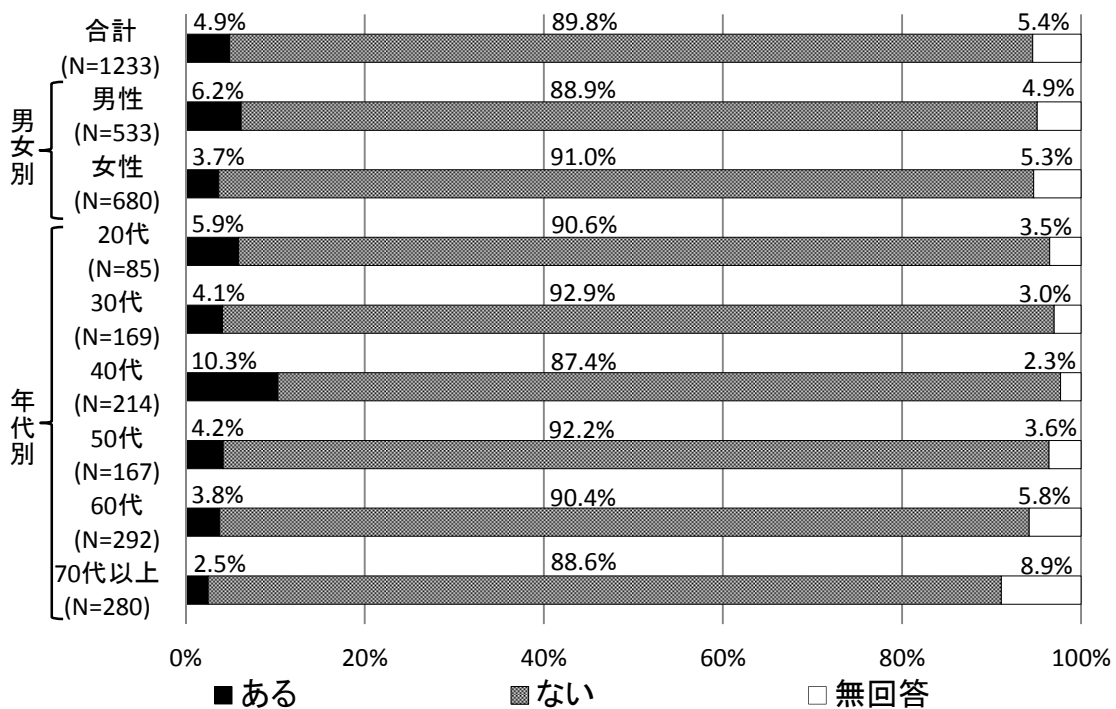


図 38 Q21A 高槻シティハーフマラソンへの参加

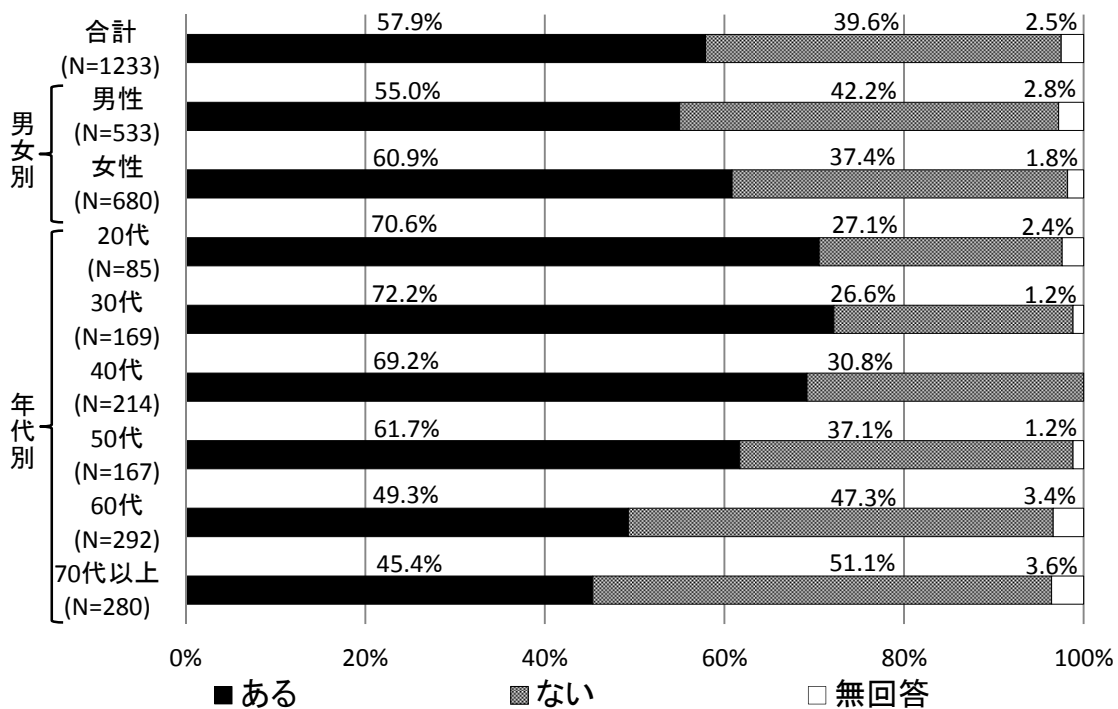


図 39 Q21B 高槻まつりへの参加

Q21C の高槻ジャズストリートに関しては、男女別・年代別のどの層でも「ない」の割合の方が高いが、「ある」の割合も3割前後となっている（図 40）。

Q21D の高槻バルと Q21E の関西大学の行事に関しては、男女別・年代別のどの層でも「ない」が9割程度である（図 41, 図 42）。

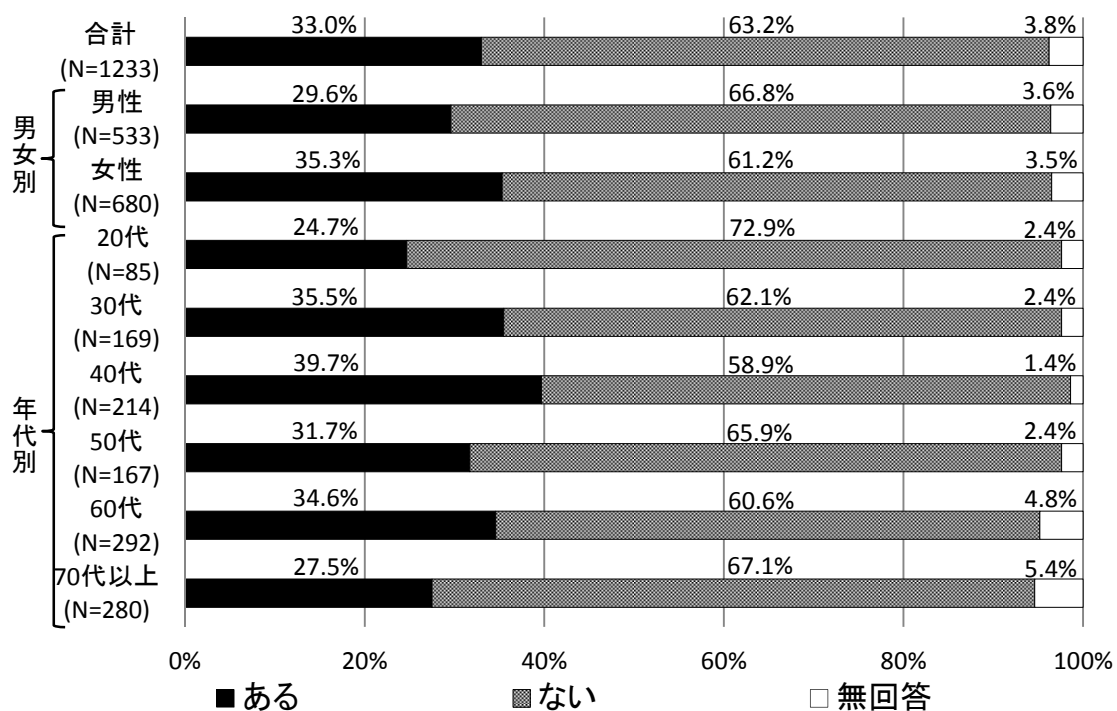


図 40 Q21C 高槻ジャズストリートへの参加

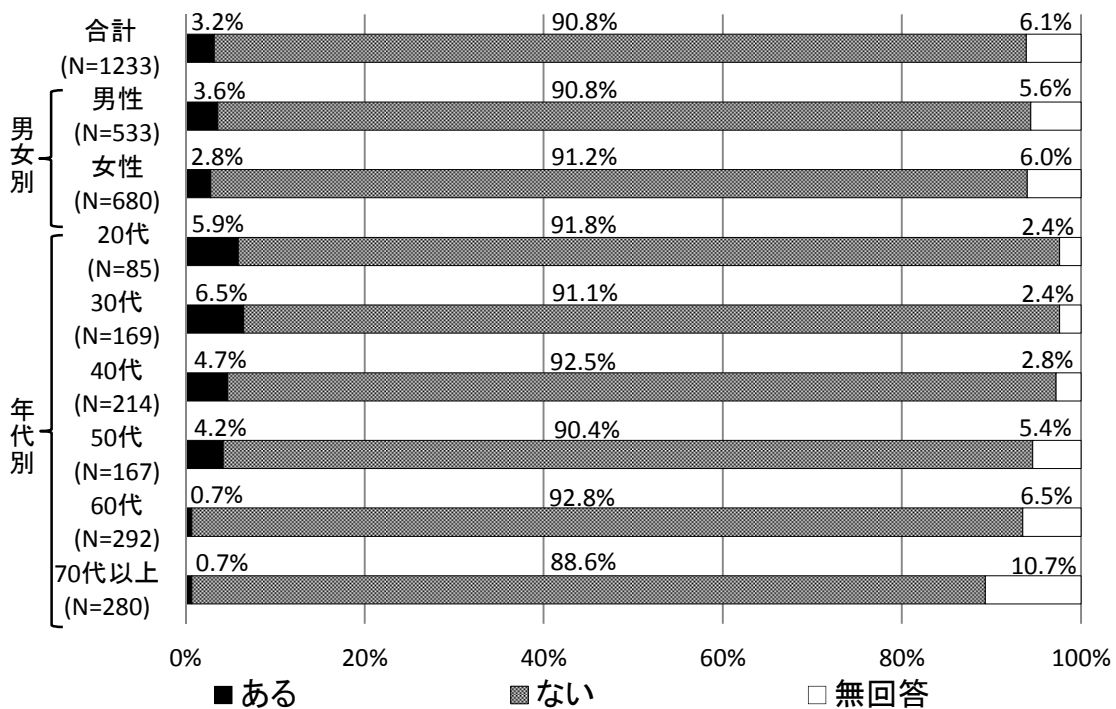


図 41 Q21D 高槻バルへの参加

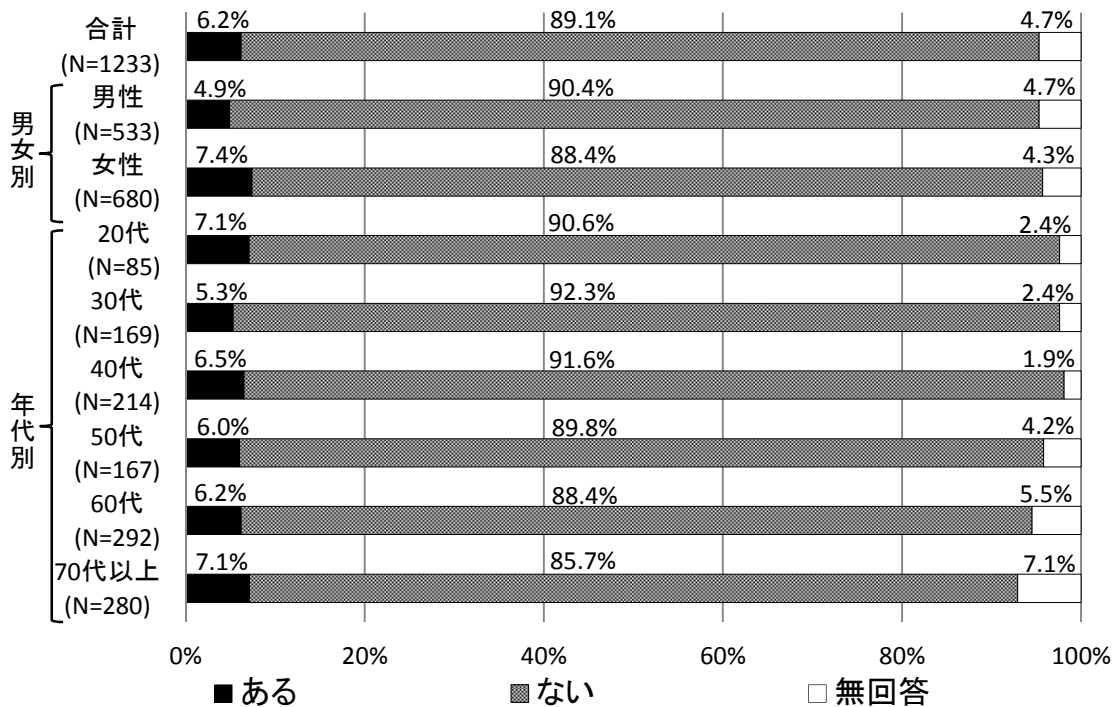


図 42 Q21E 関西大学の行事(講演会や学園祭など)への参加

Q22 の地域のボランティア活動への参加頻度については、「ほとんどない」の割合が 60 代以上では 7 割以上、それ以外の年代では 9 割以上である。20 代と 30 代では「ほぼ毎日」、「週に 3～4 日」、「週に 1～2 日」の 3 項目が 0.0% である（表 5）。

表 5 Q22 地域のボランティア活動への参加頻度

							(%)
		ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に1～2日	ほとんどない	無回答
合計 (N=1233)		0.7	0.6	2.2	8.7	85.6	2.1
男女別	男性 (N=533)	0.8	0.6	2.3	7.9	86.5	2.1
	女性 (N=680)	0.6	0.6	2.2	9.6	85.4	1.6
年代別	20代 (N=85)	0.0	0.0	0.0	2.4	94.1	3.5
	30代 (N=169)	0.0	0.0	0.0	2.4	97.0	0.6
	40代 (N=214)	0.0	0.0	2.8	5.6	91.6	0.0
	50代 (N=167)	0.0	0.0	0.6	6.0	93.4	0.0
	60代 (N=292)	1.4	1.4	4.1	12.7	78.1	2.4
	70代以上 (N=280)	1.4	1.1	2.9	15.0	75.7	3.9

Q23 の市政の動きや市内の行事・イベントなどを何によって知るかについては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「市の広報紙（広報たかつき）」が 88.5% と特に多く、次に「自治会等の回覧や配布文書」が 52.9% と続いている。（図 43）

Q23 を男女別で見ると「自治会等の回覧や配布文書」で特に差が大きく、女性の方が男性よりも 10 ポイント近く高い（図 44）。

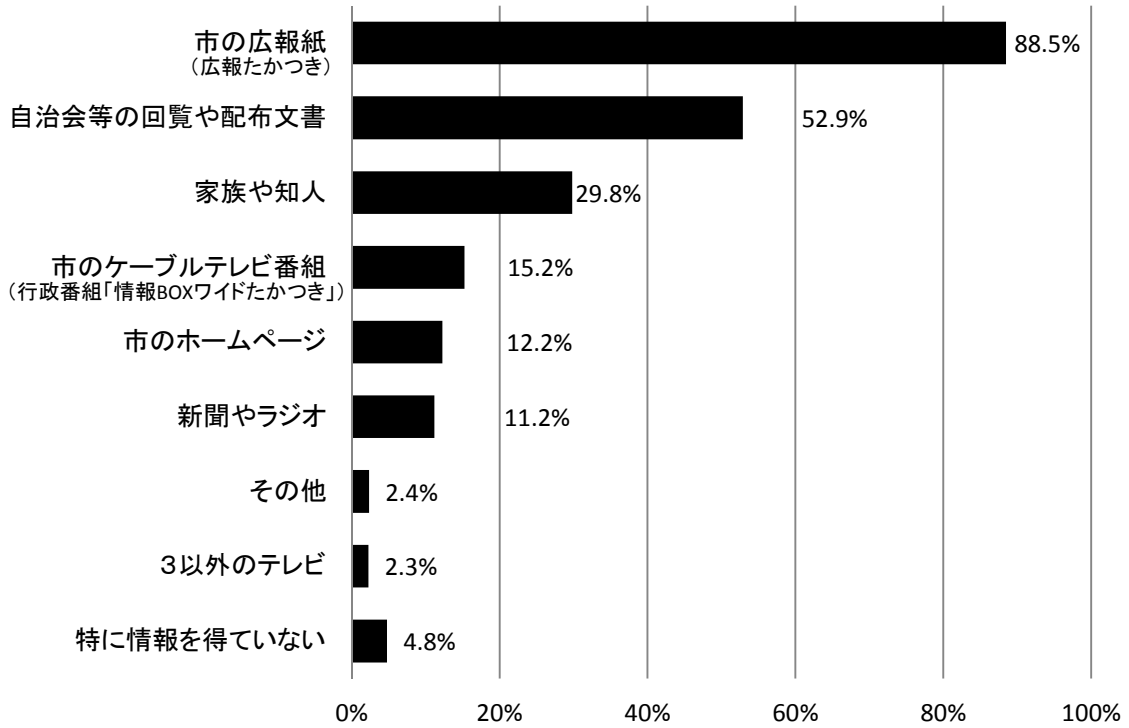


図 43 Q23 市政の動きや市内の行事・イベントなどを何によって知るか (全体 N=1233)

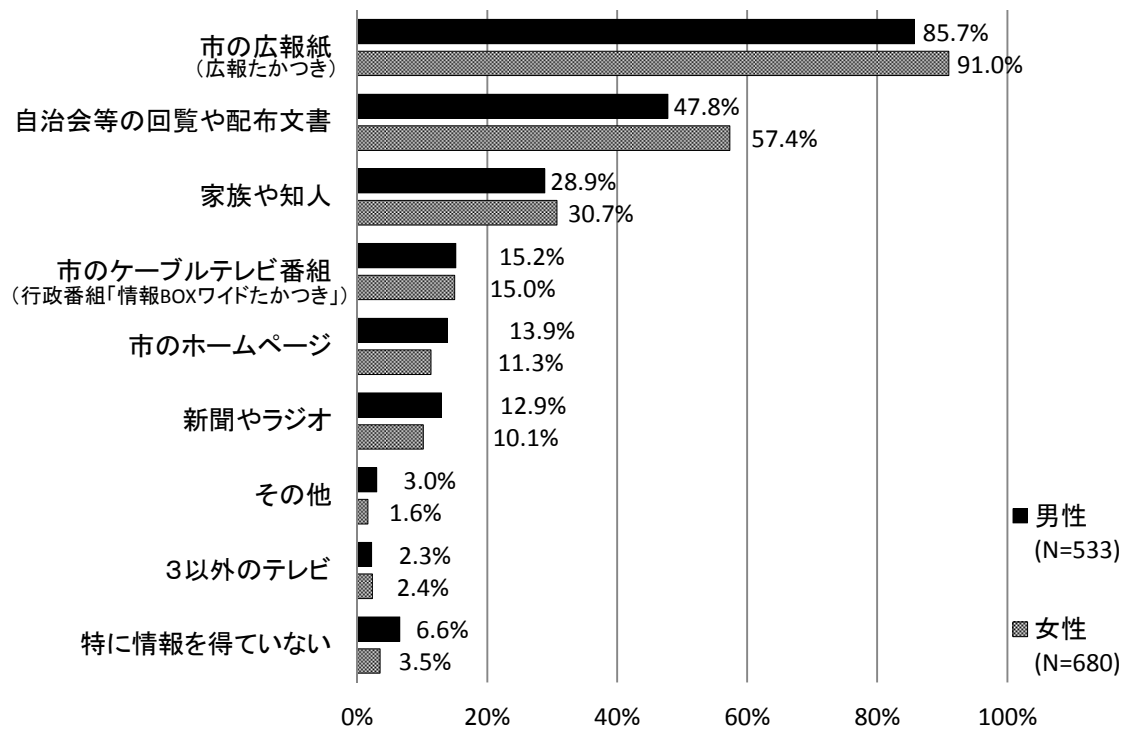


図 44 Q23 市政の動きや市内の行事・イベントなどを何によって知るか (男女別)

Q23 を年齢別で見ると、「市の広報紙(広報たかつき)」と「自治会等の回覧や配布文書」は年代が上がるにつれて割合が増加する傾向にあるが、「家族や知人」の割合は、60代を除き年代が下がるほど増加している(図45)。

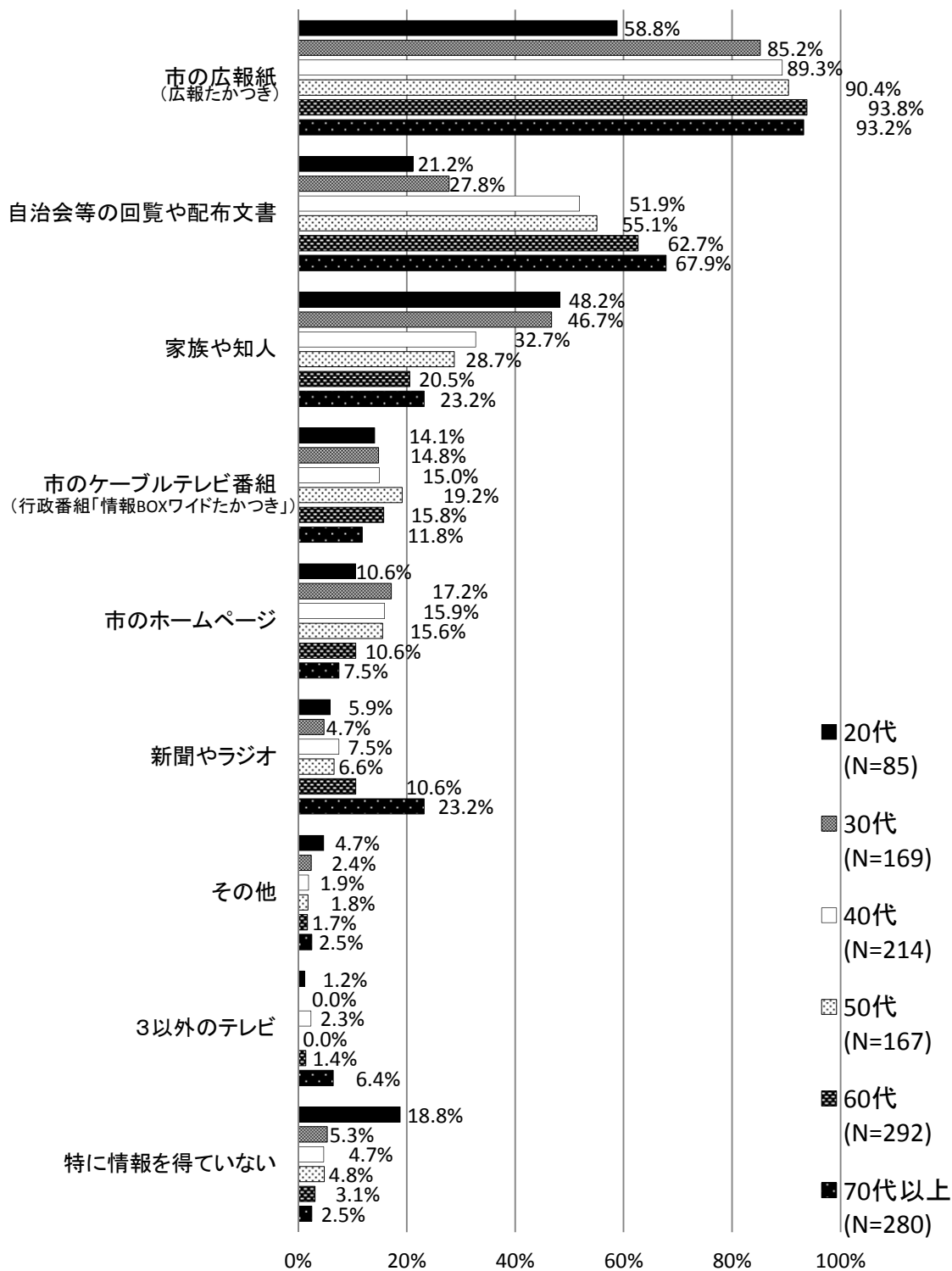


図 45 Q23 市政の動きや市内の行事・イベントなどを何によって知るか(年齢別)

Q24 の広報たかつきを読んでいるかについて見ると、20代を除くすべての年代と男性・女性で「よく読んでいる」と「ときどき読んでいる」を合わせて8割以上である。20代では5割程度である。男女別で見ると、女性の方が「よく読んでいる」の割合が男性よりも17ポイント高い。年代が上がるほど「よく読んでいる」の割合が増加している（図46）。

Q25 の広報たかつきの中で関心をもって読むコーナーについては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「行事・イベント・講座・教室のお知らせ」、「市政に関する記事」、「保健等のお知らせ」の3項目が特に多く読まれていることが分かる（図47）。

		(%)					
		よく読んでいる	ときどき読んでいる	ほとんど読んでいない	知っているが、読んだことはない	「広報たかつき」が発行されていることを知らない	無回答
合計 (N=1233)		52.5	34.6	6.9	2.7	2.1	1.2
男女別	男性 (N=533)	43.0	39.6	9.2	4.5	2.8	0.9
	女性 (N=680)	60.0	31.0	5.0	1.3	1.6	1.0
年代別	20代 (N=85)	18.8	29.4	24.7	15.3	11.8	0.0
	30代 (N=169)	39.1	42.0	9.5	5.9	3.0	0.6
	40代 (N=214)	48.1	38.3	7.9	1.9	2.3	1.4
	50代 (N=167)	45.5	44.3	7.8	0.6	1.8	0.0
	60代 (N=292)	58.6	36.6	2.7	0.3	1.0	0.7
	70代以上 (N=280)	72.9	21.4	2.5	1.1	0.0	2.1

図 46 Q24 「広報たかつき」を読んでいるか

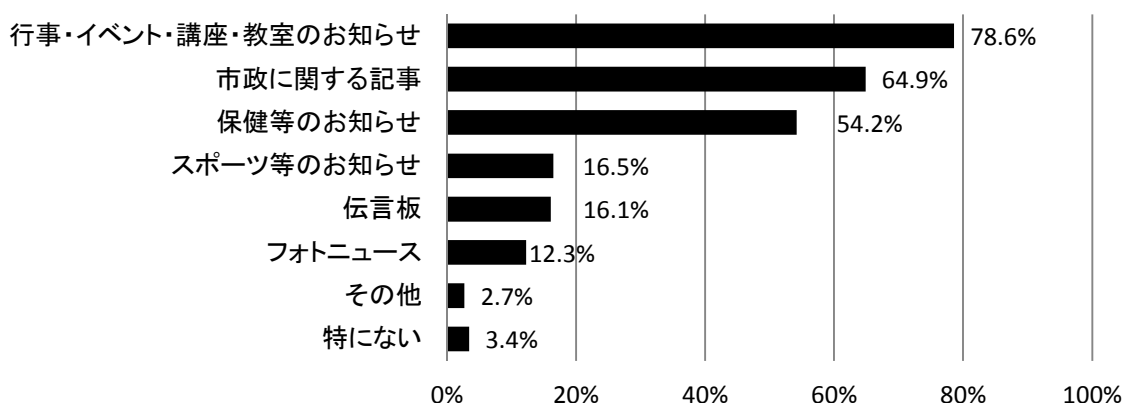


図 47 Q25 「広報たかつき」の中で関心をもって読むコーナー（全体 N=1074）

Q25 を男女別で見ると、「行事・イベント・講座・教室のお知らせ」と「保健等のお知らせ」は女性の方が多く、「市政に関する記事」は男性の方が多い（図 48）。

Q25 を年齢別で見ると、「スポーツ等のお知らせ」「その他」では 20 代が最も多いが、それ以外の項目では 20 代の割合が最も低い（図 49）。

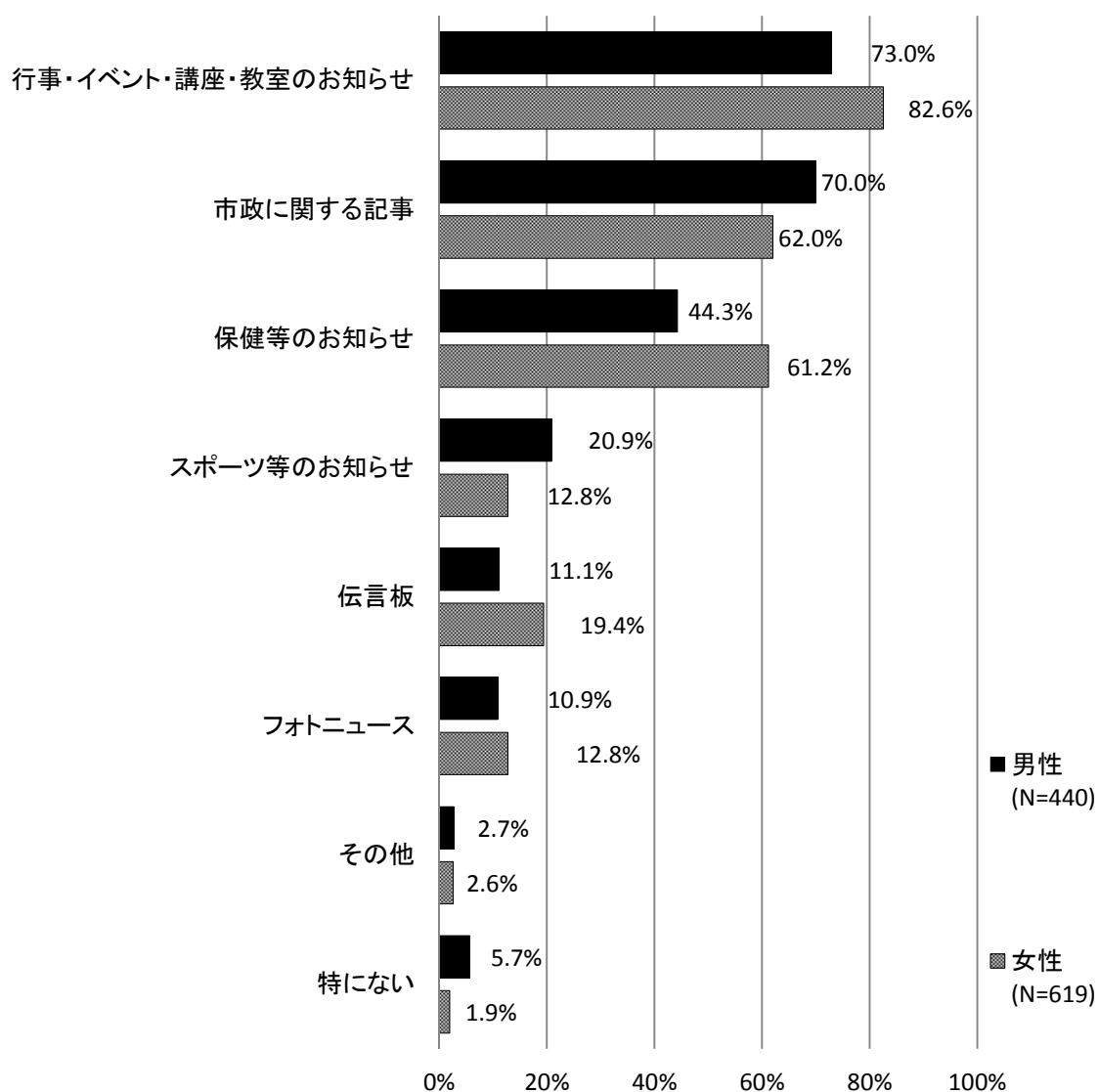


図 48 Q25 「広報たかつき」の中で関心をもって読むコーナー（男女別）

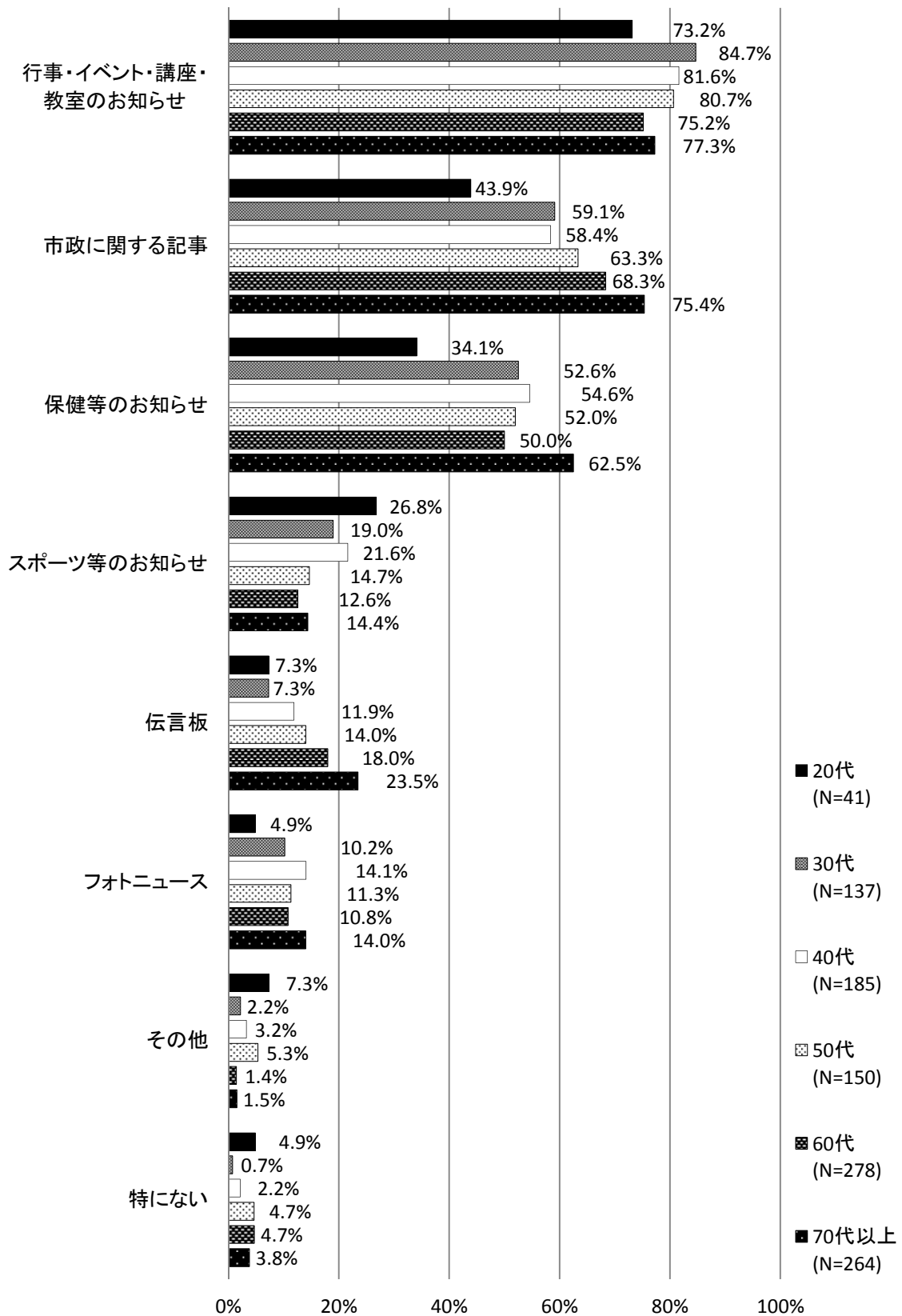


図 49 Q25 「広報たかつき」の中で関心をもって読むコーナー（年齢別）

Q26 の広報たかつきの紙面は読みやすいかについて見ると、男女別・年代別のどの層でも「読みやすい」と「まあ読みやすい」を合わせた割合が8割以上である。特に女性と30代と70代以上では「読みやすい」の割合が2割以上となっている(図50)。

Q27 の広報たかつきが読みにくい理由については、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「レイアウトが悪い」が45.3%と最も高い。(図51)。

Q27 を男女別に見ると、「読みたい記事がない」と「文字が小さい」の男女差が特に大きい。前者は男性、後者は女性の割合が10ポイント以上高い(図52)。

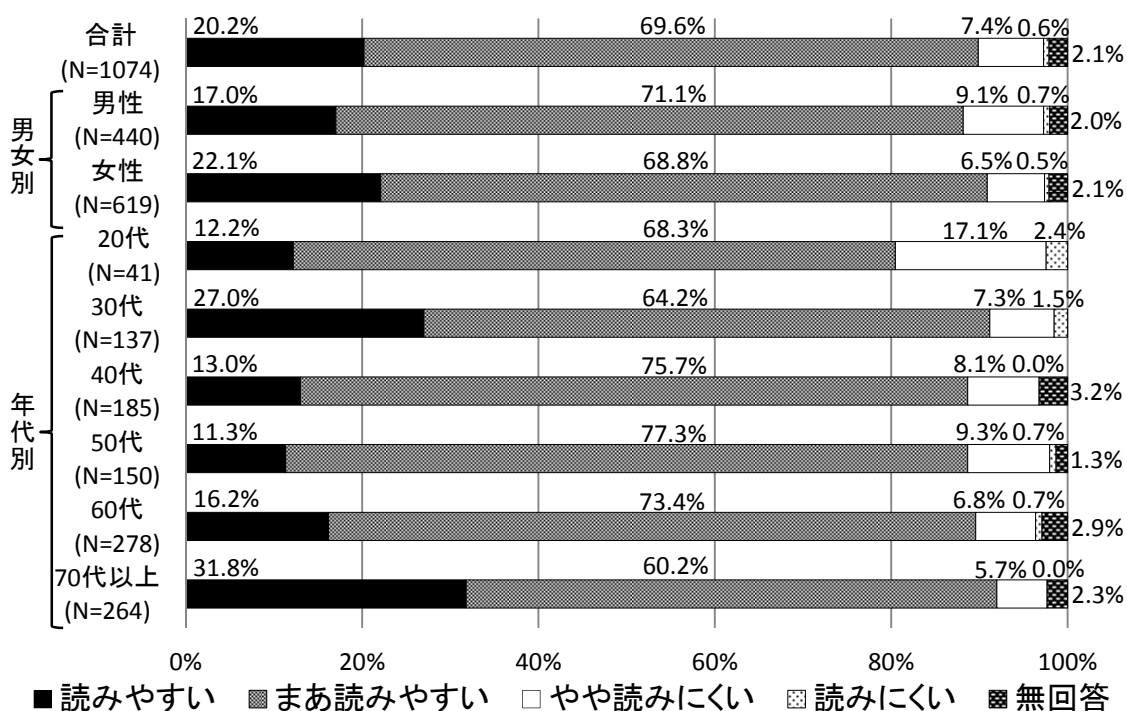


図 50 Q26 「広報たかつき」の紙面は読みやすいか

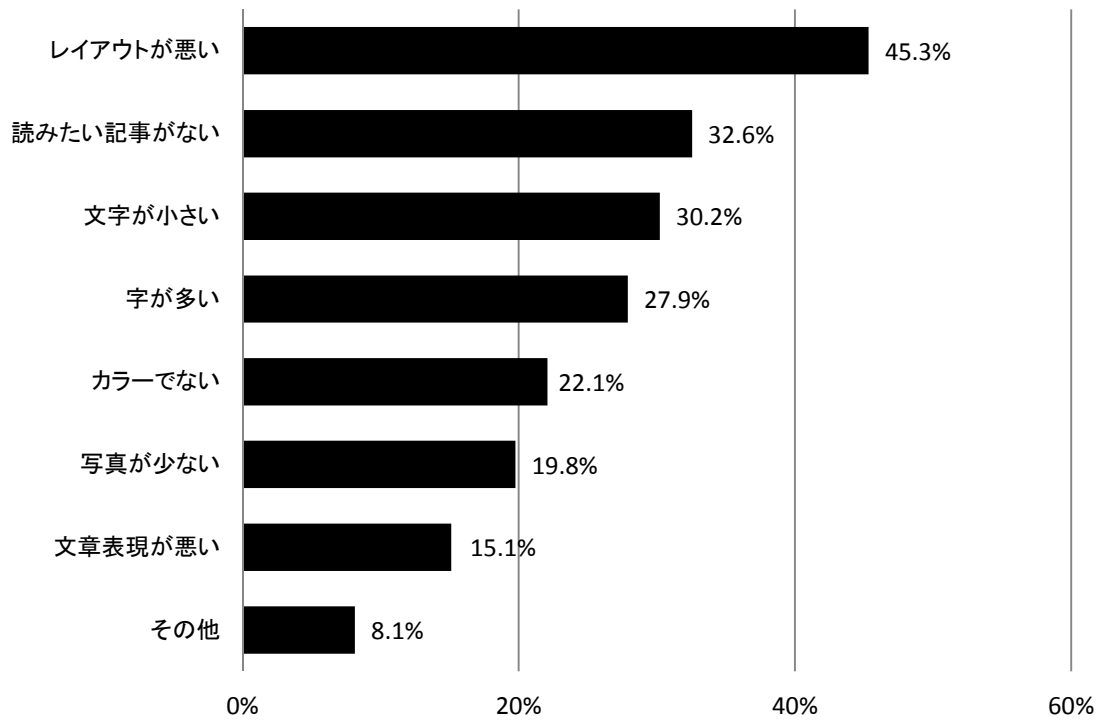


図 51 Q27 「広報たかつき」が読みにくい理由（全体 N=86）

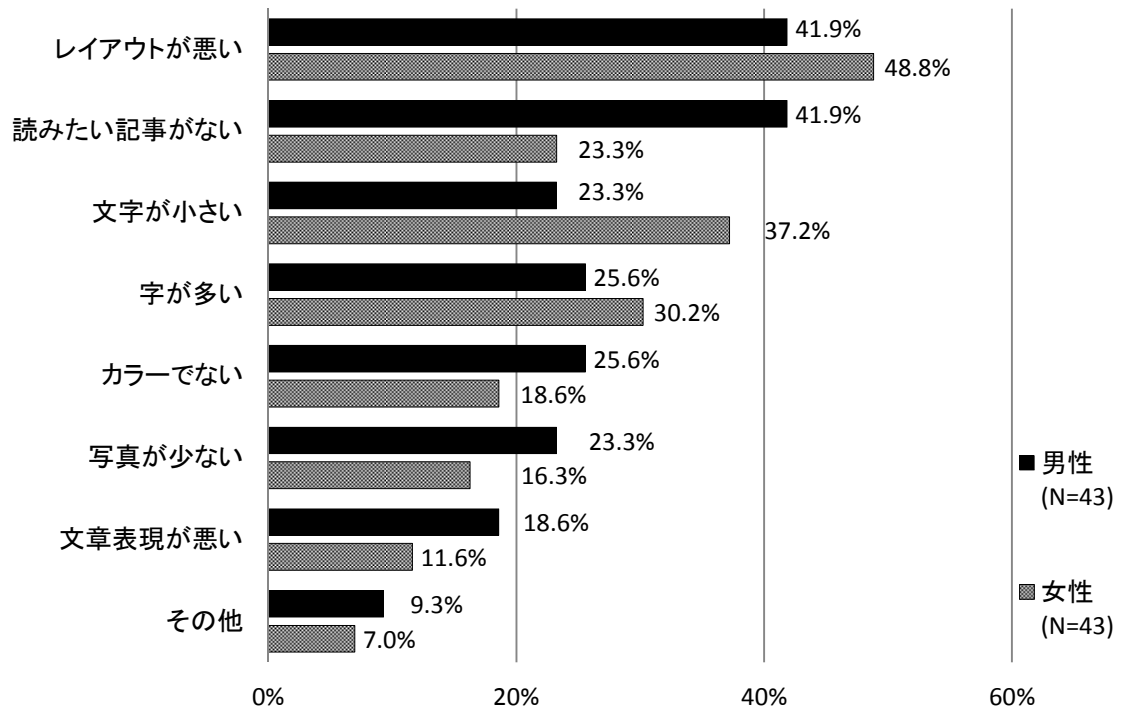


図 52 Q27 「広報たかつき」が読みにくい理由（男女別）

Q27 を年齢別に見ると、30代で「字が多い」の割合が特に高く、6割以上になっている（図 53）。

Q28 の広報たかつきの保存期間については、20代と30代では「保存してない」の割合が「1ヶ月未満」よりも高い。その他の年代と男性・女性では「1ヶ月未満」が4割以上と最も多い。「1ヶ月以上3ヶ月未満」は男女別・年代別のどの層でも1割～2割程度である（図 54）。

Q29 の高槻市のホームページを見ているかについては、30代と40代では「必要なときのみ見ている」の割合が6割以上で最も高い。60代以上では「ホームページがあることを知っているが、見る方法がない」が他の年代よりも多い（図 55）。

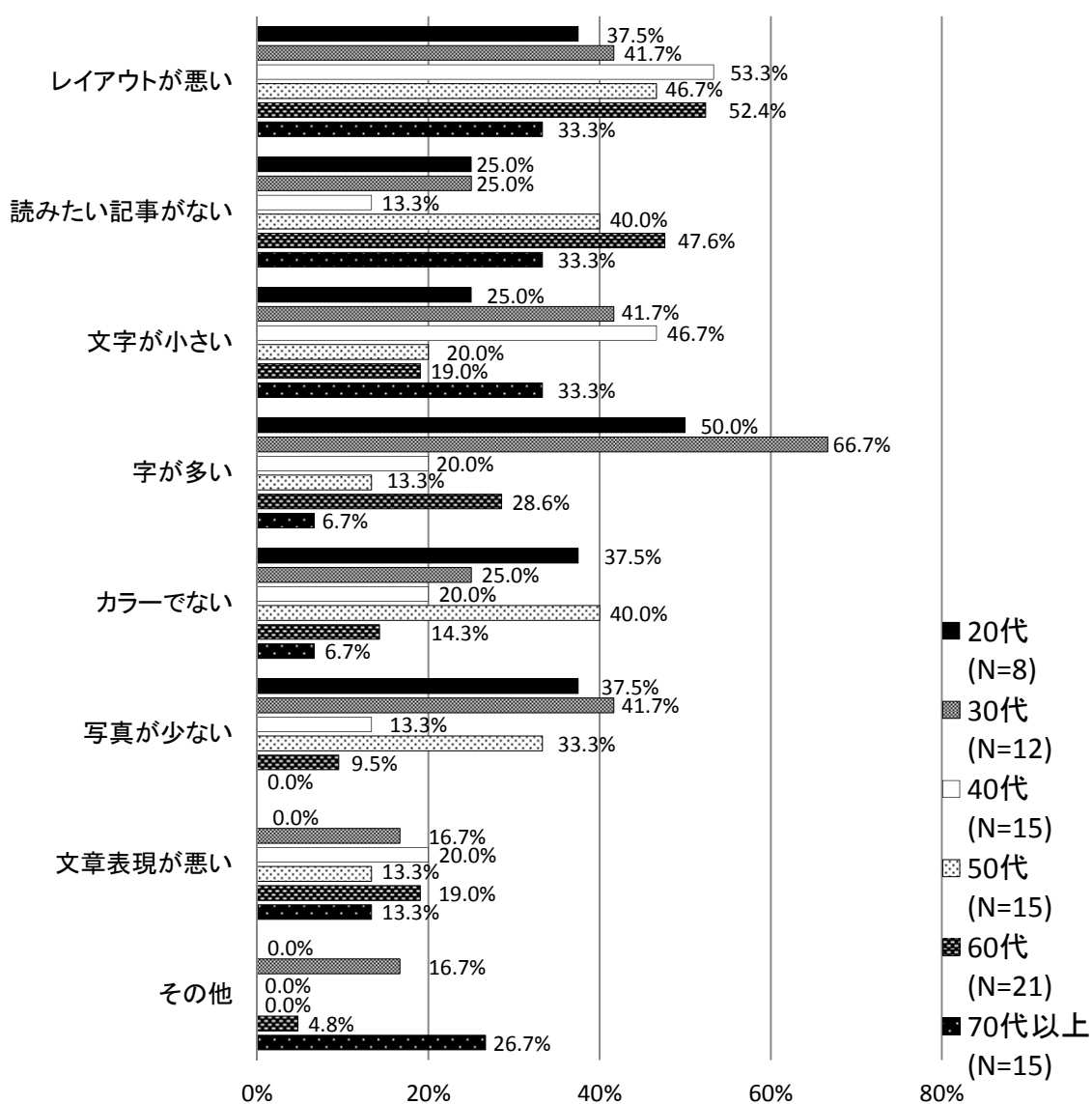


図 53 Q27 「広報たかつき」が読みにくい理由（年齢別）

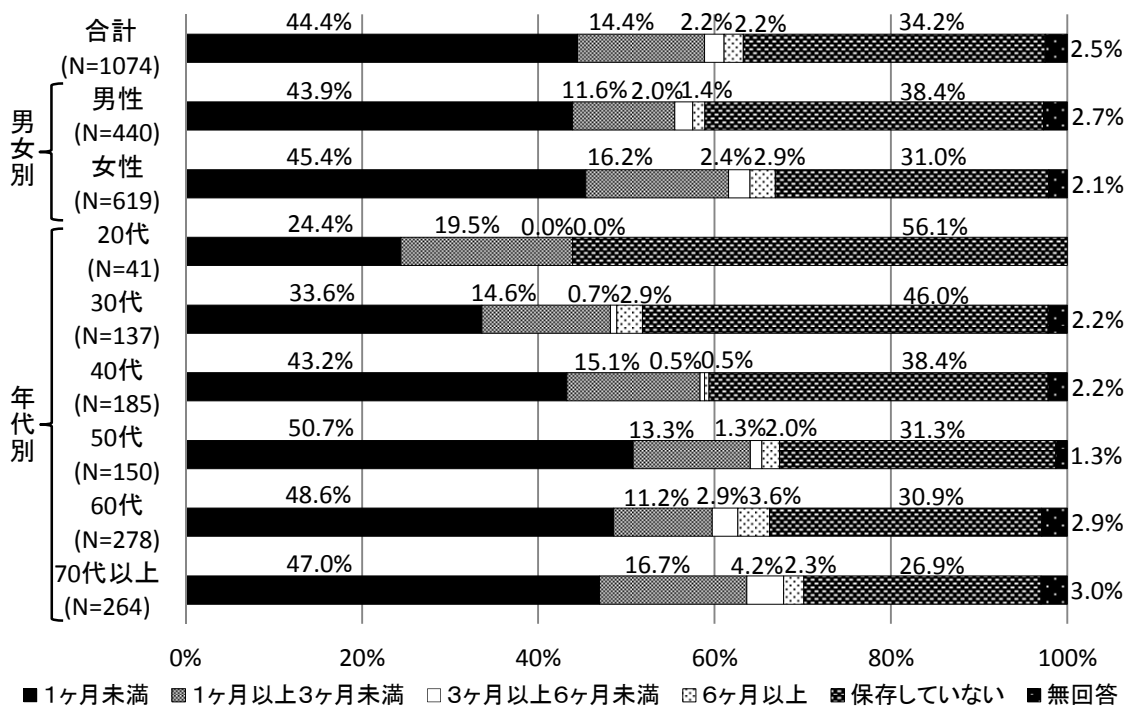


図 54 Q28 「広報たかつき」の保存期間

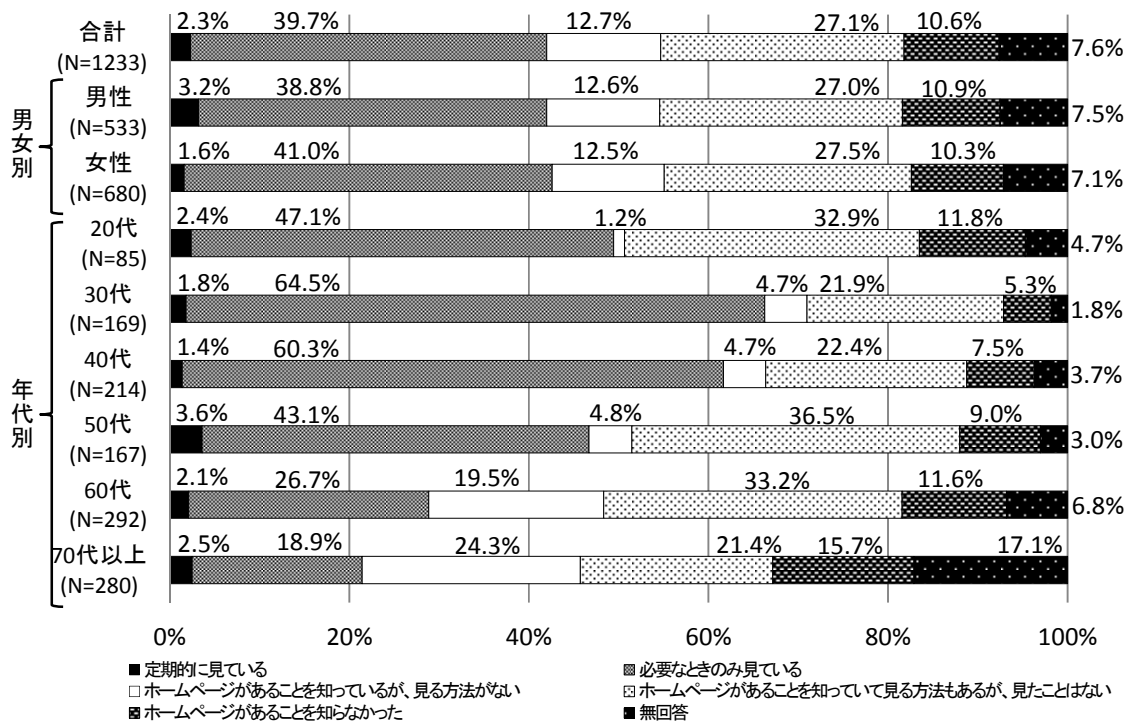


図 55 Q29 高槻市のホームページを見ているか

Q30 の市のホームページを見る手段については、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「パソコン」が 86.7%、次いで「スマートフォンや携帯電話」が 31.7%であり、「パソコン」の割合が特に高くなっている（図 56）。

Q30 を男女別で見ると、「スマートフォンや携帯電話」には大きな差が見られ、女性の方が男性よりも 10 ポイント以上高い（図 57）。

Q30 を年齢別で見ると、「パソコン」はどの年代でも多いが、「スマートフォンや携帯電話」の割合は 20 代が 66.7%、30 代が 52.7%と特に高い（図 58）。

Q31 の市のホームページでよく見る情報については、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「公共施設の案内」、「市営バス案内」、「イベント情報」が 3 割以上であり、よく見られている（図 59）。

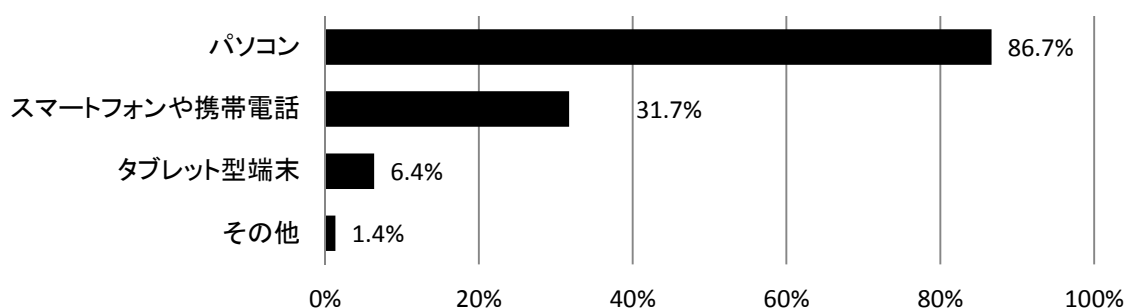


図 56 Q30 市のホームページを見る手段（全体 N=517）

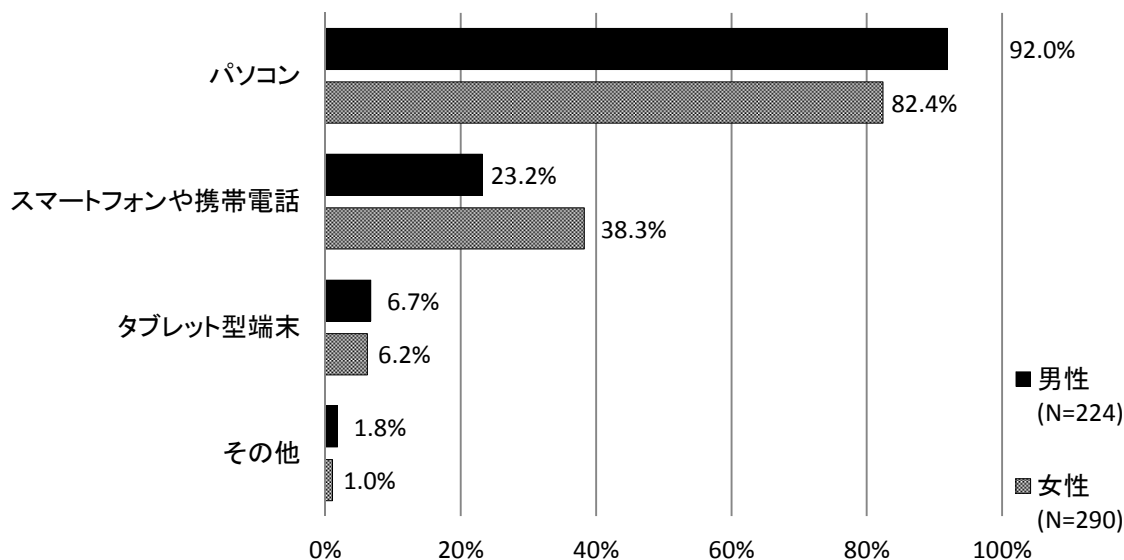


図 57 Q30 市のホームページを見る手段（男女別）

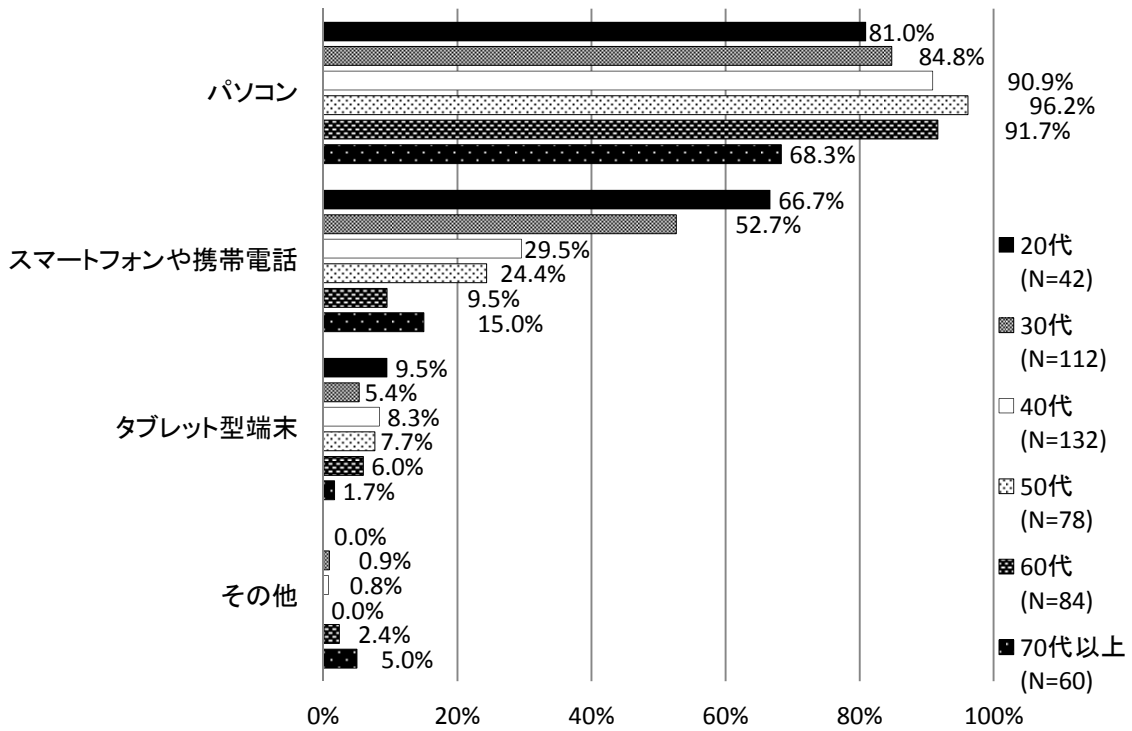


図 58 Q30 市のホームページを見る手段（年齢別）

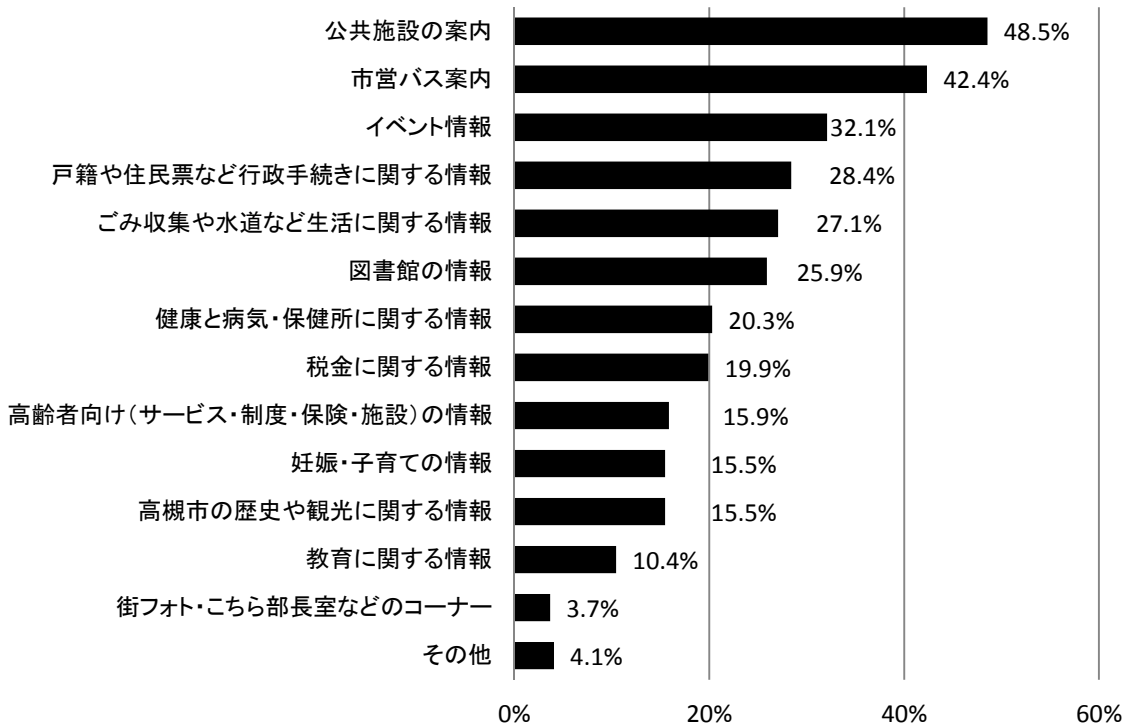


図 59 Q31 市のホームページでよく見る情報（全体 N=517）

Q31 を男女別で見ると、「税金に関する情報」は男性の方が、「妊娠・子育ての情報」は女性の方が、それぞれ 10 ポイント以上高い（図 60）。

Q31 を年齢別で見ると、「健康と病気・保健所に関する情報」、「高齢者向け（サービス・制度・保険・施設）の情報」において 70 代以上の割合が特に高い。また、「市営バス案内」では 20 代の割合が 6 割以上と高い（図 61）。

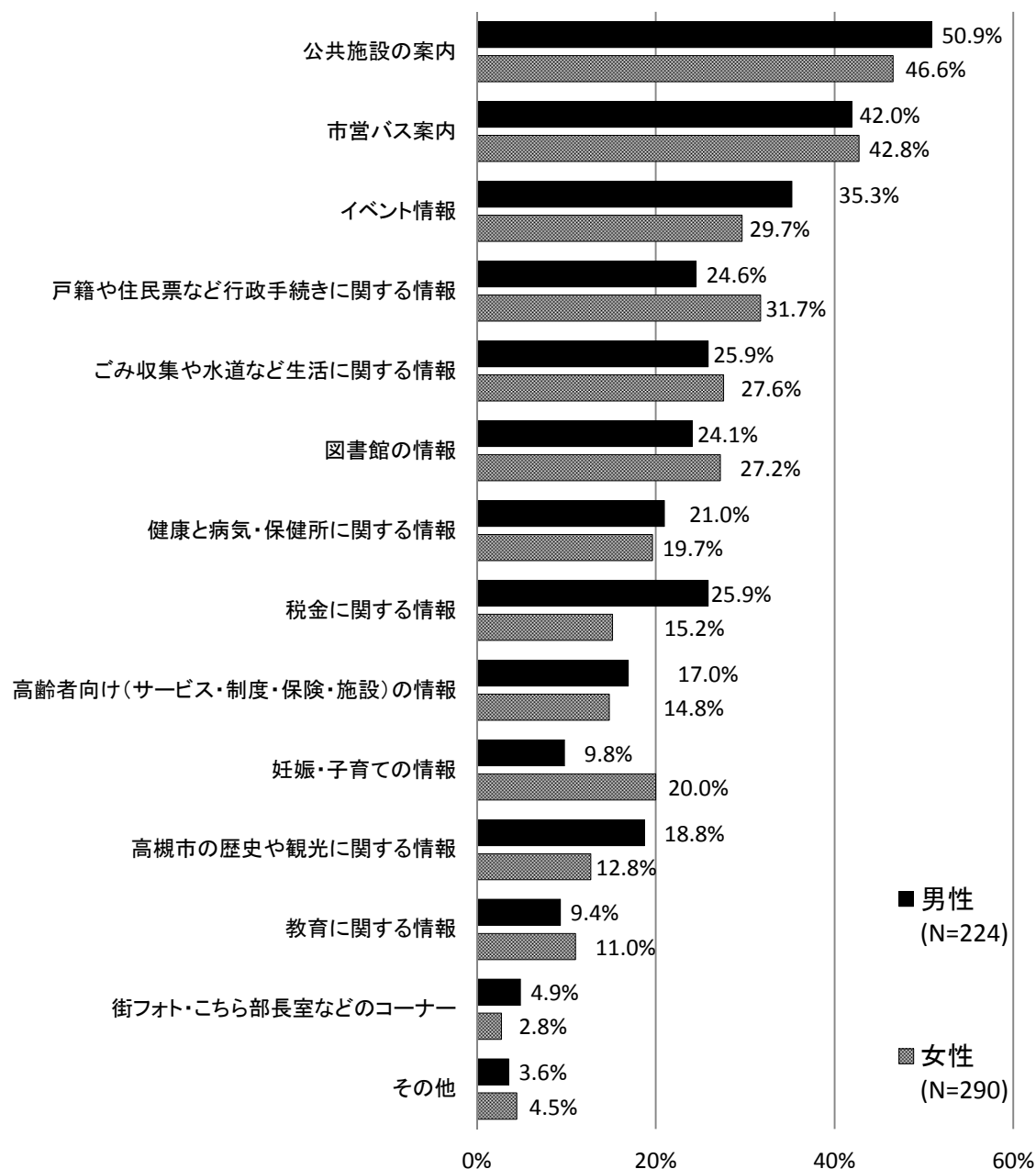


図 60 Q31 市のホームページでよく見る情報（男女別）

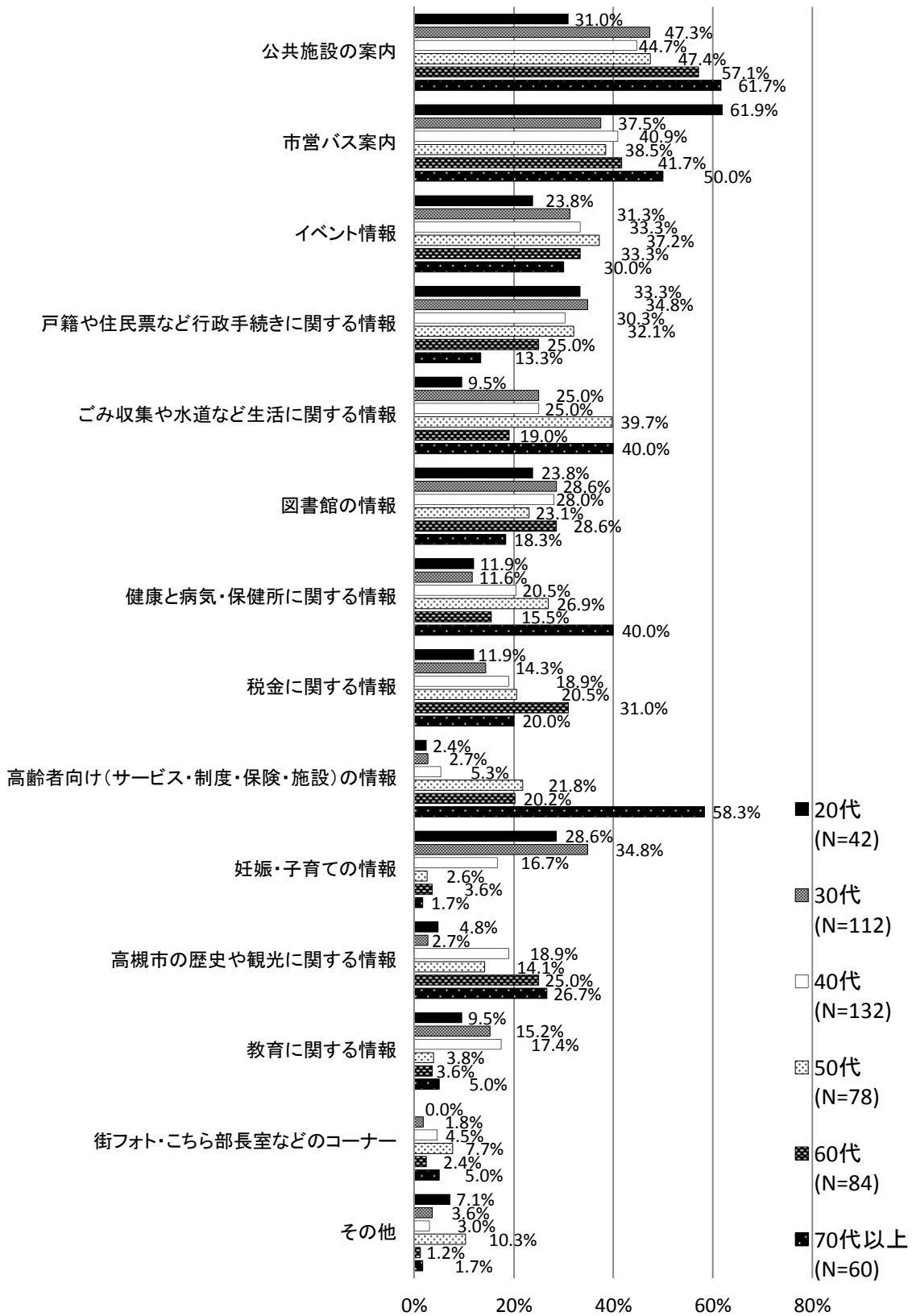


図 61 Q31 市のホームページでよく見る情報（年齢別）

Q32 の情報 BOX ワイドたかつきを視聴しているかについて見ると、男女別・年代別のどの層でも、「ほとんど見ていない」「知っているが、見たことはない」「放送されていることを知らなかった」の割合が6割以上である。20代では「放送されていることを知らなかった」の割合が40.0%と特に高い(図62)。

Q33 の情報 BOX ワイドたかつきを一番よく見る時間帯については、女性と20代と60代以上では「午後6時00分から」の割合が最も高く、男性とそれ以外の年代では「午後10時15分から」の割合が最も高い(図63)。

Q34 の情報 BOX ワイドたかつきのインターネット配信を視聴すると思うかについては、男女別・年代別のどの層でも「視聴しないと思う」の割合が最も高い。男性と40代と50代では「ときどき視聴すると思う」の割合が3割以上である(図64)。

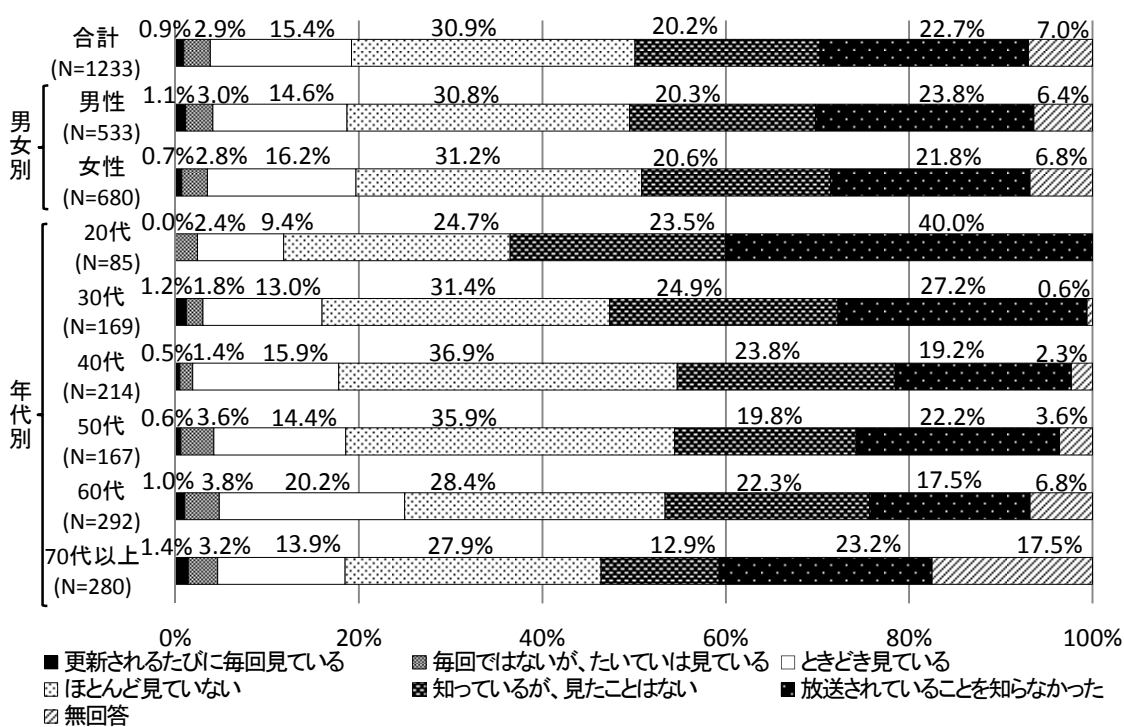


図 62 Q32 「情報 BOX ワイドたかつき」を視聴しているか

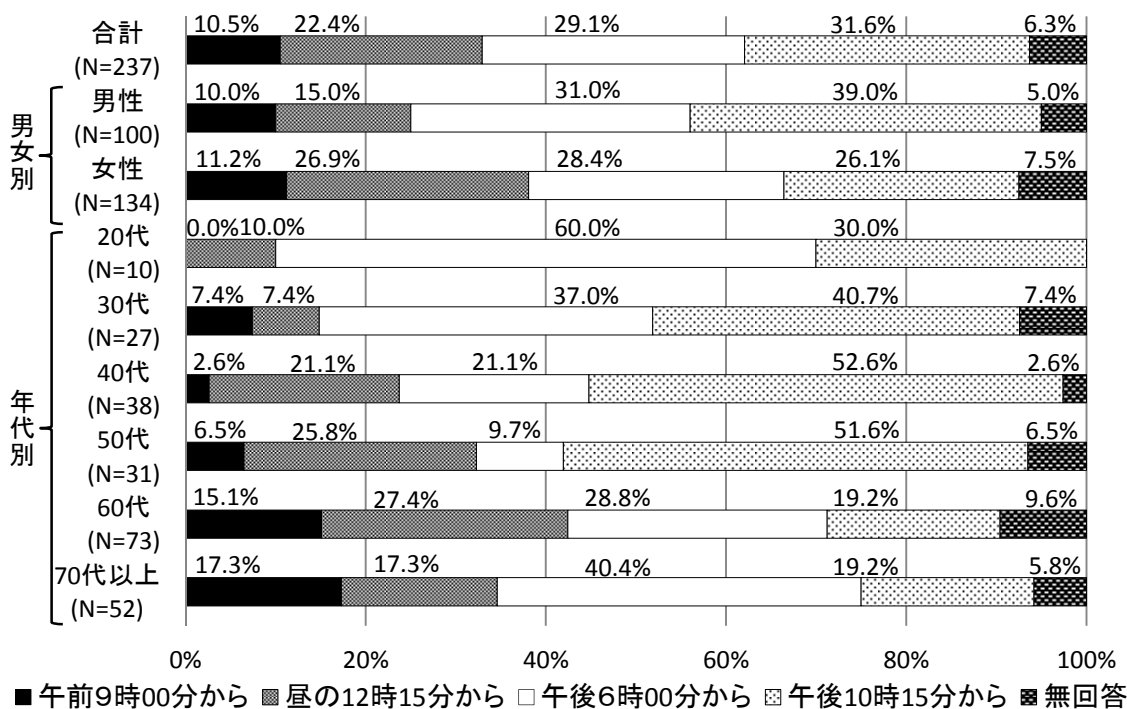


図 63 Q33 「情報 BOX ワイドたかつき」を一番よく見る時間帯

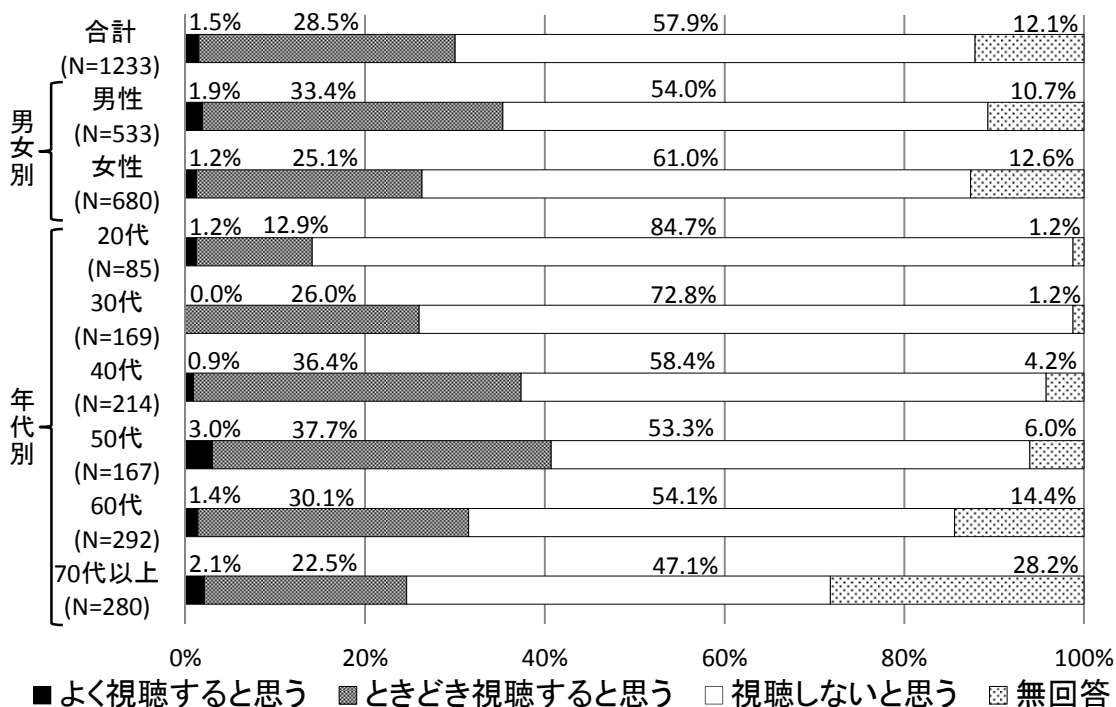


図 64 Q34 「情報 BOX ワイドたかつき」のインターネット配信を視聴すると思うか

Q35 の市から提供してほしい情報については、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「市の窓口や各種制度などに関する情報」、「市の施設の紹介や案内などの状況」、「催しや講座・教室などの案内情報」が4割以上と高い(図65)。

Q35 を男女別で見ると、その3項目に関しては、いずれも男性より女性の割合の方が高い(図66)。

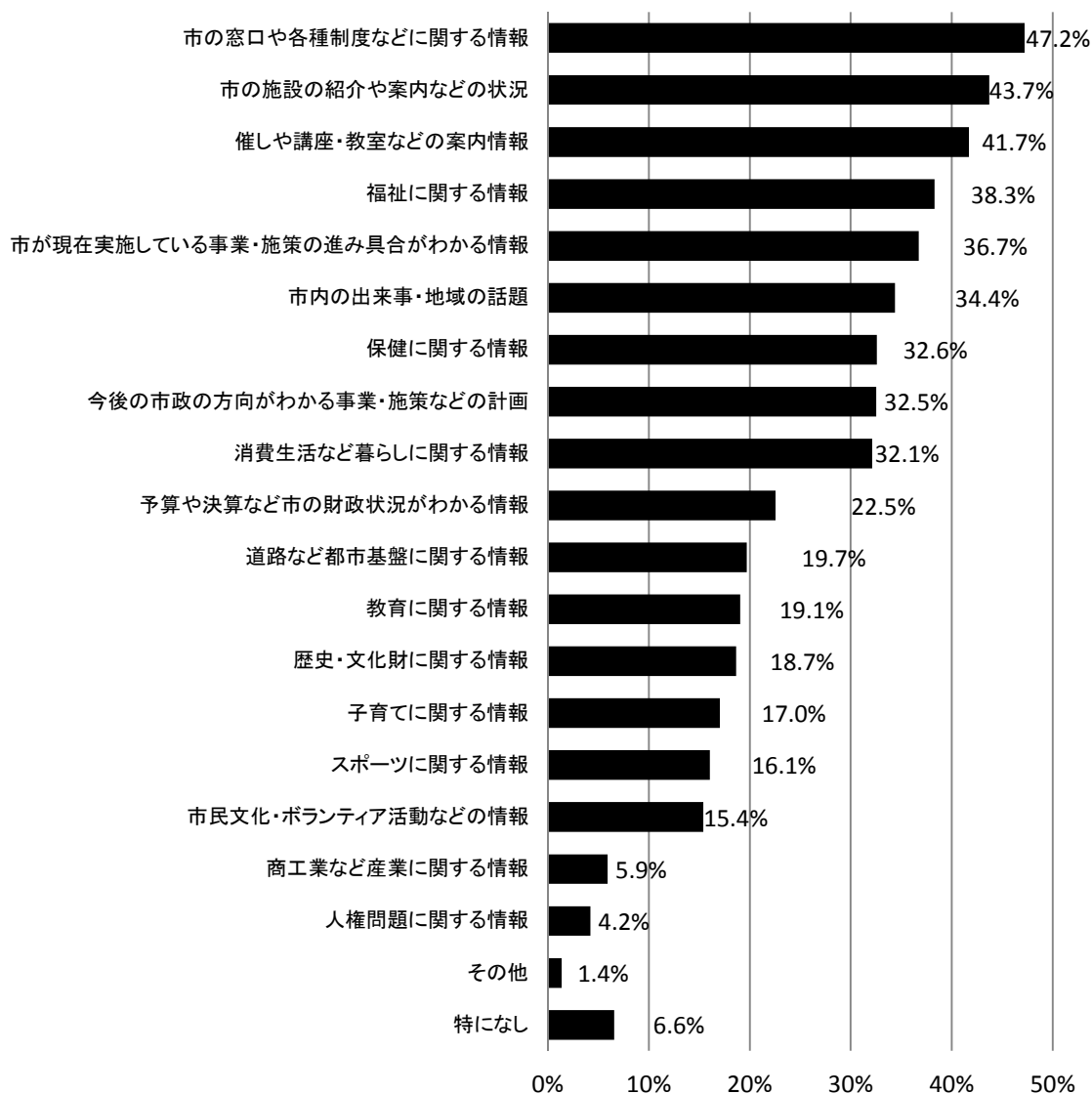


図 65 Q35 市から提供してほしい情報 (全体 N=1233)

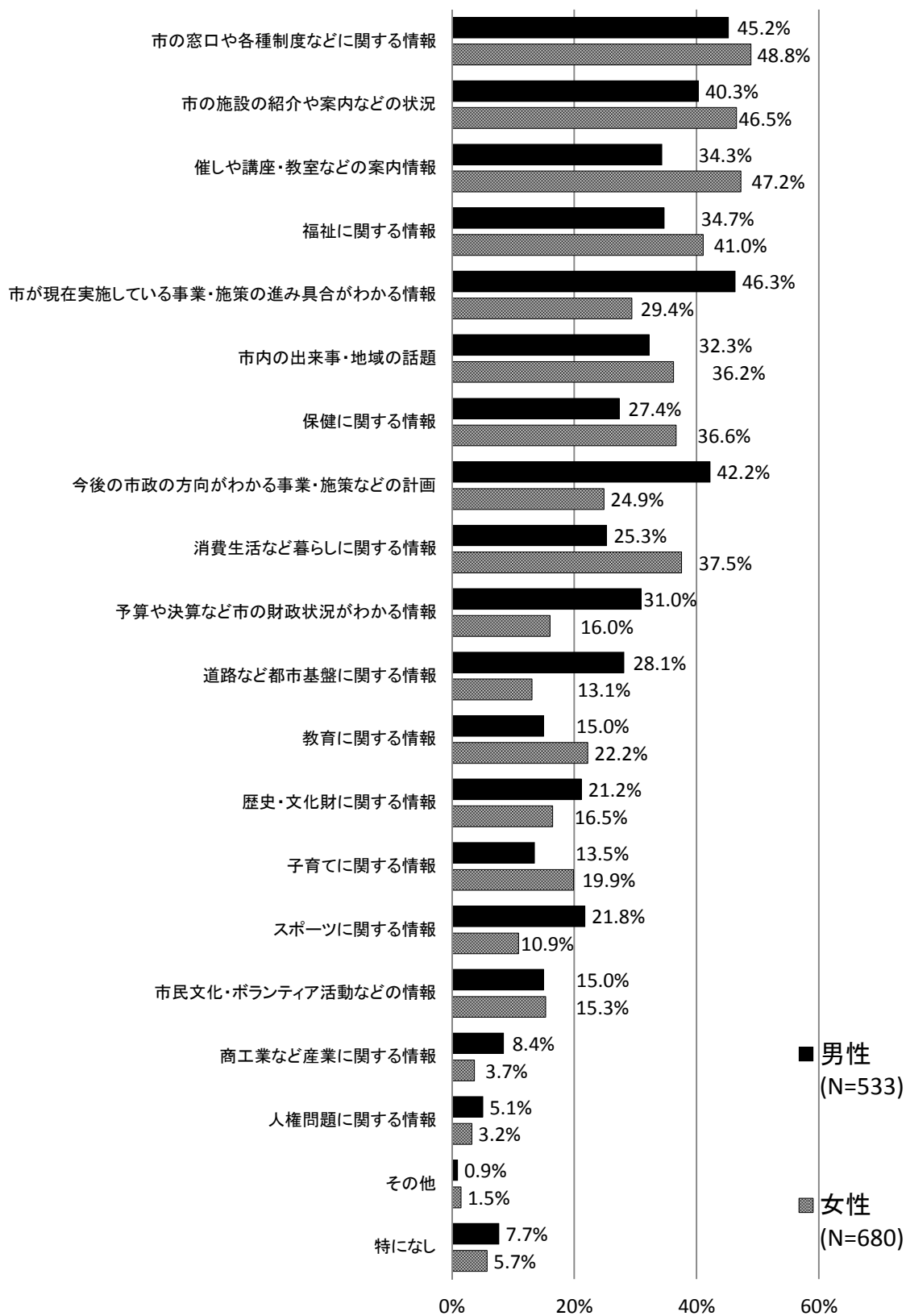


図 66 Q35 市から提供してほしい情報（男女別）

Q35 を年齢別で見ると、「福祉に関する情報」は年代が上がるにつれて増加しており、70代以上では 47.5%である。「子育てに関する情報」は 30 代の割合が 49.7%と他の年代よりも 18 ポイント以上高い(表 6, 図 67)。

表 6 Q35 市から提供してほしい情報(年齢別)

	(%)						
	市の窓口や各種制度などに関する情報	市の施設の紹介や案内などの状況	催しや講座・教室などの案内情報	福祉に関する情報	市が現在実施している事業・施策の進み具合がわかる情報	市内の出来事・地域の話	保健に関する情報
20代 (N=85)	41.2	34.1	31.8	20.0	28.2	27.1	17.6
30代 (N=169)	51.5	42.6	47.3	23.1	40.8	32.0	24.3
40代 (N=214)	52.3	46.3	46.3	30.4	37.4	36.4	36.4
50代 (N=167)	54.5	50.3	44.3	43.7	47.9	39.5	37.1
60代 (N=292)	47.3	48.3	42.5	46.6	34.9	34.9	32.2
70代以上 (N=280)	38.2	37.1	35.4	47.5	32.1	33.9	37.1

	(%)						
	今後の市政の方向がわかる事業・施策などの計画	消費生活など暮らしに関する情報	予算や決算など市の財政状況がわかる情報	道路など都市基盤に関する情報	教育に関する情報	歴史・文化財に関する情報	子育てに関する情報
20代 (N=85)	28.2	30.6	24.7	15.3	21.2	7.1	27.1
30代 (N=169)	32.0	26.0	25.4	20.1	38.5	14.2	49.7
40代 (N=214)	30.4	33.2	23.4	19.6	40.2	16.4	30.8
50代 (N=167)	39.5	35.3	22.8	23.4	16.2	18.6	6.0
60代 (N=292)	33.6	32.9	18.8	20.2	7.2	21.6	4.1
70代以上 (N=280)	30.7	32.5	23.6	18.9	4.6	23.6	3.9

	(%)					
	スポーツに関する情報	市民文化・ボランティア活動などの情報	商工業など産業に関する情報	人権問題に関する情報	その他	特になし
20代 (N=85)	24.7	16.5	4.7	2.4	1.2	15.3
30代 (N=169)	20.7	10.7	8.3	4.7	3.6	3.6
40代 (N=214)	19.6	12.6	7.9	3.3	1.9	3.7
50代 (N=167)	19.8	18.6	6.0	3.0	1.2	6.0
60代 (N=292)	12.0	19.9	3.4	4.1	0.3	8.2
70代以上 (N=280)	8.6	13.2	5.4	5.4	0.4	6.4

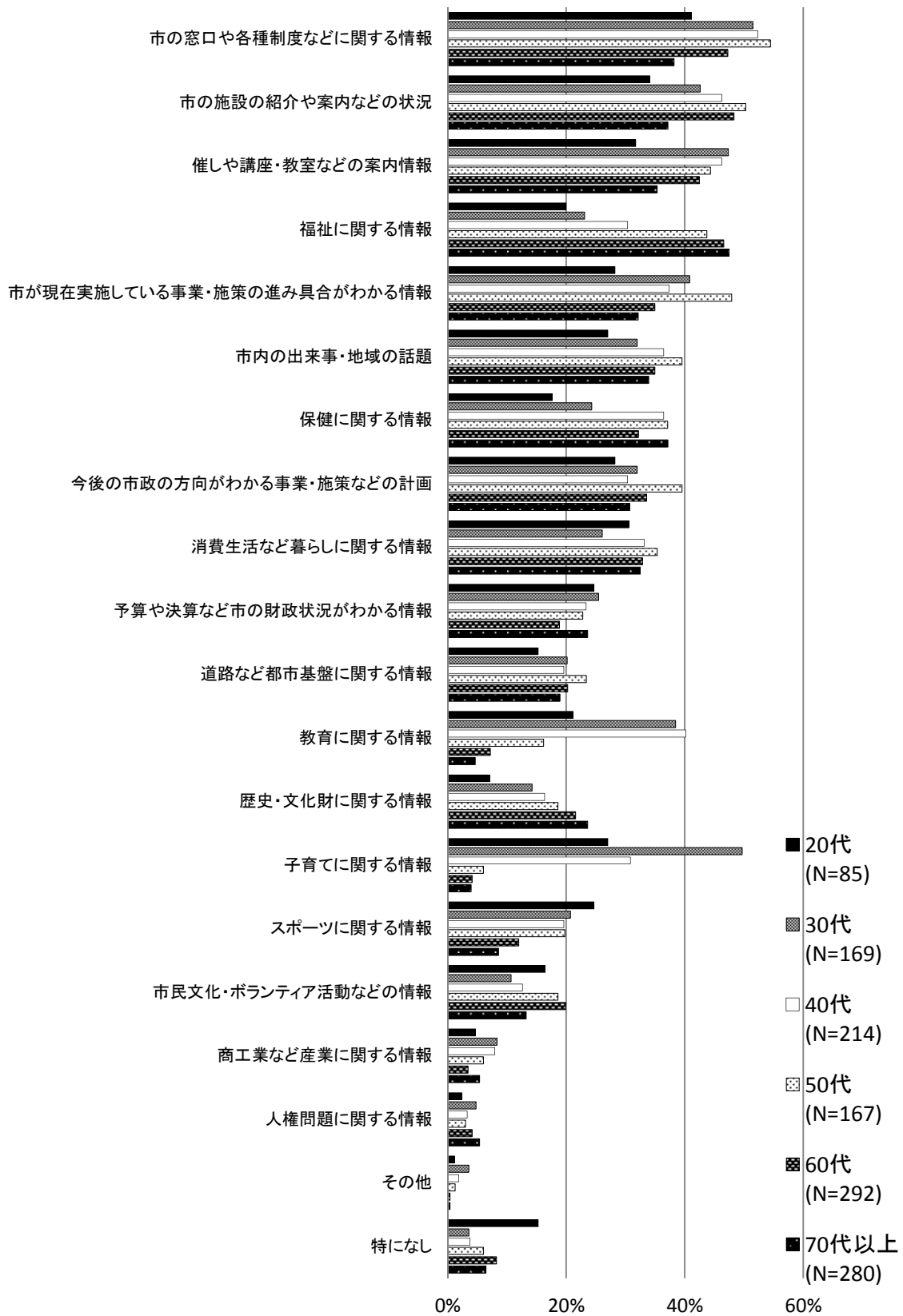


図 67 Q35 市から提供してほしい情報（年齢別）

Q36 と Q36 に関しては居住地域と居住年数とのクロス集計も提示する。また、図の数字が見づらくなる場合は同時に表も提示している。

Q36 の市の仕事のうち良くなってきたものについては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「図書館などの文化施設の整備」が 35.4%と最も多く、次いで「駅前の整備、駐車・駐輪対策」の 33.1%となっている（図 68）。

Q36 を男女別で見ると、「子育て支援」の割合が男性よりも女性の方が 7ポイント以上高い。「空気の汚れ、騒音などへの対策」の割合は、男性の方が女性の倍以上高い。（図 69）。

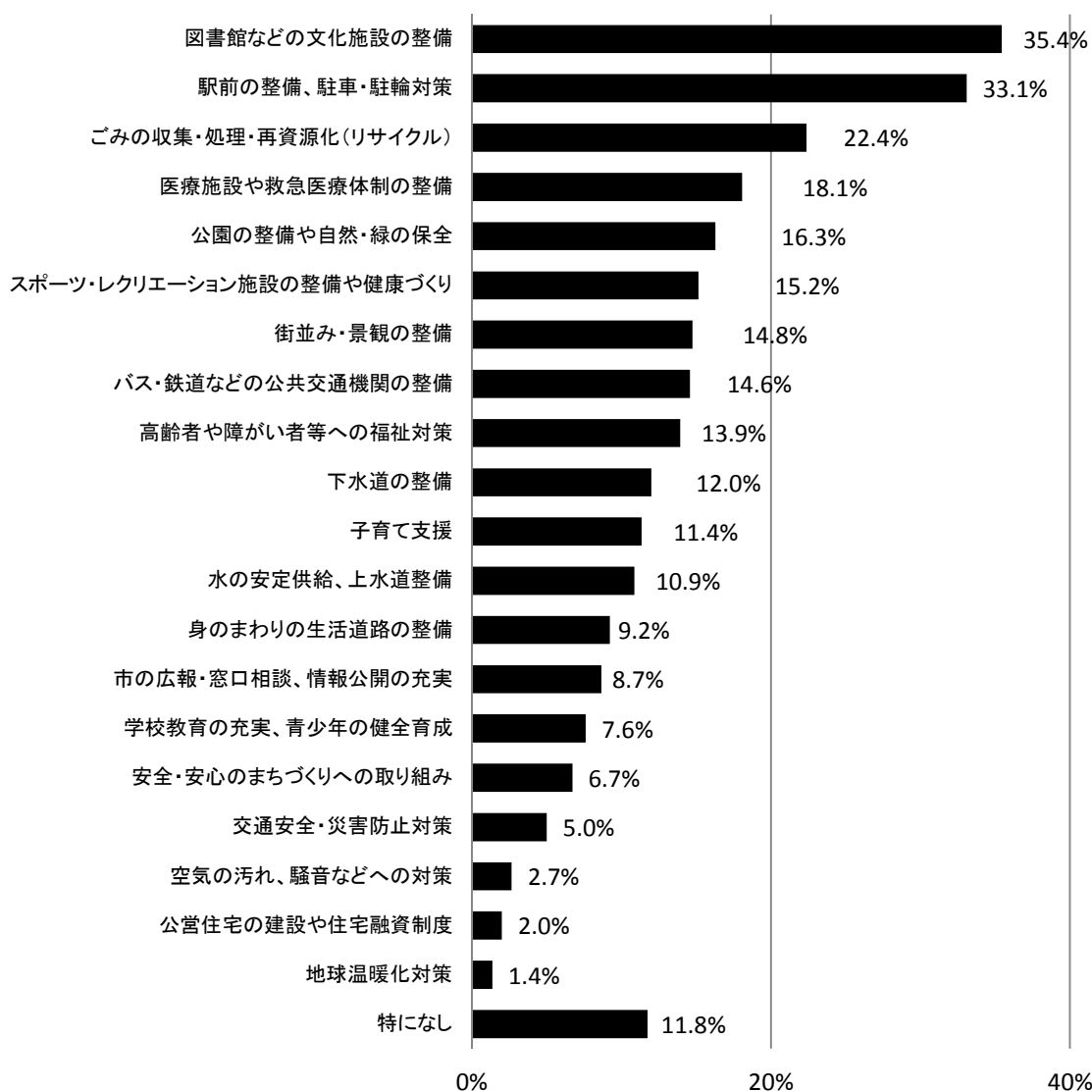


図 68 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの（全体 N=1233）

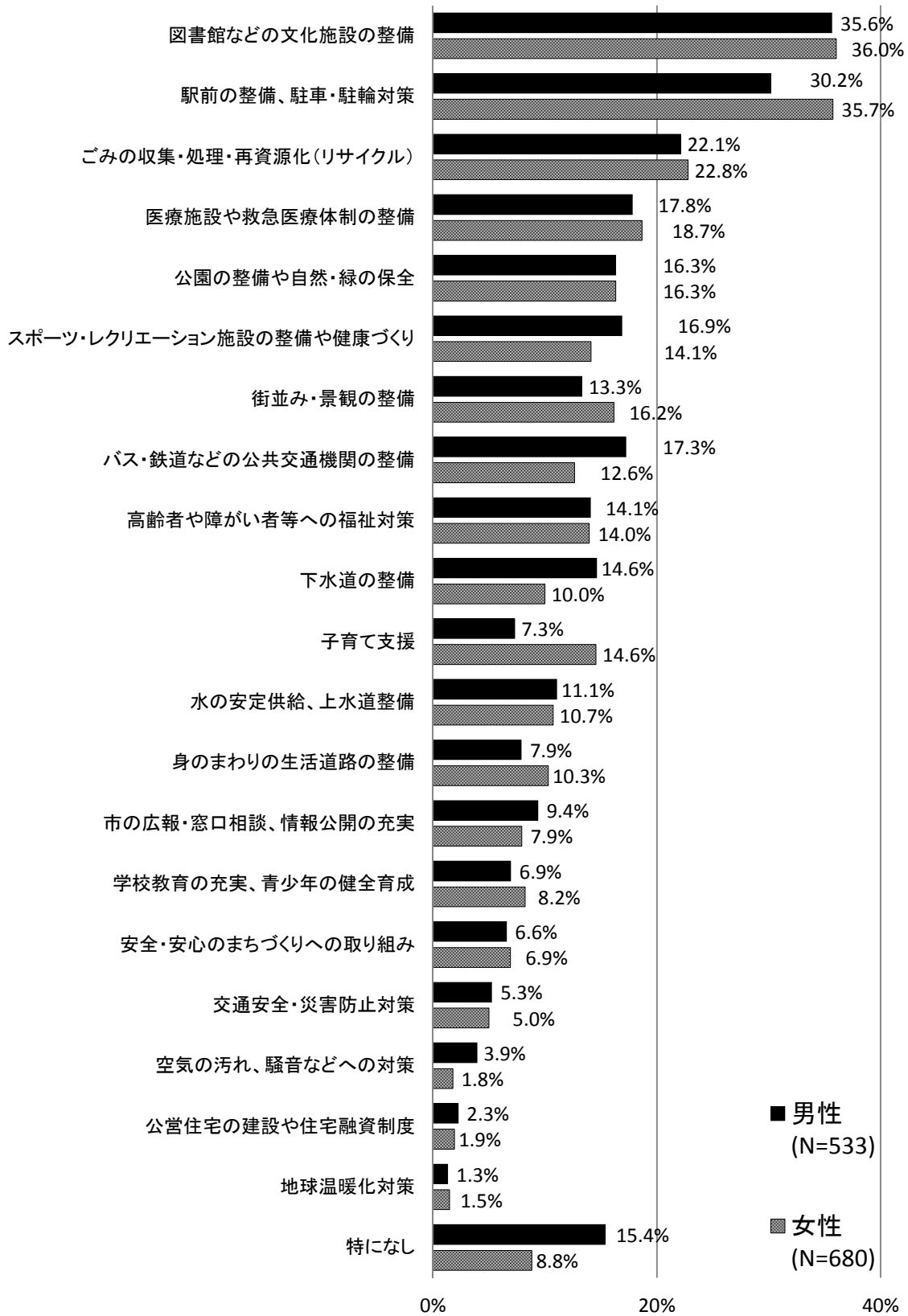


図 69 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの(男女別)

Q36 を年齢別で見ると、多くの項目において70代以上の割合が最も高い。特に「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」や「市の広報・窓口相談、情報公開の充実」、「安全・安心のまちづくりへの取り組み」が他の年代に比べて割合が高い(表7, 図70)。

表7 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの(年齢別)

	(%)						
	図書館などの文化施設の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	医療施設や救急医療体制の整備	公園の整備や自然・緑の保全	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	街並み・景観の整備
20代(N=85)	35.3	25.9	8.2	10.6	12.9	17.6	10.6
30代(N=169)	28.4	25.4	12.4	13.6	9.5	10.7	15.4
40代(N=214)	37.4	30.8	16.8	15.9	14.5	12.6	17.8
50代(N=167)	42.5	37.1	15.6	18.0	18.6	15.6	19.8
60代(N=292)	37.0	36.0	28.1	19.9	15.8	17.5	13.4
70代以上(N=280)	34.3	37.9	35.0	23.6	22.1	17.5	12.9

	(%)						
	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	下水道の整備	子育て支援	水の安定供給、上水道整備	身のまわりの生活道路の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実
20代(N=85)	11.8	10.6	5.9	12.9	5.9	8.2	5.9
30代(N=169)	11.8	5.9	7.1	23.1	7.1	8.3	4.7
40代(N=214)	10.3	7.9	9.8	15.4	6.5	7.9	3.7
50代(N=167)	13.2	9.0	9.0	5.4	9.6	8.4	9.6
60代(N=292)	13.4	17.8	13.4	6.5	11.6	10.6	7.5
70代以上(N=280)	22.9	23.9	19.3	9.6	18.2	10.0	15.7

	(%)						
	学校教育の充実、青少年の健全育成	安全・安心のまちづくりへの取り組み	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	地球温暖化対策	特になし
20代(N=85)	5.9	5.9	5.9	1.2	1.2	1.2	16.5
30代(N=169)	9.5	6.5	5.3	1.8	1.2	1.2	21.9
40代(N=214)	9.8	3.7	2.8	2.8	1.9	2.3	13.1
50代(N=167)	7.2	5.4	1.8	1.2	2.4	0.6	12.6
60代(N=292)	6.5	4.8	5.1	1.7	2.7	1.4	8.9
70代以上(N=280)	7.1	12.5	8.6	5.7	2.1	1.4	5.4

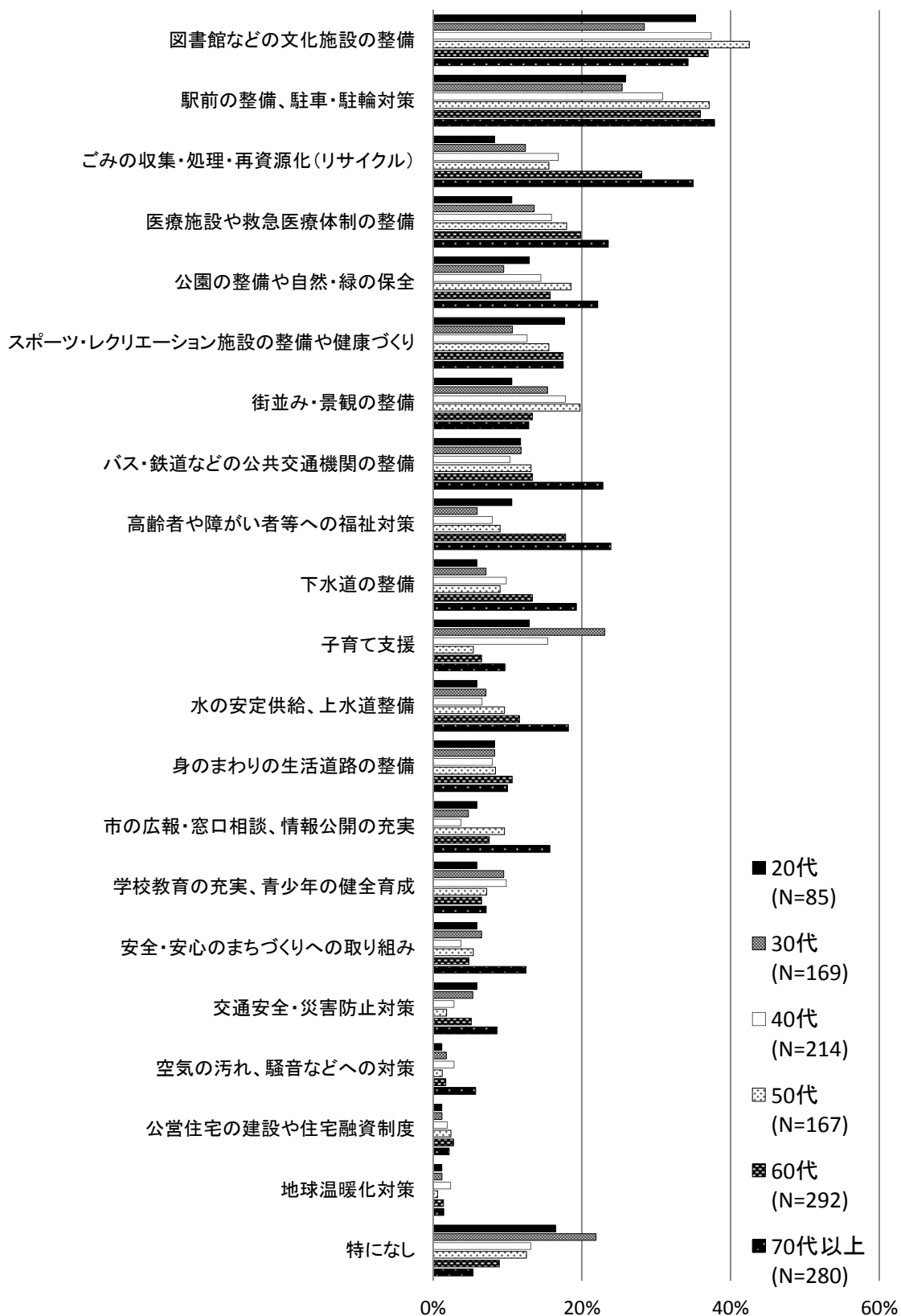


図 70 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの（年齢別）

Q36 を居住地域別で見ると、「図書館などの文化施設の整備」と「街並み・景観の整備」では高槻北地区、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」では五領地区、「下水道の整備」では三箇牧地区の割合が、他の地区よりも9ポイント以上高い(表8, 図71)。

表8 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの(居住地域別)

	(%)						
	図書館などの 文化施設の整備	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	医療施設や救急 医療体制の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	街並み・景観 の整備
高槻北地区 (N=331)	51.1	40.8	22.4	18.4	18.1	13.3	22.7
高槻南地区 (N=314)	27.7	39.2	22.9	20.4	15.3	15.9	12.1
五領地区 (N=49)	14.3	32.7	32.7	24.5	14.3	12.2	8.2
高槻西地区 (N=195)	35.9	27.7	25.1	21.0	20.5	12.8	12.8
如是・富田地区 (N=256)	31.6	23.4	18.0	13.7	14.8	19.1	12.1
三箇牧地区 (N=29)	31.0	31.0	20.7	13.8	10.3	24.1	3.4
	(%)						
	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	下水道の整備	子育て支援	水の安定供給、 上水道整備	身のまわりの 生活道路の整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実
高槻北地区 (N=331)	16.3	13.6	12.4	12.1	11.5	9.1	10.6
高槻南地区 (N=314)	15.3	15.9	14.3	13.1	13.7	8.9	9.2
五領地区 (N=49)	28.6	12.2	12.2	4.1	10.2	16.3	10.2
高槻西地区 (N=195)	14.9	14.4	8.7	10.8	8.7	11.3	9.2
如是・富田地区 (N=256)	10.2	13.3	10.5	10.2	8.6	7.0	5.5
三箇牧地区 (N=29)	10.3	13.8	24.1	13.8	6.9	3.4	10.3
	(%)						
	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	安全・安心の まちづくりへの 取り組み	交通安全・災害 防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	地球温暖化対策	特になし
高槻北地区 (N=331)	8.8	7.3	6.6	3.0	1.5	1.2	9.1
高槻南地区 (N=314)	10.8	8.0	5.7	3.5	2.5	1.6	11.8
五領地区 (N=49)	4.1	8.2	4.1	4.1	6.1	2.0	18.4
高槻西地区 (N=195)	8.2	6.2	3.6	2.6	1.5	2.1	11.3
如是・富田地区 (N=256)	3.9	6.3	4.3	1.6	1.2	1.2	15.6
三箇牧地区 (N=29)	3.4	0.0	0.0	0.0	10.3	0.0	6.9

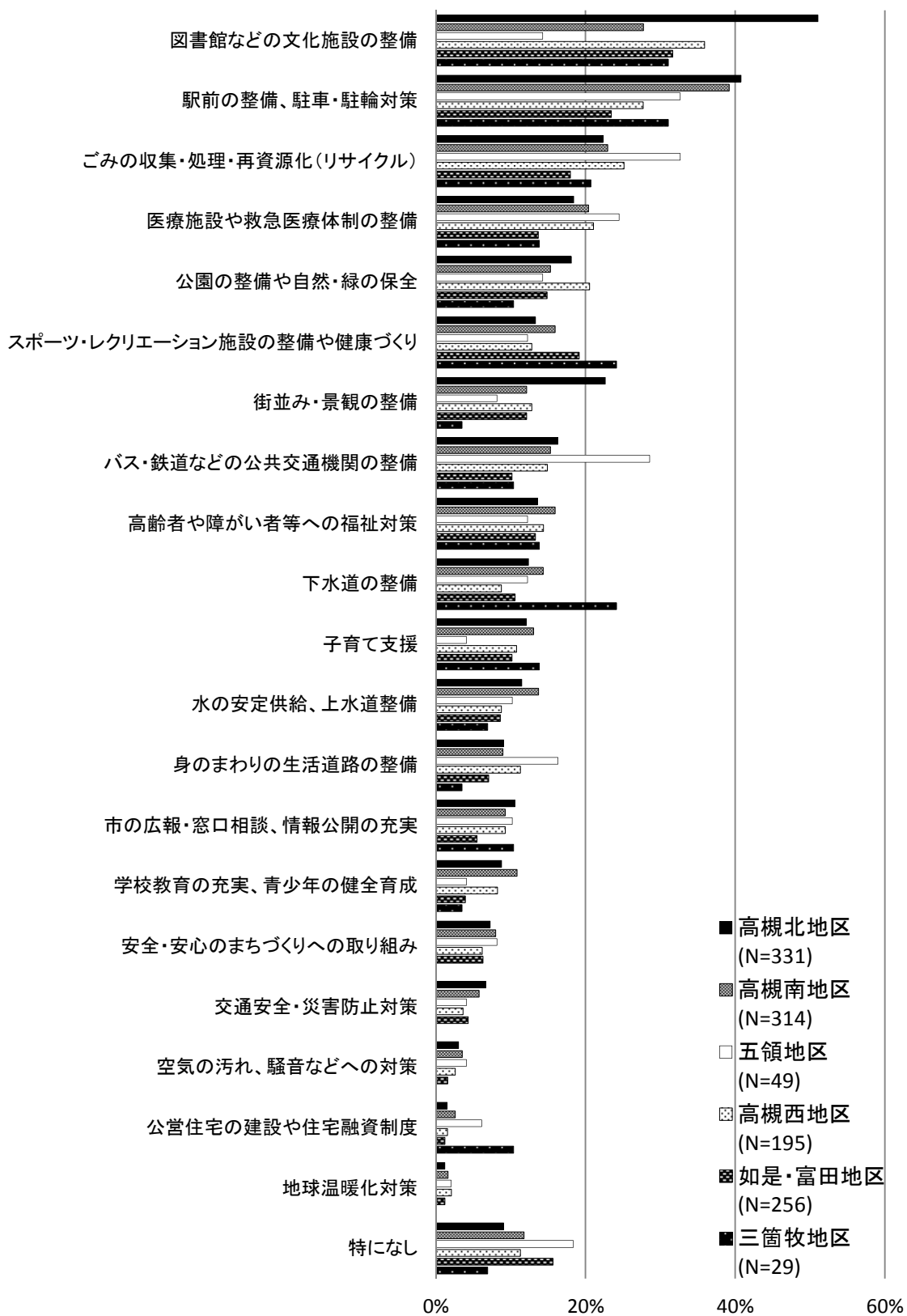


図 71 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの（居住地域別）

Q36 を居住年数別で見ると、「子育て支援」では1年以上3年未満が37.5%と他の居住年数よりも19ポイント以上高い(表9, 図72)。

表9 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの(居住年数別)

	図書館などの文化施設の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	医療施設や救急医療体制の整備	公園の整備や自然・緑の保全	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	街並み・景観の整備
1年未満(N=21)	14.3	19.0	9.5	19.0	9.5	0.0	9.5
1年以上3年未満(N=40)	5.0	27.5	2.5	7.5	17.5	2.5	12.5
3年以上5年未満(N=39)	28.2	17.9	25.6	20.5	0.0	5.1	10.3
5年以上10年未満(N=84)	23.8	20.2	11.9	17.9	16.7	8.3	10.7
10年以上20年未満(N=166)	34.3	25.9	15.7	13.3	11.4	13.9	13.9
20年以上30年未満(N=214)	46.7	38.3	18.7	17.3	17.8	17.3	17.3
30年以上40年未満(N=277)	37.9	36.8	20.9	17.0	14.4	14.1	13.4
40年以上50年未満(N=270)	38.1	37.8	35.6	23.7	21.9	20.4	20.0
50年以上(N=104)	31.7	34.6	27.9	20.2	18.3	20.2	9.6

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	下水道の整備	子育て支援	水の安定供給、上水道整備	身のまわりの生活道路の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実
1年未満(N=21)	4.8	9.5	0.0	9.5	4.8	0.0	0.0
1年以上3年未満(N=40)	10.0	12.5	0.0	37.5	0.0	10.0	2.5
3年以上5年未満(N=39)	10.3	10.3	2.6	17.9	2.6	10.3	2.6
5年以上10年未満(N=84)	13.1	7.1	4.8	13.1	2.4	9.5	7.1
10年以上20年未満(N=166)	10.8	9.0	7.2	11.4	7.2	10.8	7.8
20年以上30年未満(N=214)	12.6	13.1	7.9	8.4	7.9	7.5	7.9
30年以上40年未満(N=277)	12.3	10.1	13.4	8.3	11.6	6.5	6.1
40年以上50年未満(N=270)	23.3	23.0	20.0	12.6	17.8	13.0	11.1
50年以上(N=104)	15.4	19.2	20.2	8.7	17.3	7.7	19.2

	学校教育の充実、青少年の健全育成	安全・安心のまちづくりへの取り組み	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	地球温暖化対策	特になし
1年未満(N=21)	0.0	9.5	9.5	0.0	0.0	0.0	23.8
1年以上3年未満(N=40)	15.0	2.5	2.5	2.5	0.0	0.0	25.0
3年以上5年未満(N=39)	5.1	7.7	5.1	5.1	2.6	0.0	15.4
5年以上10年未満(N=84)	9.5	4.8	2.4	0.0	0.0	1.2	20.2
10年以上20年未満(N=166)	5.4	4.2	3.6	1.2	2.4	0.6	9.6
20年以上30年未満(N=214)	7.0	6.1	3.3	1.4	1.9	2.3	8.9
30年以上40年未満(N=277)	6.9	6.1	4.3	2.2	0.7	0.7	14.1
40年以上50年未満(N=270)	10.0	9.6	8.1	6.3	4.4	3.0	6.7
50年以上(N=104)	6.7	8.7	6.7	1.9	1.9	0.0	12.5

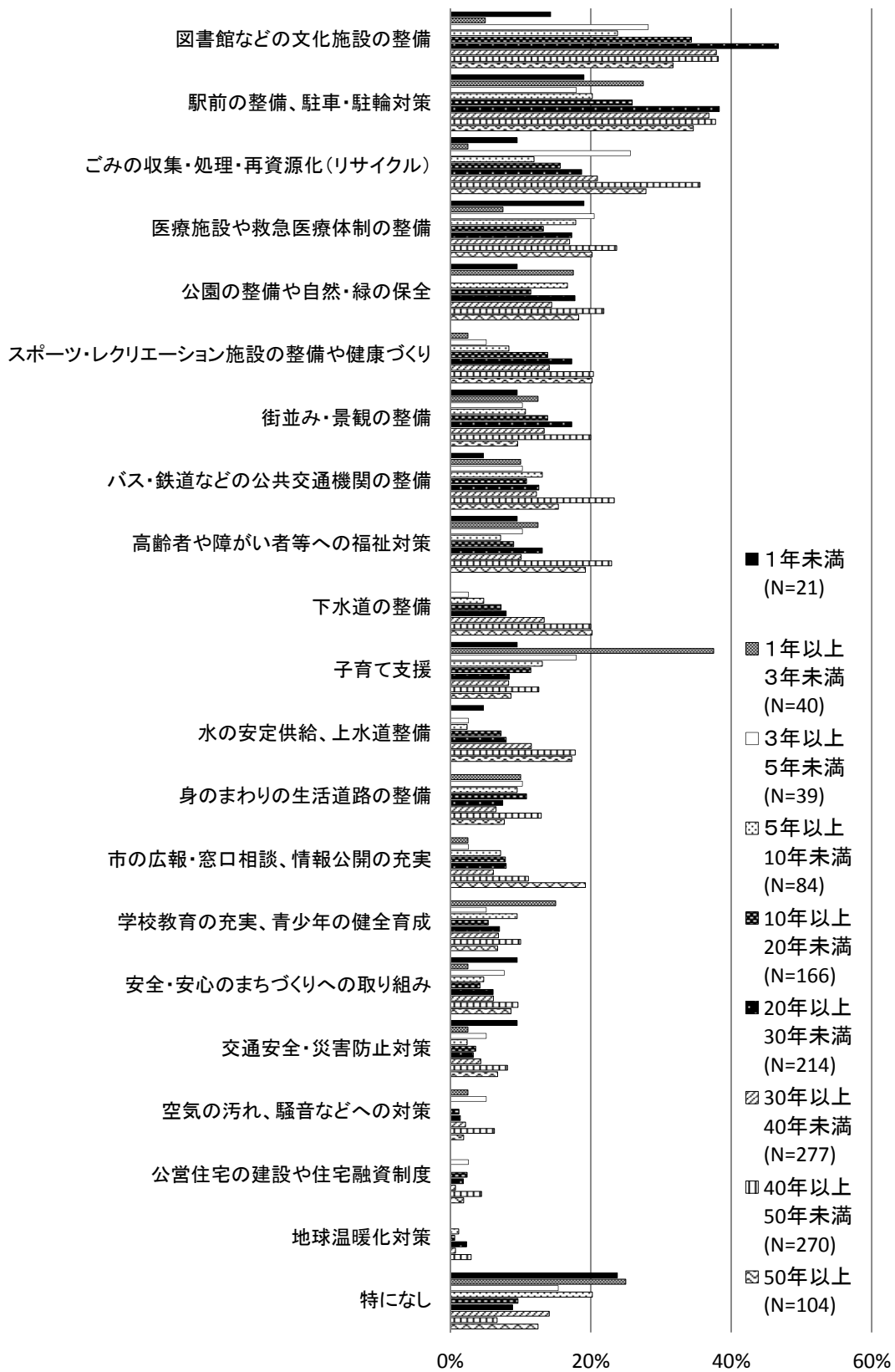


図 72 Q36 市の仕事のうち良くなってきたもの（居住年数別）

Q36 の市の仕事のうち力を入れてほしいものについては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、「医療施設や救急医療体制の整備」と「高齢者や障がい者等への福祉対策」の割合がともに30%以上と高い(図73)。

Q36 を男女別で見てもあまり大きな差は見られない(図74)。

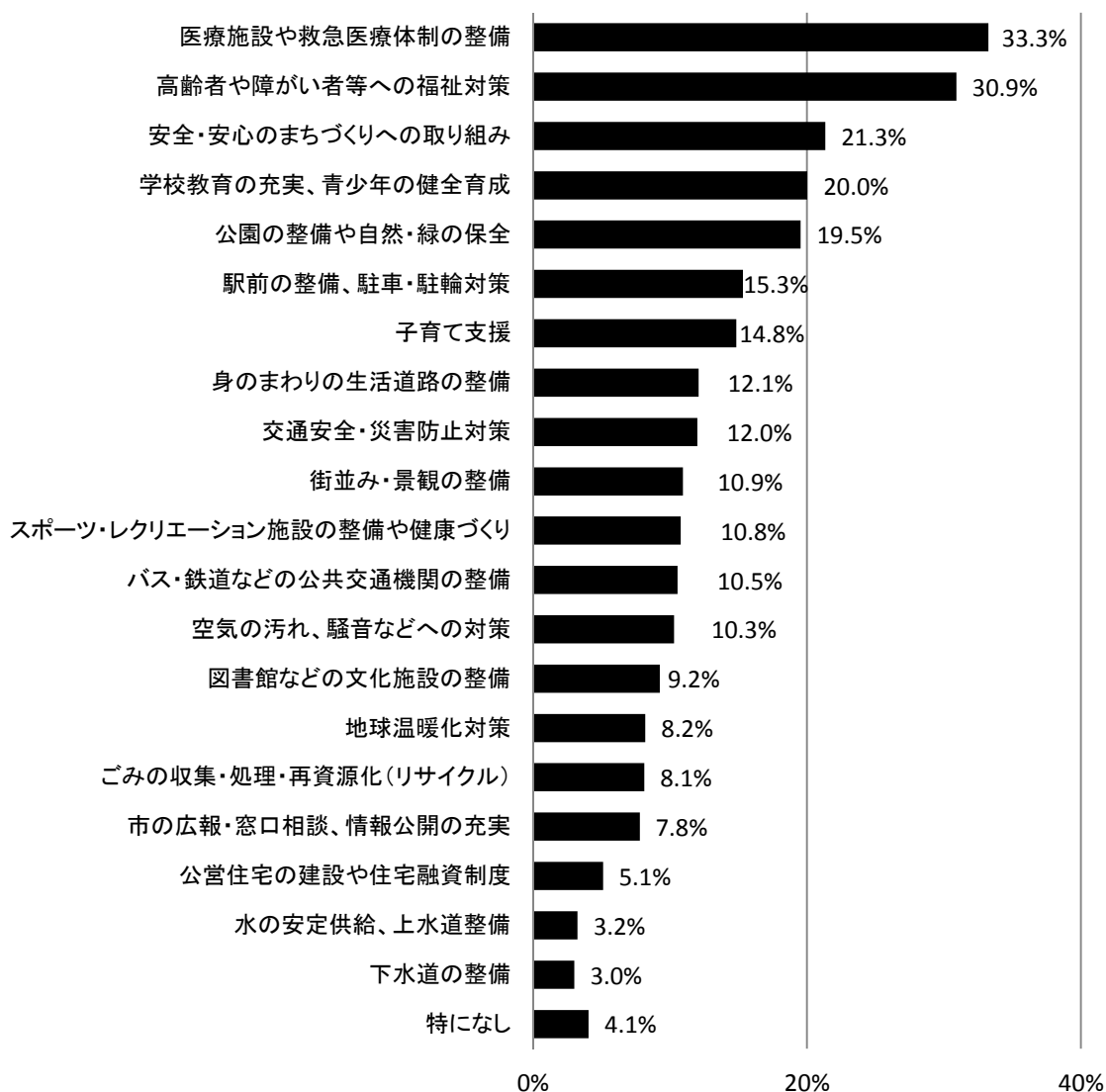


図73 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(全体 N=1233)

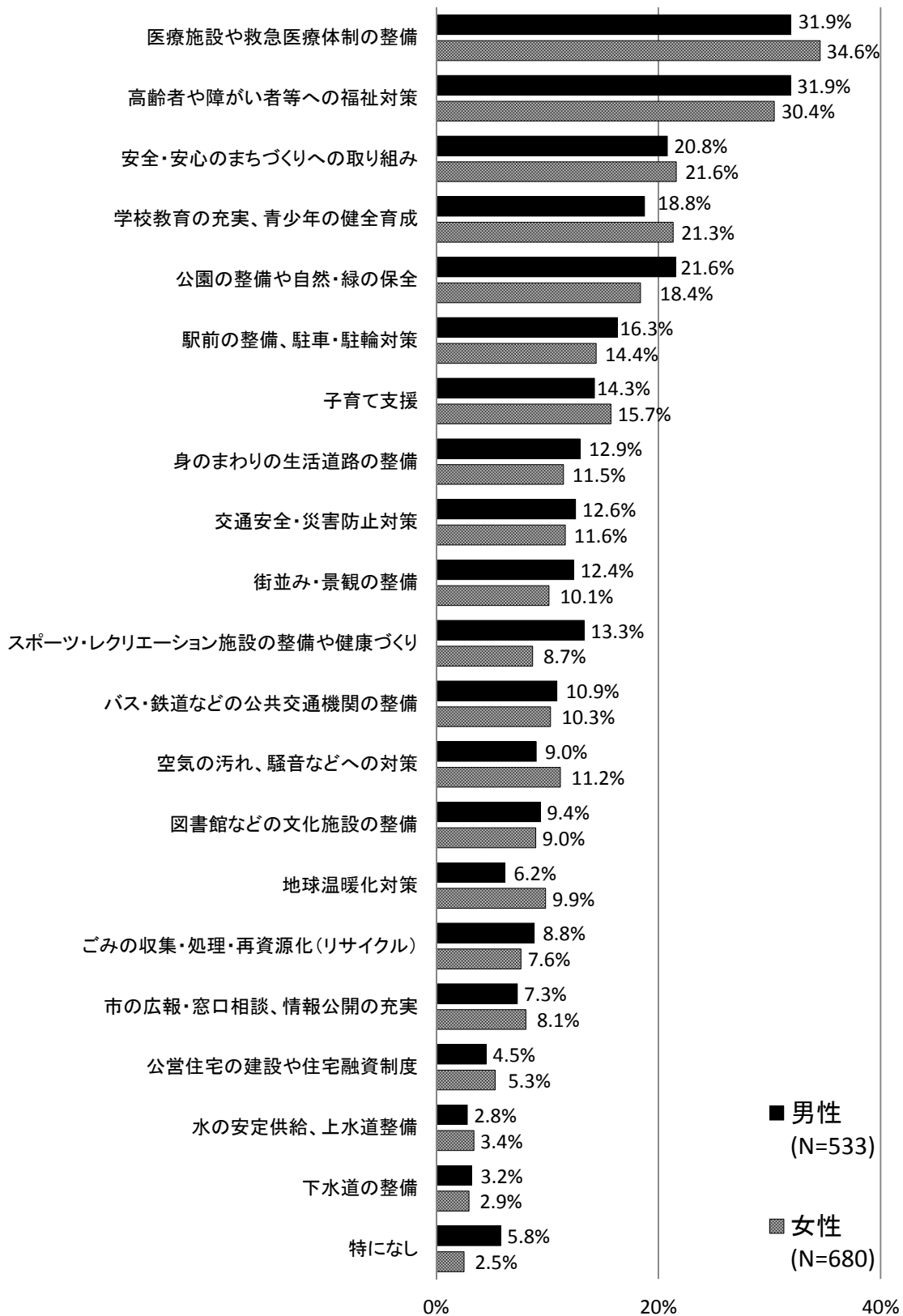


図 74 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(男女別)

Q36 を年齢別で見ると、「子育て支援」で30代が43.8%と他の年代よりも20ポイント以上高い。「子育て支援」はQ36の30代では23.1%であり、それよりも20ポイント以上高い結果である(表10, 図75)。

表10 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(年齢別)

	(%)						
	医療施設や救急医療体制の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	安全・安心のまちづくりへの取り組み	学校教育の充実、青少年の健全育成	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	子育て支援
20代(N=85)	28.2	16.5	16.5	16.5	12.9	14.1	23.5
30代(N=169)	26.0	10.7	19.5	30.2	25.4	17.2	43.8
40代(N=214)	33.2	21.5	24.3	33.6	22.0	18.7	21.0
50代(N=167)	41.9	37.1	25.1	17.4	22.2	21.6	7.2
60代(N=292)	36.6	40.1	20.5	12.3	22.9	12.3	7.9
70代以上(N=280)	30.4	41.8	20.4	15.7	11.8	11.4	2.9

	(%)						
	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	街並み・景観の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館などの文化施設の整備
20代(N=85)	11.8	8.2	8.2	17.6	10.6	15.3	12.9
30代(N=169)	16.0	10.7	5.9	5.3	8.3	13.0	13.0
40代(N=214)	13.6	15.4	12.1	11.7	12.6	9.3	9.3
50代(N=167)	12.6	15.0	15.6	14.4	9.0	9.0	11.4
60代(N=292)	11.3	12.3	12.7	11.6	11.6	9.9	5.8
70代以上(N=280)	10.0	9.3	10.4	8.6	10.7	8.9	8.2

	(%)						
	地球温暖化対策	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上水道整備	下水道の整備	特になし
20代(N=85)	9.4	5.9	9.4	5.9	1.2	4.7	5.9
30代(N=169)	3.6	10.7	5.9	5.3	3.0	3.0	6.5
40代(N=214)	7.9	10.3	7.5	6.5	2.3	3.3	3.3
50代(N=167)	10.2	12.6	7.8	3.6	3.0	2.4	4.8
60代(N=292)	9.9	6.2	7.5	4.5	2.4	1.7	3.1
70代以上(N=280)	7.5	5.4	8.9	4.3	5.4	4.3	2.9

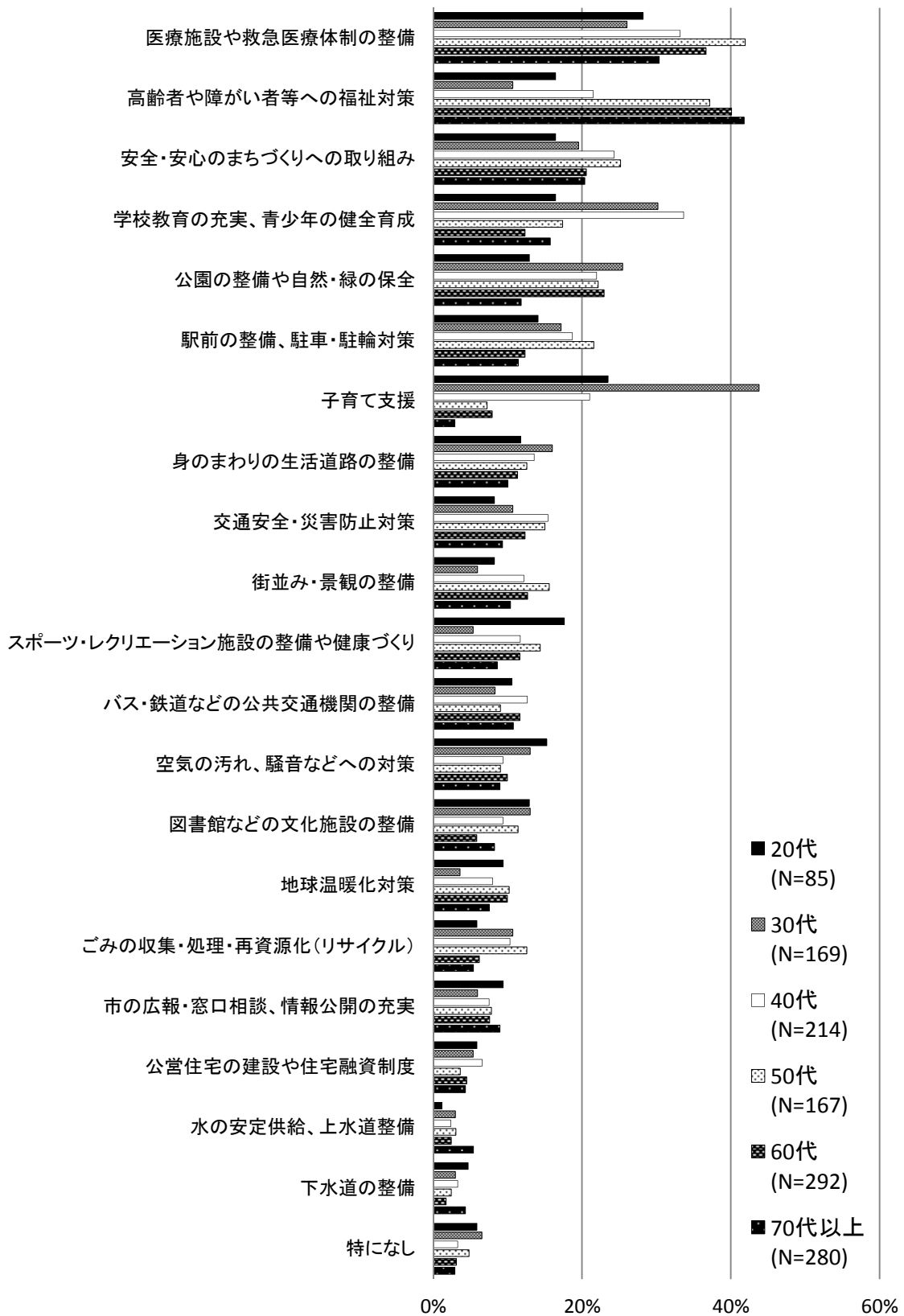


図 75 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（年齢別）

Q36 を居住地域別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」では三箇牧地区が 55.2%と他の地区よりも 20 ポイント以上高い。「図書館などの文化施設の整備」では五領地区が 22.4%と他の地区よりも 10 ポイント以上高い。「公営住宅の建設や住宅融資制度」では三箇牧地区のみが 1 割以上である。(表 11, 図 76)。

表 11 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(居住地域別)

	(%)						
	医療施設や救急医療体制の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	安全・安心のまちづくりへの取り組み	学校教育の充実、青少年の健全育成	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	子育て支援
高槻北地区 (N=331)	32.3	32.3	21.1	18.7	23.6	17.5	10.0
高槻南地区 (N=314)	29.0	26.8	22.0	21.3	18.8	17.2	17.5
五領地区 (N=49)	30.6	28.6	14.3	18.4	26.5	16.3	14.3
高槻西地区 (N=195)	35.4	34.9	25.6	24.6	21.0	14.4	16.9
如是・富田地区 (N=256)	36.3	27.7	19.1	19.9	16.0	13.3	18.4
三箇牧地区 (N=29)	41.4	55.2	17.2	10.3	6.9	6.9	6.9

	(%)						
	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	街並み・景観の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館などの文化施設の整備
高槻北地区 (N=331)	10.6	11.5	13.9	13.6	9.4	11.2	10.0
高槻南地区 (N=314)	12.4	14.6	10.8	12.4	8.3	11.5	9.2
五領地区 (N=49)	10.2	10.2	10.2	4.1	16.3	8.2	22.4
高槻西地区 (N=195)	14.4	10.3	12.3	9.7	13.3	9.7	6.7
如是・富田地区 (N=256)	12.9	12.1	8.2	8.6	11.3	8.2	8.6
三箇牧地区 (N=29)	13.8	6.9	10.3	6.9	17.2	13.8	6.9

	(%)						
	地球温暖化対策	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上水道整備	下水道の整備	特になし
高槻北地区 (N=331)	9.4	9.1	7.3	2.1	2.7	2.4	4.8
高槻南地区 (N=314)	6.1	8.3	6.4	7.0	3.2	3.8	5.1
五領地区 (N=49)	6.1	2.0	8.2	2.0	6.1	2.0	2.0
高槻西地区 (N=195)	9.2	6.7	8.7	4.1	4.1	2.1	3.1
如是・富田地区 (N=256)	9.0	9.8	8.6	5.9	3.1	3.9	3.5
三箇牧地区 (N=29)	3.4	10.3	3.4	10.3	0.0	3.4	0.0

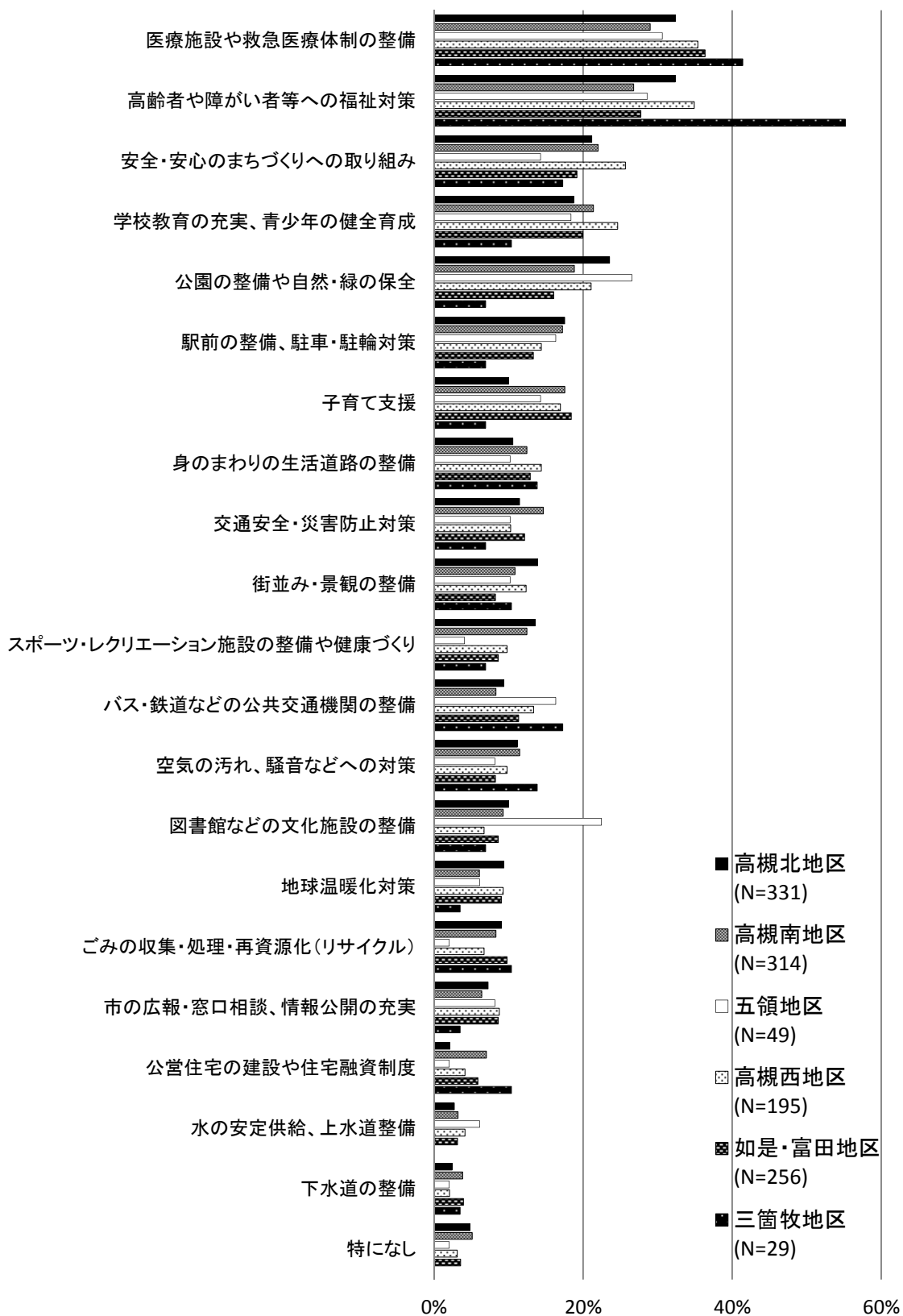


図 76 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（居住地域別）

Q36 を居住年数別で見ると、「学校教育の充実、青少年の健全育成」では5年以上10年未満の割合が他の年代よりも10ポイント以上高い。「子育て支援」では1年以上3年未満の割合が他の年代よりも20ポイント以上高い(表12, 図77)。

表12 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(居住年数別)

	医療施設や救急医療体制の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	安全・安心のまちづくりへの取り組み	学校教育の充実、青少年の健全育成	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	子育て支援
1年未満(N=21)	38.1	28.6	33.3	9.5	14.3	14.3	14.3
1年以上3年未満(N=40)	27.5	20.0	30.0	27.5	25.0	17.5	57.5
3年以上5年未満(N=39)	35.9	20.5	15.4	15.4	30.8	10.3	35.9
5年以上10年未満(N=84)	23.8	16.7	25.0	38.1	23.8	13.1	35.7
10年以上20年未満(N=166)	31.9	25.9	22.3	21.7	22.9	14.5	18.7
20年以上30年未満(N=214)	36.0	29.9	19.2	17.3	18.2	13.1	11.2
30年以上40年未満(N=277)	30.0	28.9	19.5	17.0	20.6	16.6	13.0
40年以上50年未満(N=270)	36.3	43.0	20.7	22.6	16.7	17.0	7.4
50年以上(N=104)	40.4	36.5	24.0	11.5	14.4	17.3	1.9

	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	街並み・景観の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	図書館などの文化施設の整備
1年未満(N=21)	19.0	19.0	9.5	23.8	19.0	19.0	14.3
1年以上3年未満(N=40)	22.5	17.5	7.5	5.0	2.5	17.5	10.0
3年以上5年未満(N=39)	12.8	12.8	10.3	17.9	20.5	15.4	15.4
5年以上10年未満(N=84)	11.9	7.1	4.8	15.5	8.3	3.6	13.1
10年以上20年未満(N=166)	10.8	14.5	10.8	9.6	13.3	15.7	15.1
20年以上30年未満(N=214)	13.6	11.2	11.2	12.1	11.7	11.2	9.3
30年以上40年未満(N=277)	11.6	12.3	13.7	6.9	9.4	9.4	6.5
40年以上50年未満(N=270)	9.3	11.5	10.7	12.2	10.4	8.5	7.4
50年以上(N=104)	15.4	12.5	12.5	9.6	6.7	5.8	4.8

	地球温暖化対策	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上下水道整備	下水道の整備	特になし
1年未満(N=21)	9.5	19.0	0.0	4.8	0.0	4.8	4.8
1年以上3年未満(N=40)	2.5	10.0	5.0	7.5	5.0	2.5	0.0
3年以上5年未満(N=39)	7.7	7.7	2.6	7.7	2.6	2.6	0.0
5年以上10年未満(N=84)	1.2	6.0	3.6	4.8	1.2	0.0	6.0
10年以上20年未満(N=166)	10.8	13.9	5.4	7.2	3.6	4.2	3.0
20年以上30年未満(N=214)	10.7	6.1	12.6	4.2	1.9	2.8	3.7
30年以上40年未満(N=277)	8.3	7.6	5.8	4.7	2.9	4.0	6.1
40年以上50年未満(N=270)	8.9	8.9	8.9	5.2	4.4	2.6	2.6
50年以上(N=104)	5.8	2.9	7.7	1.9	4.8	2.9	5.8

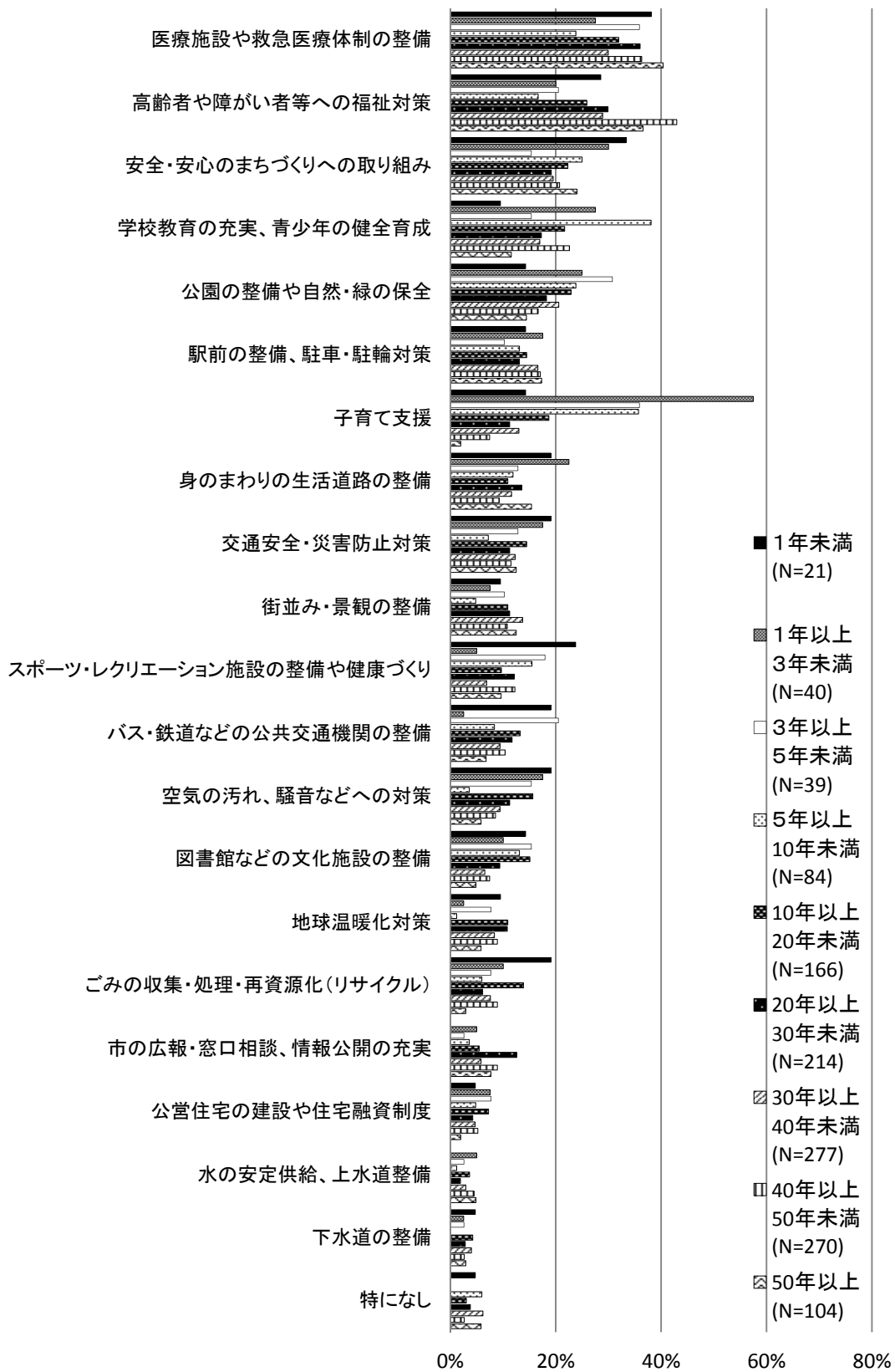


図 77 Q36 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（居住年数別）

Q37 の情報収集の手段としてインターネットでのやりとりを重視するかについては、男女別で見ると、男性の方が女性よりも「重視する」と「少し重視する」を合わせた割合が10ポイント程度高い。年代別で見ると、その割合は20代で8割以上あり、年代が上がるにつれて減少している（図78）。

Q38 のパソコンの利用期間については、全体で見ると6割以上の方がパソコンを利用していることが分かる。男女別で見ると、男性では「15年以上」と回答した人の割合が29.6%であるが、女性では15.3%と男性の半分である。年代別に見ると、20代では9.4%である「利用していない」の割合は年代が上がるにつれて増加し、70代以上では56.4%となっている（図79）。

Q39 の自身のパソコンのスキルについてどう思うかについては、60代以上を除くすべての年代と男性・女性で「ふつう」の割合が3割～4割程度と最も高い。60代以上では「低い」の割合が最も高い。年代が上がるにつれて「低い」の割合は増加している（図80）。

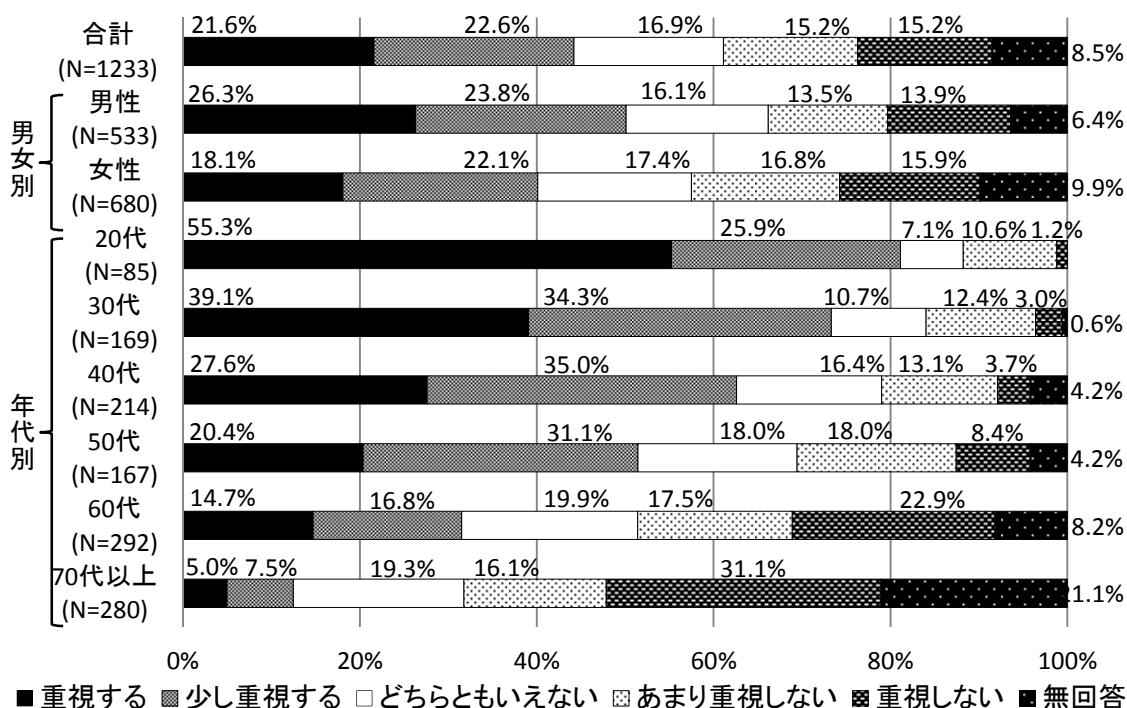


図78 Q37 情報収集の手段としてインターネット上でのやりとりを重視するか

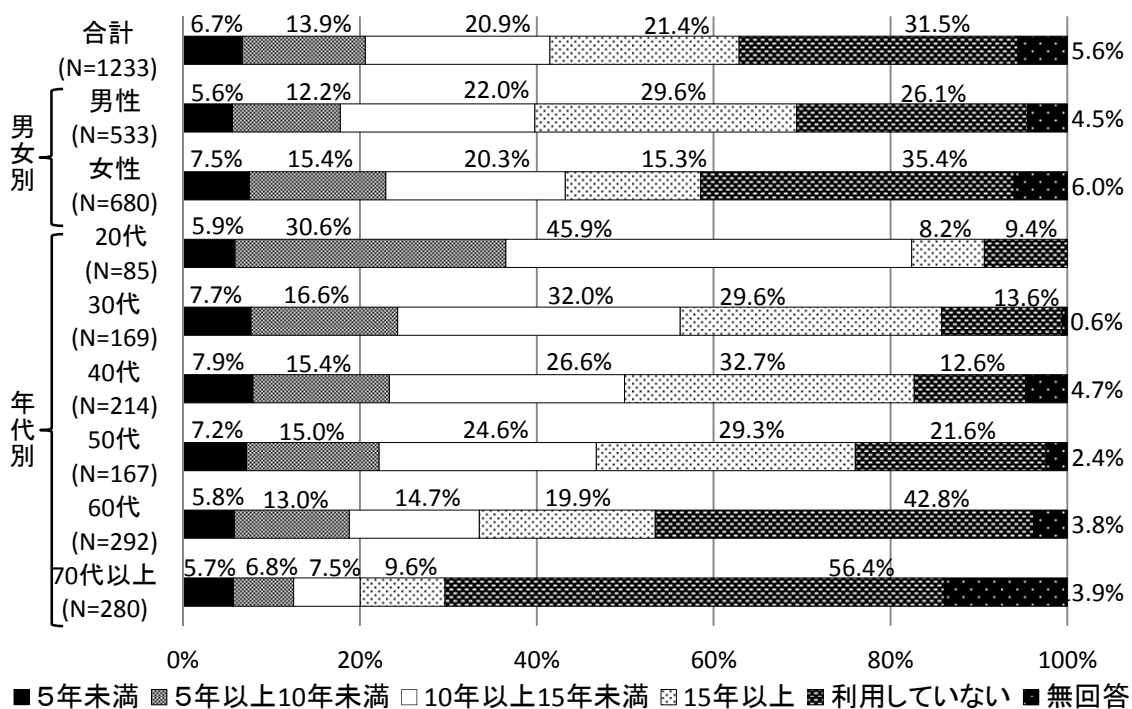


図 79 Q38 パソコンの利用期間

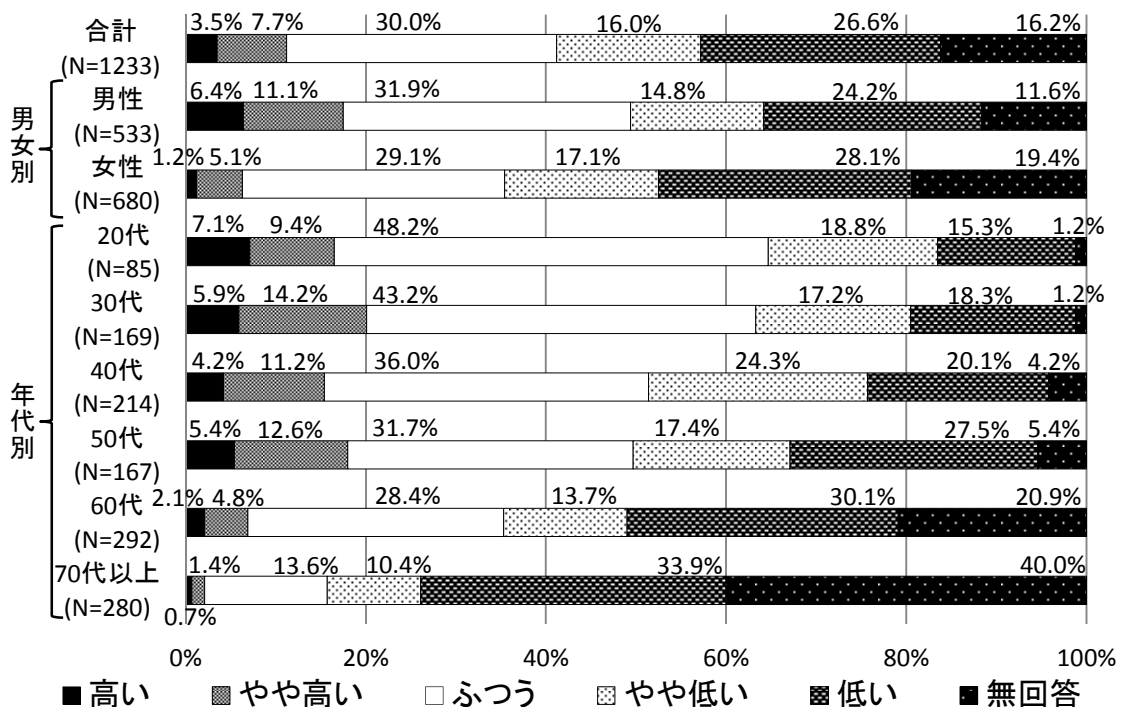


図 80 Q39 自身のパソコンのスキルについてどう思うか

Q40 の高槻市に大学が増えるといいと思うかについては、20 代を除くすべての年代と男性・女性で「どちらともいえない」の割合が最も高い。20 代では「あまりそう思わない」が 38.8%と最も高い。男女別で見ると、男性の方が女性よりも「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が 10 ポイント程度高い（図 81）。

Q41 の関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしているかについては、男女別・年代別のどの層でも「どちらともいえない」の割合が最も高い。20 代でのみ「あまりそう思わない」の割合が 2 割以上である（図 82）。

Q42 の関西大学は公開授業など生涯学習による地域貢献をしているかについては、男女別・年代別のどの層でも「どちらともいえない」の割合が最も高い。50 代でのみ「ややそう思う」の割合が 2 割以上である（図 83）。

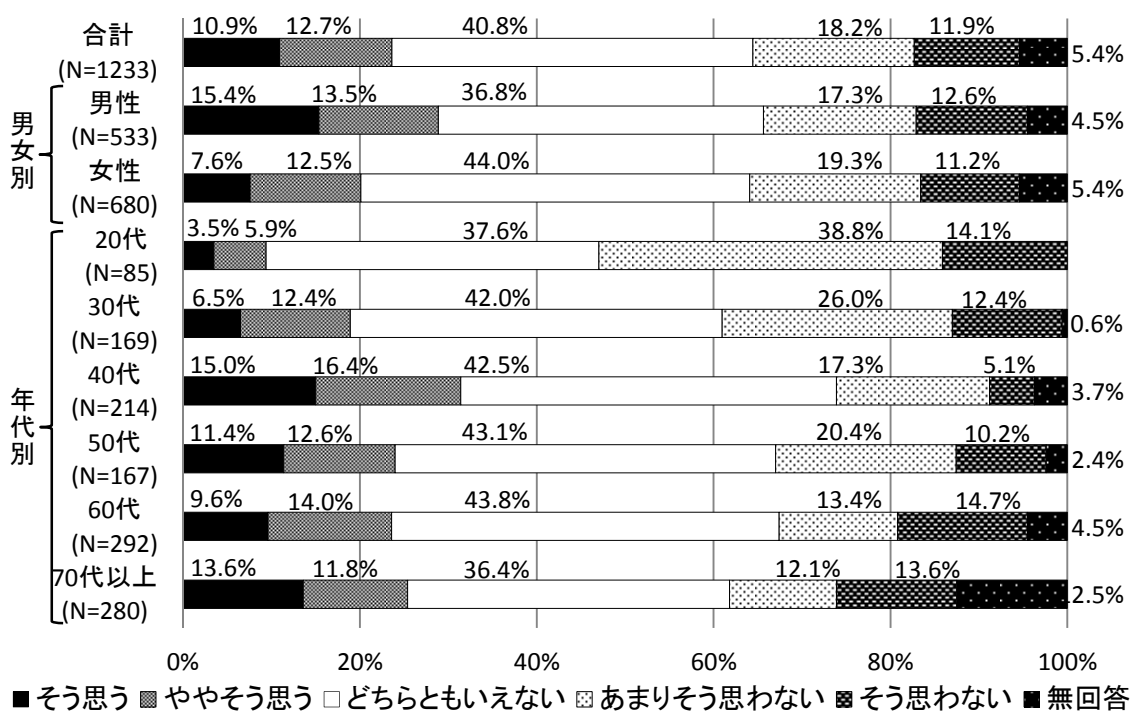


図 81 Q40 高槻市に大学が増えるといいと思うか

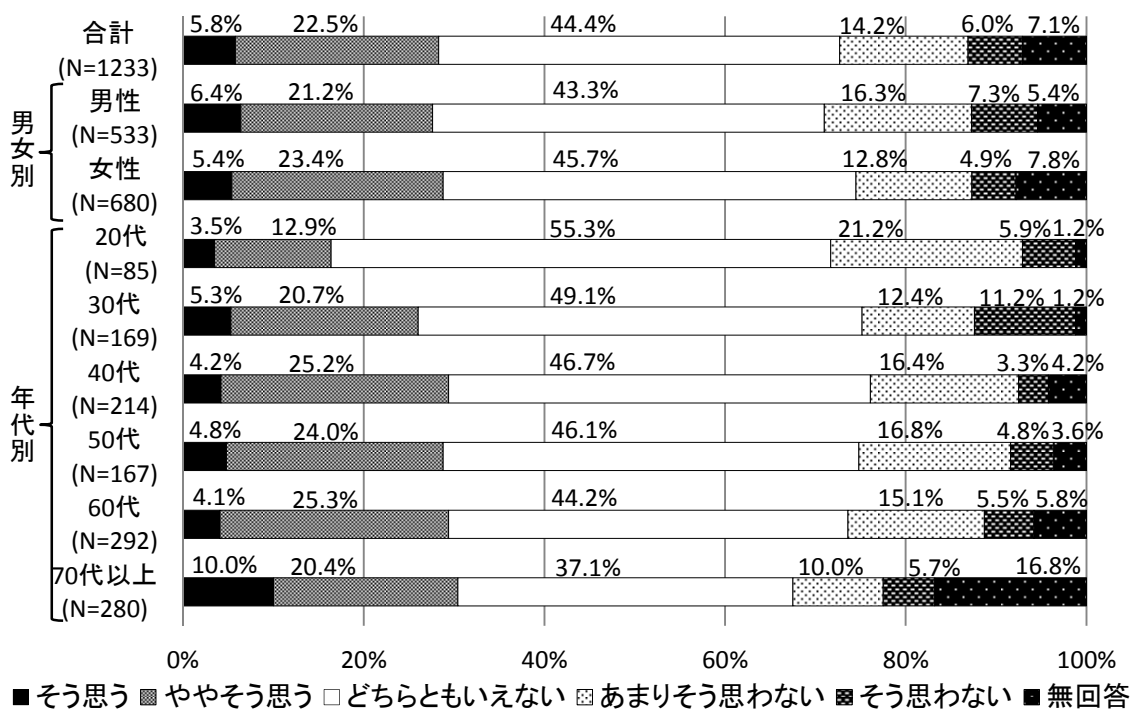


図 82 Q41 関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしているか

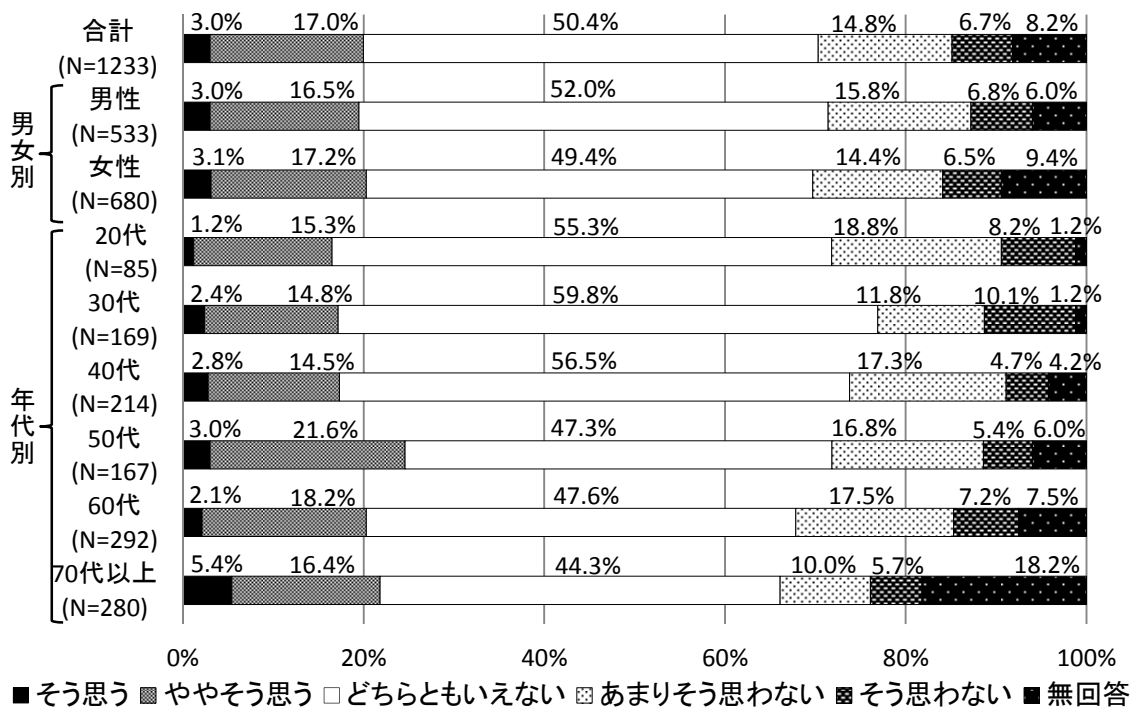


図 83 Q42 関西大学は公開授業など生涯学習による地域貢献をしているか

Q43 の政治上の出来事にどれくらい注意をはらっているかについては、「とても注意をはらっている」の割合は 20 代では 3.5%と最も低く、年代が上がるにつれて増加し、70 代以上では 27.9%である。男女別で見ると、「とても注意をはらっている」と「やや注意をはらっている」を合わせた割合が女性よりも男性の方が 10 ポイント以上高い(図 84)。

Q44 の高槻市内の介護サービスは頼りになるかについては、男女別・年代別のどの層でも「どちらともいえない」の割合が最も高い。50 代以上になると「ややそう思う」の割合が 2 割以上である(図 85)。

Q45 の日常生活の中で時間的ゆとりを感じるかについては、年代別で見ると「よく感じる」と「やや感じる」を合わせた割合が 20 代で 31.7%であり、年代が上がるほど減少し 40 代で 16.9%だが、それ以降は増加し 70 代以上では 62.8%と最も高くなっている。男女別で見ると差は見られない(図 86)。

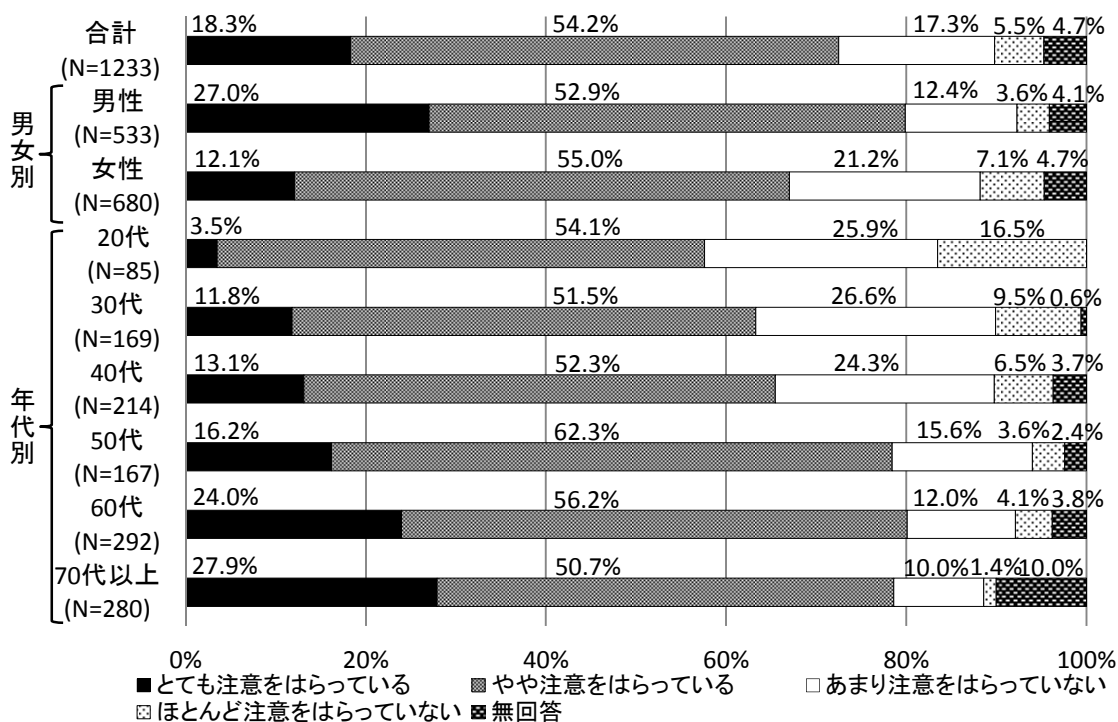


図 84 Q43 政治上の出来事にどれくらい注意をはらっているか

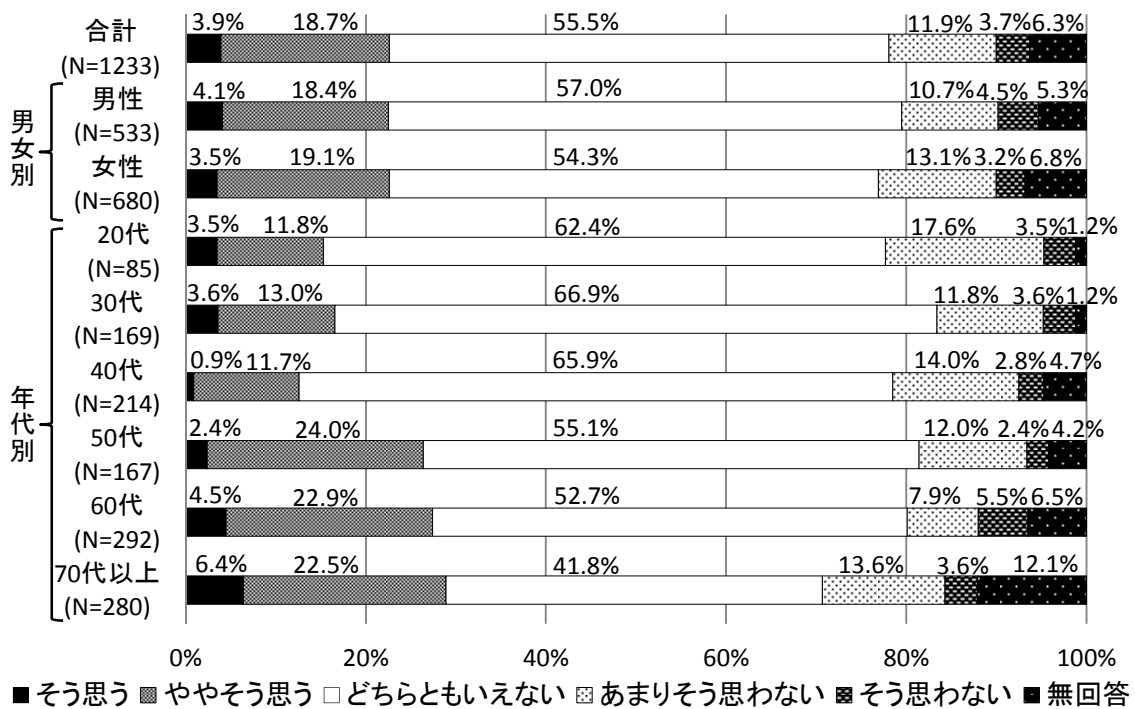


図 85 Q44 高槻市内の介護サービスは頼りになるか

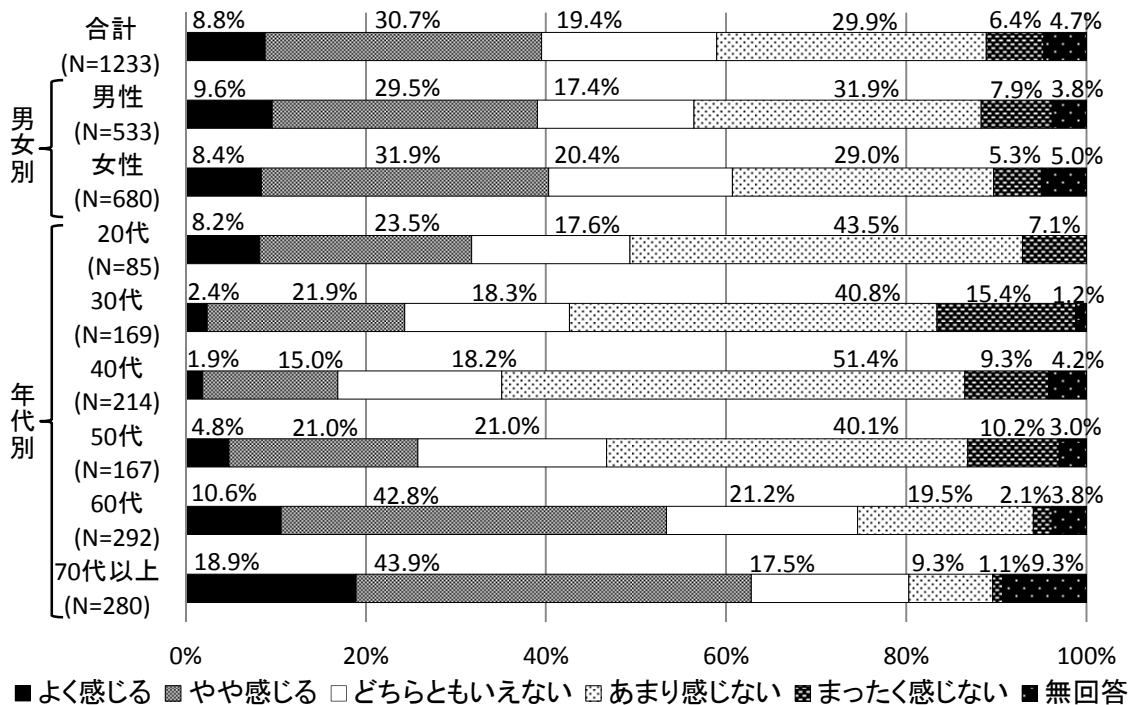


図 86 Q45 日常生活の中で時間的ゆとりを感じるか

Q46 の情報収集の手段として人と直接会って話をすることを重視するかについては、男女別・年代別のどの層でも「少し重視する」の割合が最も高い。60代以上では「重視する」と「少し重視する」を合わせた割合は6割以下である。男女差はあまり見られない(図87)。

Q47 の1日の家族との平均会話時間については、全体で見ると1時間以上と1時間未満で半々くらいである。男女別で見ると、女性よりも男性の方が1時間未満の割合が10ポイント以上高い(図88)。

Q48 の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方については、全体で見ると賛成と反対が半々くらいである。男女別で見ると、女性よりも男性の方が「賛成」と「やや賛成」の割合が10ポイント以上高い。年代別で見ると、60代以上は「賛成」と「やや賛成」の割合が5割以上である(図89)。

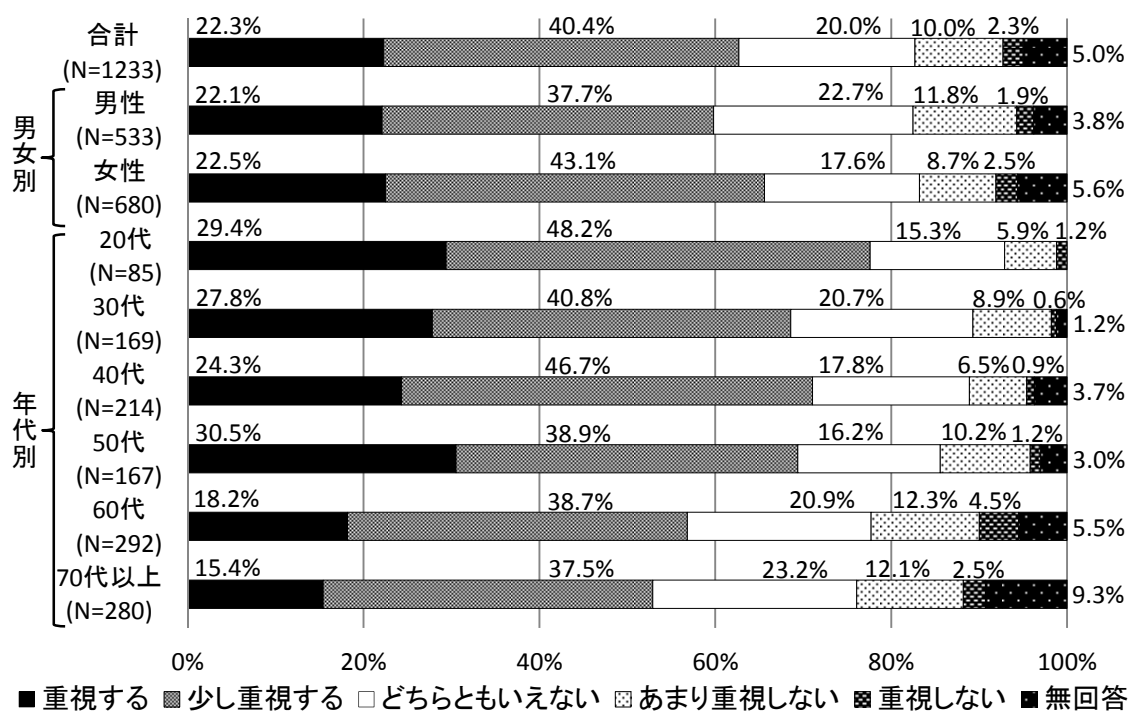


図 87 Q46 情報収集の手段として人と直接会って話をすることを重視するか

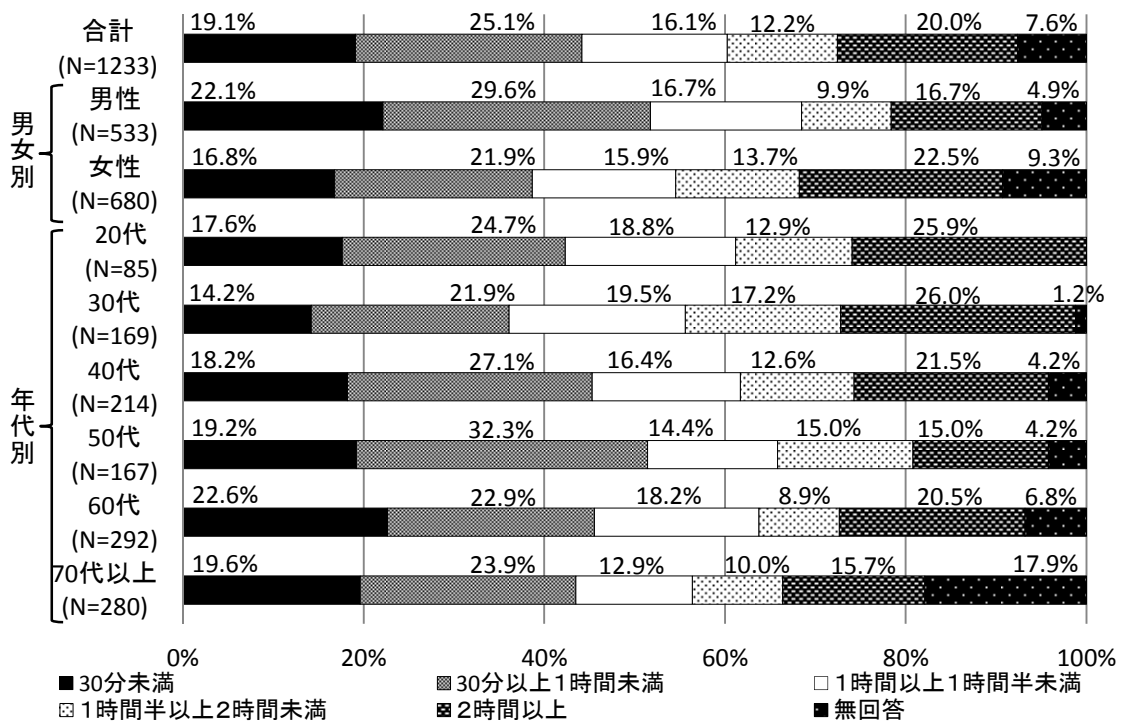


図 88 Q47 1日の家族との平均会話時間

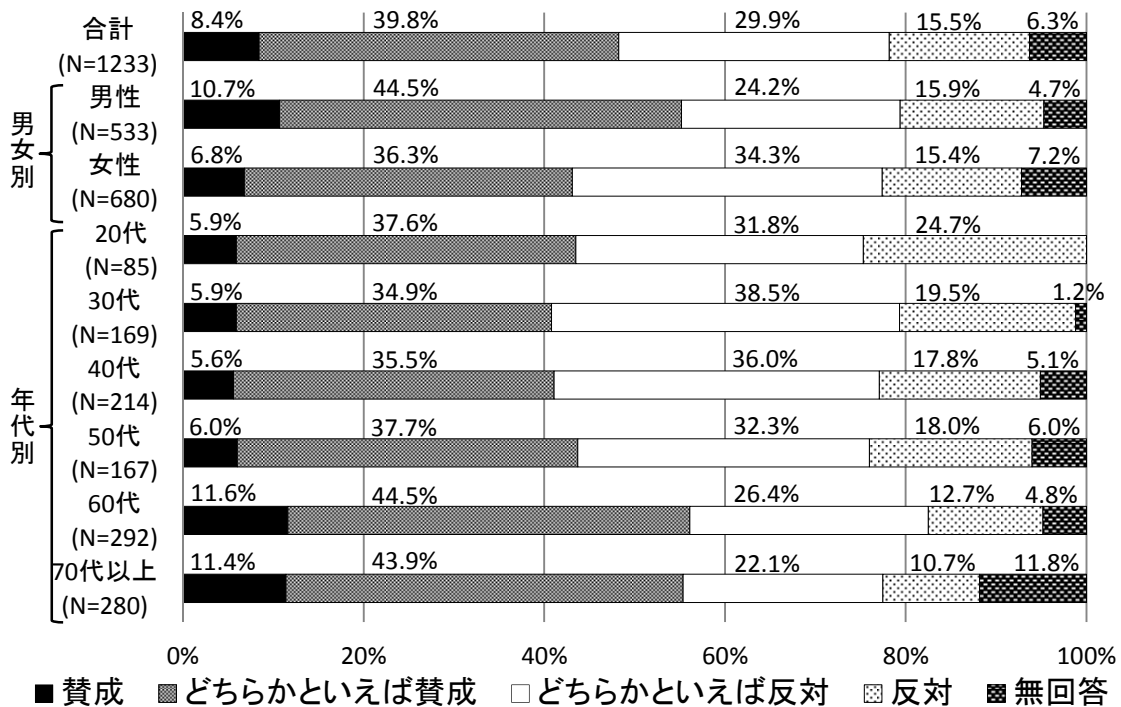


図 89 Q48 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について

Q49の一般的に子どもを育てるための金銭的負担は大きいかについては、70代以上を除くすべての年代と男性・女性で「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が7割以上である。年代が上がるにつれてその割合は減少しており、70代以上では59.6%である(図90)。

Q50の子育てしやすい社会環境が整っているかについては、男女別・年代別のどの層でも大きな差は見られず、「ややそう思う」の割合が最も高い(図91)。

Q51の育児における助け合いが地域でよく行われているかについては、男女別・年代別のどの層でも「あまりそう思わない」の割合が最も高く、次いで「そう思わない」が高い。年代別で見ると、30代では「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が24.3%と最も高いが、年代が上がるにつれて減少している(図92)。

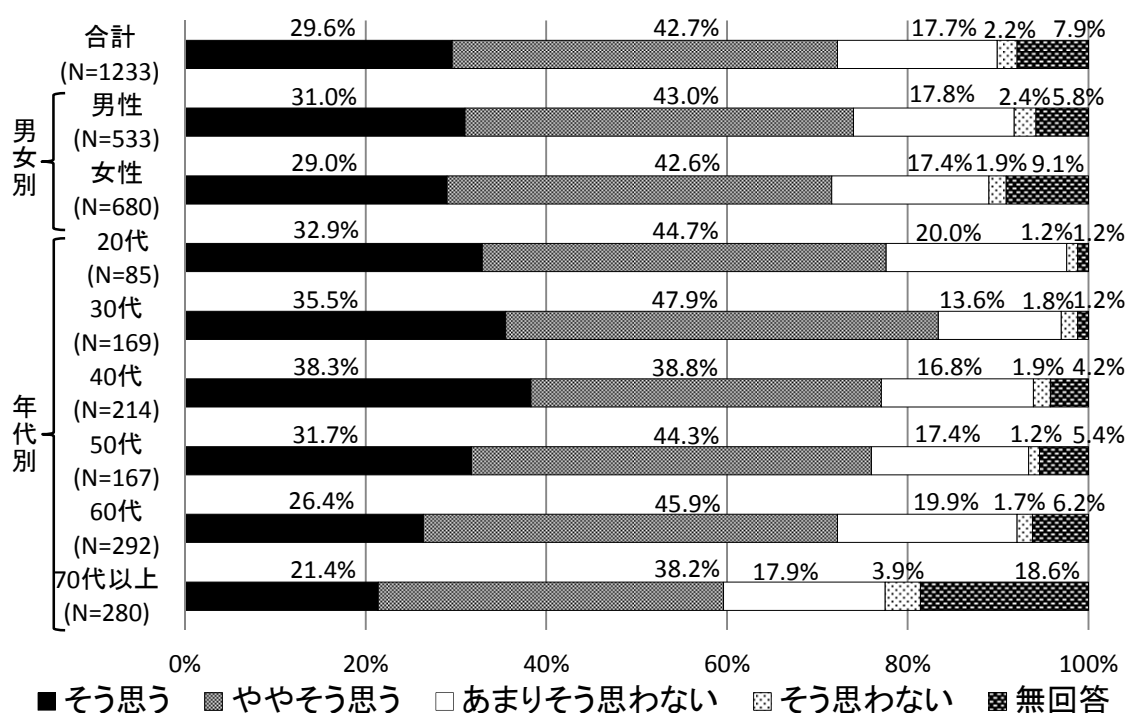


図 90 Q49 一般的に子どもを育てるための金銭的負担は大きいか

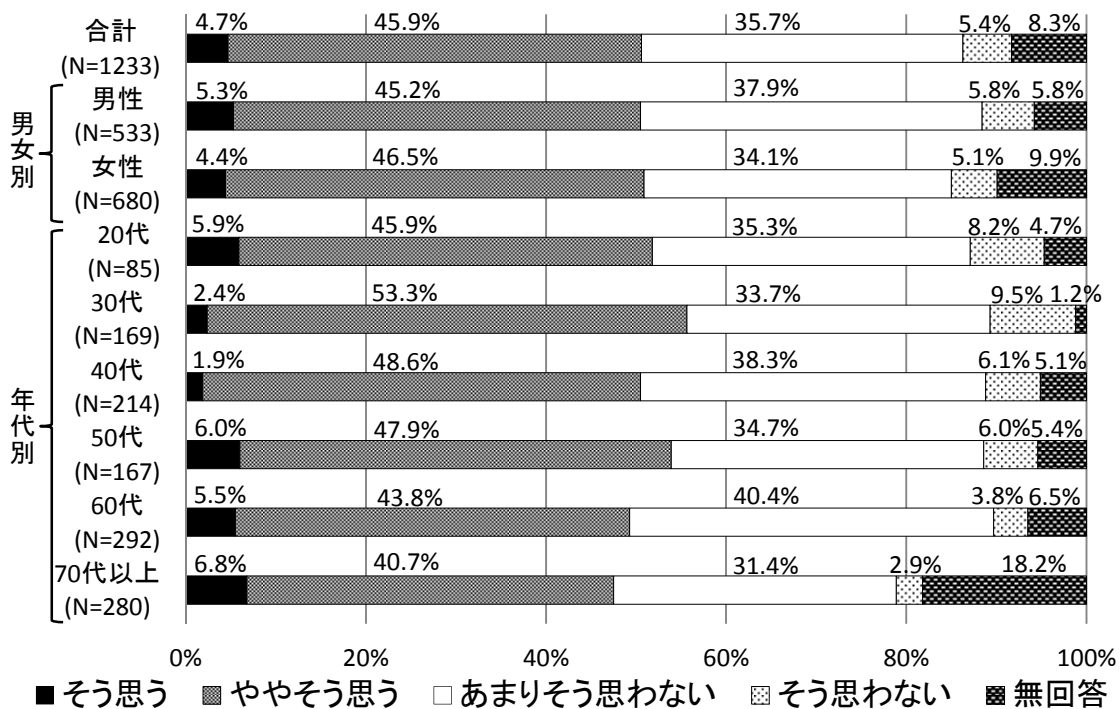


図 91 Q50 子育てしやすい社会環境が整っているか

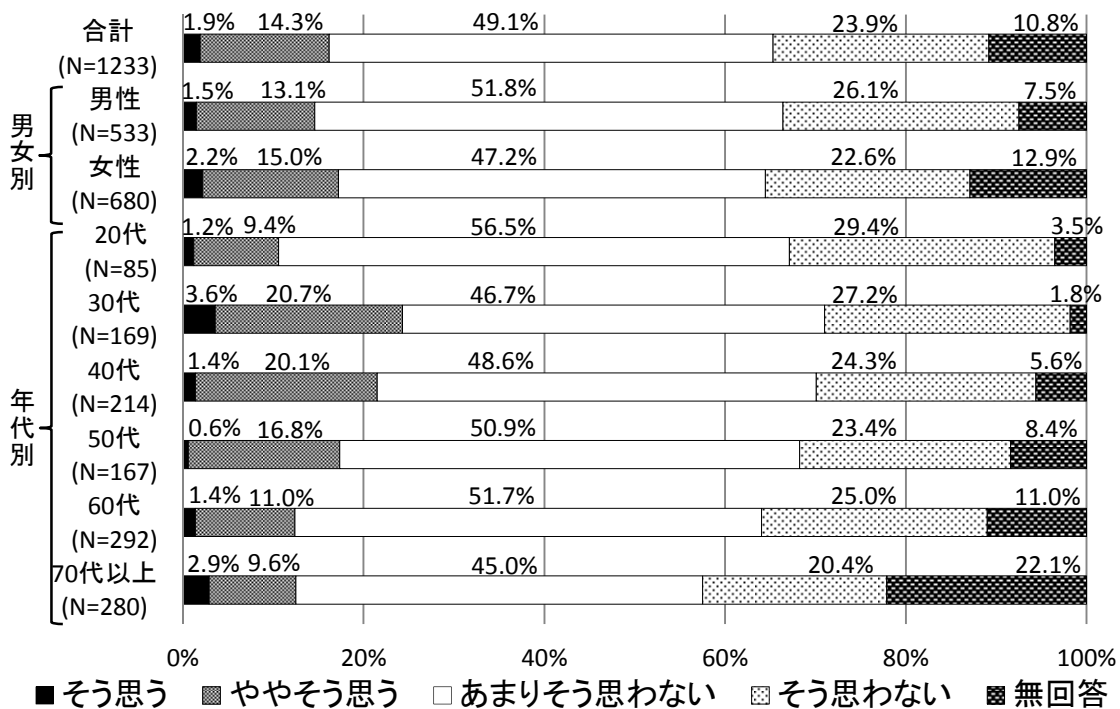


図 92 Q51 育児における助け合いが地域で行われているか

Q52 の育児は母親の役割であると思うかについては、20代を除くすべての年代と男性・女性で「ややそう思う」の割合が最も高く、次いで「あまりそう思わない」が高い。20代はその逆であり、「そう思わない」の割合も3割以上である。男女差はあまり見られない(図93)。

Q53 の婚姻状況については、20代では「既婚(配偶者あり)」が21.2%と特に少なく、「未婚」が77.6%と特に多い。その他の年代と男性・女性では「既婚(配偶者あり)」の割合が7割から8割程度と最も高い(図94)。

Q54 の配偶者の家事の取り組みに対して満足しているかについては、男女別で見ると、女性よりも男性の方が「満足」と「やや満足」の割合が30ポイント程度高い。年代別で見ると、20代では「満足」が66.7%と顕著に高いが20代から60代では4割以下である(図95)。

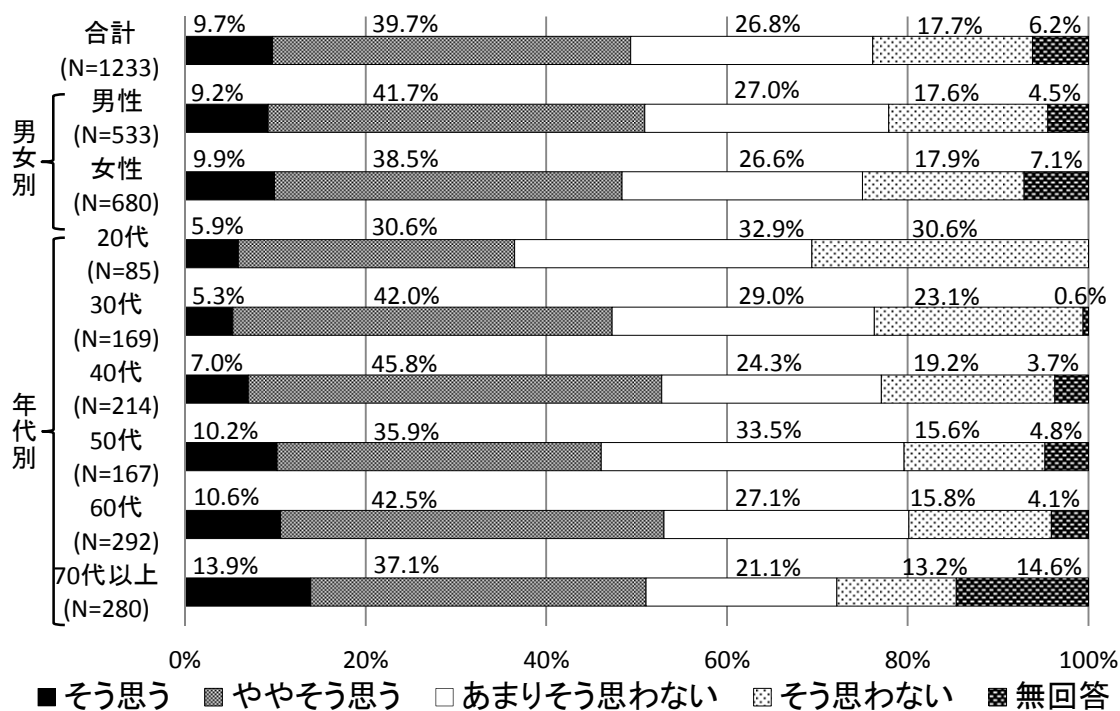


図 93 Q52 育児は母親の役割であると思うか

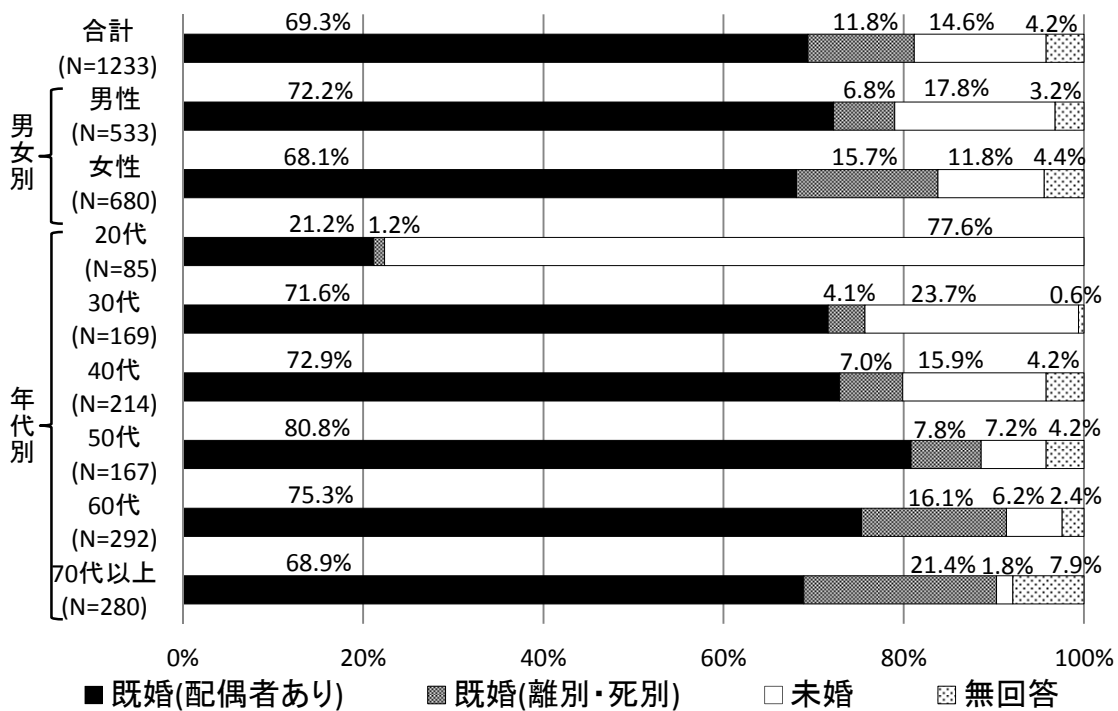


図 94 Q53 婚姻状態

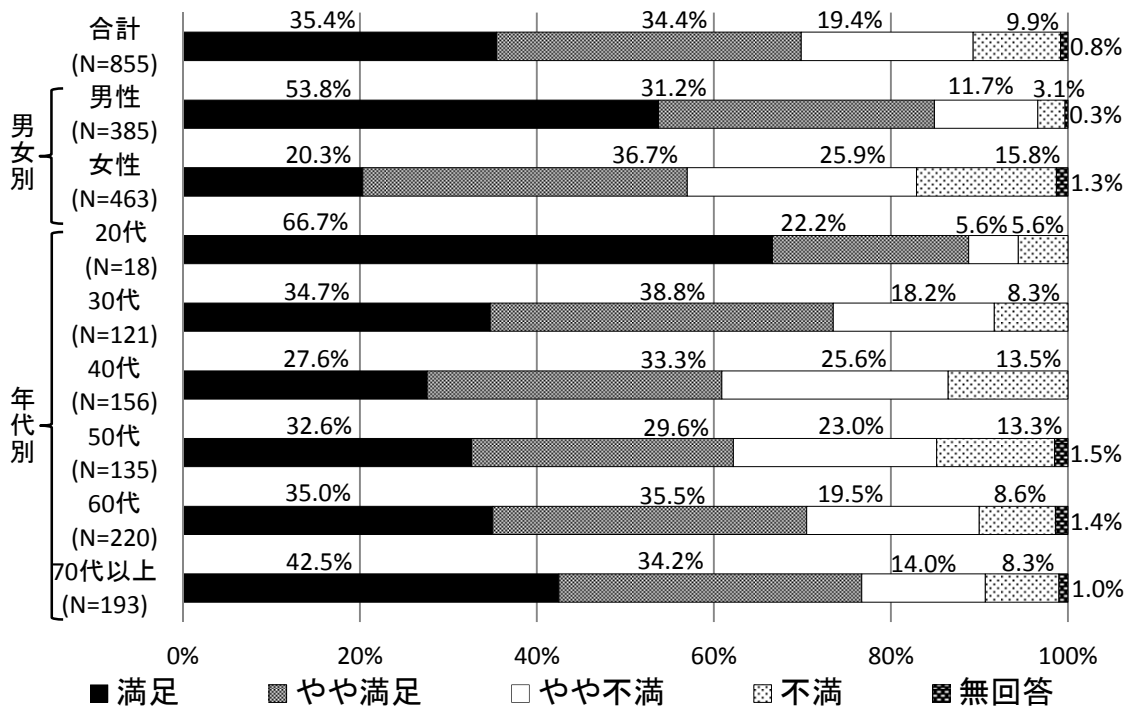


図 95 Q54 配偶者の家事の取り組みに対して満足しているか

Q55 の配偶者の育児の取り組みに対して満足しているかについては、男女別で見ると、女性よりも男性の方が「満足」と「やや満足」を合わせた割合が 30 ポイント程度高い。年代別で見ると、20 代では「満足」の割合が 44.4%と顕著に高いが、それ以外の年代では大きな差は見られない(図 96)。

Q56 の 1 日の夫婦での会話時間については、全体で見ると 1 時間以上と 1 時間未満で半々くらいである。男女別では大きな差は見られない。年代別で見ると、20 代は 1 時間以上の割合が 83.3%と特に高い(図 97)。

Q57 の配偶者の職業について見ると、20 代から 50 代は常時雇用者が最も多いが、60 代以上では無職の割合が最も高い。男女別で見ると、男性では「家事専業」の割合が 28.6%、女性では常時雇用者が 47.7%と最も高い(表 13)。

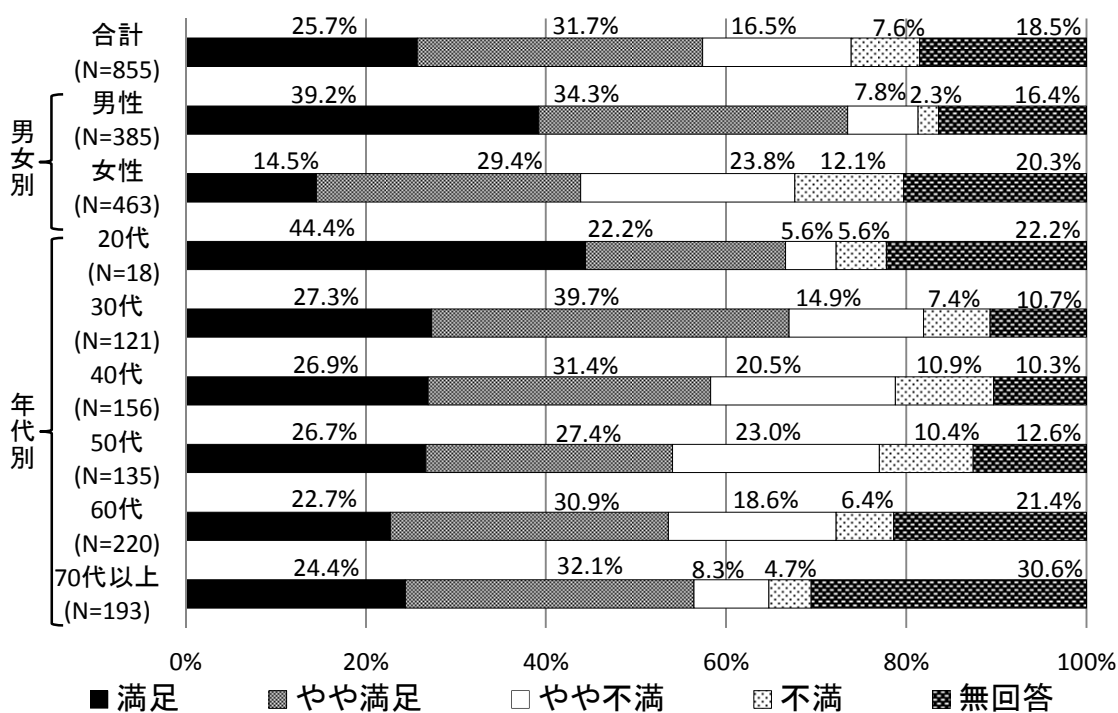


図 96 Q55 配偶者の育児の取り組みに対して満足しているか

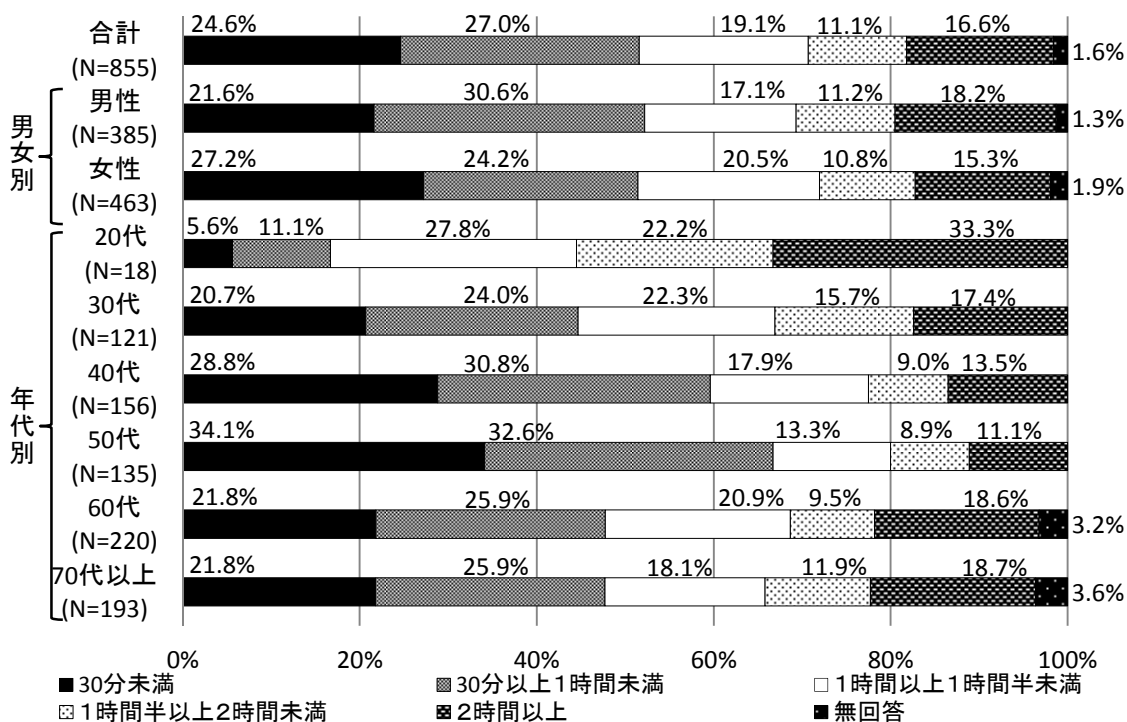


図 97 Q56 1日の夫婦での平均会話時間

表 13 Q57 配偶者の現在の職業

		常時雇用の勤め人	臨時雇用、パート、アルバイト	自営業主	自営業の家族従業者	経営者、役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
合計 (N=855)		32.0	14.7	5.6	1.3	2.8	13.3	0.1	26.1	1.6	2.3
男女別	男性 (N=385)	13.2	23.4	2.6	1.3	0.8	28.6	0.0	26.0	1.3	2.9
	女性 (N=463)	47.7	7.6	8.2	1.3	4.5	0.9	0.2	25.7	1.9	1.9
年代別	20代 (N=18)	83.3	5.6	5.6	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代 (N=121)	63.6	7.4	8.3	1.7	1.7	10.7	0.0	5.8	0.0	0.8
	40代 (N=156)	55.1	18.6	9.0	0.6	2.6	12.2	0.0	1.3	0.0	0.6
	50代 (N=135)	43.7	21.5	4.4	1.5	5.9	12.6	0.0	8.1	2.2	0.0
	60代 (N=220)	14.5	20.0	3.6	0.9	3.2	15.0	0.0	37.3	1.4	4.1
	70代以上 (N=193)	1.6	6.2	3.1	1.6	1.6	16.1	0.5	60.6	4.1	4.7

Q58 の子どもの人数について見ると、20代と30代では「0人」が最も多く、40代以上になると「2人」が最も多い(表14)。

Q59 の子供を持ちたいと望むかについては、男女別で見ると、女性よりも男性の方が「はい」の割合が7ポイントほど高い。年代別で見ると、20代と30代は「はい」の割合が8割前後あるが、年代が上がるにつれて減少し、70代以上では7.9%である(図98)。

Q60 の末子年齢について見ると、20代と30代では「3歳未満」が最も多いが、40代では「6歳以上12歳未満」、50代以上では「18歳以上」が最も多い(表15)。

表 14 Q58 子どもの人数

		(%)						
		0人	1人	2人	3人	4人	5人以上	無回答
合計 (N=1233)		25.1	16.0	38.0	11.1	0.8	0.3	8.7
男女別	男性 (N=533)	28.9	15.0	37.5	9.6	0.9	0.4	7.7
	女性 (N=680)	22.1	16.9	38.7	12.6	0.7	0.3	8.7
年代別	20代 (N=85)	85.9	7.1	4.7	0.0	0.0	0.0	2.4
	30代 (N=169)	36.1	21.9	29.6	6.5	1.8	0.0	4.1
	40代 (N=214)	28.5	16.8	34.1	15.0	0.9	0.0	4.7
	50代 (N=167)	18.6	22.8	41.9	12.0	0.6	0.0	4.2
	60代 (N=292)	13.4	12.3	49.7	14.0	1.0	1.4	8.2
	70代以上 (N=280)	13.6	14.3	42.9	11.4	0.4	0.0	17.5

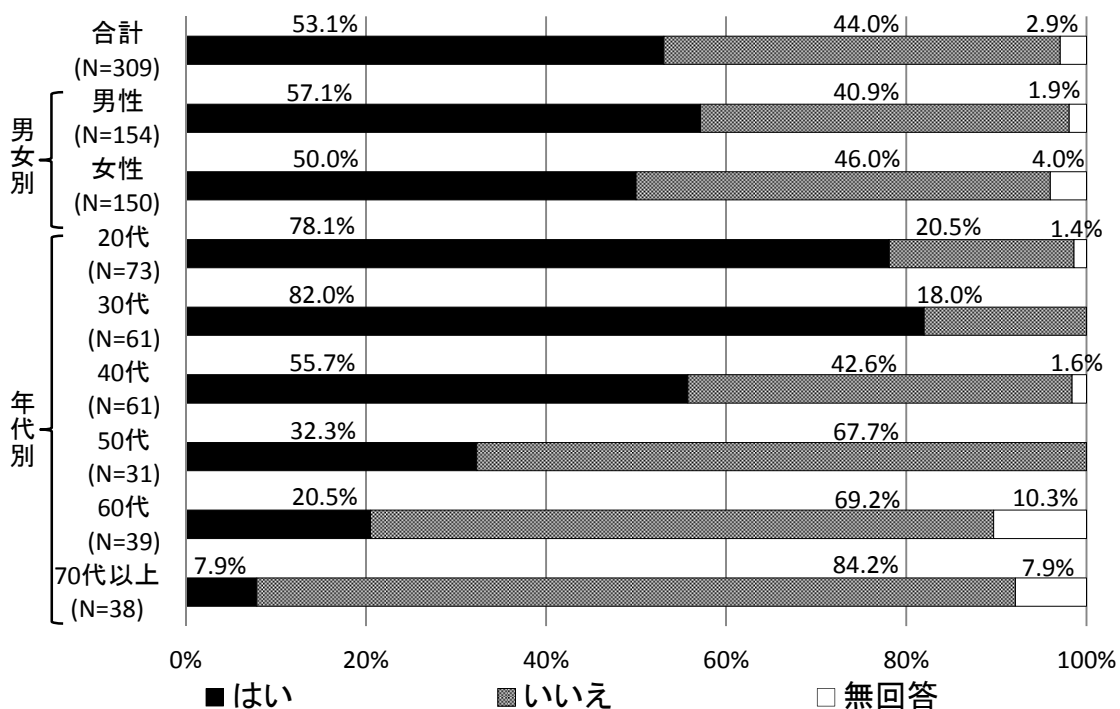


図 98 Q59 子どもを持ちたいと望むか

表 15 Q60 末子年齢

		(%)						
		3歳未満	3歳以上 6歳未満	6歳以上 12歳未満	12歳以上 18歳未満	18歳以上	無回答	
合計	(N=817)	8.4	6.1	10.2	7.2	64.9	3.2	
男女別	男性	(N=338)	8.6	4.7	10.4	6.8	67.2	2.4
	女性	(N=471)	8.5	7.2	10.2	7.4	62.8	3.8
年代別	20代	(N=10)	90.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代	(N=101)	45.5	29.7	21.8	2.0	0.0	1.0
	40代	(N=143)	9.8	12.6	38.5	25.2	14.0	0.0
	50代	(N=129)	0.0	0.0	4.7	14.0	80.6	0.8
	60代	(N=229)	0.0	0.0	0.0	0.4	95.6	3.9
70代以上	(N=193)	0.0	0.0	0.0	0.0	92.7	7.3	

Q61 の子どもとの外泊の頻度については、全体と男女でほとんど差は見られず「1年に1～2回」もしくは「全くしない」がそれぞれ3割前後である。「1年に1～2回」以上の頻度で外泊をする割合は30代で最も高く、年代が上がるにつれて減少している（図99）。

Q62 の利用している保育施設・事業に総合的に満足しているかについては、30代を除くすべての年代と男性・女性で「何も利用していない」の割合が最も高い。30代では「やや満足」が36.6%と最も高い（図100）。

Q67 の自宅で今の仕事がしたいかについては、男女別・年代別のどの層でも「したくない」の割合が最も高い。「したい」と「まあしたい」を合わせた割合は30代で44.3%と最も高いが、年代が上がるにつれて減少している。また、女性よりも男性の方がその割合が高い（図101）。

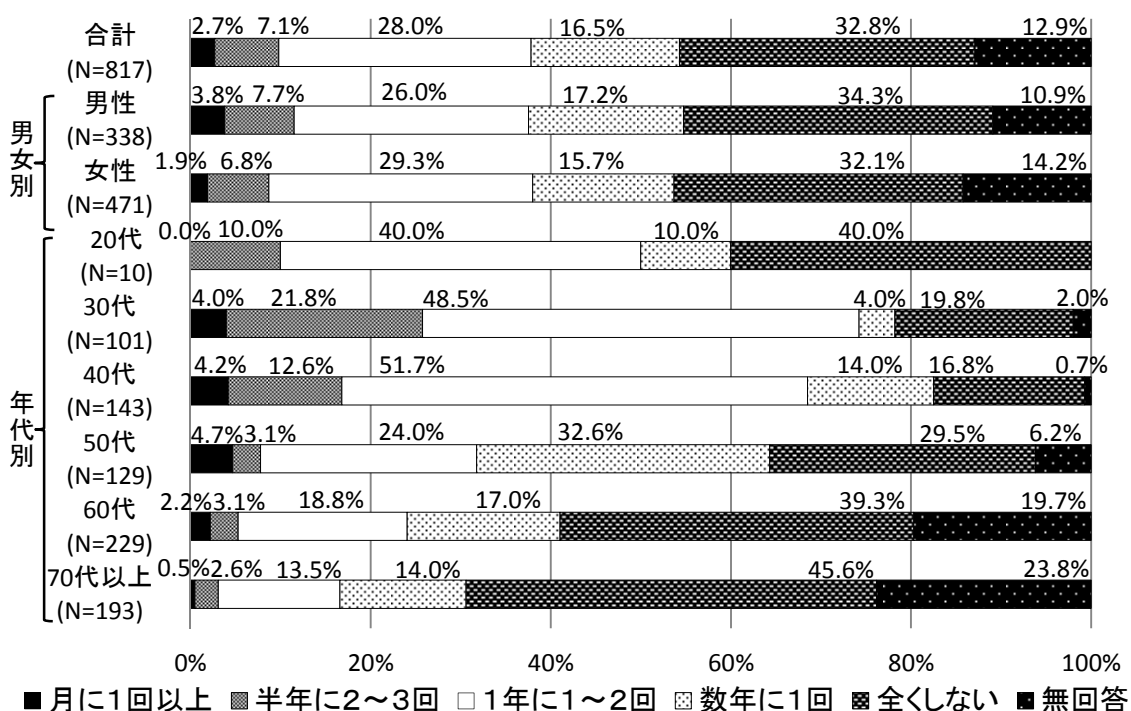


図99 Q61 子どもとの外泊の頻度

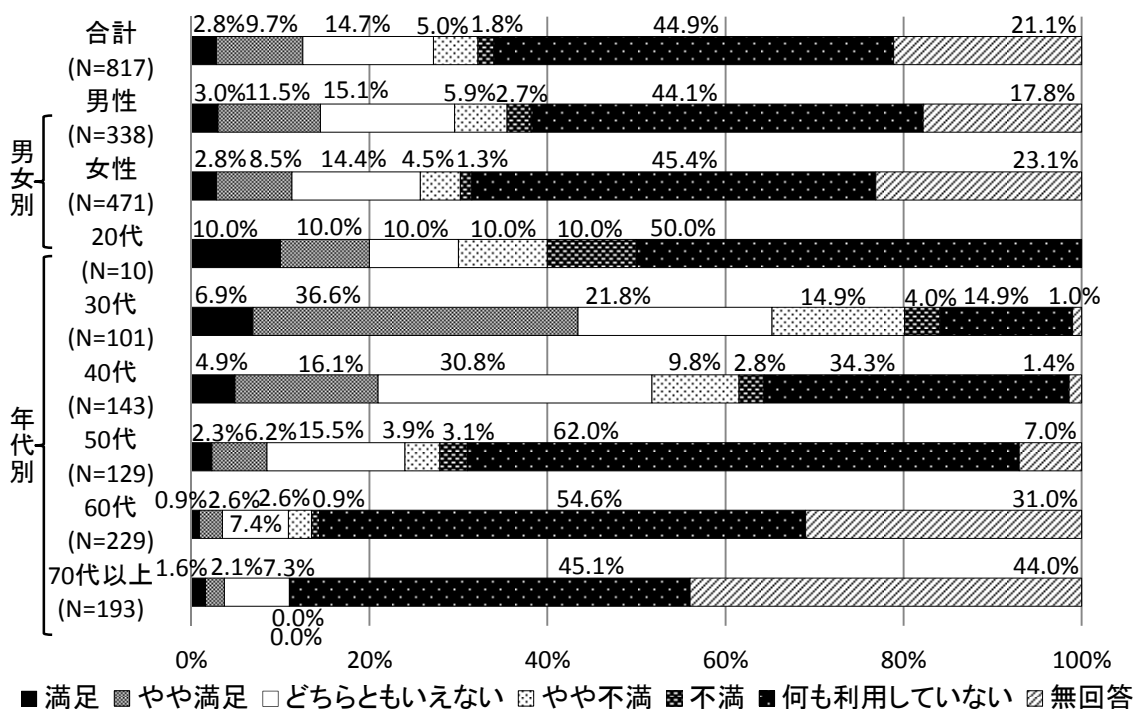


図 100 Q62 利用している保育施設・事業に総合的に満足しているか

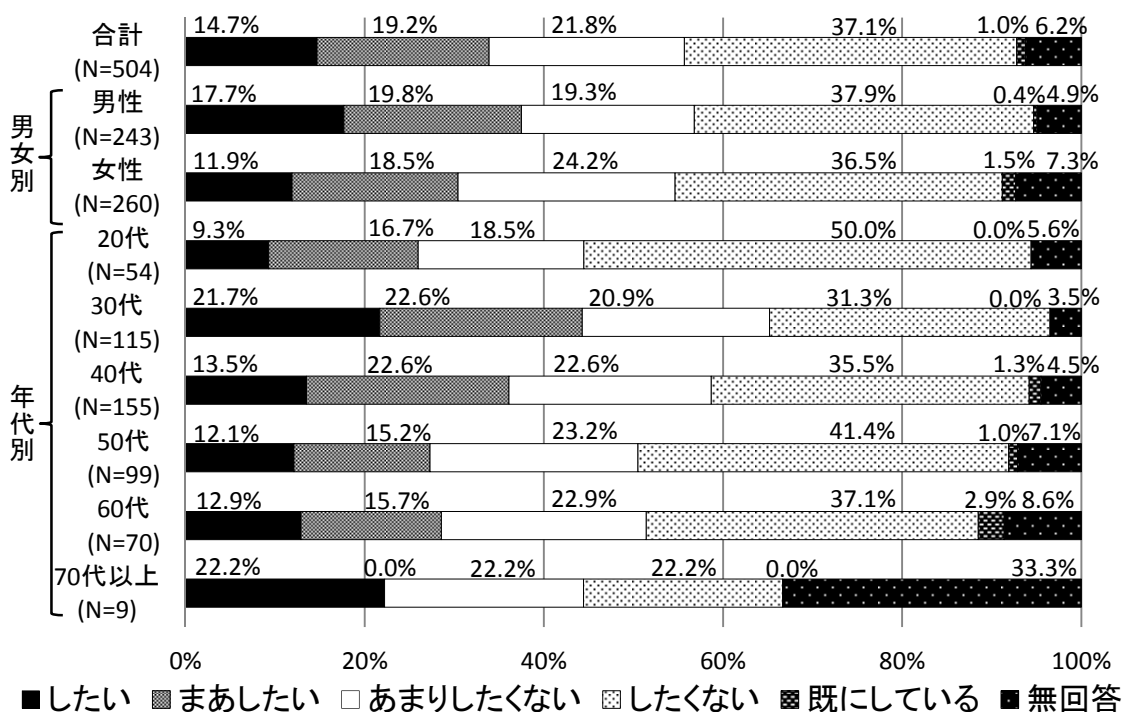


図 101 Q67 自宅で今の仕事がしたいか

第3章 生活満足度とその要因

木村 太一

1. はじめに

世界各国と比較して我が国が世界でどのくらいの順位にいるかを測るための指標は数多く存在している。有名なものでいえばGDPやGNPが有名である。しかし、近年新しい指標も注目されてきている。それがGNH、「国民総幸福量」を示す尺度である。1970年代以降、従来の経済・物質中心的な開発、発展のあり方に対して、その限界を指摘し、人間・社会・自然と調和のとれた持続的な世界の発展を目指す、「持続可能な開発」論が登場した。

その取り組みの中で注目を集めたのが、ヒマラヤ仏教王国ブータンの第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュクが1976年に初めて用いたGNHという言葉である。当時は一風変わった言葉として軽く受け止められていたが、その後、地球規模の開発、発展の行き詰まりの中で登場した「持続可能な開発」論のモデルケースとして、大きな関心を集めるに至った。

日本は現在もなお、経済力を示す指標では世界3位の経済大国である。しかし、GNHは先進国の中では低い水準である。便利で、モノが溢れることが幸せに繋がっているのではないのである。では高槻市民はどれくらいの方が生活に満足しているのか、また生活満足度につながる要因を高槻市民へのアンケートをもとに検証する。

2. 仮説

「生活満足度は地域のインフラや商業施設よりも家庭環境の充実によるところが大きい」という仮説のもとに分析を行う。インフラや商業施設とは、図書館、バス、商店街、電車、医療機関、市役所の満足度のことを表し、家庭環境とは配偶者の育児、家事への取組、時間のゆとり、夫婦の会話時間、世帯収入、週の平均労働時間のことを表す。

3. データと変数

3.1. データ

分析に関しては2013年度に実施した「高槻市と関西大学による高槻市郵送調査」を用いる。調査対象(母集団)は高槻市在住の20歳以上の男女で、対象者数(サンプル数)は2000人、有効回収数は1233人、回収率は61.7%であった。

3.2. 変数

変数として用いたのは全体で12である。その中で「Q9a 電車満足度」「Q9b バス満足度」「Q9c 医療機関満足度」「Q9d 図書館満足度」「Q9e 市役所満足度」「Q9f 商店街満足度」「Q45 時間のゆとり」「Q54 配偶者の家事の取組への満足度」「Q55 配偶者の育児の取組への満足度」は5段階評価

で判断し、満足度が高ければ 5、低ければ 1 をつけるようにした。「Q56 夫婦の会話時間」「Q68 週の平均労働日数」「Q74 世帯収入」も、それぞれ分析の値が高ければ生活満足度も高いことを意味している。また、「Q65 年齢」「世帯収入」については中央値処理を行った。

4. 分析

表1：生活満足度を従属変数にした重回帰分析

	B	SE	
(定数)	.944	.220	
年齢(中央値)	.007 **	.002	.099
世帯収入(中央値)	.001 **	.000	.215
q64 性別	.108	.055	.057
q9a電車満足度反転	.107 **	.038	.097
q9bバス満足度反転	.027	.030	.031
q9c医療機関満足度反転	.162 **	.038	.156
q9d図書館満足度反転	.018	.035	.018
q9e市役所満足度反転	.102 *	.040	.097
q9f商店街満足度反転	.063	.035	.062
調整済み決定係数		0.174 **	
N		986	

** p < .01 * p < .05

表1は、従属変数である「生活満足度」のうち、17.4%が投入した独立変数で説明できる(調整済 $R^2=0.174$)。分散分析でF検定を行うと、有意確率が0.000となり1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「生活満足度」の予測に役立つモデルである。

表1の結果から有意水準1%で有意な変数は年齢(中央値)、世帯収入(中央値)、電車満足度、医療機関満足度であり、5%水準で有意な変数は市役所満足度である。ベータの値をみると、生活満足度に最も重要な要因は世帯収入($\beta=.215$)であり、次いで医療機関の満足度($\beta=.156$)、電車($\beta=.097$)、市役所の満足度($\beta=.097$)と続いている。

ここから家庭環境を表す内的要因を加えて分析を行う。それが下の表2である。

表 2：生活満足度を従属変数にした重回帰分析

	B	SE	
(定数)	.628	.339	
年齢(中央値)	-.005	.003	-.066
世帯収入(中央値)	.001 **	.000	.207
q64 性別	.118	.070	.069
q9a電車満足度反転	.144 **	.047	.139
q9bバス満足度反転	-.010	.038	-.011
q9c医療機関満足度反転	.116 *	.047	.116
q9d図書館満足度反転	-.020	.044	-.021
q9e市役所満足度反転	.040	.049	.040
q9f商店街満足度反転	.037	.045	.036
q45時間のゆとり反転	.226 **	.041	.252
q54 配偶者の家事の取組への満足度反転	.132 *	.061	.128
q55 配偶者の育児の取組への満足度反転	.102	.064	.094
q56 夫婦の会話時間	.084 **	.028	.115
q68 週の平均労働日数	-.002	.019	-.005
調整済み決定係数		0.263 **	
N		536	

**p<.01 *p<.05

従属変数である「生活満足度」のうち 26.3%が投入した独立変数で説明できる(調整済 $R^2=0.263$)。分散分析で F 検定を行うと、有意確率が 0.000 となり 1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「生活満足度」の予測に役立つモデルである。表1の独立変数に加え、「Q45 時間のゆとり」「Q54 配偶者の家事の取組への満足度」「Q55 配偶者の育児の取組への満足度」「Q56 夫婦の会話時間」「Q68 週の平均労働時間」を加えた。

表2の結果から有意水準 1%で有意な変数は世帯収入、電車満足度、時間のゆとり、夫婦の会話時間であり、5%水準で有意な変数は医療機関満足度、配偶者の家事の取組への満足度である。家庭環境要因のベータの値をみると、世帯年収($\beta=.207$)、時間のゆとり($\beta=.252$)、夫婦の会話時間($\beta=.115$)、配偶者の家事の取組への満足度($\beta=.128$)が満足度に影響を与えることがわかった。この二つの分析結果から注目すべきことは調整済み R^2 が 17.4%から 26.3%に上がったことである。このように生活満足度はインフラや施設の満足度のような外的要因だけではなく、内的な家庭環境要因によっても大きく左右されることが分かる。

5. 考察

高槻市民の生活満足度を決定する要因としては外的な満足度(公共交通機関や施設の満足度)よりも内的な家庭環境満足度(夫婦の会話時間やゆとりや年収)によるところが大きかった。

しかし、個々の要因を見てみると電車や医療機関の満足度も生活満足度を大きく左右する要因

だと言える。特に生活に密着し、欠かせないモノやサービスはある程度、生活満足度には欠かせない要因だと言える。

日本のようなモノが溢れ、サービスが行き届いたような国では内的要因の充実が生活満足度を決める上では非常に大切なのである。では内的な充実を図るにはどうすべきなのか？今回の調査からは時間的なゆとりや会話があげられる。Twitter や facebook などの SNS の進歩で個人の時間や会話の仕方は大きく変化した。プライベートな時間は限りなく無くなり、会って話す必要もなくなった。常に人と繋がっているという気持ちから SNS 疲れという現象も起きている。モノやサービスが無かった時代には考えられない現象である。昔の時代からも学ぶことは多いように思える。

6. 文献

[1] 内閣府「平成 20 年度国民生活白書」

[2] <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/01_honpen/html/08sh010301.html>

第4章 住民の地域社会に対する印象と 社会貢献との関係性

藤原 邦彦

1. はじめに

近年、東日本大震災の影響からボランティア活動の重要性が改めて見直され、NPO 活動、市民活動への参加率は大きく上昇している。しかし、ボランティア活動の参加率は上昇したがその割合は 24.6%(内閣府 国民生活選好度調査 平成 23 年)と、未だ増加の余地は存在するといえる。また、各地方自治体も市民のボランティア活動参加促進のための政策を模索している。そこで本稿では市民のボランティア活動促進のために地方ができることを考えるべく、市民の地域社会に対する意識とボランティア活動参加との関連性を調べた。

2. 先行研究と仮説

2010 年に米澤らが行った調査ではボランティア活動の継続要因は、活動の辛さを相談できる相手の存在、人的資源の確保、ボランティア活動を楽しみやすいための環境整備であると結論づけていた。

本稿では、地域社会に対する印象がボランティア活動を促進する要因になるのではと考え仮説を立てた。

仮説 1 地域社会に対する印象が良いほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 1 生活満足度が高いほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 2 地域が暮らしやすいと思うほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 3 地域に住み続けたいと思うほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 4 近所の人たちとの世間話が多いと思うほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 5 近所づきあいを増やしたいと思うほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 6 居住地域に親しい人が多いと思うほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 1 - 7 居住地域へのイメージが良いほど、地域に貢献しようという意識が高くなる

仮説 2 地域社会に対する印象が良いほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 1 生活満足度が高いほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 2 地域が暮らしやすいと思うほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 3 地域に住み続けたいと思うほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 4 近所の人たちとの世間話が多いと思うほど、ボランティア活動に積極的になる

る

仮説 2 - 5 近所づきあいを増やしたいと思うほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 6 居住地域に親しい人が多いと思うほど、ボランティア活動に積極的になる

仮説 2 - 7 居住地域へのイメージが良いほど、ボランティア活動に積極的になる

3. データ・変数

3.1 データ

分析においては 2013 年に実施した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査対象者は無作為に選ばれた男女 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民である。対象者数は 2000 人、有効回収数は 1233 人、回収率は 61.7%である。

3.2 変数

変数は以下の質問の結果を用いた。質問の数値は満足度や頻度の高さ、印象の良さを表している。また変数を以下のように数値が大きくなるほど満足度や頻度は高く、印象は良くなることを表すように操作した。

Q1 現在の生活全体にどのくらい満足していますか

1 不満 2 やや不満 3 どちらともいえない 4 やや満足 5 満足

Q2 あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか

1 非常に悪い 2 やや悪い 3 どちらともいえない 4 まあよい 5 非常に良い

Q3 あなたは現在住んでいる地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか

1 機会があれば引っ越したい 2 どちらともいえない 3 まあ住み続けたい 4 住み続けたい 5 ずっと住み続けたい

Q4 あなたは地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか

1 そう思わない 2 あまりそう思わない 3 どちらともいえない 4 ややそう思う 5 そう思う

Q5 あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか。

1 ほとんどない 2 月に 1~2 日 3 週に 1~2 日 4 週に 3~4 日 5 ほぼ毎日

Q6 あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。

1 減らしたい 2 少し減らしたい 3 どちらともいえない 4 少し増やしたい 5 増やしたい

Q7 あなたは、現在のお住まいの地域で親しくしている人の数が、どちらかといえば多い方だと思いませんか、それとも少ない方だと思いませんか。

1 少ない 2 やや少ない 3 どちらともいえない 4 やや多い 5 多い

Q8 あなたは高槻市という地域についてどのようなイメージを持っていますか。

1 悪い 2 やや悪い 3 どちらともいえない 4 やや良い 5 良い

Q22 あなたは地域のボランティア活動などにどれくらい参加していますか

1 ほとんどない 2 月に1~2日 3 週に1~2日 4 週に3~4日 5 ほぼ毎日

4. 分析

今回の分析では主に重回帰分析と、相関係数を用いた。

仮説1に対して、Q4地域の役に立ちたいかと各項目に関する相関係数を調べた。(表1)

表1 地域の役に立ちたいかとの相関係数

	q4_r 地域の役に立ちたいか反転	q1_r 満足度反転	q2_r 居住地域の暮らしやすさ反転	q3_r 住み続けたさ反転	q5_r 世間話の頻度反転	q6_r 近所付き合いを増やしたいか反転	q7_r 親しい人は多いか反転	q8_r 高槻市のイメージ反転
q4_r 地域の役に立ちたいか反転	1 1220	.212** 1217	.223** 1220	.254** 1220	.202** 1216	.334** 1217	.238** 1208	.245** 1208
q1_r 満足度反転		1 1226	.460** 1225	.410** 1225	.115** 1219	.161** 1220	.174** 1213	.315** 1213
q2_r 居住地域の暮らしやすさ反転			1 1228	.536** 1228	.068* 1222	.126** 1223	.130** 1215	.419** 1215
q3_r 住み続けたさ反転				1 1228	.171** 1222	.147** 1223	.213** 1215	.371** 1215
q5_r 世間話の頻度反転					1 1222	.077** 1221	.547** 1210	.073* 1210
q6_r 近所付き合いを増やしたいか反転						1 1223	0.056 1211	.144** 1211
q7_r 親しい人は多いか反転							1 1217	.109** 1216
q8_r 高槻市のイメージ反転								1 1217

** 相関係数は1%水準で有意(両側)です。

* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

表1において今回は表の1行目、地域の役に立ちたいかとの相関係数に注目する。全体的に弱い正の相関が見られた。また、Q6近所づきあいを増やしたいかが比較的強めの相関が出ていた。このことから、仮説1-1~1-7はわずかではあるが指示されたと考えられる。

また、地域に貢献しようという意識と地域に関する印象同士の関係性について重回帰分析(表2)を行った。

表 2 地域の役に立ちたいかの重回帰分析

	B	SE	
(定数)	.734**	.185	
q1_r 生活満足度	.037	.028	.040
q2_r 居住地域の暮らしやすさ	.075	.044	.057
q3_r 地域に住み続けたいか	.063*	.026	.077
q5_r 世間話の頻度	.059*	.024	.075
q6_r 近所付き合いを増やしたいか	.388**	.037	.275
q7_r 親しい人は多いか	.113**	.025	.138
q8_r 高槻市のイメージ	.141**	.034	.122
調整済み決定係数		0.205**	
N		1199	

**p<.01, *p<.05

調整済み決定係数は 0.205 であり、従属変数の「地域の役に立ちたいか」のうち、20.5%がこのモデル説明されているといえる。Q3 地域に住み続けたいか、Q5 世間話の頻度において 5%水準で、Q6 世間話の頻度、Q7 親しい人は多いかにおいて 1%水準で有意な結果が得られた。値を見ると、特に近所づきあいを増やしたいか (=0.275) が大きな影響度を示した。

表 2 から自分と地域とのつながりを広げようという気持ちは、自分の所属する地域に貢献しようという意識と、積極的に地域に働きかけるといった共通点があり、影響度が高くなったのではと考える。

仮説 2 に対しても同様に、Q22 ボランティア頻度との相関係数の分析 (表 3) と、重回帰分析 (表 4) を行った。

表 3 Q22 ボランティアの頻度 との相関係数

	q22_r ボラン ティア頻度反 転	q1_r 満足度 反転	q2_r 居住地 域の暮らしや すさ反転	q3_r 住み続 けたさ反転	q5_r 世間話 の頻度反転	q6_r 近所付 きあいを増や したいか反 転	q7_r 親しい 人は多いか 反転	q8_r 高槻市 のイメージ反 転
q22_r ボランティア頻 度反転	1 1207	.090** 1203	.076** 1205	.116** 1205	.221** 1199	.129** 1200	.235** 1203	.106** 1203
q1_r 満足度反 転		1 1226	.460** 1225	.410** 1225	.115** 1219	.161** 1220	.174** 1213	.315** 1213
q2_r 居住地域の暮ら しやすさ反転			1 1228	.536** 1228	.068* 1222	.126** 1223	.130** 1215	.419** 1215
q3_r 住み続けたさ反 転				1 1228	.171** 1222	.147** 1223	.213** 1215	.371** 1215
q5_r 世間話の頻度 反転					1 1222	.077** 1221	.547** 1210	.073* 1210
q6_r 近所付きあいを 増やしたいか反転						1 1223	0.056 1211	.144** 1211
q7_r 親しい人は多い か反転							1 1217	.109** 1216
q8_r 高槻市のイメー ジ反転								1 1217

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

表 3 において 1 行目の q22 ボランティア頻度との相関係数に注目する。すべての項目に対し 1%水準で有意であった。またすべての項目に対し弱い正の相関がみられ、Q7 親しい人は多いか、Q5 世間話の頻度において比較的強い相関が見られた。この結果から仮説 2-4,2-6 については仮説がわずかに支持されたといえるが、それ以外の仮説については関連性があるかについては疑問の残る結果となった。

表 4 Q22 ボランティアの頻度の重回帰分析

	B	SE	
(定数)	.388**	.122	
q1_r 生活満足度	.004	.019	.006
q2_r 居住地域の暮らしやすさ	-.006	.029	-.008
q3_r 地域に住み続けたいか	.014	.017	.028
q5_r 世間話の頻度	.060**	.016	.125
q6_r 近所付きあいを増やしたいか	.088**	.024	.102
q7_r 親しい人は多いか	.075**	.017	.150
q8_r 高槻市のイメージ	.041	.022	.058
調整済み決定係数		0.081**	
N		1191	

**p<.01, *p<.05

表4において、調整済み決定係数は0.081であり、従属変数の「ボランティア頻度」のうち、8.1%がこのモデルによって説明されているといえる。Q5「世間話の頻度」、Q6「近所づきあいを増やしたいか」、Q7「親しい人は多いか」で1%水準で有意な結果が得られた。Q5「世間話の頻度」($\beta = 0.125$)とQ7「近所づきあいを増やしたいか」($\beta = 0.150$)は共に有意な中では他に比べ数値が高い。これは親しい人はボランティア活動に誘いやすく、そういった活動に誘う機会が世間話をする中に存在するからと思われる。

5. 議論と考察

分析より、地域への印象のなかでも近所づきあいをより増やしたいという意識が地域貢献への意識につながり、実際にボランティア活動を促進するという点に関しては、世間話の頻度と、親しいと感じる人の多さがやや影響を与えていないことがわかった。すなわち、地域住民同士のコミュニケーションがボランティア活動の参加を促進すると考えられる。この調査結果からボランティア活動は地域住民のコミュニケーションの場の一つとして考えられているのではないかと推測した。このことから、ボランティア活動の促進のためには、ボランティアを地域住民と楽しくコミュニケーションできる場所として位置づけることが重要であり、そうすることで社会貢献の場を広げるだけでなく、地域住民同士の交流もより盛んになるのではないかと考える。

6. 文献

[1] 米澤 美保子(2010)「ボランティア活動の継続要因」『関西福祉科学大学紀要』Vol14 pp.31-41 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007726799>)

[2] 内閣府,平成23年,『国民生活選好度調査』 (http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h23/23senkou_02.pdf)

第5章 地域のボランティア活動と 収入等複数要因との関連

壺井 章賀

1. はじめに

近年、日本では従来の地域でのボランティア活動やその他の地域活動において、消極的な傾向が進んでおり、特に若年層の地域離れが問題視されている傾向にある。しかし、若年層だけでなく人付き合いに消極的な老年層の人や、逆に積極的な若年層が存在しているということも事実であると考えられる。これらの違いには、単に年齢だけでなく他の要因も十分に考慮する余地があると思ひ、その要因について高槻市を対象として調査を行った。

2. 先行研究と仮説

『在宅高齢者の家族構成からみた包括ケアサービスおよび地域活動の都市・農村比較：在宅高齢者の地域ケアに関する研究 その1（教育・福祉の地域施設、農村計画）』によると、家族人数が多いほど自治会や趣味活動に参加している割合が高くなる という調査結果が得られていた。この調査結果が高槻市でも妥当性のあるものであるかどうか検証した上で、家族人数の多寡が直接的な要因であるかどうかを調査するため、以下の仮説について検証を行う。

仮説：世帯年収および家族1人あたりの収入が多いほど、積極的に地域のボランティア活動等の活動に参加している。

また、社会起業大学監修の『社会貢献意識および「学び」に関する実態調査』によると、普段の生活の中で、社会に貢献したい・人の役に立つことをしたいと思っている人は全体の約9割で、社会に貢献している実感のある人は約5割で年齢が高くなるにつれ実感している人の割合が上昇している。これらについて次の仮説についての検証も行う。

仮説：地域に貢献したいと思っている人ほどボランティア活動に参加している。

3. データ・変数

3.1 データ

用いたデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は、高槻に居住する20歳以上の男女を対象に、2013年に実施したものである。計画標本サイズは2,000、有効回収数は1,233（回収率は61.7%）である。

3.2 変数

用いた変数は、Q4 地域の役に立ちたいか、Q7 親しい人は多いか、Q22 ボランティア頻度、Q63 世帯人数、Q65 年齢、Q74_right 世帯収入、Q74_Q63_right 家族1人あたりの

平均収入であり、Q22 ボランティア頻度を従属変数、残りを独立変数とし、重回帰分析を行った。

それぞれの質問・回答、回答の処理を以下に記す。

「Q22. あなたは地域のボランティア活動等にどれくらい参加していますか。」に対する選択肢は、「1.ほぼ毎日」「2.週に3~4日」「3.週に1~2日」「4.月に1~2日」「5.ほとんどない」の5つを設け、重回帰分析時には、Q22の選択肢を反転させ、「1.ほとんどない」「2.月に1~2日」「3.週に1~2日」「4.週に3~4日」「5.ほぼ毎日」とした。

「Q63. あなたの世帯の人数を、あなたも含めてお答えください。」に対して、人という空欄を設け、記入できるようにした。

「Q65. あなたの年齢をお答えください。」に対する選択肢は、「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」とした。

「Q74. 過去1年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。」に対する選択肢は、「1.100万円未満」「2.100万円~200万円未満」「3.200万円~400万円未満」「4.400万円~600万円未満」「5.600万円~800万円未満」「6.800万円~1000万円未満」「7.1000万円~1500万円未満」「8.1500万円以上」「9.わからない」とし、分析時には、100万円未満を50万円、100万円~200万円未満を150万円、200万円~400万円未満を300万円、400万円~600万円未満を500万円、600万円~800万円未満を700万円、800万円~1000万円未満を900万円、1000万円~1500万円未満を1250万円、1500万円以上を1750万円とした。また、その際変数名をQ74_rightとした。

そして、Q74_rightのデータに対し、Q63の世帯人数で割った値を、家族1人あたりの収入として、分析時に使用した。その際の変数名をQ74_Q63とした。

4. 分析

まず最初に、地域の役に立ちたいと考えている人の割合を度数分布表で表す。

表1 q4 地域の役に立ちたいかの度数分布表の結果

	度数	累積%
そう思う	229	18.8
ややそう思う	479	58.0
どちらともいえない	354	87.0
あまりそう思わない	135	98.1
そう思わない	23	100.0

この結果より、約半数以上の人々が地域の役に立ちたいと思っており、高槻市においても地域貢献したいと考えている人がそう思わないと答えた人に対して、かなり多いということがわかった。この結果を考慮した上で、次にボランティア頻度との重回帰分析を行う。

表2 ボランティア頻度に関する重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	0.42**	0.12	
q65 年齢	0.05***	0.01	0.15
q4_r 地域の役に立ちたいか反転	0.08***	0.02	0.14
q7_r 親しい人の数反転	0.09***	0.02	0.19
q63 世帯人数	0.03	0.03	0.06
q74_right 世帯収入(正)	0.00	0.00	-0.10
q74_q63 一人あたりの収入	0.00	0.00	0.07
調整済み決定係数		0.10***	
N		886	

***p<.001, **p<.01, *p<.05

この結果によると、q65 年齢、q4_r 地域の役に立ちたいか反転、q7_r 親しい人の数反転について有意水準 $p<0.01$ で有意差がみられた。

q63 世帯人数、q74_right 世帯収入、q74_63 一人あたりの収入については、いずれも有意差はみられなかった。

5. 議論と考察

分析結果によると、まず先行研究で挙げていた、家族人数とボランティア活動についての有意差がみられなかった。この結果について、いくつかの要因が考えられるが、最も考えられる要因に、先行研究と本調査のアンケートに関する文の表記の差異が挙げられる。先行研究では、家族人数が多いほど自治会や趣味活動に参加している割合が高くなるという、多岐の活動を明示していた。それに対し本調査では、地域のボランティア活動等にどれくらい参加していますかと、地域のボランティア活動のみを明示し、その他の活動について明確に提示しなかった。これらのことから、回答者に必ずしも適切な質問の意図が行き届かず、結果先行研究との不一致が起きた可能性があると考えられる。そのことから、再度適切な質問内容を考慮した上での再調査を行う必要があると思われ、仮説 についても検証をもう一度行うことで、本調査とは異なった結果が生じる可能性が大いに考えられる。本調査では、ボランティア活動を従属変数とした重回帰分析において、家族人数や世帯収入、及び家族一人あたりの収入の多寡による有意差はみられず、ボランティア活動において、家族人数や収入との関連性はみられなかった。

仮説 に挙げていた事柄については、重回帰分析によるボランティア活動と地域の役に立ちたいという事柄に有意差がみられることから、地域の役に立ちたいと考えている人ほどボランティア活動に参加しているという仮説が肯定された。また、この結果から、地域の役に立ちたいと考えている人は、必ずしもボランティア活動に積極的な姿勢を取ってい

るわけでもないため、地域の役に立ちたいが時間がない人や、ほかの地域活動を行っている人、また、地域の役に立ちたいが何をすればよいかわからない人など、様々な理由から地域のボランティア活動等の活動に参加していないと考えられることから、本調査をより深めていくことで、ボランティア活動に従事する若者の増加や、若者の地域離れを食い止めることにつながっていく可能性があるため、更なる調査を行うことが必要であると思われる。

6. 文献

[1] 大塚 聡史、藤本 信義、北澤 大佑:在宅高齢者の家族構成からみた包括ケアサービスおよび地域活動の都市・農村比較:在宅高齢者の地域ケアに関する研究 その1(教育・福祉の地域施設、農村計画)、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)2006年9月

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006329978>

[2] 社会起業大学監修 社会貢献意識および「学び」に関する実態調査 2012年3月

<http://socialvalue.jp/research/reseach.pdf>

第6章 高槻市民の高槻まつりに対する関心度

千貫 綾佳

1. はじめに

近年、高槻は大阪のベッドタウンと言われており、人口も増え、駅前も以前より栄えているように感じる。しかし、ベッドタウンとして栄えているということは、高槻よりも他の地域にいる時間の方が長い可能性が高い。だから、実際には高槻市民がどれほど高槻に関心を持っているのだろうかと興味を持った。関心の度合いを測る指標はたくさんあるが、今回は地域行事の一環である「高槻まつり」を取り上げる。なぜなら、一年に一度しかなく、大々的に宣伝が行われていて、とてもたくさんの人が参加している行事なので、高槻の代表的な行事と言えるからである。よって、「高槻まつり」に焦点を当てて分析を行う。

2. 仮説

高槻まつりのような地域のお祭りは小さい子どもでも楽しめるので、小さい子どもがいる親が子どもを連れて行こうと考える可能性が高いと考えた。また、年齢で考えると若い年代の方が、高槻まつりなど行事ごとに敏感なので、地域のイベントに参加する可能性が高いのではないかと。したがって、以下のような仮説を立てた。

- ① 末子の年齢が低ければ低いほど、高槻まつりへの参加経験がある。
- ② 年齢が低ければ低いほど、高槻まつりへの参加経験がある。

3. データ・変数

3.1 データについて

データは平成25年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1233票、回収率は61.7%である。

3.2 変数について

変数は以下の3種類の質問項目、および回答を使用した。

「Q21 あなたは、高槻市内で行われていた次のような行事に参加したことがありますか。

B 高槻まつり」

参加したことがあるかどうかの回答は「1:ある」、「2:ない」の2択である。

「Q60 あなたのお子さまの中で、一番下のお子さまの年齢はおいくつですか。」

お子さまの年齢の回答は「1:3歳未満」、「2:3歳以上6歳未満」、「3:6歳以上12歳未満」、「4:12歳以上18歳未満」、「5:18歳以上」の5段階である。

「Q65 あなたの年齢をお答えください。」

回答としては、「1:20代」、「2:30代」、「3:40代」、「4:50代」、「5:60代」、「6:70代以上」の6段階である。

表1 年齢の度数分布表

	度数	パーセント
20代	85	7.0
30代	169	14.0
40代	213	17.6
50代	168	13.9
60代	294	24.4
70代以上	278	23.0
合計	1207	100.0

4. 分析

最初に、仮説①の検証を行う。末子の年齢と高槻まつりへの参加の有無との関係性を知りたいので、表2と図1を作成した。

次に、仮説②の検証を行う。実際にどの年代の人が多く高槻まつりに参加しているのかを知りたいので、表3と図2を作成した。

表2 末子の年齢 と 高槻まつりへの参加経験の有無 のクロス表

		高槻まつりへの参加経験		合計
		あり	なし	
末子の年齢 3歳未満	度数	51	17	68
	行%	75.0%	25.0%	100.0%
3歳以上6歳未満	度数	38	12	50
	行%	76.0%	24.0%	100.0%
6歳以上12歳未満	度数	66	16	82
	行%	80.5%	19.5%	100.0%
12歳以上18歳未満	度数	48	11	59
	行%	81.4%	18.6%	100.0%
18歳以上	度数	280	243	523
	行%	53.5%	46.5%	100.0%
合計	度数	483	299	782
	行%	61.8%	38.2%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=782)=46.086, **p<0.01$

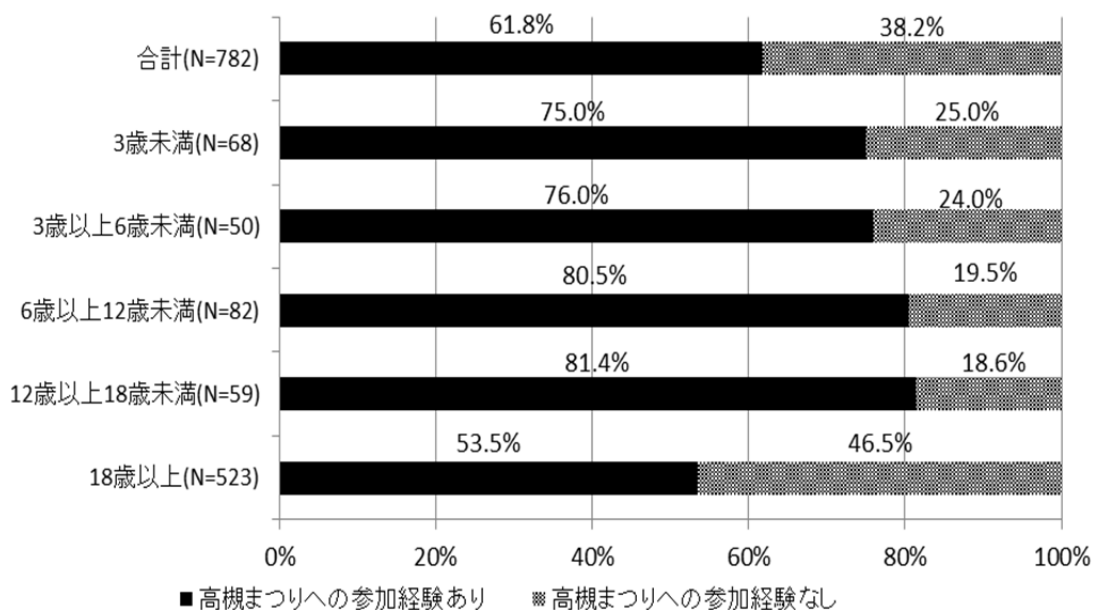


図1 末子年齢と高槻まつりへの参加経験の有無

表2・図1の結果から、末子の年齢が18歳未満のときは、末子の年齢が上がるにつれて高槻まつりに参加したことがあると答えた人が増えている。末子年齢が18歳未満の人の参加の有無については、「参加したことがある」と回答した人の割合は緩やかに増加しているため、末子の年齢と高槻まつりへの参加の有無には正の相関がみられるといえる。しかし、末子の年齢が18歳以上のとき、参加したことがあると答えた人は50%強にとどまった。これは、18歳未満のときよりも20%~30%も低い割合である。

表3 年齢と高槻まつりへの参加経験の有無のクロス表

年齢	高槻まつりへの参加経験		合計	
	あり	なし		
20代	度数	60	23	83
	行%	72.3%	27.7%	100.0%
30代	度数	122	45	167
	行%	73.1%	26.9%	100.0%
40代	度数	148	65	213
	行%	69.5%	30.5%	100.0%
50代	度数	104	62	166
	行%	62.7%	37.3%	100.0%
60代	度数	145	139	284
	行%	51.1%	48.9%	100.0%
70代以上	度数	126	142	268
	行%	47.0%	53.0%	100.0%
合計	度数	705	476	1181
	行%	59.7%	40.3%	100.0%

$\chi^2(df=5, N=1181)=53.662, **p<0.01$

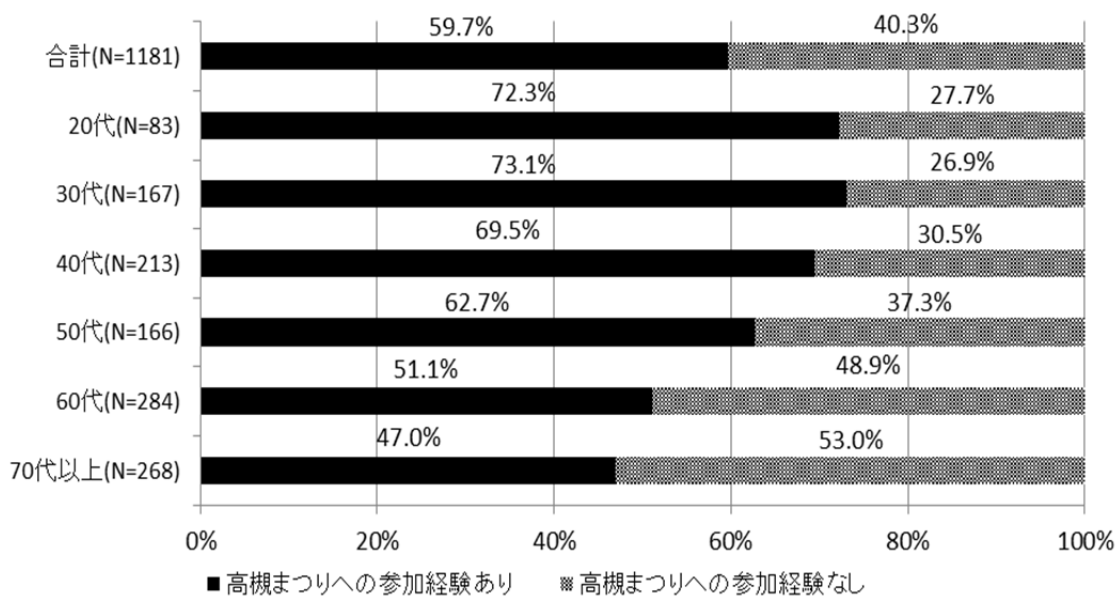


図2 年齢と高槻まつりへの参加経験の有無

表3・図2より、年齢が上がるにつれて、高槻祭りに参加したことがあると答えた人が減っている。つまり、負の相関がみられる。このことから、年齢が上がれば上がるほど高槻まつりに参加したことがない傾向にあることがわかる。

この二つの分析を経て、末子の年齢が低い人ほど、また、年齢も低い人ほど高槻まつりに参加する傾向にあることが分かった。これらより、年齢と末子の年齢も相関関係にあり、年齢が低いの方が末子の年齢も低いのではないかという疑問を持った。だから、年齢と末子の年齢の関連を調べるため、以下に表4・図3を作成した。

表4 年齢 と 末子の年齢の クロス表

年齢		末子の年齢					合計
		3歳未満	3歳以上6歳未満	満	未満	18歳以上	
20代 (N=10)	度数	9	1	0	0	0	10
	行%	90.0%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
30代 (N=100)	度数	46	30	22	2	0	100
	行%	46.0%	30.0%	22.0%	2.0%	0.0%	100.0%
40代 (N=142)	度数	14	18	54	36	20	142
	行%	9.9%	12.7%	38.0%	25.4%	14.1%	100.0%
50代 (N=129)	度数	0	0	6	18	105	129
	行%	0.0%	0.0%	4.7%	14.0%	81.4%	100.0%
60代 (N=222)	度数	0	0	0	1	221	222
	行%	0.0%	0.0%	0.0%	.5%	99.5%	100.0%
70代以上 (N=179)	度数	0	0	0	0	179	179
	行%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
合計 (N=782)	度数	69	49	82	57	525	782
	行%	8.8%	6.3%	10.5%	7.3%	67.1%	100.0%

$\chi^2(df=20, N=782)=877.659, **p<0.01$

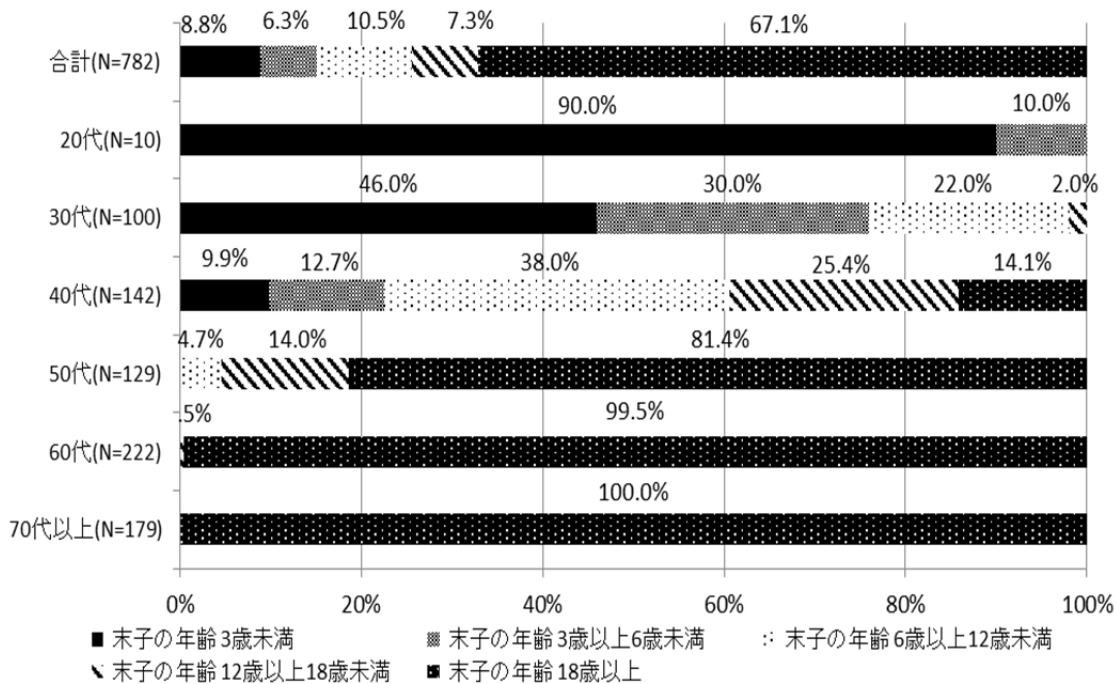


図3 年齢と末子の年齢

表4・図3より、末子年齢が3歳未満に焦点を当てて見ると、20代では末子年齢が3歳未満の人が90%を占めているが、30代では3歳未満は50%弱まで減少しており、以降年齢が増加するにしたがい、末子年齢は高くなっている。例えば、末子年齢が18歳以上について見ると、20代・30代は0%であるが、40代は14.1%であり、以降年齢が高くなるにつれて末子が18歳以上の人の割合が高くなっている。つまり、年齢と末子の年齢には強い正の相関がみられる。

5. 考察・議論

まず、上記にも述べたとおり末子年齢と高槻まつりへの参加経験の有無には、末子年齢が18歳以上の場合を除いて正の相関が見られる。つまり、「末子の年齢が低ければ低いほど、高槻まつりへの参加経験がある。」という①の仮説は証明されなかった。これは、地域のまつりだと遠くに出かけるよりも安心して出かけられるので、6歳未満の場合は親が子どもを連れて高槻まつりへ行くケースが多いのではないかと考えられる。しかし、幼稚園や小学校に通い出すと、子どもが親に高槻まつりに行きたいと言うようになり、家族で出かけるケースが増えるので、末子年齢が6歳～18歳の親の高槻まつりへの参加の割合は8割を超えているのではないかと考えた。

次に、表3・図2より年齢と高槻まつりへの参加経験の有無には、負の相関が見られる。よって、「年齢が低ければ低いほど、高槻まつりへの参加経験がある。」という②の仮説は証明された。それは、若い人は情報にとっても敏感であり、かつイベントが好きという人が多いため、積極的にイベントへ参加する傾向があるからだと考えられる。また、年齢が上がるにしたがい、お金にも余裕ができるので遠方へ出かけてのんびりしようという考えの人が増えるため、あまり高槻まつりに参加しないので

はないか。

最後に、70%以上が「高槻まつりに参加したことがある」と答えた 20 代・30 代に着目する(表 3・図 2 参照)。表 4 を見ると、20 代は末子年齢が 3 歳未満の人が 90%を超えていることから 20 代は親が率先して子どもを高槻まつりに連れて行く、つまり能動的に高槻まつりに参加しているのではないかと考えた。逆に 30 代を見てみると、末子年齢が「3 歳未満」、「3 歳以上 6 歳未満」、「6 歳以上 12 歳未満」の 3 つを足すと 90%を超えており、さらに後者 2 つの割合を足すと 50%を超える。3 歳～12 歳というのはいろいろなことに興味を持ち始める時期なので、高槻まつりなどのイベントにも行きたいと感じる時期である。だから、子どもが親に高槻まつりに連れて行ってほしいと言う傾向にあるのではないかと考えた。

6. 参考資料

[1] 地域の行事・イベント等への参加について - 大阪市

<http://www.city.osaka.lg.jp/shimin/cmsfiles/contents/0000065/65275/1syoun-2.pdf>

第7章 高槻市内で行われるイベント参加と 近所づきあいの関係

吉井 実南

1. はじめに

高槻市の若い世代は地元で行われるイベントには積極的に参加しているのだろうか。高槻市は近年急速にベッドタウン化が進み、2.5 歳階級の人口統計を見てみると、25～29 歳、45～49 歳の間に 1 つの山ができる。つまり、生産年齢人口が他の年代よりも多い。これは少子高齢化が全国の市町村で問題視されているなかで非常に良い傾向である。若い世代が比較的多い高槻市では街をより活性化させることは可能であるといえる。街のイベントは地域活性化に非常に貢献する。そこで、高槻市内で行われるイベントにどれだけの人が参加しているかに注目した。今後、若い世代が地域に関心を持ち、さらに発展していくためにはどのような取り組みが効果的か、この調査を用いて検討する。

2. 仮説

地元でのイベントには家族や近所でつきあいのある人と一緒にいくと考えたからである。また、若い世代はまだ近所よりも学校での友人関係を重視し、近所づきあいはそれほど重視しないと考えたからである。また、年齢を重ね、その土地に住み続けることによって近所でのつながりが強くなると考えた。以上のことから 2 つの仮説を立てた。

仮説 : 近所の人とのつきあいが多い人ほど高槻市内で行われるイベントに参加している。

対立仮説 : 近所の人とのつきあいが少ない人ほど高槻市内で行われるイベントに参加していない。

仮説 : 年齢が若い人ほど近所づきあいが少ない。

対立仮説 : 年齢が高い人ほど近所づきあいは多い。

3. データ・変数の説明

3.1 データについて

分析には 2013 年に実施された「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査対象（母集団）は高槻市に移住する 20 歳以上の男女で、対象者の数（計画サンプル数）は 2000 人である。有効回収数は 1233 人、回収率は 61.7% である。

3.2 変数について

用いた質問項目と、用いた変数は 5 つである。それぞれの度数分布表を以下に示す。「Q6 . あなたは今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。」

回答としては「1,増やしたい」「2,やや増やしたい」「3,どちらともいえない」「4,やや減らしたい」「5,減らしたい」の5つである。(表1)

表1 q6 近所づきあいを増やしたいか

	度数	パーセント
増やしたい	66	5.4
少し増やしたい	287	23.5
どちらともいえない	823	67.3
少し減らしたい	18	1.5
減らしたい	29	2.4
合計	1223	100.0

「Q7. あなたは現在お住まいの地域で親しくしている人の数が、どちらかといえば多い方だと思いますか、それとも少ない方だと思いますか。」回答としては「1,多い」「2,やや多い」「3,どちらともいえない」「4,やや少ない」「5,少ない」の5つである。(表2)

表2 q7 親しい人は多いか

	度数	パーセント
多い	52	4.3
やや多い	164	13.5
どちらともいえない	293	24.1
やや少ない	289	23.7
少ない	419	34.4
合計	1217	100.0

「Q21. あなたは高槻市内で行われている次のような行事に参加したことがありますか。」選択肢は「A.高槻マラソン」「B.高槻まつり」「C.高槻ジャズストリート」「D.高槻バル」「E.関西大学の行事(講演会や学園祭など)」の5つあり、回答としては「1.ある」「2.ない」の2つである。

「Q64. あなたの性別はどちらですか。」回答としては「1.男性」「2.女性」の2つである。2値変数なので、重回帰分析に用いるためにダミー変数(0/1)をつくり、男性1、女性0の「男性ダミー」とした。(表3)

表3 q64 性別

	度数	パーセント
男性	534	44.0
女性	679	56.0
合計	1213	100.0

「Q65．あなたの年齢を教えてください。」回答としては「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」の6つである。分析では中央化した数値を用いる。(表4)

表4 q65 年齢

	度数	パーセント
20代	85	7.0
30代	169	14.0
40代	213	17.6
50代	168	13.9
60代	294	24.4
70代以上	278	23.0
合計	1207	100.0

4. 分析

仮説が2つあるので仮説ごとに分析を行う。

4.1 仮説（高槻市内で行われるイベントには近所の人とのつきあいが多い人ほど参加している）について分析

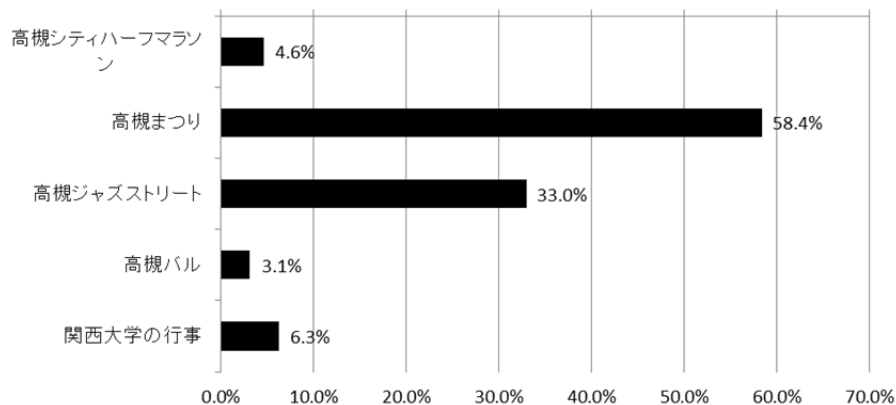


図1 Q7 高槻市内の行事に参加したことがある人(全体)

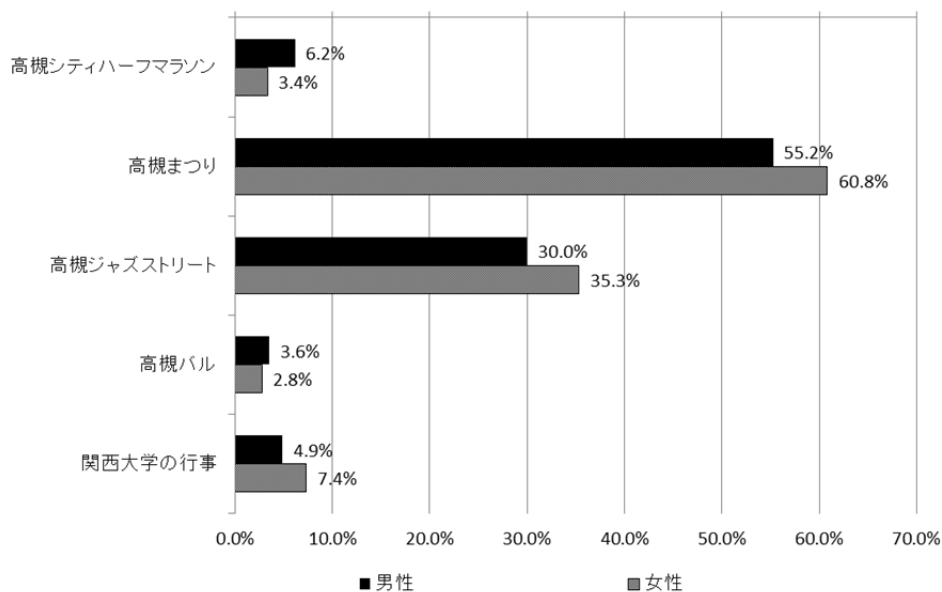


図2 Q7 高槻市内の行事に参加したことがある人(男女別)

5つの高槻市内での行事の中で、参加したことがある人が最も多いのは「高槻まつり」で58.4%であった(図1)。男女別でもやはり「高槻まつり」に参加したことがある人がほかの行事に参加したことがある人に比べて多く、ともに過半数を超えていた(図2)。

イベントごとに近所で親しい人が多いかとの関係性の有無を調べるために、表を作成した。(表5,6,7,8,9)

表5 q7 親しい人は多いかq21a 高槻シティハーフマラソンへの参加のクロス表

		q21a 高槻シティハーフマラソンへの参加		合計
		ある	ない	
q7 多い	度数	6	40	46
	%	13.0%	87.0%	100.0%
やや多い	度数	13	141	154
	%	8.4%	91.6%	100.0%
どちらともいえない	度数	13	268	281
	%	4.6%	95.4%	100.0%
やや少ない	度数	10	267	277
	%	3.6%	96.4%	100.0%
少ない	度数	16	391	407
	%	3.9%	96.1%	100.0%
合計	度数	58	1107	1165
	%	5.0%	95.0%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=1165) = 12.343^*, CramerV=0.103^*, *p < .05$

表6 q7 親しい人は多いかq21b 高槻まつりへの参加のクロス表

		q21b 高槻まつりへの参加		合計
		ある	ない	
q7 多い	度数	32	17	49
	%	65.3%	34.7%	100.0%
やや多い	度数	109	54	163
	%	66.9%	33.1%	100.0%
どちらともいえない	度数	185	104	289
	%	64.0%	36.0%	100.0%
やや少ない	度数	164	119	283
	%	58.0%	42.0%	100.0%
少ない	度数	222	192	414
	%	53.6%	46.4%	100.0%
合計	度数	712	486	1198
	%	59.4%	40.6%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=1198) = 13.011*$, CramerV=0.104*, *p < .05

表7 q7 親しい人は多いかq21c 高槻ジャズストリートへの参加のクロス表

		q21c 高槻ジャズストリートへの参加		合計
		ある	ない	
q7 多い	度数	16	30	46
	%	34.8%	65.2%	100.0%
やや多い	度数	69	89	158
	%	43.7%	56.3%	100.0%
どちらともいえない	度数	99	186	285
	%	34.7%	65.3%	100.0%
やや少ない	度数	100	182	282
	%	35.5%	64.5%	100.0%
少ない	度数	124	288	412
	%	30.1%	69.9%	100.0%
合計	度数	408	775	1183
	%	34.5%	65.5%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=1183) = 9.540*$, CramerV=0.090*, *p < .05

表8 q7 親しい人は多いかq21d 高槻バルへの参加のクロス表

		q21d 高槻バルへの参加		合計
		ある	ない	
q7 多い	度数	1	44	45
	%	2.2%	97.8%	100.0%
やや多い	度数	4	146	150
	%	2.7%	97.3%	100.0%
どちらともいえない	度数	10	268	278
	%	3.6%	96.4%	100.0%
やや少ない	度数	12	266	278
	%	4.3%	95.7%	100.0%
少ない	度数	12	393	405
	%	3.0%	97.0%	100.0%
合計	度数	39	1117	1156
	%	3.4%	96.6%	100.0%

$$\chi^2(df=4, N=1156) = 1.423, \text{CramerV}=0.035$$

表9 q7 親しい人は多いかq21e 関西大学の行事への参加のクロス表

		q21e 関西大学の行事への参加		合計
		ある	ない	
q7 多い	度数	6	41	47
	%	12.8%	87.2%	100.0%
やや多い	度数	11	145	156
	%	7.1%	92.9%	100.0%
どちらともいえない	度数	12	271	283
	%	4.2%	95.8%	100.0%
やや少ない	度数	25	253	278
	%	9.0%	91.0%	100.0%
少ない	度数	22	386	408
	%	5.4%	94.6%	100.0%
合計	度数	76	1096	1172
	%	6.5%	93.5%	100.0%

$$\chi^2(df=4, N=1172) = 9.178, \text{CramerV}=0.057$$

以上の結果から、近所で親しくしている人が多ければ多いほど、高槻まつりに参加している人が多いことがわかった。

また、それぞれのイベントにおいて、どのような人が参加しているか、ダミー変数を用いてロジスティック回帰分析を行った。(表 10,11,12,13,14)

表10 高槻シティハーフマラソン参加者のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
年齢(中央値)	-.008	.012	.992
近所づきあいをふやした いか反転	-.165	.219	.848
親しい人は多いか反転	.445 **	.122	1.560
男性ダミー	.278	.330	1.320
初等学歴ダミー	-17.877	4723.754	.000
中等学歴ダミー	-.001	.311	.999
常勤勤めダミー	18.618	14194.396	121811298.426
自営業者ダミー	17.874	14194.396	57886765.348
その他職業ダミー	17.126	14194.396	27386482.498
子どもありダミー	.444	.383	1.559
定数	-21.338	14194.396	.000
Nagelkerke R2 乗	0.131507		
χ^2 (df =10,N=1012)	44.25021		
**p<.01,*p<.05			

表 10 より、近所で親しい人が多い人ほど高槻シティハーフマラソンに参加していることがわかった。

表11 高槻まつり参加者のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
年齢(中央値)	-.034 **	.005	.967
近所づきあいをふやした いか反転	.104	.095	1.109
親しい人は多いか反転	.215 **	.060	1.240
男性ダミー	-.170	.142	.844
初等学歴ダミー	.448 **	.166	1.565
中等学歴ダミー	-.594 *	.286	.552
常勤勤めダミー	.030	.145	1.031
自営業者ダミー	-1.905	1.104	.149
その他職業ダミー	-1.649	1.127	.192
子どもありダミー	-1.848	1.094	.157
定数	3.130 **	1.178	22.884
Nagelkerke R2 乗	0.104332		
χ^2 (df =10,N=1038)	83.00533		
**p<.01,*p<.05			

表 11 より、近所で親しい人が多い人ほど高槻まつりに参加している。また、年齢に関しては、Exp(B)=0.967 なので、10 年刻みの年齢が一つ増加するごとに「高槻まつり」に参加する傾向が約 0.97 倍になる。したがって、13%参加する傾向が低くなるといえる。また、最終学歴でみると、高等学歴の人と比べて初等学歴の人が多く参加している傾向があ

る。

表12 高槻ジャズストリート参加者のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
年齢(中央値)	.004	.005	1.004
近所づきあいをふやした いか反転	.098	.097	1.103
親しい人は多いか反転	.111	.058	1.117
男性ダミー	-.378 **	.146	.685
初等学歴ダミー	.089	.168	1.094
中等学歴ダミー	-1.361 **	.367	.256
常勤勤めダミー	-.398 **	.144	.671
自営業者ダミー	1.053	1.106	2.868
その他職業ダミー	1.205	1.130	3.336
子どもありダミー	.840	1.099	2.317
定数	-2.023	1.176	.132
Nagelkerke R2 乗	0.04876 *		
χ^2 (df =10,N=1025)	36.86319		

**p<.01,*p<.05

表12より、男性よりも女性が、最終学歴が高等学歴の人よりも初等学歴の人が、高槻ジャズストリートに多く参加している傾向が見られた。

表13 高槻バル参加者のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
年齢(中央値)	-.048 **	.015	.953
近所づきあいをふやした いか反転	-.303	.244	.739
親しい人は多いか反転	.007	.157	1.007
男性ダミー	.489	.398	1.631
初等学歴ダミー	.385	.445	1.470
中等学歴ダミー	-.712	1.055	.491
常勤勤めダミー	-.458	.391	.633
自営業者ダミー	17.344	14056.045	34062219.281
その他職業ダミー	18.459	14056.045	103910022.117
子どもありダミー	17.505	14056.045	40030313.870
定数	-17.906	14056.045	.000
Nagelkerke R2 乗	0.090918		
χ^2 (df =10,N=1004)	23.18669		

**p<.01,*p<.05

高槻バルには、年齢に関する分析結果のみ有意となったことから、Exp(B)=0.953なので、10年刻みの年齢が一つ増加するごとに「高槻バル」に参加する傾向が約0.95倍になる。したがって、5%参加する傾向が低くなるといえる。

表14 関西大学の行事参加者のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
年齢(中央値)	.008	.010	1.008
近所づきあいをふやした いか反転	.077	.183	1.080
親しい人は多いか反転	.027	.109	1.028
男性ダミー	-.560	.288	.571
初等学歴ダミー	.166	.333	1.181
中等学歴ダミー	-1.201	.754	.301
常勤勤めダミー	-.618 *	.276	.539
自営業者ダミー	18.223	14989.131	82091476.162
その他職業ダミー	18.658	14989.131	126779792.733
子どもありダミー	18.265	14989.131	85581060.573
定数	-21.214	14989.131	.000
Nagelkerke R2 乗	0.033071 *		
$\chi^2(df=10, N=1016)$	13.12571		

**p<.01, *p<.05

関西大学の行事には、常時雇用の勤め人が参加しない傾向があることがわかった。

以上の分析結果から、高槻シティハーフマラソンと高槻まつりの2つのイベントの参加率と、近所で親しくしている人が多いこととの関連があることがわかった。

4.2 仮説②(年齢が若い人ほど近所づきあいが少ない)について分析

年齢と近所づきあいを増やしたいかについての関係性を調べるため、表を作成した。(表15)

表15 q65 年齢 と q6 近所づきあいを増やしたいか のクロス表

		q6 近所づきあいを増やしたいか					合計	
		少し増やし 増やしたい		どちらとも いえない		少し減らし 減らしたい		
q65 年齢	20代	度数	4	17	61	0	3	85
		%	4.7%	20.0%	71.8%	0.0%	3.5%	100.0%
	30代	度数	16	38	111	1	3	169
		%	9.5%	22.5%	65.7%	.6%	1.8%	100.0%
	40代	度数	9	45	153	1	5	213
		%	4.2%	21.1%	71.8%	.5%	2.3%	100.0%
	50代	度数	4	38	113	3	9	167
		%	2.4%	22.8%	67.7%	1.8%	5.4%	100.0%
	60代	度数	14	80	186	7	6	293
		%	4.8%	27.3%	63.5%	2.4%	2.0%	100.0%
	70代以上	度数	18	68	180	5	2	273
		%	6.6%	24.9%	65.9%	1.8%	.7%	100.0%
合計		度数	65	286	804	17	28	1200
		%	5.4%	23.8%	67.0%	1.4%	2.3%	100.0%

$\chi^2(df=20, N=1200) = 30.518, CramerV=0.080$

これより、近所づきあいを増やしたいという回答は、20代、30代、40代では50代、60代、70代以上の回答よりも少ないことがわかった。また、どちらともいえない、少し減らしたい、減らしたい、の3つの回答が20代では75.3%、30代では68.1%、40代では74.6%、50代では74.9%、60代では67.9%、70代では68.4%となっている。この中で最も多いのが20代の75.3%である。このことから、若い人は近所づきあいに対してあまり関心を持っていないことがわかる。しかし、40代や50代でも70%を超える数値が出ているため、年齢が高い人ほど近所づきあいをしたいと思っているとはいえない結果となった。

5. 結論

仮説 については、近所で親しい人が多い人ほど高槻バル以外のイベントへの参加率は高いことが分かった。これより、高槻シティーフマラソン、高槻まつり、高槻ジャズストリート、関西大学の行事、においては、親しい人が多いから誘い合って参加していると考えられる。高槻バルについては、参加している人が30代、40代に多く分布していることがわかっている。また、その年代は近所で親しくしている人は少ないと答えている人が多いことから、近所でのつながりを深めるのではなく、これから新たな交友関係を広げたいと考える人々が集うためのイベントであると考えられる。

次に仮説 については、若い世代は近所づきあいへの関心は薄いことは証明されたが、ほかの世代でも関心は薄れてきていることが読み取れた。よって、年齢が若い人ほど近所づきあいが少ないことは証明できなかった。

以上のことから、地域への関心は各世代で薄くなってきてはいるものの、若い世代を中心に地域のイベントに参加していくことを促していくことは地域を若い力で盛り上げていくには効果的であろう。近所どうして誘い合って参加する形のイベントを今後も続けることで、今ある関係性を保ち、また近所以外の場所で市民が交流する機会が増えるイベントに参加することで、新たな人とのつながりが生まれ、人々は日常生活に刺激が与えられると考える。そして人々の生活が向上すると、経済の活性化にもつながると予想される。このようにして、地域のイベントは高槻市全体を活性化していくのに効果的な取り組みであると考えられる。

6. 参考文献

- [1] 菅井勇蔵「人口急増都市の財政構造：高槻市財政の事例」『経済編, 桃山学院創立九十周年記念論文集』
- [2] 高槻市ホームページ--高槻市の人口
<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_h25/1365407280325.html> (2013年4月15日アクセス)

第 8 章 高槻市民満足度に関する分析

細見 晶歩

1. はじめに

高槻市は JR、阪急、バスと交通機関が充実していると感じる。交通機関がこんなに数多く充実している都市は少ないのではないかと感じる。そういった面から暮らしに不自由ないのではないかと感じる。このような交通機関の中でも特に私は高槻市営バスを中心に考える。私は、高槻市営バスをほぼ毎日利用している乗客の一人である。高槻市営バスの本数は他の地域に比べ一時間あたりの数が多いと感じる。高槻市営バスは経常利益が黒字だと言われている。いろいろな都市で公営バスが運行されているが、赤字経営がほとんどの中、経常利益が黒字であるということは乗客の利用頻度、満足度が大きく関わっているのではないかと考える。そこで、今回高槻市と関西大学で実施した合同アンケート調査データに基づいて、高槻市民の市営バスに関する満足度を生活満足度と踏まえ、分析する。

2. 先行研究と仮説

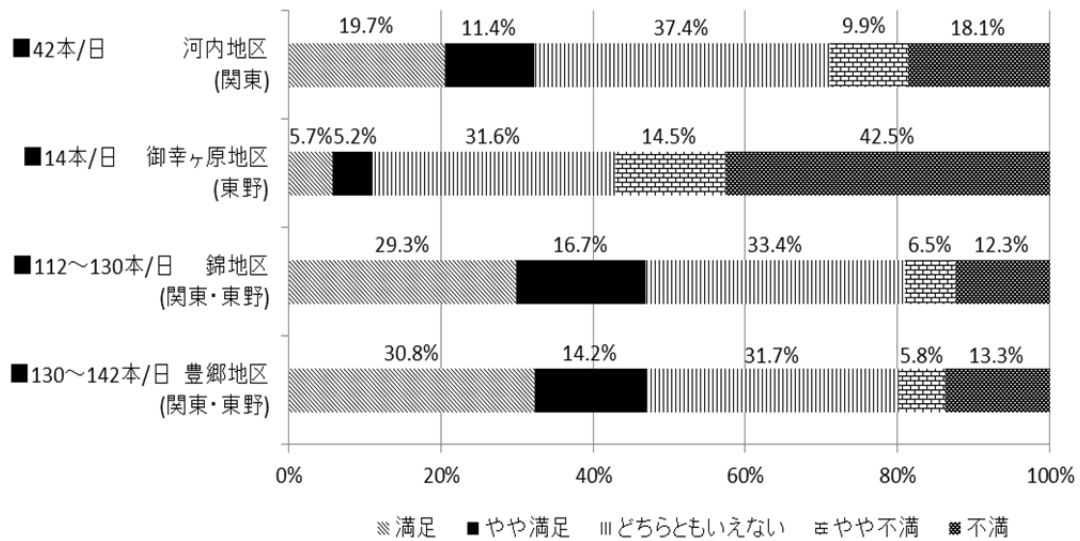
2.1 先行研究

先行研究としては、布目ゆきお(2013)によると高槻市営バスは阪急バス、京阪バス、近鉄バスなどの競合バス会社の中で、営業キロが 118km と一番長いとされ、ダイヤも 2 分間隔の路線もある。市営バスの乗客は昭和 50 年の 3000 万人をピークに平成 21 年には 2000 万人に減少しているものの 6 割減の全国平均を大きく上回っている。

図1では、関東地区のバスの運行本数に対する満足度の調査をし、公共交通サービスに関する定義を表している。この結果から、最低でも 1 時間に 2 本(30 分間隔)の運行本数が必要とされ、この条件を満足できないオフピークの運行が 1 時間に 2 本未満の地域を公共交通不便地域として定義している。

この結果から、高槻市営バスの場合、公共交通不便地域の定義には当てはまらず、むしろ満足度が高いのではないかと考える。

その他にも、高槻市は JR では約 15 分、阪急では約 20 分で大阪と京都と両方とも行くのに便利であることから住民にとって満足できる点ではないかと考える。



※宇都宮市「重点課題と対応の方向」より参照

図 1: 運行本数満足度(グラフ参照)

2.2. 仮説

高槻市営バスの運行本数満足度が高いほど生活満足度も高い。

3. データ・変数

3.1 データ

分析に関しては平成25年に実施した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象は高槻市在住の20歳以上の男女で、対象者数は2000人、有効回収数は1233人、回収率は61.7%であった。

3.2 変数

変数として用いたのは、「バスの満足度」、「電車満足度」、「バスの運行本数満足度」、「生活満足度」、の変数を使いクロス表と重回帰分析を行う。

「バス満足度」、「電車満足度」、「生活満足度」に関しては、

- 1.満足
- 2.やや満足
- 3.どちらともいえない
- 4.やや不満
- 5.不満

「バスの運行本数満足度」に関しては、

- 1.満足
- 2.やや満足
- 3.どちらともいえない
- 4.やや不満
- 5.不満
- 6.知らない

としている。

4. 分析

はじめに、高槻市民の生活満足度とバス満足度の結果である。

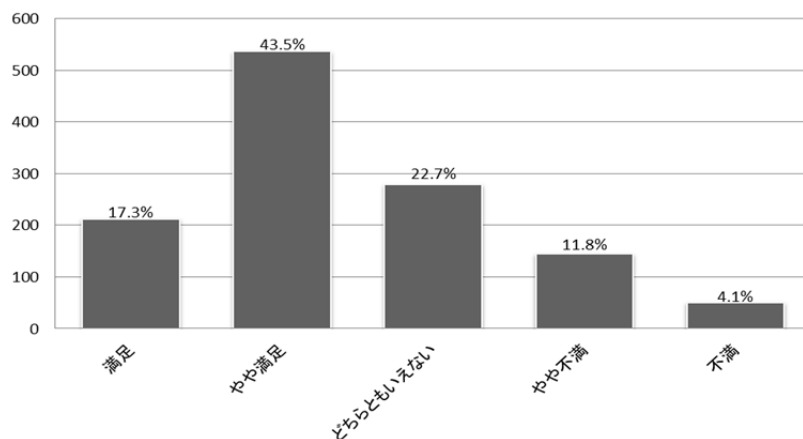


図 2: 高槻市民の生活満足度

この結果から、どちらともいえないと回答した人が 22.7%と少し多かったが、満足と回答した人が 60.8%と半数以上を占めていることが分かった。このことから高槻市民の多くが高槻市で生活することに満足しているという結果が出た。

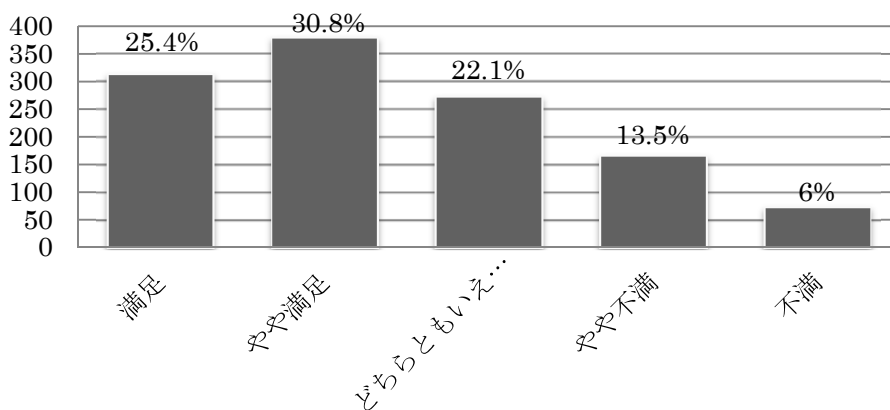


図 3: 高槻市民のバス満足度

この結果からどちらともいえないと回答した人が 22.1%と少し多く分析しにくい。しかし、満足と回答した人が 56.2%と半数以上満足と回答していたことから、先行研究で宇都宮市を元にした定義は高槻市ではこの定義が当てはまると言える。

次に、生活満足度で満足と回答した人がバス全体、バス運行本数、電車にたいしてどれほど満足しているのかを分析する。

表 1：生活満足度とバス満足度のクロス分析

		生活満足度					合計	
		どちらとも						
		満足	やや満足	いけない	やや不満	不満		
バス満足度	満足	度数	95	136	48	23	11	313
		割合	30.4%	43.5%	15.3%	7.3%	3.5%	100.0%
	やや満足	度数	49	188	90	40	12	379
		割合	12.9%	49.6%	23.7%	10.6%	3.2%	100.0%
	どちらとも	度数	38	122	66	36	9	271
		割合	14.0%	45.0%	24.4%	13.3%	3.3%	100.0%
	いけない	度数	17	63	54	27	6	167
		割合	10.2%	37.7%	32.3%	16.2%	3.6%	100.0%
	やや不満	度数	10	22	18	13	11	74
		割合	13.5%	29.7%	24.3%	17.6%	14.9%	100.0%
	不満	度数	209	531	276	139	49	1204
		割合	17.4%	44.1%	22.9%	11.5%	4.1%	100.0%

N=1204 X²=98.349**, cramerV=0.143**

**p<.01, *p<.05

表 1 の結果から、生活に満足している人の 30.4%がバスに対して満足していることが分かる。生活にやや満足している人も合わせれば 73.9%がバスに満足していることが分かる。このことから全体的にバスに満足している人が多くいることが分かる。

表 2：生活満足度と運行本数満足度のクロス分析

		生活満足度					合計	
		どちらとも						
		満足	やや満足	いけない	やや不満	不満		
バス運行本数満足度	満足	度数	60	73	25	14	7	179
		割合	33.5%	40.8%	14.0%	7.8%	3.9%	100.0%
	やや満足	度数	52	145	57	23	4	281
		割合	18.5%	51.6%	20.3%	8.2%	1.4%	100.0%
	どちらとも	度数	34	140	67	36	17	294
		割合	11.6%	47.6%	22.8%	12.2%	5.8%	100.0%
	いけない	度数	16	78	52	27	5	178
		割合	9.0%	43.8%	29.2%	15.2%	2.8%	100.0%
	やや不満	度数	17	39	33	19	13	121
		割合	14.0%	32.2%	27.3%	15.7%	10.7%	100.0%
	不満	度数	32	58	42	21	5	158
		割合	20.3%	36.7%	26.6%	13.3%	3.2%	100.0%
知らない	度数	211	533	276	140	51	1211	
	割合	17.4%	44.0%	22.8%	11.6%	4.2%	100.0%	

N=1211 X²=89.418**, cramerV=0.146**

**p<.01, *p<.05

表 3:生活満足度と電車満足度のクロス分析

		生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いけない	やや不満	不満		
電車満足度	満足	度数	161	275	109	46	21	612
		割合	26.3%	44.9%	17.8%	7.5%	3.4%	100.0%
	やや満足	度数	36	190	101	56	8	391
		割合	9.2%	48.6%	25.8%	14.3%	2.0%	100.0%
	どちらとも	度数	9	40	39	19	8	115
	いけない	割合	7.8%	34.8%	33.9%	16.5%	7.0%	100.0%
	やや不満	度数	2	24	18	11	11	66
		割合	3.0%	36.4%	27.3%	16.7%	16.7%	100.0%
	不満	度数	3	2	9	6	3	23
		割合	13.0%	8.7%	39.1%	26.1%	13.0%	100.0%
	合計	度数	211	531	276	138	51	1207
		割合	17.5%	44.0%	22.9%	11.4%	4.2%	100.0%

N=1207 X²=141.491**, cramerV=0.171**

**p<.01, *p<.05

表 2 の結果からは、生活に満足している人の 33.5% の人がバスの運行本数に対し満足していることが分かる。だからといって、生活に不満の人がバスの運行本数に不満を抱いているわけではない。生活にやや満足している人を合わせれば 74.3% が運行本数に満足している。

表 3 の結果からは、生活に満足している人の 26.3% の人しか電車に対して満足していないが、生活にやや満足している人を合わせると 70.2% もの人が満足していることが分かる。

この 3 つの結果から、生活満足度の高い人は公共交通機関に関して満足している人が多いことが分かった。しかし、その中で特に満足度が高かったのはバスの運行本数満足度だった。そこで、生活満足度を従属変数として、バス満足度、運行本数満足度、電車満足度を独立変数とした重回帰分析を行い、それぞれの独立変数が生活満足度に及ぼす直接効果を見る。そこで、変数を反転させる。

「生活満足度」、「バス満足度」、「電車満足度」は

5.満足 4.やや満足 3.どちらともいけない 2.やや不満 1.不満

「運行本数満足度」は

6.知らない 5.満足 4.やや満足 3.どちらともいけない 2.やや不満 1.不満
とし、値が大きくなるほど、満足度が高くなることを示す。

表4：生活満足度反転を従属変数とする重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.184 **	0.144	
q9a_r 電車満足度反転	0.228 **	0.035	0.212
q9b_r バス満足度反転	0.025	0.037	0.029
q10_r バス運行本数満足度反転	0.111 **	0.034	0.133
調整済み決定係数		0.09 **	
N		1041	

**p<.01, *p<.05

表4の重回帰分析の結果、1%水準で有意な変数は「電車満足度」と「バス運行本数満足度」であり、「バス満足度」は有意ではなかった。このことから、高槻市民の生活満足度に影響を及ぼしているのは「バス満足度」ではなく、「バス運行本数満足度」であるということがわかった。

5. 議論と考察

高槻市民の生活に対する満足度は半数以上だったが、公共交通機関が大きく関わっている。高槻市は京都と大阪の主要都市の間に位置し、高槻市営バスは他の市営バスとは大きく違い、運行本数も多く、黒字経営として知られている。

そして、分析の結果、バスの運行本数満足度が高槻市民の生活満足度に大きく影響していることが分かり、仮説のように、運行本数満足度が高ければ高いほど、生活満足度が高くなるということが分かった。やはり、布目(2013)が言うように、高槻市営バスは他の都市に比べ、運行本数が充実している。その分人件費も他に比べて高くはなるが、利用者も多いためその面に関しては問題がないと言える。運行本数の満足度は生活満足度に影響していたが、バス満足度という市営バス全体の満足度に関しては、あまり関係性がなかった。つまり、バスに対して他の面で満足出来ない所が目立つのだろうか。

そういったことから今回の分析では、高槻市営バスの運行本数満足度のみの調査をしたが、他の項目の満足度も調査し、満足しない点を分析することで高槻市営バスの問題点を挙げられたのではないかと感じ、この点が課題である。

6. 参考文献

- [1] 宇都宮市「宇都宮市における公共交通ネットワークの重点課題と対応の方向性」
http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/dbps_data/_material/_localhost/sougouseisaku/ko-tsuseisaku/senryaku/senryaku3_bessatu.pdf
- [2] 布目ゆきお(2013)「公共交通対策特別委員会の視察より(その3)・・・市営バス維持の高槻市」
<http://www.nunomeyukio.jp/blog/archives/3075>

第9章 大学の地域に対する貢献について

宮本 明実

1. はじめに

本研究では、大学の地域に対する貢献について調査した。大学は教育と研究を本来の使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献の重要性が強調されている。近年では、大学開放や生涯学習などを通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、いわば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっていると考えられる。実際に高槻市民はこうした取り組みについて関西大学が貢献できているのかを確かめたいと思いこれを検証する。

2. 先行研究と仮説

「地域的機能からみた国立大学と大学人」によると、地域交流に関する地域有識者の期待と現状評価を尋ねたアンケート結果では将来について「もっと貢献すべき」という回答の比率と、現状について「おおいに貢献している」という回答の比率が高いことが分かった。関西大学が高槻に2つのキャンパスを持っていて、地域の人に図書館開放や、生涯学習を行っていることから、高槻市民は一般開放や生涯学習によって関西大学が地域に貢献できていると感じている。

以上より今回検討する仮説は次の通りである。

仮説 1:「大学がもっと増えるといいと感じている人ほど関西大学が地域貢献していると感じている。」

仮説 2:「年齢が高くなればなるほど関西大学が地域貢献をしていると感じている。」

3. データ・変数

3.1 データ

用いたデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は、高槻に移住する20歳以上85歳未満の男女を対象に、2013年に実施したものである。計画標本サイズは2,000、有効回収数は1233(回収率は61.65%)である。

3.2 変数

今回使用した変数と回答を以下に表記する。

① Q41. 関西大学は、キャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしていますか。

「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらともいえない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」

- ② Q42.関西大学は、公開授業など生涯学習による地域貢献をしていると思いますか。
「1.そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらともいえない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」
- ③ Q40.高槻市にもっと大学が増えると良いと思いますか。
「1.そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらともいえない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」
- ④ Q65 あなたの年齢をお答えください。
「1. 20代」「2. 30代」「3. 30代」「4. 40代」「5. 50代」「6. 70代以上」

なお、無回答は欠損値処理をした。

4. 分析

高槻市民は、「Q40 大学が増えるといいか」と「Q41 関西大学は一般開放による地域貢献をしているか」との関係と、「Q65 年齢」と「Q41 関西大学は一般開放による地域貢献をしているか」との関係について、クロス表と棒グラフを用いて検討した結果を以下の表で示した。

表1 大学が増えるといいかと関大は一般開放による地域貢献をしているかのクロス表

		q41 関大は一般開放による地域貢献をしているか					合計	
		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない		
q40 大学が増えるといいか	そう思う	度数	30	43	35	17	7	132
		%	22.7%	32.6%	26.5%	12.9%	5.3%	100.0%
	ややそう思う	度数	11	53	65	24	3	156
		%	7.1%	34.0%	41.7%	15.4%	1.9%	100.0%
	どちらともいえない	度数	17	124	276	60	11	488
		%	3.5%	25.4%	56.6%	12.3%	2.3%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	6	43	111	46	14	220
		%	2.7%	19.5%	50.5%	20.9%	6.4%	100.0%
	そう思わない	度数	4	13	60	27	39	143
		%	2.8%	9.1%	42.0%	18.9%	27.3%	100.0%
合計	度数	68	276	547	174	74	1139	
	%	6.0%	24.2%	48.0%	15.3%	6.5%	100.0%	

N=1139 $\chi^2=245.198^{**}$, CramerV=0.232**

**p<.01, *p<.05

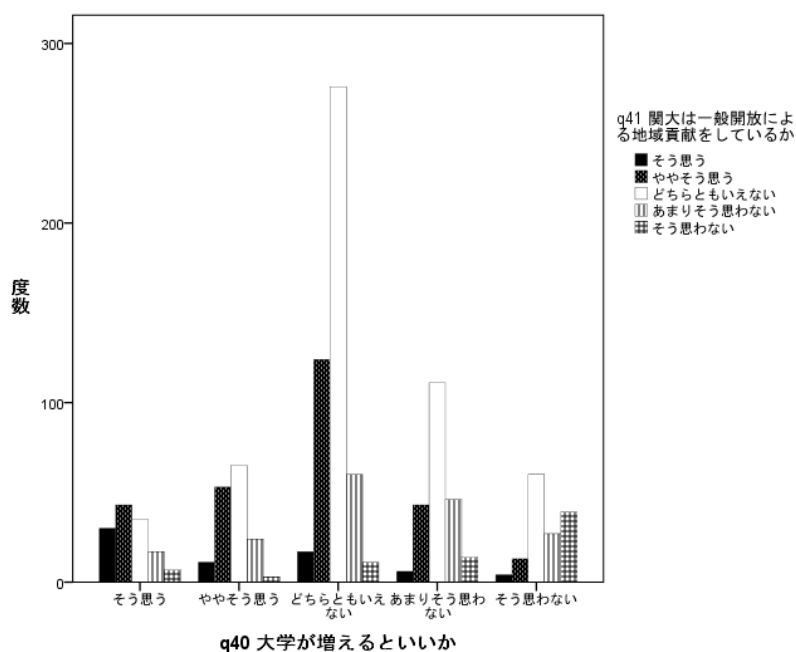


図1 大学が増えるといいかと関大は一般開放による地域貢献をしているかの棒グラフ

「Q41 関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしていると思うか」について「Q40 大学が増えるといいか」という質問と分析した結果、大学が増えるといいと思っている人ほど、関西大学は地域貢献をしていると感じている人が多いことが分かった。しかし、全体的に見ると大学が増えるといいかどうかに関わらず関西大学が地域貢献をしているかについて「どちらともいえない」という回答が多いことが分かった。

表2 年齢と関大は一般開放による地域貢献をしているかのクロス表

		q41 関大は一般開放による地域貢献をしているか					合計
		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
20代	度数	3	11	47	18	5	84
	%	3.6%	13.1%	56.0%	21.4%	6.0%	100.0%
30代	度数	9	35	83	21	19	167
	%	5.4%	21.0%	49.7%	12.6%	11.4%	100.0%
40代	度数	9	54	100	35	7	205
	%	4.4%	26.3%	48.8%	17.1%	3.4%	100.0%
q65 年齢 50代	度数	8	40	77	28	8	161
	%	5.0%	24.8%	47.8%	17.4%	5.0%	100.0%
60代	度数	12	74	129	44	16	275
	%	4.4%	26.9%	46.9%	16.0%	5.8%	100.0%
70代以上	度数	28	57	104	28	16	233
	%	12.0%	24.5%	44.6%	12.0%	6.9%	100.0%
合計	度数	69	271	540	174	71	1125
	%	6.1%	24.1%	48.0%	15.5%	6.3%	100.0%

N=1125 $\chi^2=40.732^{**}$, CramerV=0.095**

**p<.01, *p<.05

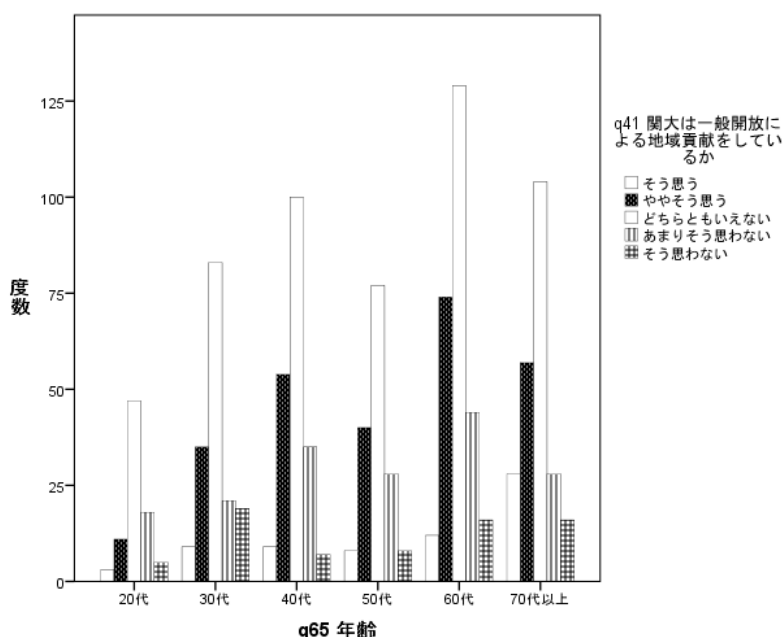


図2 年齢と関大は一般開放による地域貢献をしているかの棒グラフ

「Q41 関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしていると思うか」について「Q65 年齢」別で分析した結果、年齢が高くなれば高くなるほど地域貢献をしていると感じている人が多いことが分かった。しかし、全体的に見ると年齢に関わらず「どちらともいえない」という回答が多いことがこの図をみて分かる。

高槻市民は、「Q40 大学が増えるといいと思っているか」と「Q42 関西大学は公開授業による地域貢献をしているか」との関係と、「Q65 年齢」と「Q42 関西大学は公開授業による地域貢献をしているか」との関係について、クロス表と棒グラフを用いて検討した結果を以下の表で示した。

表3 大学が増えるといいかと関大は公開授業による地域貢献をしているかのクロス表

		q42 関大は公開授業による地域貢献をしているか					合計	
		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない		
q40 大学が増えるといいか	そう思う	度数	16	34	51	22	7	130
		%	12.3%	26.2%	39.2%	16.9%	5.4%	100.0%
	ややそう思う	度数	3	30	87	30	4	154
		%	1.9%	19.5%	56.5%	19.5%	2.6%	100.0%
	どちらともいえない	度数	8	102	293	68	11	482
		%	1.7%	21.2%	60.8%	14.1%	2.3%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	5	28	126	42	17	218
		%	2.3%	12.8%	57.8%	19.3%	7.8%	100.0%
	そう思わない	度数	3	14	62	20	43	142
		%	2.1%	9.9%	43.7%	14.1%	30.3%	100.0%
合計	度数	35	208	619	182	82	1126	
	%	3.1%	18.5%	55.0%	16.2%	7.3%	100.0%	

N=1126 $\chi^2=197.399^{**}$, CramerV=0.209**

**p<.01, *p<.05

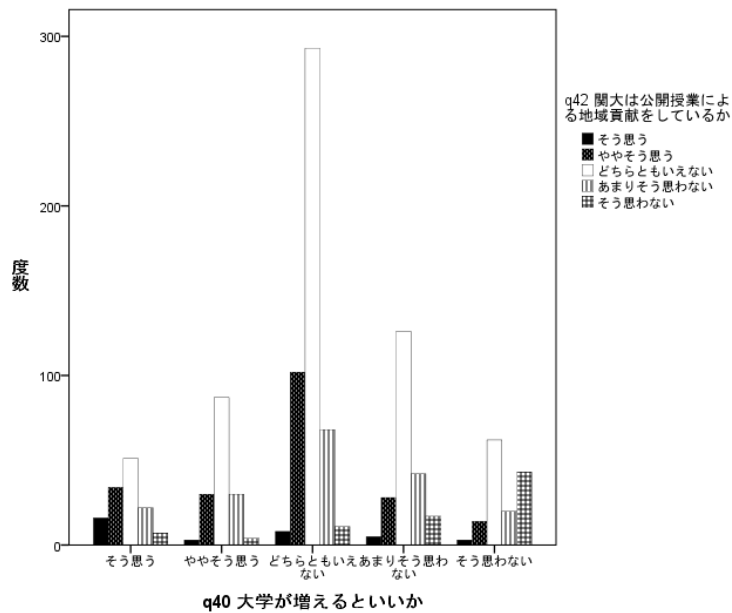


図3 大学が増えるといいかと関大は公開授業による地域貢献をしているかの棒グラフ

「Q42 関西大学は公開授業など生涯学習による地域貢献をしていると思うか」について「Q40 大学が増えるといいか」という質問と分析した結果、大学が増えるといいと思っている人は関西大学が地域貢献をしていると感じていることが分かった。また、大学が増えるといいと思っていない人は関西大学が地域貢献をしていないと感じている人が 30%近くいることがこの図を見て分かる。しかし、全体的にみると大学が増えるといいかどうかに関わらず「どちらともいえない」という回答が多いことが分かった。

表 4 年齢と関大は公開授業による地域貢献をしているかのクロス表

		q42 関大は公開授業による地域貢献をしているか					合計
		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
20代	度数	1	13	47	16	7	84
	%	1.2%	15.5%	56.0%	19.0%	8.3%	100.0%
30代	度数	4	25	101	20	17	167
	%	2.4%	15.0%	60.5%	12.0%	10.2%	100.0%
40代	度数	6	31	121	37	10	205
	%	2.9%	15.1%	59.0%	18.0%	4.9%	100.0%
q65 年齢	50代	5	36	79	28	9	157
	%	3.2%	22.9%	50.3%	17.8%	5.7%	100.0%
60代	度数	6	53	139	51	21	270
	%	2.2%	19.6%	51.5%	18.9%	7.8%	100.0%
70代以上	度数	15	46	124	28	16	229
	%	6.6%	20.1%	54.1%	12.2%	7.0%	100.0%
合計	度数	37	204	611	180	80	1112
	%	3.3%	18.3%	54.9%	16.2%	7.2%	100.0%

N=1112 $\chi^2=28.376$, CramerV=0.080

**p<.01, *p<.05

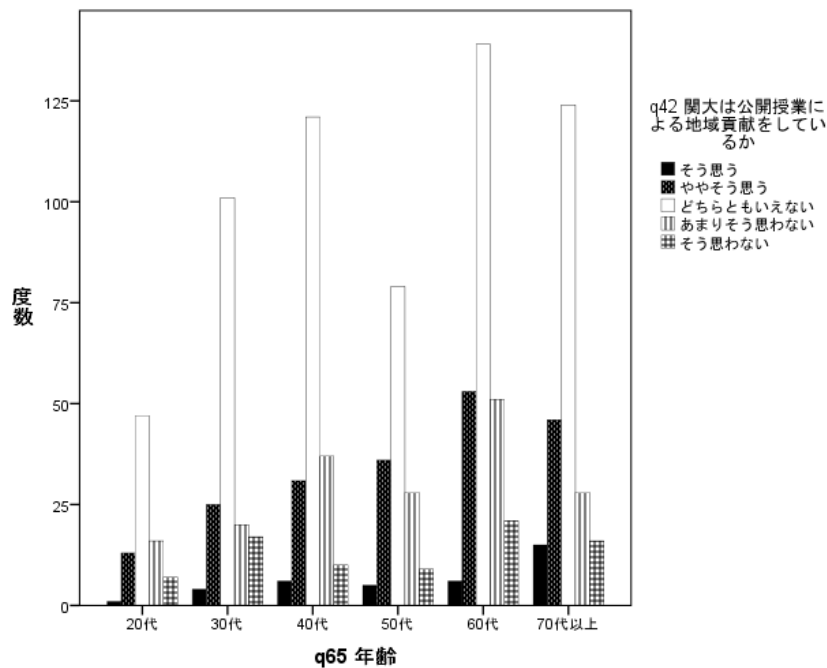


図 4 年齢と関大は公開授業による地域貢献をしているかの棒グラフ

「Q42 関西大学は公開授業など生涯学習による地域貢献をしていると思うか」について「Q65 年齢」別で分析したが、有意性検定の結果、有意でないことがわかった。

5. まとめ

分析から、仮説通り高槻にこれからも大学が増えるといいと感じている人ほど関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献していると感じている人が多いことや、大学が増えるといいと感じている人ほど関西大学は公開授業など生涯学習による地域貢献をしていると感じている人が多いことは分かったが、全体的にどちらともいえないという回答が多すぎたと思う。

また、年齢別にみると、仮説通り年齢が高くなれば高くなるほど関西大学はキャンパス・施設等の一般開放による地域貢献していると感じている人が多いことが分かった。しかし全体的に見て、どちらともいえないという結果が多いことから、関西大学が地域の人に図書館開放や生涯学習を行っていることを高槻市民はあまり知らないと感じた。社会貢献の役割を大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっている今、もっと市民に大学の社会貢献を知ってもらうべきであると同時に大学側もより地域の人に社会貢献をしていかなければならないと考える。

6. 参考文献

- [1] 地域的機能からみた国立大学と大学人
<http://hdl.handle.net/2324/18520>

第 10 章 高槻市の住みやすさとコミュニティ満足度

竹田 友香

1. はじめに

高槻市は京都・大阪のどちらにも便利なベッドタウンとして発展してきた。また高槻市はすみやすい街の上位によく入っている。そこで高槻市のどこに魅力を感じているのか、やはり通勤が便利などところに比重が大きいのかということに興味を持ち、高槻市の住みやすさとコミュニティの満足度の関係性について調べた。

2. 仮説

高槻市のコミュニティに満足しているほど、高槻市に住み続けたいと思っている。

3. データと変数

3.1 データ

分析においては、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査は無作為に抽出した高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女を対象に、2013 年に実施したものである。計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1233 票、回収率は 61.7%であった。詳しくは第一章を参照されたい。

3.2 変数

q3 地域に住み続けたいか、 q9a 電車満足度、 q9b バス満足度、 q9c 医療機関満足度、 a64 性別、 q65 年齢

4. 分析

表1 q3 地域に住み続けたいか

	度数	パーセント
ずっと住み続けたい	300	24.3
住み続けたい	388	31.4
まあ住み続けたい	315	25.5
どちらともいえない	126	10.2
機会があれば引っ越したい	99	8.0
無回答	6	0.5
合計	1228	100.0

表 1 からずっと住み続けたいと答えた人と住み続けたいと答えた人の合計が 55.7%と半

数以上を占めている。しかし機会があれば引っ越したいと考えている人が 8%おり、約 10 人に一人は引っ越したいと考えていることになる。

表2 地域に住み続けたいか と 電車満足度 のクロス表

		電車満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満		
ずっと住み続けたい	度数	201	68	22	5	2	298	
	行%	67.4%	22.8%	7.4%	1.7%	.7%	100.0%	
住み続けたい	度数	204	134	25	17	3	383	
	行%	53.3%	35.0%	6.5%	4.4%	.8%	100.0%	
地域に住み続けたいか	まあ住み続けたい	度数	128	126	31	20	4	309
	行%	41.4%	40.8%	10.0%	6.5%	1.3%	100.0%	
	どちらともいえない	度数	38	42	25	10	8	123
	行%	30.9%	34.1%	20.3%	8.1%	6.5%	100.0%	
	機会があれば引っ越したい	度数	44	21	12	14	6	97
	行%	45.4%	21.6%	12.4%	14.4%	6.2%	100.0%	
合計		度数	615	391	115	66	23	1210

N=1210 $\chi^2=126.445^{**}$, CramerV=0.162**

**p<.01, *p<.05

表 2 からずっと住み続けたいと答えた人で電車に満足と答えた人は 67.4%と高く、やや不満と答えた人は 1.7%、不満と答えた人は 0.7%で、やや不満と不満を合わせても 2.4%にしか達しなかった。ずっと住み続けたいと答えた人ほど電車に満足しており、不満を感じていないことが分かった。どちらともいえないと答えた人の中で満足と答えた人の割合が一番低く、30.9%であった。不満と答えた人も一番多く、6.5%であった。どちらともいえないと答えた人は電車ではそれほど満足していないが他のことに対して満足しているためどちらともいえない、を選択したのではないだろうか。機会があれば引っ越したいと答えた人でも電車に満足と答えた人は 45.4%と半分まではいかなかったが多い傾向にあった。電車に関しては新快速がとまることもあり、引っ越したいと思っている人でも満足している人が多いようだ。

表3 地域に住み続けたいか と バス満足度 のクロス表

		バス満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満		
ずっと住み続けたい	度数	125	83	54	21	11	294	
	行%	42.5%	28.2%	18.4%	7.1%	3.7%	100.0%	
住み続けたい	度数	99	139	76	53	15	382	
	行%	25.9%	36.4%	19.9%	13.9%	3.9%	100.0%	
地域に住み続けたいか	まあ住み続けたい	度数	59	103	73	52	24	311
	行%	19.0%	33.1%	23.5%	16.7%	7.7%	100.0%	
	どちらともいえない	度数	10	35	50	20	10	125
	行%	8.0%	28.0%	40.0%	16.0%	8.0%	100.0%	
	機会があれば引っ越したい	度数	20	20	20	21	14	95
	行%	21.1%	21.1%	21.1%	22.1%	14.7%	100.0%	
合計		度数	313	380	273	167	74	1207

N=1207 $\chi^2=117.542^{**}$, CramerV=0.156**

**p<.01, *p<.05

表3からずっと住み続けたいと思っている人ほどバス満足度が高く、機会があれば引っ越したいと思っている人ほどバス満足度が低くなっている。ずっと住み続けたいと答えた人と住み続けたいと答えた人はバス満足度が満足、やや満足合わせて70%を超えている。ずっと住み続けたいと答えた人はバス満足度がやや不満、不満合わせてようやく10%と低い水準になっている。地域に住み続けたいかについてどちらともいえないと答えた人はバス満足度に対してもどちらともいえないと答えている割合が高く40.0%となった。引っ越したいと答えた人のバス満足度は、満足もやや満足もどちらともいえないが21.1%と同じであった。そのため機会があれば引っ越したいと答えた人に関してはバスの満足度はあまり関係ないように見える。

表4 地域に住み続けたいか と 医療機関満足度 のクロス表

		医療機関満足度					合計	
		どちらともいえない		満足				
		満足	やや満足	いや	やや不満	不満		
地域に住み続けたいか	ずっと住み続けたい	度数	131	110	41	17	1	300
		行%	43.7%	36.7%	13.7%	5.7%	.3%	100.0%
	住み続けたい	度数	111	179	72	18	4	384
		行%	28.9%	46.6%	18.8%	4.7%	1.0%	100.0%
	まあ住み続けたい	度数	56	129	75	40	9	309
		行%	18.1%	41.7%	24.3%	12.9%	2.9%	100.0%
	どちらともいえない	度数	13	42	40	21	6	122
		行%	10.7%	34.4%	32.8%	17.2%	4.9%	100.0%
	機会があれば引っ越したい	度数	21	31	20	18	7	97
		行%	21.6%	32.0%	20.6%	18.6%	7.2%	100.0%
合計	度数	332	491	248	114	27	1212	

N=1212 $\chi^2=135.755^{**}$, CramerV=0.334^{**}

**p<.01, *p<.05

表4からずっと住み続けたいと答えた人ほど医療満足度が高く、機会があれば引っ越したいと答えた人ほど医療満足度が低かった。ずっと住み続けたいと答えた人は医療満足度が満足、やや満足合わせて80%を超えており、満足度が非常に高かった。逆に医療満足度が不満と答えた人は0.3%で1%にも達しないほど低かった。一番医療に満足している人が少なかったのはどちらともいえないと答えた人たちで10.7%あった。満足、やや満足を合わせて50%に達していないのはどちらともいえないと答えた人たちのみであった。

表5 地域に住み続けたいか と 性別 のクロス表

		地域に住み続けたいか					無回答	合計
		ずっと住み続けたい	住み続けた	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい		
男性	度数	125	159	147	57	44	1	533
	行%	23.5%	29.8%	27.6%	10.7%	8.3%	.2%	100.0%
女性	度数	174	223	163	66	53	1	680
	行%	25.6%	32.8%	24.0%	9.7%	7.8%	.1%	100.0%
合計	度数	299	382	310	123	97	2	1213

表 5 から男女で地域に住み続けたいかに差はあまり見られなかった。女性の方がずっと住み続けたいと、住み続けたいと答えた人が多く、逆に男性の方がどちらともいえないと、機会があれば引っ越したいと答えた人が多くなった。全体としてはずっと住み続けたいと、住み続けたいと答えた人で半数以上を占め、満足している人が多かった。

表6 地域に住み続けたいか と 年齢 のクロス表

		地域に住み続けたいか					無回答	合計
		ずっと住み続けたい	住み続けた い	まあ住み続 けたい	どちらとも いえない	機会があれば 引っ越し たい		
20代	度数	9	25	29	12	10	0	85
	行%	10.6%	29.4%	34.1%	14.1%	11.8%	0.0%	100.0%
30代	度数	30	64	47	17	11	0	169
	行%	17.8%	37.9%	27.8%	10.1%	6.5%	0.0%	100.0%
40代	度数	48	66	55	31	14	0	214
	行%	22.4%	30.8%	25.7%	14.5%	6.5%	0.0%	100.0%
50代	度数	34	54	38	21	20	0	167
	行%	20.4%	32.3%	22.8%	12.6%	12.0%	0.0%	100.0%
60代	度数	82	86	74	26	24	0	292
	行%	28.1%	29.5%	25.3%	8.9%	8.2%	0.0%	100.0%
70代以上	度数	94	87	65	15	17	2	280
	行%	33.6%	31.1%	23.2%	5.4%	6.1%	.7%	100.0%
合計	度数	297	382	308	122	96	2	1207

表 6 から年齢が高くなればなるほど地域に住み続けたいと答えた人の割合が高く、年齢が低くなればなるほど機会があれば引っ越したいと答えた人の割合が高くなった。機会があれば引っ越したいと答えた人の割合は 50 代が一番高くなった。

5. 議論と考察

今回の分析で、コミュニティによって高槻市に住み続けたいこととの関連性に差が出るのがわかった。全体としては住み続けたいかについてどちらともいえないと答えた人が、機会があれば引っ越したいと答えた人よりも満足度が低いことがわかった。機会があれば引っ越したいと答えた人でも満足度に関しては、不満よりも満足の方の割合が高くなった。基本的にずっと住み続けたいと答えた人も、引っ越したいと答えた人もコミュニティの満足度は満足の方向に傾いており、引っ越したい理由のひとつとしてコミュニティの満足度をあげられるくらいであろう。

6. 参考文献

[1]suumo

http://suumo.jp/edit/sumi_machi/kansai/

第 11 章 高槻市のイメージ形成要因についての分析

岡本 香帆里

1. はじめに

毎年開催されている様々なイベントは、高槻市民のイメージ形成にどのように関わっているのだろうか。高槻市による調査では、高槻市民は高槻市の交通の便に満足しているという結果が出ているが、交通の便に満足している人は、高槻市に良いイメージを持っているのだろうか。本分析では、交通の便に満足している人とイベント参加者の高槻市に対するイメージを調査すると共に、交通の便とイベントのどちらが高槻市のイメージに関係しているのかを比較する。

2. 先行研究と仮説

2.1 先行研究

「高槻市の地域イメージに関する調査報告書」平成 23 年 12 月

全国各地域を対象に、高槻市及び市内地域資源に関する認知度や地域イメージ等の現状を明らかにすることを目的として実施された調査である。この調査では、高槻市に対して「交通の便がよいまち」というイメージを持っていると回答している高槻市在住者が 71.8%という結果が出ていた。

2.2 仮説

以下の 3 つの仮説を元に分析を進めていく。仮説 3 は、交通機関の方がイベントよりも日常生活で関わることが多いということを考慮した。

仮説 1:「高槻市のイベントに参加している人ほど、高槻市に良いイメージを持っている」

仮説 2:「高槻市の交通の便に満足している人ほど、高槻市に良いイメージを持っている」

仮説 3:「交通の便に満足している人の方が、高槻市のイベントに参加している人よりも、高槻市に対して良いイメージを持っている人が多い」

3. データ・変数

3.1 データ

データは、平成 25 年に高槻市と関西大学総合情報学部の合同で実施した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を利用する。調査は、無作為に選出した高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女 2000 人に対して行われたもので、有効回収数は 1233 人、回収率は 61.7%であった。

3.2 変数

今回使用した変数を以下に表記する。①～③の変数は、重回帰分析を行う際に反転して使用した。また、④～⑧の変数は、重回帰分析を行う際にリコードしてダミー変数として使用した。

- ① Q8.高槻市のイメージ
回答は「1.悪い」「2.やや悪い」「3.どちらともいえない」「4.やや良い」「5.良い」の5段階。
- ② Q9.A 電車満足度
回答は「1.不満」「2.やや不満」「3.どちらともいえない」「4.やや満足」「5.満足」の5段階。
- ③ Q9.B バス満足度
回答は「1.不満」「2.やや不満」「3.どちらともいえない」「4.やや満足」「5.満足」の5段階。
- ④ Q21.A 高槻シティハーフマラソン
回答は参加したことが「ある=1」「ない=0」にリコードし、「高槻シティハーフマラソン参加ダミー」とした。
- ⑤ Q21.B 高槻まつり
回答は参加したことが「ある=1」「ない=0」にリコードし、「高槻まつり参加ダミー」とした。
- ⑥ Q21.C 高槻ジャズストリート
回答は参加したことが「ある=1」「ない=0」にリコードし、「高槻ジャズストリート参加ダミー」とした。
- ⑦ Q21.D 高槻バル
回答は参加したことが「ある=1」「ない=0」にリコードし、「高槻バル参加ダミー」とした。
- ⑧ Q21.E 関西大学の行事
回答は参加したことが「ある=1」「ない=0」にリコードし、「関西大学の行事参加ダミー」とした。

4. 分析

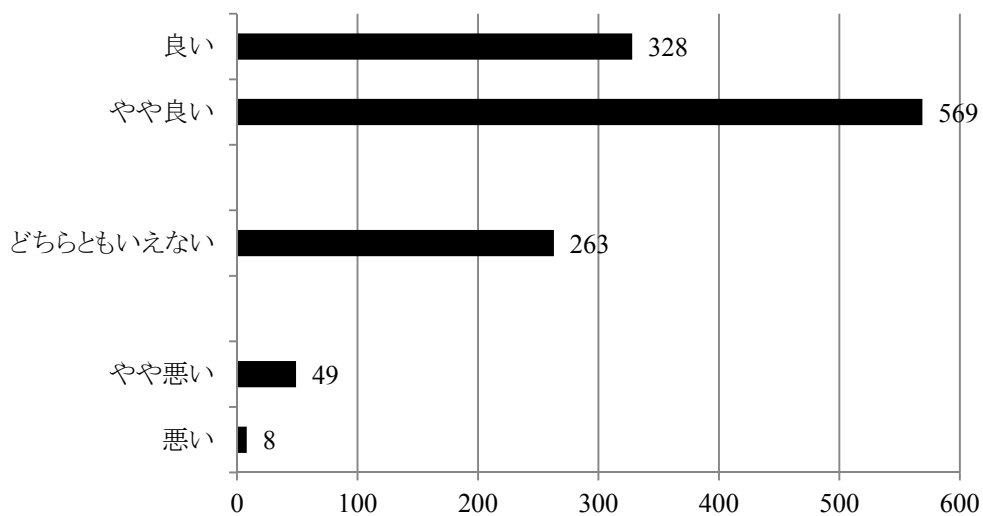


図1 高槻市のイメージ

高槻市に対して、肯定的(良い+やや良い)なイメージを持っている人が 897 人、否定的(悪い+やや悪い)なイメージを持っている人が 57 人で、肯定的イメージを持っている人が否定的イメージを持っている人を大幅に上回っている。

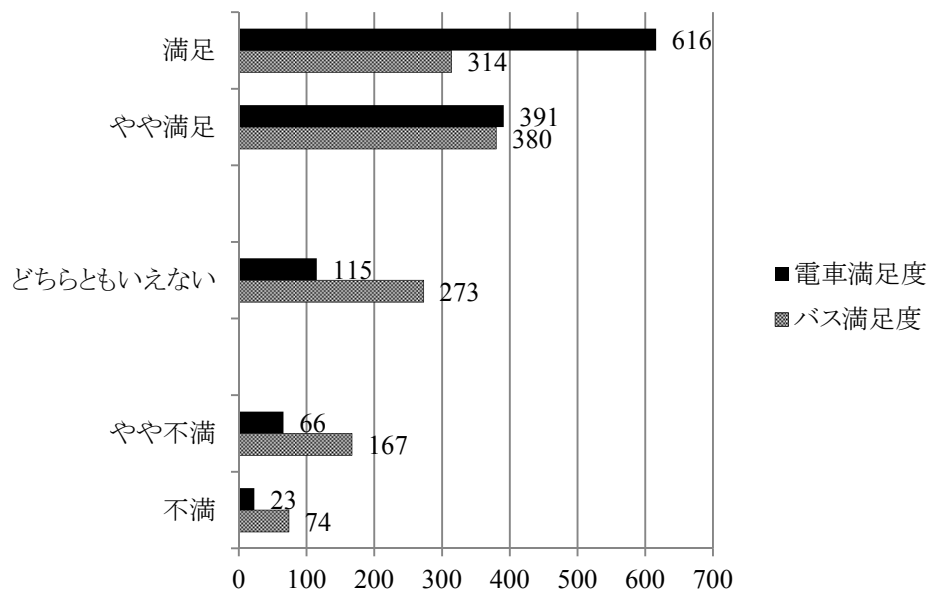


図2 電車・バス満足度の比較

バスに比べて、電車の方が満足している人が多いようだ。電車に比べてバスに不満を持っている人の方が多かった。

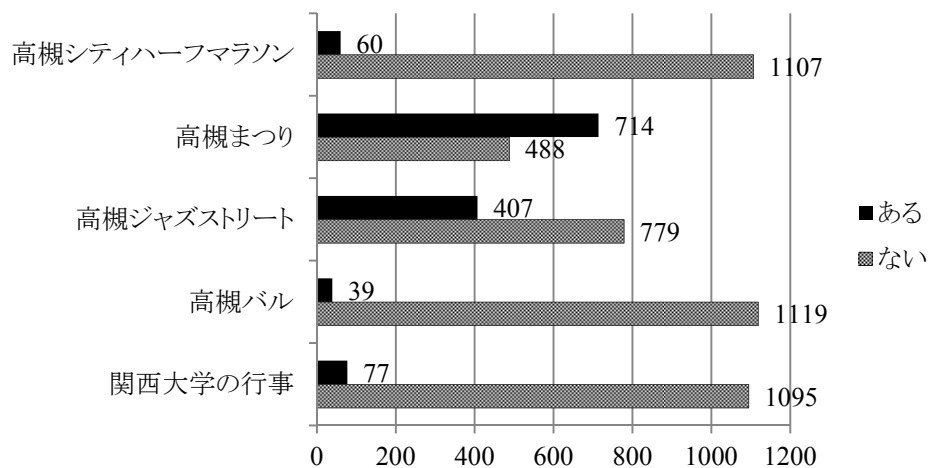


図3 高槻市民のイベント参加者数の比較

この図から、高槻まつりや高槻ジャズストリート以外のイベントには、あまり市民は積極的に参加

していないことが見て取れる。参加者数が不参加者を上回ったのは、高槻まつりだけである。また、一番参加者が少なかったのは高槻バルである。

表 1 高槻市のイメージを従属変数とする重回帰分析

	B	SE	
(定数)	2.598 **	.111	
電車満足度反転	.190 **	.027	.221
バス満足度反転	.130 **	.022	.184
高槻シティハーフマラソン参加ダミー	.260 *	.112	.066
高槻まつり参加ダミー	.103 *	.050	.061
高槻ジャズストリート参加ダミー	.049	.054	.028
高槻バル参加ダミー	-.183	.134	-.039
関西大学の行事参加ダミー	-.053	.096	-.016
調整済み決定係数		0.124 **	
N		1134	

**p<0.01, *p<0.05

Q8.「高槻市のイメージ」を従属変数とし、Q9.A「電車満足度」Q9.B「バス満足度」Q21.A「高槻シティハーフマラソンへの参加」Q21.B「高槻まつりへの参加」Q21.C「高槻ジャズストリートへの参加」Q21.D「高槻バルへの参加」Q21.E「関西大学の行事への参加」を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、Q9.A「電車満足度」Q9.B「バス満足度」が 1%水準で、Q21.A「高槻シティハーフマラソンへの参加」Q21.B「高槻まつりへの参加」が 5%水準で有意となった。これは電車・バスの交通の便に満足している人、高槻シティハーフマラソン・高槻まつりに参加している人ほど高槻市に良いイメージを持っていることを示す。

β 値を比較すると、Q9.A「電車満足度」Q9.B「バス満足度」Q21.A「高槻シティハーフマラソンへの参加」Q21.B「高槻まつりへの参加」Q21.C「高槻ジャズストリートへの参加」の順で、高槻市のイメージ形成に影響していることがわかる。

5. 議論と考察

イベントに関しては高槻シティハーフマラソンと高槻まつりに参加している人ほど、高槻市のイメージが良いという結果になっていた。しかし今回調査対象となった高槻市民の中でイベントに参加したことがある人が少なく、その少ない人数の中での分析になってしまった。この調査をするに当たって、実際にイベント会場に向かい、参加者の中から無作為に調査する方が望ましいと考える。

参加者が多かった高槻まつりから、参加している人ほど高槻市に対するイメージが良いという結果が出ているので、高槻市のイメージを向上させるためにはイベント参加者を増やすことは効果的であると考えられる。参加したことがあるイベントと、参加したことがないイベントの人数にここまで開きがあるのは、知名度はあまり関係ないようだ。高槻市の地域イメージに関する調査を高槻市が行った平成 23 年時点で、調査対象ではなかった高槻バル以外で高槻市在住者は、高槻まつりが 97.1%、高槻ジャズストリートが 87.4%、高槻シティハーフマラソンが 68.9%、関西大学の行事(アイス

アリーナのみ)が 64.1%の人が知っていることと答えていることから、イベントを知っていても参加しない人の方が多いと考えられる。その要因が解決できれば、参加者を増やすことが出来るだろう。

一方、参加者数が少なかった高槻シティハーフマラソンからも、参加している人ほど高槻市に対するイメージが良いという結果が出ていた。このことから、イベントに対する満足度が関係しているのではないかということが考えられる。

交通の便に関しては、日常生活に深く関わっているためなのか 1%水準で有意な結果になった。今回の分析では、仮説 2・仮説 3 は肯定され、仮説 1 は一部でのみ肯定された。

6. 文献

[1] 高槻市,平成 23 年,「高槻市の地域イメージに関する調査報告書」

(<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/9/chiiki.pdf>,平成 26 年 1 月 6 日取得)

第12章 子育てしやすい社会環境に関する分析

中村 佳世

1. はじめに

日本は現在、急速に進行する少子高齢化社会であり、また、時代の変化と共に子育てに関わる環境も変化してきている。津田・野呂(2010)の「地域における子育て支援と保育環境」によると、乳幼児が育つ過程で関わる環境は、歴史・社会的に大きく変貌してきており、それに伴って親や身近な大人たちの生活スタイルも子育て観・子ども観も変貌し、乳幼児の姿・特性に変化が表れてきたと述べている。また、乳幼児の発達において、親や身近な大人・保育者との愛情に満ちた直接的な交流、やがては同年代の仲間との活動は欠かせない条件であるとも述べられている。

今回、高槻市と関西大学との合同アンケート調査の実施により、子育てしやすい社会環境が整っていると高槻市民が感じる要因について調べ、今後の高槻市内、そして全国への子育てしやすい環境の設立を考案する。

2. 先行研究と仮説

2.1 先行研究

先行研究では、子育てとその周りの環境についての研究が盛んに行われている。

井出・伊藤・津田・寺村(2012)「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」によると、子育ては孤独な環境でなされていると述べており、子育てが孤独な環境でなされる状況は、子育てという問題に止まらず、私たちが生活していく場における社会環境の閉塞性、特に人間と人間との関わりあいの問題が横たわっていると考察している。

また、郭(2012)「子育て環境にみる家族の機能と社会的支援」によると、「急用ができて子どもの世話を頼まなければならないとき」に頼りにする人として、もっとも多く挙げられたのは「自分の親」で、有配偶者全体の56.2%を占めていた。「配偶者」と回答した人は、有配偶者全体の49.9%であり、専門家・機関・サービスなどを挙げた回答者は少なく、有配偶者全体で7.7%にとどまった。現代社会では、子育てにおいて、家族・親族ネットワークがまだ重要な役割を果たしていることがわかった。また、現在子育てをしている人たちにとって、支援となっているのは、主に配偶者と妻の親である。近隣の人や専門家・サービスが挙げられる割合は低く、家族関係がうまくいかない場合、あるいは近くに家族が住んでいない場合には、孤独な子育てとなる可能性がかなり高いと述べられている。

また、大豆生田(2013)の「保育の場における子育て支援の課題」において、保育者の金銭的負担が大きな課題の一つとされ、現状のままでは、保育者の金銭的負担は軽減されないだろうと述べられている。そして、保育の場が子育てを地域で支え合う協同的な場とし

て機能することが重要であると考察されている。

谷本都栄・福岡孝純（2013）の「地域における子育て環境」では、子育てのしやすい環境は、老若男女あらゆる人々の生命（明るさ、楽しさ、たくましさ）が輝き出るような、共によりよく生きられる、共生共創が可能な新たな生活文化の創出、そして、健康・環境・教育・芸術・文化・福祉・スポーツ・観光政策等の地域連携と開かれた地域間交流が大切であると述べられていた。

2.2 仮説

子育てしやすい社会環境が整っていると思う人ほど、子どもを育てるための金銭的負担は少ないと感じている。

3. データ・変数

3.1 データ

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査（平成 25 年度市民意識調査）を使用する。

調査母集団は高槻市民、対象者は無作為に選ばれた 20 歳以上の市民 2000 人、有効回収数は 1233 件であり、回収率は 61.7%である。

3.2 変数

この分析で用いた変数は、以下のとおりである。

Q36_t：市の仕事によって、最近よくなってきたと思うもの【子育て支援】（子育て支援ダミー）

「0. 思わない」「1. 思う」の 2 段階のである。

Q49：ひとりの子どもを育てるための金銭的負担の大小 反転

「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. ややそう思う」「4. そう思う」の 4 段階で、値が大きいほど子どもを育てるための金銭的負担が大きいと感じていることを表す。

Q50：子育てしやすい社会環境が整っているか 反転

「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. ややそう思う」「4. そう思う」の 4 段階で、値が大きいほど子育てしやすい社会環境が整っていると感じていることを表す。

Q51：育児における助け合いの有無 反転

「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. ややそう思う」「4. そう思う」の 4 段階で、値が大きいほど育児における助け合いが行われていると感じていることを表す。

Q55：配偶者の育児の取り組みに対する満足度 反転

「1. 不満」「2. やや不満」「3. やや満足」「4. 満足」の 4 段階で、値が大きいほ

ど配偶者の育児の取り組みに満足していることを表す。

Q58：子どもの有無（子ども有ダミー）

「0. 子ども無」「1. 子ども有」の2段階である。

Q62：保育施設・事業の満足度 反転

「0. 何も利用していない」「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」の6段階である。値が大きいほど現在利用している保育施設・事業に満足していることを表す。

Q64：性別（男性ダミー）

「0. 女性」「1. 男性」の2段階である。

Q65：年齢（中央値）

「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」の6段階である。

以下に、用いた変数の度数分布表を載せる。

表1 Q36.t:市の仕事によって、最近よくなってきたと思うもの【子育て支援】の度数分布表

		度数	割合
市の仕事によって、【子育て支援】が良くなってきたと	思う	141	13.3
	思わない	921	86.7
	合計	1,062	100.0

表2 Q49:ひとりの子どもを育てるための金銭的負担の大小(反転)の度数分布表

		度数	割合
ひとりの子どもを育てるための【金銭的負担】が大きいと思いますか	そう思う	366	32.2
	ややそう思う	523	46.1
	あまりそう思わない	219	19.3
	そう思わない	27	2.4
	合計	1,135	100.0

表3 Q50:子育てしやすい社会環境が整っているか(反転)の度数分布表

		度数	割合
【子育てしやすい社会環境】が整っていると思いますか	そう思う	58	5.1
	ややそう思う	565	50.0
	あまりそう思わない	440	38.9
	そう思わない	67	5.9
	合計	1,130	100.0

表4 Q51: 育児における助け合いの有無(反転)の度数分布表

		度数	割合
育児における【助け合い】が よく行われていると思いますか	そう思う	23	2.1
	ややそう思う	174	15.8
	あまりそう思わない	605	55.1
	そう思わない	297	27.0
合計		1,099	100.0

表5 Q55: 配偶者の育児の取り組みに対する満足度(反転)の度数分布表

		度数	割合
【配偶者の育児の取り組み】 に対して、満足ですか	満足	222	31.8
	やや満足	269	38.5
	やや不満	142	20.3
	不満	66	9.4
	合計	699	100.0

表6 Q58: 子どもの有無(子ども有ダミー)の度数分布表

		度数	割合
子供の有無	有り	814	72.8
	無し	304	27.2
	合計	1,118	100.0

表7 Q62: 保育施設・事業の満足度(反転)の度数分布表

		度数	割合
【保育施設・事業】に 満足していますか	満足	23	3.6
	やや満足	78	12.1
	どちらともいえない	119	18.4
	やや不満	41	6.3
	不満	15	2.3
	何も利用していない	370	57.3
	合計	646	100.0

表8 Q64: 性別(男性ダミー)の度数分布表

		度数	割合
性別	男性	534	44.0
	女性	679	56.0
	合計	1,213	100.0

表9 Q65:年齢の度数分布表

	度数	割合	
年齢	20代	85	7.0
	30代	169	14.0
	40代	213	17.6
	50代	168	13.9
	60代	294	24.4
	70代以上	278	23.0
	合計	1,207	100.0

今回の分析では、まず、子育てしやすい社会環境に影響を及ぼしている要因を調べるため、従属変数として「Q50：子育てしやすい社会環境が整っていると思うか 反転」を、独立変数として「Q36_t：市の仕事によって、最近よくなってきたと思うもの【子育て支援】(子育て支援ダミー)」、「Q49：ひとりの子どもを育てるための金銭的負担の大小 反転」、「Q51：育児における助け合いの有無 反転」、「Q55：配偶者の育児の取り組みに対する満足度 反転」、「Q58：子どもの有無(子ども有ダミー)」、「Q62：保育施設・事業の満足度 反転」、「Q64：性別(男性ダミー)」、「Q65：年齢」を投入して重回帰分析を行った。

3. 分析

まず、「Q50. あなたが生活する地域では、子育てしやすい社会環境が整っていると思いますか。」という質問に対する返答の結果が以下のとおりである。

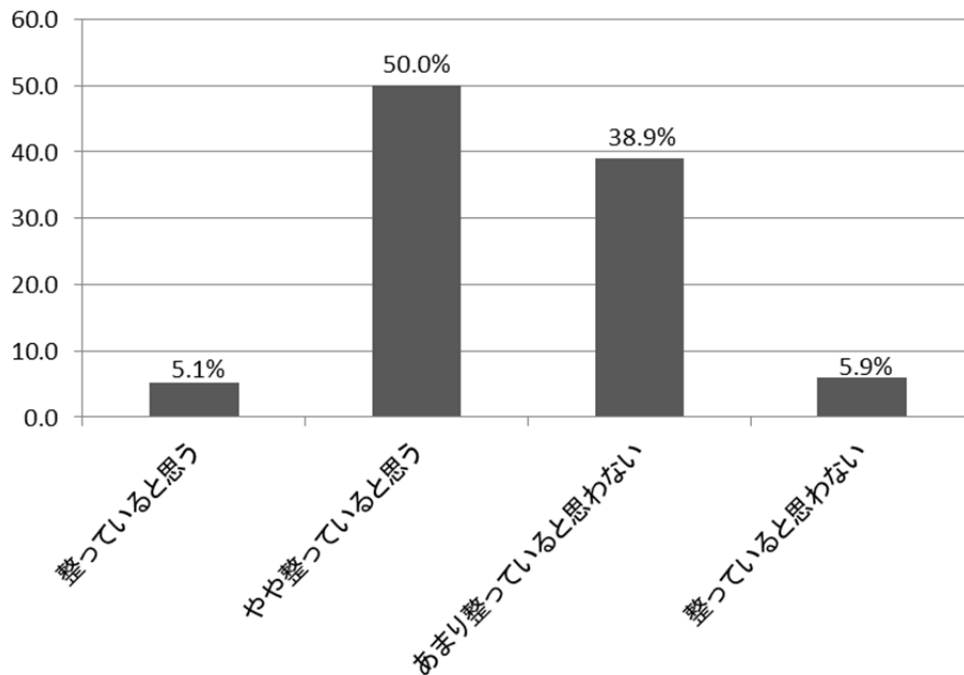


図1 高槻市民の【子育てしやすい社会環境】に対する意識調査 n=1,130

高槻市民は、自分が生活する地域において、子育てしやすい社会環境がどちらかという
と整っていると思っている人の割合は 58.9%であり、どちらかというと思っていない人の割合は 41.1%であった。

高槻市民は、子育てしやすい社会環境がどちらかというと思っている人の方が
多いことがわかった。

次に、仮説の「子育てしやすい社会環境が整っていると思う人ほど、子どもを育てるた
めの金銭的負担は少ないと感じている。」を検証するため、また、高槻市民が子育てしやす
い社会環境が整っていると思う要因は何かを探るために重回帰分析を行った。結果は以下
のとおりである。

表10 子育てしやすい社会環境が整っているかを従属変数とする重回帰分析

	B	標準誤差(SE)	ベータ(β)
(定数)	0.540**	0.129	
市の仕事で良くなってきたもの 【子育て支援】(子育て支援ダミー)	0.216*	0.107	0.048
子供を育てるための 金銭的負担の大小<反転>	0.349**	0.025	0.369
地域での育児における 助け合いの有無<反転>	0.349**	0.024	0.391
配偶者の育児の取り組み 満足度<反転>	0.017	0.014	0.038
子どもの有無 (子ども有ダミー)	-0.188	0.111	-0.058
保育施設・事業満足度<反転>	0.013	0.020	0.021
性別(男性ダミー)	0.042	0.070	0.014
年齢	0.079**	0.026	0.086
調整済み決定係数		0.462**	
N		1,097	

** p<.01, * p<.05

この重回帰分析では、自由度調整済み決定係数 (R²) が 0.426 であることより、従属変
数である「Q50：子育てしやすい社会環境が整っていると思うか」のうち 42.6%が、投入し
た独立変数で説明されていることがわかった。また、分散分析で F 検定を行うと、有意確
率が 1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団におい
ても「Q50：子育てしやすい社会環境が整っていると思うか」の予測に役立つモデルであるこ

とがわかる。

重回帰分析結果（表 10）より、5%水準で有意な変数は「Q36_t：市の仕事によって、最近よくなってきたと思うもの【子育て支援】」、「Q49：ひとりの子どもを育てるための金銭的負担の大小」、「Q51：育児における助け合いの有無」、「Q65：年齢」である。したがって、これらは「子育てしやすい社会環境が整っていると思う」意識に影響を及ぼしている。逆に、「Q55：配偶者の育児の取り組みに対する満足度」、「Q58：子どもの有無」、「Q62：保育施設・事業の満足度」、「Q64：性別」は、「子育てしやすい社会環境が整っていると思う」意識に影響を及ぼしていないことがわかった。

また、すべての変数を標準特点化して単位をそろえたうえで各独立変数の従属変数に対する相対的な影響力を示す標準化係数 B と、単位の違いを解消し各独立変数が従属変数に与える影響量を比較することができる（ベータ）の値を見ると、「Q51：育児における助け合いの有無」が 0.391 で最も値が大きいので、育児における助け合いがよく行われていることが、「子育てしやすい社会環境が整っていると思う」意識に、最も影響を与えていることがわかった。すなわち、「育児における助け合い」がよく行われていると感じている人ほど、「子育てしやすい社会環境が整っている」と考えている。ちなみに、次に「子育てしやすい社会環境が整っていると思う」意識に影響を与えているのは、（ベータ）の値が 0.369 で 2 番目に大きい「Q49：ひとりの子どもを育てるための金銭的負担の大小」であった。

5. 議論と考察

高槻市民が、自分の地域において子育てしやすい社会環境が整っていると感じる要因は、「高槻市が子育て支援してくれること」、「子どもを育てるための金銭的負担が少ないこと」、「地域において、育児の助け合いが行われていること」であった。仮説では、子育てしやすい社会環境が整っていると思う人ほど、子どもを育てるための金銭的負担は少ないと考えていたが、高槻市の人々にとって、金銭的負担が少ないことは子育てしやすい社会環境が整っていると感じる要因の一つに過ぎなかった。

また、「配偶者の育児の取り組み」、「保育施設・事業」に関しては、「子育てしやすい社会環境が整っていると思う」意識に影響を及ぼしていないことから、今後、改善の余地はあると思った。

高度情報化社会のなかで、今こそ子どもに相応しい環境とはどうあるべきかについて真剣に考えていかなければならない。温室の促成栽培ではなく、自然にさらされた露地栽培のような環境、子どもの野生を引き出し、健全な心身の育成につながるゆたかな環境を創り出していくことが今後必要である。

6. 文献

[1] 井出良徳・伊藤篤・津田英二・寺村ゆかの（2012）「子育て支援を契機とした共生のま

- ちづくり」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』5(2)巻 173 頁～185 頁
- [2] 大豆生田啓友(2013)「保育の場における子育て支援の課題」『保育学研究紀要』51(1)巻 134～142 頁
- [3] 郭莉莉(2012)「子育て環境にみる家族の機能と社会的支援」『北海道大学大学院文学研究科紀要』12 巻 391 頁～412 頁
- [4] 谷本都栄・福岡孝純(2013)「地域における子育て環境」『法政大学スポーツ健康学部紀要』30 巻 59 頁～67
- [5] 津田千鶴・野呂アイ(2010)「地域における子育て支援と保育環境」『保育学研究紀要』48(2)巻 245 頁～254 頁

第 13 章 子育ての環境についての分析

高宮 智仁

1. はじめに

現在、日本の人口は減少しつつある。厚生労働省の「人口動態統計月報年計（概数）の概況」のデータによると平成 24 年の合計特殊出生率は 1.41(概数値)と前年に対して 00.2%ほど上昇しているが、出生率は 8.2%であり前年より 0.1%減少している。少子化の原因は未婚化、無産化などがあげられる。その背景の中に経済的な理由が一例としてあげられている。子供を育てるための費用を得るには共働きする必要もあるが共働きになると時間に余裕がなくなる。また親も子育てに十分な時間が必要になり出産を控えてしまう。また文献では「男女ともに家庭生活と職業生活の調和をはかる新しいシステムはまだ形成されていない」(著 佐藤龍三郎)と書かれており家庭と仕事の両立をすることが難しい。子供を育てるには環境を整える必要がある。そこで子供を育てる環境とはどのようなものが必要であるかを分析することにする。

2. 先行研究と仮説

1 節で述べたように子どもを育てる環境とはどのようなものが必要であるか、経済的理由がどれほど子育てに影響しているのかを分析する。また家庭と職業生活の両立を調べるために時間にゆとりを感じているかどうかを分析する。他に地域での子育てを助け合うような環境であるかどうかも分析する。仮説は以下の通りである。

仮説 1. 時間にゆとりがあれば子育てできる環境である。

仮説 2. 収入が良いほど、子育てできる環境である。

仮説 3. 居住地域が良いほど、子育てできる環境である。

3. データ・変数

3.1 データ

用いたデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は高槻に居住する 20 歳以上の男女を対象に、2013 年に実際したものである。計画標本サイズは 2,000、有効回収数 1233 (回収率は 61.7%である。)

3.2 変数

使用する変数と選択肢は以下の通りである。

- ・ Q2 居住地域の暮らしやすさ

「1.非常に悪い」「2.やや悪い」「3.どちらともいえない」「4.まあよい」「5.非常によい。」

・ Q45 時間的ゆとりを感じているか

「1.よく感じる」「2.やや感じる」「3.どちらともいえない」「4.あまり感じない」「5.全く感じない」

・ Q49 子供を育てる金銭的負担が大きいか

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

・ Q50 子育ての環境整備

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

・ Q51 地域における育児の助け合いが行われているか

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」

尚、上記の Q2、Q45、Q49、Q50、Q51 は反転処理を行っている。

・ Q64 性別

「1.男性」「2.女性」

ここで「男性=1、女性=0」としたダミー変数「男性ダミー」を作成した。

・ Q65 年齢（中央値）

「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」

・ Q74 収入（中央値）

「1.100万円未満」_ⓧ、「2.100万円～200万円未満」_ⓧ、「3.200万円～400万円未満」_ⓧ、「4.400万円～600万円未満」_ⓧ、「5.600万円～800万円未満」_ⓧ、「6.800万円～1000万円未満」_ⓧ、「7.1000万円～1500万円未満」_ⓧ、「8.1500万円以上」

4 分析

まず家庭と職業生活の両立を調べるために時間にゆとりを感じているかどうかを分析するために収入と時間のゆとりを感じているかのクロス表でカイ二乗検定を行い、q45 時間的ゆとりを感じるかと収入（中央値）との関連性をみる。

		年収								合計	
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上		
q45 時間的ゆとりを感じるか	よく感じる	度数	3	13	38	17	8	3	5	2	89
		調整済み残差(%)	3.40%	14.60%	42.70%	19.10%	9.00%	3.40%	5.60%	2.20%	100.00%
	やや感じる	度数	21	29	116	72	35	21	18	4	316
		調整済み残差(%)	6.60%	9.20%	36.70%	22.80%	11.10%	6.60%	5.70%	1.30%	100.00%
	どちらともいえない	度数	17	23	55	43	24	15	9	6	192
		調整済み残差(%)	8.90%	12.00%	28.60%	22.40%	12.50%	7.80%	4.70%	3.10%	100.00%
	あまり感じない	度数	15	24	75	69	59	37	27	11	317
		調整済み残差(%)	4.70%	7.60%	23.70%	21.80%	18.60%	11.70%	8.50%	3.50%	100.00%
	まったく感じない	度数	2	6	24	7	14	7	6	1	67
		調整済み残差(%)	3.00%	9.00%	35.80%	10.40%	20.90%	10.40%	9.00%	1.50%	100.00%
	合計	度数	58	95	308	208	140	83	65	24	981
		調整済み残差(%)	5.90%	9.70%	31.40%	21.20%	14.30%	8.50%	6.60%	2.40%	100.00%

$$X^2 = 54.993^{**} \text{ (df = 28 , p < 0.05)}$$

$$\text{CramerV} = 0.118^{**}$$

表 1 より 二乗検定結果の有意確率が 0.002 で $p < 0.01$ なので 1%水準で有意である。時間

的ゆとりを「よく感じる」を占める割合が低く、同様に「全く感じない」を占める割合も低い。又、時間的ゆとりを感じる人と感じない人の割合はほぼ半分ずつに分かれている。収入が多い人ほど時間のゆとりを感じる人が少ない傾向がある事がわかる。

同じく「q50 子育てしやすい社会環境が整っているか」と「q51 地域における育児の助け合いが行われているか」とのクロス表でカイ二乗検定を行い、地域における育児の助け合いと子育て環境が整っているかの関連性をみる。

表 2 q50 子育てしやすい社会環境が整っているか と q51 地域における育児の助け合いが行われているか のクロス表

		q51 地域における育児の助け合いが行われているか				合計	
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない		
q50 子育てしやすい社会環境が整っているか	そう思う	度数	8	13	23	11	55
		調整済み残差(%)	14.50%	23.60%	41.80%	20.00%	100.00%
	ややそう思う	度数	11	119	300	111	541
		調整済み残差(%)	2.00%	22.00%	55.50%	20.50%	100.00%
	あまりそう思わない	度数	4	39	259	127	429
		調整済み残差(%)	0.90%	9.10%	60.40%	29.60%	100.00%
	そう思わない	度数	0	2	20	45	67
		調整済み残差(%)	0.00%	3.00%	29.90%	67.20%	100.00%
合計	度数	23	173	602	294	1092	
	調整済み残差(%)	2.10%	15.80%	55.10%	26.90%	100.00%	

$$X^2 = 141.364^{**} \text{ (df = 9 , p < 0.01), CramerV} = 0.208^{**}$$

表 2 より有意確率が $p < 0.01$ であり 1%水準で有意である。地域における育児の助け合いは行われていると感じている人数の割合が少なく、子育てしやすい社会環境が整っているかどうかに関わらずあまり助け合いをしていると思っている人は少ない傾向が見られた。

最後に重回帰分析で従属変数を q50「子育ての環境整備」として、q2「住居地域の暮らしやすさ」、q45「時間的ゆとり」、q49「子供を育てる金銭的負担が大きいのか」、q65「年齢」、q74「年収」を説明変数として重回帰分析をした。

調整済み決定係数は0.137である。これは、従属変数である「子育ての環境整備」のうち13.7%が投入した独立変数で説明されていることを示している。分散分析F検定を行うと有意確率が1%水準で有意である。つまり母集団においても「子育てしやすい社会環境が整っているか」の予測に役立つモデルであると言える。q2「住居地域の暮らしやすさ」、q45「時間的ゆとり」、q49「子供を育てる金銭的負担が大きいのか」、q51「地域における育児の助け合いが行われているか」においては有意確率が $p < 0.001$ となり1%水準で有意である。その中で標準化係数()を見てみると最も値が大きいのは「地域における育児の助け合いが行われているかどうか」($\beta = 0.244$)である。よって「子育ての環境整備が整っていると思うか」に最も影響があるのは「地域における育児の助け合いが行われているかどうか」である。

表3 子育てしやすい社会環境が整っているかの重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.000 **	.155	
q2_r 居住地域の暮らしやすさ 反転	.074 **	.022	.113
q45_r 時間的ゆとりを感じる か反転	.090 **	.022	.149
q49_r 子供を育てる金銭的負 担が大きい反転	-.136 **	.028	-.153
q51_r 地域における育児の助 け合いが行われているか反転	.233 **	.030	.244
男性ダミー	.037	.043	.027
年齢	-.001	.002	-.023
年収	2.229E-05	.000	.012
調整済み決定係数		0.137 **	
N		901	

** p < .01

5. 議論と考察

分析結果より時間にゆとりを感じている人ほど、あるいは居住地域が暮らしやすいほど子育てをしやすい環境が整っているという結果が導き出され「仮説 1. 時間にゆとりがあれば子育てできる環境である。」「仮説 3. 居住地域が良いほど、子育てできる環境である。」の仮説は成り立った。地域における助け合いが行われている地域ほど子育てしやすい環境が整っている傾向があることが分かった。しかし実際は地域における子育ての助け合いが行われていると思っている人は多くはない。「仮説 2. 収入が良いほど、子育てできる環境である。」は重回帰分析の結果、収入は子育ての環境整備が整っていることについて直結できなかった。理由としては給与の高い人ほど時間にゆとりが無いことから収入が多く経済的に余裕があっても職業で追われて、自分の時間を十分に確保できていないことが考えられる。よって仮説 2 は棄却された。

6. 文献・参考資料

- [1] 「人口動態統計月報年計（概数）の概況」, (平成 24 年), 厚生労働省
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai12/>)
- [2] 日本の「超少子化」—その原因と政策対応をめぐって—, 佐藤龍三郎, (人口問題研究 (J.ofPopulationProblems) 64 - 2 (2008.6) pp.10 ~ 24)

第 14 章 子育てしやすい社会環境についての研究

木村 イチン

1. はじめに

我が国では近代以降、子育ては主として母親が担い、母親の個人的労働として定着してきたが、女性のライフコースの多様化や子育てを取り巻く環境の変化により、母親の子育てに対する負担感は一層増大してきている。子育てがかつてなく困難になっている現状に対して、子育てを社会的に支援するシステムの整備が求められている。政府は、1990年代から顕著になり始めた少子化に歯止め、エンゼルプランを策定し(1994年)、働く母親に対する両立支援として保育施設を主に推進してきた。しかし一層の少子化の進行に対処するために、政府は支援の対象を子供を育てているすべての女性に拡大し、2003年、次世代育成支援対策推進法および改正児童福祉法を策定した。現在、子育て支援策は、従来の両立支援に加え、地域における子育て支援を新たなテーマとして自治体政策の中で推進されようとしている。

本研究は、このような状況に対し、これまでほとんど議論が行われてこなかった地域計画の視点から子育て支援を捉え、高槻における安心して子育てができる地域環境づくりの整備課題を整理することを目的とするものである。

2. 先行研究と仮説

岸川ほか(2009)「C市における子育て環境の事態～育児困難、育児支援についての質問紙調査～」によると1歳6ヶ月児の母親で、子育て中に必要と思われる支援については、『医療体制の充実』、『遊び場・交流の場の充実』、『保育・相談機関の充実』などが上位を占めていたことが分かっている。また、1) 地域の人々の間で信頼関係を醸成すること、2) 異世代間の積極的な交流を促進すること、3) 地域で支え合う生活思想を共有することなどが重要な課題であることが分かった。大垣ら(2011)「子育ての苦労意識に影響を与える要因～札幌市・釧路市・釧路町におけるアンケート調査の分析～」によると子育てを若い母親にだけ押し付けるのではなく、子育て(支援)コミュニティを形成することが目標であると示している。

上記の内容より、私は今回の調査結果から子育て関連における高槻市の状況を6つ仮説に基づき分析を行い、分析結果から考察を行った。

- ① 「子育てしやすい社会環境」は「地域における育児の助け合い」と関係している。
- ② 「子育てしやすい社会環境」は「育児は母親の役割」という考えの人の人数と関係している。
- ③ 「子育てしやすい社会環境」は「配偶者の取り組み」と関係している。
- ④ 「子育てしやすい社会環境」は「子供の人数」と関係している。
- ⑤ 「子育てしやすい社会環境」は「末子の年齢」と関係している。
- ⑥ 「子育てしやすい社会環境」の「保育施設に対する満足度」と関係している。

3. データ・変数

3.1 データ

分析においては、2013 年に実施された「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。平成 25 年度調査:調査対象者は 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000、有効回収数 1233 票、回収率は 61.7%であった。

3.2 変数

変数として用いたのは全体で 8 つである。

【従属変数】

q50.子育てしやすい社会環境反転

値が大きいほど、子育てしやすい社会環境が整えていると思っている人が多い傾向を示すように操作している。

【独立変数】

q51.地域における育児の助け合い反転

値が大きいほど、生活する地域では育児の助け合うことが多い傾向を示すように操作している。

q52.育児は母親の役割反転

値が大きいほど、育児は母親の役割という考えの人が多い傾向を示すように操作している。

q54.配偶者の家事の取り組み反転

値が大きいほど、配偶者の家事の取り組みに対する満足している人が多い傾向を示すように操作している。

q55.配偶者の育児の取り組み反転

値が大きいほど、配偶者の育児の取り組みに対する満足している人が多い傾向を示すように操作している。

q58.子供の人数

q60.末子の年齢

q62.現在利用している保育施設の満足度反転

値が大きいほど、現在利用している保育施設の満足している人が多い傾向を示すように操作している。

4. 分析

調査で「子育てしやすい社会環境」に関する原因を解明することを重回帰分析の目的とする。「子育てしやすい社会環境」を従属変数で、この原因と考えられる複数の変数は「地域における育児の助け合い」、「育児は母親の役割」、「配偶者の家事の取り組み」、「配偶者の育児の取り組み」、「子供の人数」、「末子の年齢」、「保育施設の満足度」と考え、独立変数にした。

表1 子育てしやすい社会環境の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
(定数)	1.595	.180	
q51 地域における育児の助け合い反転	.217**	.040	.229
q52 育児は母親の役割反転	.018	.032	.023
q54 配偶者の家事の取り組み反転	.004	.046	.006
q55 配偶者の育児の取り組み反転	.110*	.048	.151
q58 子供の人数	-.041	.040	-.042
q60 末子の年齢	.035	.022	.076
q62 保育施設の満足度の反転	.039*	.019	.100
調整済み決定係数		0.088**	
N		534	

** $p < .01$, * $p < .05$

表1では、調整済み決定係数(R^2)は0.088である。これは、従属変数である「子育てしやすい社会環境」のうち8.8%が、投入した独立変数で説明されていることを示している。

分散分析でF検定を行うと、有意確率が0.000となり1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「子育てしやすい社会環境」の予測に役立つモデルであることが分かる。

子育てしやすい社会環境と地域における育児の助け合い反転の有意確率は1%水準で有意であるので、地域における育児の助け合いが多いと思っているほど、子育てしやすい社会環境だと考えていることが分かる。

子育てしやすい社会環境と配偶者の育児の取り組み反転の有意確率は5%水準で有意であるので、配偶者の育児の取り組みに満足しているほど、子育てしやすい社会環境だと考えていることが分かる。

子育てしやすい社会環境と保育施設の満足度の反転の有意確率は5%水準で有意であるので、保育施設の満足度が高いほど、子育てしやすい社会環境だと考えていることが分かる。

有意確率が1%および5%水準で有意であるのは「地域における育児の助け合い」($B=0.217$)、「配偶者の育児の取り組み」($B=0.110$)、「保育施設の満足度」($B=0.039$)という結果が出た。

β 値を見ると、「地域における育児の助け合い」($\beta=0.229$)、「配偶者の育児の取り組み」($\beta=$

0.151)・「保育施設の満足度」($\beta=0.100$)である。つまり、子育てしやすい社会環境だと思ふ意識に最も大きい影響を与えているのは「地域における育児の助け合い」であることが分かった。

結論として、仮説

- ① 「子育てしやすい社会環境」は「地域における育児の助け合い」と関係している。
 - ③ 「子育てしやすい社会環境」は「配偶者の取り組み」と関係している。
 - ⑥ 「子育てしやすい社会環境」の「保育施設に対する満足度」と関係している。
- は肯定された。

5. まとめ

先行研究で述べられた内容が高槻市でも証明された。今回の研究で高槻市の子育て環境について、結論が出た。「地域における育児の助け合い」があればあるほど、子育てしやすい社会環境になる。「配偶者の育児の取り組み」があればあるほど、子育てしやすい社会環境になる。「保育施設の満足度」があればあるほど、子育てしやすい社会環境になる。それは高槻市の現状であり、高槻市で子育てしようと考えている人にはアピールポイントとして使えるのではないかと考えられる。

6. 参考文献

- [1] 大谷由紀(2005)「都市における乳幼児の子育てを支える居住地域環境整備に関する研究」(<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/bitstream/10935/1233/1/AN10140874vol22pp35-40.pdf>, 2013年12月17日).
- [2] 大垣ら(2011)「子育ての苦労意識に影響を与える要因～札幌市・釧路市・釧路町におけるアンケート調査の分析～」(http://ci.nii.ac.jp/els/110008752404.pdf?id=ART0009827357&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1389086383&cp=, 2013年12月17日).
- [3] 岸川ほか(2009)「C市における子育て環境の事態～育児困難、育児支援についての質問紙調査～」(http://ci.nii.ac.jp/els/110008801676.pdf?id=ART0009851462&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1389086277&cp=, 2013年12月17日).

第 15 章 子どもの人数と生活

勝又 隆行

1. はじめに

WTO 世界統計によれば、2012 年時点での日本の合計得出生率(1 人の女性が生涯で産む子供の数の割合)は 1.4 と世界で 175 位に位置している。2011 年では 1.3 であり、近年回復傾向にある数値だが、世界的に見てもまだまだ低い水準にある。合計特殊出生率の推移を見ると、2005 年の 1.26 を底としそれ以降は上昇傾向にあり、特に、近年の傾向に関しては日本の景気回復による上昇が一つの要因として見られている。一方で、最近の家庭では共働きの世帯が増加しているように感じる。現に、厚生労働省による共働き世帯数の推移によれば、2002 年には 951 万世帯が共働きであったのに対し、2012 年には 1068 万世帯と 100 世帯以上も増加したというデータもあり、着実に共働きの家庭が増加していることが見て取れる。

以上のデータから、世帯における子どもの人数は親世代の労働環境や子どもを育てるための金銭的負担に原因があるのではないかと考え、子どもの人数と労働環境について調査をするに至った。

2. 仮説

結婚と出産に関する全国調査によると、末子年齢にかかわらず、パート・アルバイトで働く女性が増加している。また、予定子ども数が理想子ども数を下回る理由として、「子育てや養育にお金がかかりすぎる」が最多であり、特に 30 代以下の若い世代においては 83.3%もの家庭が、金銭的な負担を感じているようである。

そのため、仮説として

①子どもの人数が多いほど金銭的負担は大きいと考える。

②子どもの人数が多いほど、親が労働に力を入れる。

の 2 点を取り上げて考察していく。

3. データ・変数

3.1 データ

本研究においては、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」によって得られたデータを用いる。調査は 2013 年に実施したもので、高槻市に住む 20 歳以上の男女の母集団からサンプルを無作為に選出した。計画標本サイズは 2,000 人、有効回収数は 1,233 件で回収率は 61.7%である。詳しくは第 1 章を参照されたい。

3.2 変数

変数については以下の質問項目と回答を使用した。回答項目に編集を加えたものは特筆する。

「Q36-②. 市の仕事のうち、あなたが今後力を入れてほしいものを選んでください。」

この質問に対して、「t. 子育て支援」のみに回答を絞って分析する。

→この質問について、子育て支援を回答したかどうかを「子育て支援に力を入れてほしい」とタイトルを改訂し、次の図にまとめた。

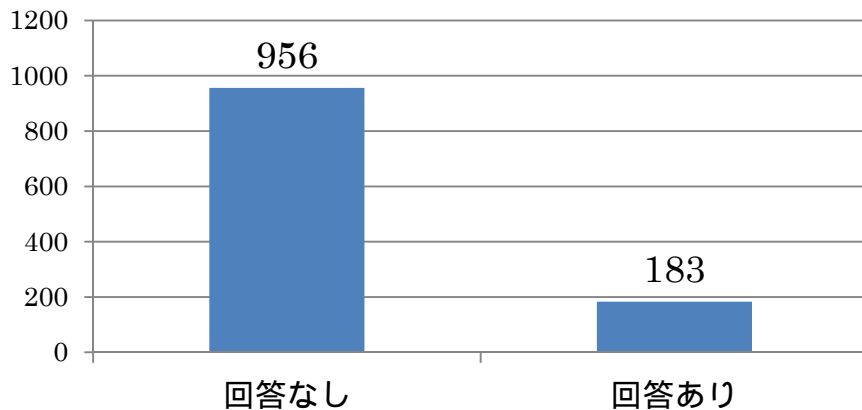


図1. 子育て支援に力を入れてほしい N=1,193

「Q48. 『夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである』という考え方に対して、どのように思いますか。」

1: 反対、 2: どちらかといえば反対、 3: どちらかといえば賛成、 4: 賛成

「Q49. あなたが生活する地域では、一般的に、一人の子どもを育てるための金銭的負担は大きいと思いますか。」

1: そう思わない、 2: あまりそう思わない、 3: ややそう思う、 4: そう思う

「Q58. 現在、何人のお子さまがおられますか。」

0: 0人、 1: 1人、 2: 2人、 3: 3人、 4: 4人、 5: 5人以上

「Q66. あなたの現在の職業はどれにあたりますか。」

1: 常時雇用の勤め人

2: 臨時雇用、パート、アルバイト

3: 自営業主

4: 自営業の家族従業者

5: 経営者、役員

6: 家事専業

7: 学生

8: 無職

9: その他

「Q68. あなたは、平均すると週に何日間、収入を得られる仕事をしていますか。」

0: 0日、 1: 1日、 2: 2日、 3: 3日、 4: 4日、 5: 5日、 6: 6日、 7: 7日

4. 分析

4.1 金銭的負担と子どもの人数

この仮説については、「子どもの人数」、「金銭的負担が大きいか」、「子育て支援に力を入れてほしい」の変数を用いて、養育費などの金銭面から子どもの数についてのクロス表分析を行う。

		金銭的負担は大きいと思うか				合計
		あまりそう思			そう思う	
		そう思わない	わない	ややそう思う		
子どもの人数	0人	9 3.1%	62 21.2%	143 49.0%	78 26.7%	292 100.0%
	1人	1 .5%	34 17.4%	97 49.7%	63 32.3%	195 100.0%
	2人	11 2.5%	88 19.8%	189 42.6%	156 35.1%	444 100.0%
	3人	1 .8%	22 16.7%	63 47.7%	46 34.8%	132 100.0%
	4人	0 0.0%	2 20.0%	3 30.0%	5 50.0%	10 100.0%
	5人以上	1 25.0%	1 25.0%	1 25.0%	1 25.0%	4 100.0%
	合計	23 2.1%	209 19.4%	496 46.1%	349 32.4%	1077 100.0%

$X^2(df=15, N=1077)=25.082^*, p<0.05$

まず、表1より合計で金銭的負担が大きいと考えている人々は全体の78.5%とほとんどの人が金銭的な問題を感じていることが読み取れる。同じく表1より、子どもの人数が0人の家庭ではあまり金銭的負担を感じないという家庭が20%以上あるものの、1～3人の家庭ではいずれも20%を下回っており、逆にやや金銭的負担は大きいと思う、金銭的負担は大きいと思うという家庭は80%以上にも上る。

次に表2を見てみると、子どもの人数が1人の家庭が子育て支援に力を入れてほしいと最も感じているようである。子どもの人数が2人以上の家庭では力を入れてほしいと回答した数はいずれも20%を下回っており、子育て支援について大きな不満はない様子である。

表2. 子どもの人数と子育て支援に力を入れてほしいかのクロス表

		子育て支援に力を入れてほしいか		
		回答なし	回答あり	合計
子供の人数	0人	258	31	289
		89.3%	10.7%	100.0%
	1人	131	60	191
		68.6%	31.4%	100.0%
	2人	371	65	436
		85.1%	14.9%	100.0%
	3人	103	23	126
		81.7%	18.3%	100.0%
	4人	9	1	10
		90.0%	10.0%	100.0%
	5人以上	2	0	2
		100.0%	0.0%	100.0%
合計		874	180	1054
		82.9%	17.1%	100.0%

$$X^2(df=5, N=1054)=38.289^{**}, p<0.01$$

4.2 両親の労働環境と子どもの人数

この仮説については、独立変数を「子どもの人数」、従属変数を「性別職域分離意識」、「平均労働日数」、「職業」とおき、労働が子どもの人数にどのように影響を与えるかを分析する。

表3. 子どもの人数と性別職域分離意識のクロス表

		性別職域分離意識				合計
		反対	どちらかとい えば反対	どちらかとい えば賛成	賛成	
子どもの人数	0人	59	99	120	22	300
		19.7%	33.0%	40.0%	7.3%	100.0%
	1人	33	73	75	15	196
		16.8%	37.2%	38.3%	7.7%	100.0%
	2人	72	139	190	46	447
		16.1%	31.1%	42.5%	10.3%	100.0%
	3人	22	29	70	10	131
		16.8%	22.1%	53.4%	7.6%	100.0%
	4人	1	3	2	4	10
		10.0%	30.0%	20.0%	40.0%	100.0%
	5人以上	1	1	1	1	4
		25.0%	25.0%	25.0%	25.0%	100.0%
合計		188	344	458	98	1088
		17.3%	31.6%	42.1%	9.0%	100.0%

$$X^2(df=15, N=1088)=28.477^*, p<0.05$$

表4. 子どもの人数と週の平均労働時間のクロス表

		q68 週の平均労働日数								
		0日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	合計
子どもの人数	0人	73	3	3	7	11	138	28	5	268
		27.2%	1.1%	1.1%	2.6%	4.1%	51.5%	10.4%	1.9%	100.0%
	1人	68	1	1	7	10	69	11	3	170
		40.0%	.6%	.6%	4.1%	5.9%	40.6%	6.5%	1.8%	100.0%
	2人	185	7	8	17	25	103	31	9	385
		48.1%	1.8%	2.1%	4.4%	6.5%	26.8%	8.1%	2.3%	100.0%
	3人	44	3	1	7	11	35	13	3	117
		37.6%	2.6%	.9%	6.0%	9.4%	29.9%	11.1%	2.6%	100.0%
	4人	2	0	1	0	0	4	2	1	10
		20.0%	0.0%	10.0%	0.0%	0.0%	40.0%	20.0%	10.0%	100.0%
	5人以上	1	0	0	0	1	0	1	1	4
		25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	25.0%	25.0%	100.0%
合計		373	14	14	38	58	349	86	22	954
		39.1%	1.5%	1.5%	4.0%	6.1%	36.6%	9.0%	2.3%	100.0%

$X^2(df=35, N=954)=86.266^{**}, p<0.01$

表5. 子どもの人数と職業のクロス表

		職業									
		臨時雇用、 常時雇用の パート、ア 勤め人	パート、ア ルバイト	自営業主	自営業の家 族従業者	経営者、役 員	家事専業	学生	無職	その他	合計
子どもの人数	0人	122	50	8	3	8	25	14	56	11	297
		41.1%	16.8%	2.7%	1.0%	2.7%	8.4%	4.7%	18.9%	3.7%	100.0%
	1人	65	30	6	4	0	39	0	46	6	196
		33.2%	15.3%	3.1%	2.0%	0.0%	19.9%	0.0%	23.5%	3.1%	100.0%
	2人	87	66	20	12	11	97	1	147	14	455
		19.1%	14.5%	4.4%	2.6%	2.4%	21.3%	.2%	32.3%	3.1%	100.0%
	3人	26	26	8	4	5	23	0	38	5	135
		19.3%	19.3%	5.9%	3.0%	3.7%	17.0%	0.0%	28.1%	3.7%	100.0%
	4人	3	2	2	1	0	0	0	2	0	10
		30.0%	20.0%	20.0%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
	5人以上	0	0	1	0	1	0	0	1	1	4
		0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%	25.0%	100.0%
合計		303	174	45	24	25	184	15	290	37	1097
		27.6%	15.9%	4.1%	2.2%	2.3%	16.8%	1.4%	26.4%	3.4%	100.0%

$X^2(df=40, N=1097)=149.356^{**}, p<0.01$

以上の結果から、まずは性別職域分離意識について見てみると、子どもの人数が0～3人の家庭においてはほぼ同じような動向であった。いずれも「どちらかという賛成」が40%前後を占めており、いまだに性別による役割分担は根強いようである。賛成よりの意見と反対よりの意見で二分すると、子どもの数が増えるほど、賛成よりの意見が増加しており、共働きの風潮がある家庭では子どもの人数が少ないと見られる。

子どもの人数と週の平均労働日数では0日と5日が圧倒的に多い点は家事専業者などの存在、および日本の労働形態を考えると想像に難くない。次点で6日が多いが、子どもの人数が2人の家庭において、多くの日数で働いていることは金銭的負担から考えられる一方で、子どもが0人の家庭では、その分時間的ゆとりがあるのではないかと考えられた。

最後に子どもの人数と職業の関係について、子どもがいない家庭よりも2～3人子どもがいる家庭の方が家事専業者の多いことが最も特徴的な部分であろう。一方で、常時雇用の勤め人は子ど

もがない家庭が最も高いことも読み取れ、これに関しては女性が出産の後に離職し、パートなどに雇用形態を変えることが理由として考えられる。

5. 議論と考察

これらの結果を踏まえて仮説の検証、考察を行う。表 1 より、現在の生活において金銭的負担が大きいと特に考えている家庭は、子どもが 2 人の家庭である。3 人の家庭も「そう思う」「ややそう思う」の合計が 80%を上回っているものの、サンプル数が少ないため、そのような傾向にあるということとどめる。また、子どもが 0 人の家庭では「そう思う」「ややそう思う」の割合が約 75%となっているが、子どもを持つことを見据えたものなのかは一考の余地がある。そこで、さらに表 2 の結果をあわせると、子どもが 0 人の家庭では約 10%の家庭のみが子育て支援に力を入れてほしいと考えている一方で、子どもが 1 人の家庭では約 30%もの家庭が力を入れてほしいと考えており、子育てについて金銭的な負担が大きいと考えている家庭はすでに子どもがいる家庭の方が大きい割合を占めていると考えられる。以上の点を踏まえると、仮説 1 は全て支持できるものではないが、子育てに対しての金銭的負担に限定した場合には支持できると考えられる。

次に仮説 2 についての考察である。表 3 より、子どもの人数が 0 人の家庭では強く反対する人が多く、20%近い人が性別で役割を分担する必要はないと考えている。強く賛成している意見は多くの場合で 7%前後とあまり高くない値であるが、どちらかといえば賛成という意見をみると、子どもの人数が 2 人と答えた人では 42%、3 人と答えた人では 53%と非常に高い値となっており、共働きという考えには消極的である。表 4 より労働時間を見ると、子どもの人数が 0 人と答えた人の平均労働日数は 5 日となっている一方で、子どもがいる家庭では平均労働日数は 30%弱というものが多。さらに表 6 では子どもの数が 0 人の家庭の家事専門家は 8.4%であるのに対して、子どもがいる家庭では 20%前後で推移しており、家庭に入る人が少なくないことが読み取れる。以上のことを踏まえると、子どもが多い家庭では片働きになる家庭が多く、仮説 2 は棄却される。

さらに、「子どもを望むか」という質問を用いれば、特に金銭的負担と子どもの人数の関係について深く追求した結果が得られたと期待できるが、取り得るサンプル数が限られており、データへの信憑性が低いために今回は用いることを断念したことは遺憾である。次回の調査ではその点に留意したい。

6. 参考文献

[1] 「第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要(国立社会保障・人口問題研究所)」

<<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp>> (1 月 19 日アクセス)

[2] 「合計特殊出生率の推移(日本と諸外国)」

<<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/1550.html>> (1 月 20 日アクセス)

第 16 章 夫婦の会話時間に影響を及ぼす要因とは

篠原 舞

1. はじめに

共働きが増え、夫婦が共に過ごす時間が減少してきているように感じたため、夫婦が一日にどれほど会話しているのか調査した。

近年、深刻な社会問題となっている少子化問題や核家族の増加、育児放棄などの問題には夫婦の会話時間の減少が関わっているのではないかと考えた。そこでどのような要因が夫婦の会話時間に影響を与えているのか調べ、改善策を考える。

2. 仮説

配偶者の育児への取組について満足しているほど、会話時間は長くなる。反対に不満を抱えているほど会話時間が短くなる。これは、満足度が高いほど夫婦の仲は円満であると考え、それと比例して会話時間も長くなると考えたためである。

また、育児への取組みだけでなく家事への取組みも要因として考えられる。家事を協力して行っている夫婦の会話時間は長く、どちらかひとりが行っている夫婦では会話時間が短い。これは、家事を協力して行うことで互いに情報共有する必要性が出てくるため会話時間も長くなると考えたためである。

さらに、職業や最終学歴、年齢、性別、時間のゆとり、育児は母親の役割であると思うかなども夫婦の会話時間に影響を与える要因として考えられる。

3. データ・変数名

3.1 データ

データについては、平成25年度市民意識調査として、高槻市と関西大学総合情報学部の合同で行った、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を利用した。調査対象者は、無作為に選ばれた、20 歳以上 85 歳未満の高槻市民である。計画標本サイズは 2000、有効回収数 1233 票、回収率は 61.7%である。

3.2 変数

- q56 夫婦の会話時間
- q1_r 生活満足度反転
(満足度が高いほど高い値を選択するように反転させて分析を行っている。)
- q55_r 配偶者の育児の取組反転
(満足度が高いほど高い値を選択するように反転させて分析を行っている。)

- ・年齢(中央値)
(q65 年齢の各年代の中央値を用いて分析を行っている。)
- ・男性ダミー
(q64 性別をダミー変数にして分析を行っている。)
- ・中等学歴ダミー
(q69 最終学歴を用いて中等学歴が最終か否かをダミー変数にして分析を行っている。)
- ・高等学歴ダミー
(q69 最終学歴を用いて高等学歴が最終か否かをダミー変数にして分析を行っている。)
- ・常勤の勤め人ダミー
(q66 職業を用いて常勤の勤め人か否かをダミー変数にして分析を行っている。)
- ・自営業者ダミー
(q66 職業を用いて自営業者か否かをダミー変数にして分析を行っている。)
- ・q45_r 時間的ゆとり反転
(ゆとりがあるほど高い値を選択するように反転させて分析を行っている。)
- ・q52_r 育児は母親の役割反転
(そう思うほど高い値を選択するように反転させて分析を行っている。)
- ・q54_r 配偶者の家事への満足度反転
(満足度が高いほど高い値を選択するように反転させて分析を行っている。)

4 分析結果

表1 q56 夫婦の会話時間 と q55_r 配偶者の育児の取組反転 のクロス表

	q55_r 配偶者の育児の取組反転				合計
	不満	やや不満	やや満足	満足	
30分未満	39 21.3%	52 28.4%	60 32.8%	32 17.5%	183 100.0%
30分以上	12	35	83	59	189
1時間未満	6.3%	18.5%	43.9%	31.2%	100.0%
q56 夫婦の 会話時間 1時間以上	9	23	60	43	135
1時間半未満	6.7%	17.0%	44.4%	31.9%	100.0%
1時間半以上	1	11	26	36	74
2時間未満	1.4%	14.9%	35.1%	48.6%	100.0%
2時間以上	4	19	39	51	113
	3.5%	16.8%	34.5%	45.1%	100.0%
合計	65	140	268	221	694

N=694 $\chi^2=78.276^{**}$, CramerV=0.194^{**}

**p<.01,*p<.05

表1では、夫婦の会話時間と配偶者の育児への取組の関係性を調べた。配偶者の育児の取組

に不満をもっていると答えた人たちの 20%以上が夫婦の会話時間は30未満であると回答している。さらに、満足と答えた人たちの45%以上が2時間以上会話していることがわかる。また、会話時間が30分未満と答えた人と30分以上と答えた人の割合に注目すると、配偶者の育児の取組に不満と答えた人では前者が半数を超えており、会話時間が短いことがわかる。それに対し、配偶者の育児の取組に満足と答えた人では前者の約6倍もの人が後者に含まれており、会話時間が長いことがわかる。以上のことから、仮定で述べていた「配偶者の育児への取組について満足しているほど、会話時間は長くなる。反対に不満を抱えているほど会話時間が短くなる。」は支持できる。

表2 夫婦の会話時間の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.51 **	0.41	
q1_r 生活満足度反転	0.21 **	0.06	0.15
q55_r 配偶者の育児の取組反転	0.24 **	0.09	0.16
年齢(中央値)	0.00	0.01	-0.02
男性ダミー	-0.24	0.13	-0.09
中等学歴ダミー	-0.60 *	0.24	-0.21
高等学歴ダミー	-0.78 **	0.24	-0.28
常勤の勤め人ダミー	-0.02	0.15	-0.01
自営業者ダミー	0.10	0.21	0.02
q45_r 時間的ゆとり反転	0.04	0.06	0.04
q52_r 育児は母親の役割反転	-0.08	0.06	-0.05
q54_r 配偶者の家事への満足度反転	0.20 *	0.09	0.14
調査済み決定係数		0.119 **	
N		655	

** p<.01, *p<.05

次に、「夫婦の会話時間」を従属変数とする重回帰分析を行う。独立変数は、「q1_r 生活満足度反転」、「q55_r 配偶者の育児の取組反転」、「年齢(中央値)」、「男性ダミー」、「中等学歴ダミー」、「高等学歴ダミー」、「常勤の勤め人ダミー」、「自営業者ダミー」、「q45_r 時間的ゆとり反転」、「q52_r 育児は母親の役割反転」、「q54_r 配偶者の家事への満足度反転」である。分析結果を表 2 に示す。

調査済み決定係数(R²)の数値が 0.119 であることから、従属変数「夫婦の会話時間」の 11.9%は予測値としたこれらの変数によって説明できる。有意確率が 1%未満であるため決定係数の値は母集団において「夫婦の会話時間」の予測に役立つモデルであることがわかる。

「生活満足度」「配偶者の育児の取組」「配偶者の家事への取組」が夫婦の会話時間に対し、影響力が大きいと考えられる。このことから、仮定で述べていた「家事を協力して行っている夫婦の会話時間は長く、どちらかが行っている夫婦では会話時間が短い。」も支持できる。

また「最終学歴」も影響を与えていることがわかった。最終学歴に関しては、中等学歴、高等学

歴の符号がどちらもマイナスであるため「中等学歴と高等学歴の人は、初等学歴の人と比べて夫婦の会話時間が短い。」ということが言える。

5 議論と考察

調査の結果、夫婦の会話時間には互いの家庭での取組について、どれだけ満足しているかが重要な要因となっていることがわかった。はじめに述べていたように、社会問題の改善のためには、夫婦が協力して育児や家事に取り組むことが必要であると考え。もし、職業などの理由で家庭で過ごす時間が確保しづらい状況なのであれば、配偶者への理解をきちんと示すと共にコミュニケーションをとることを大切にすべきであると考え。

夫婦の会話時間に最終学歴が影響していたのは、高学歴の人の方が仕事に打ち込んでいる時間や、自分ひとりで過ごす時間が多いのではないかと考えられる。そのため、家族と共に過ごす時間が短くなる傾向にあり会話時間の減少にもつながるのではないだろうか。

今後、少子化や育児放棄などの問題を改善していくためには、ひとりひとりが周囲とコミュニケーションをとることをより意識し、家族にもっと関心をもつべきである。育児や家事はもちろんのこと、会話をすることが問題解決に重要な役割を果たすのだと考えられる。

第 17 章 新たな性別役割分業意識に関する分析

田中 隆介

1. はじめに

男女雇用機会均等法や、育児休業制度が施行されてから 20 年近く経った今日、女性の社会進出は昔よりは進んでいると多くの人が思っているのではないだろうか。しかし、アベノミクスの成長戦略のなかで「女性が輝く日本」というのが題目として挙げられていることから明らかなように、日本女性の社会進出が他国に比べて決して進んでいるとは言い切れない状況であるのは確かである。

そこで、このような女性の社会進出を阻む要因は何だろうかと考えてみると、やはり、伝統的な性別役割分業意識である「女性は家で家事をし、男性は外で仕事をする」といったイメージが、人々の間で払拭できていないことが一因として考えられる。そこで、本調査では、女性の社会進出を阻んでいる可能性があるものとして、人々の心の中に、建前上では伝統的な性別役割分業意識が良くないとは思っていながらも、本心では(本人も自覚していないようなケースも含めて)家事や育児は女性の方が上手である、ないし向いているといった「本音と建て前の二重構造」が存在するという仮説を立て、高槻市民を対象とした市民郵送調査を行った。

2. 仮説と先行研究

以上のような問題意識から、「性別役割分業意識のホンネとタテマエの二重構造が存在する」という仮説を立てる。ここでのホンネとは伝統的な性別役割分業意識を示し、タテマエとは伝統的な性別役割分業意識の反対で、男女は平等であるべきだといった考えのことを示している。

また、この仮説を立てるにあたって参考にした先行研究は、田淵の『女性に 2 重の負担を強いる「新・性別分業意識」の存在』である。この論文では、2000 年に時事通信社が全国 20 歳以上の男女個人 2000 人を対象に行った「パートナーシップ意識調査」の結果を用いて分析を行っている。この調査では、性別分業に関する 15 の質問項目を面接聴取法で調査し、クロス表集計によって伝統的性別役割意識のホンネと、それに反対して男女平等主義的な主張であるタテマエが容易に同居することが示されている。加えて、このようなホンネとタテマエが両立している「新・性別分業意識」は、女性に仕事と家事の二重の負担を強いることになり、危険であるという指摘もされている(田淵 2000)。

3. 分析方法・変数

分析方法は、まず「q48 性別役割分業意識」と「q52 育児は母親の役割か」のクロス表を作成して調整済標準化残差を調べ、新・性別分業意識を持っている人がどれくらいの数で存在し、どの要素がこの意識の有意性に貢献したのかを検討する(表 1)。その後、上記の分析に男女での違いを加えた調整済み標準化残差を見ることによって、新・性別役割意識の特徴を考えることとした(表

2)。

また、今回用いたデータは、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査(平成 25 年度市民意識調査)である。調査対象者は 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1233 票、回収率は 61.7%であった。

4. 分析結果

q52 育児は母親の役割か と q48 性別役割分業意識 のクロス表

			q48 性別役割分業意識				
			反対	やや反対	やや賛成	賛成	合計
q52 育児は母親の役割か	そう思わない	度数	90	76	40	10	216
		調整済み残差	10.9	1.1	-7.9	-2.4	
		行%	41.7%	35.2%	18.5%	4.6%	100.0%
		合計					
あまりそう思わない	度数	57	139	113	18	327	
	調整済み残差	0.4	4.9	-3.4	-2.5		
	行%	17.4%	42.5%	34.6%	5.5%	100.0%	
	合計						
ややそう思う	度数	36	133	277	34	480	
	調整済み残差	-7.1	-2.6	8.9	-1.8		
	行%	7.5%	27.7%	57.7%	7.1%	100.0%	
	合計						
そう思う	度数	8	16	54	39	117	
	調整済み残差	-3.0	-4.5	0.9	9.8		
	行%	6.8%	13.7%	46.2%	33.3%	100.0%	
	合計						
合計		度数	191	364	484	101	1140

N=1140 $\chi^2=288.53^{**}$, CramerV=0.29^{**}

^{**}p<.01, *p<.05

表 1 の「q48 性別役割分業意識」と「q52 育児は母親の役割」とのクロス表を見ると、点線で囲まれた部分が、性別役割分業に賛成し、かつ育児は母親の役割だと一貫性をもって賛成する人たち、および、それらに一貫して反対する人たちを表すセルである。これらのセルは志向の一貫性という点で共通している(以下「一貫型」とする)。残りのセルは、「性別役割分業」意識と「育児は母親の仕事」意識との間に一貫性がなく、食い違いが生じている人々を表すセルである(以下「矛盾型」とする)。

表 1 では、一貫型に相当するセルの度数の合計が 766 であるのに対して、矛盾型に相当するセルの度数合計は 374 と一貫型の約半数存在している。さらに、調整済み残差を見てみると、一貫型を示す 8 個のセルのうち 4 つのセルが有意な差を示していない。対して矛盾型では、各セルの調整済み残差がマイナスの値をとりながら、すべてのセルで期待値との有意な差を示している。

表 2 q48 性別役割分業意識 と q52 育児は母親の役割かと q64 性別 のクロス表

q64 性別		q52 育児は母親の役割か				合計		
		そう思わ ない	あまり そう思わ ない	やや そう思う	そう思う			
男性	反対	度数	40	24	15	6	85	
		調整済み残差	7.5	0.0	-5.3	-0.9		
		行%	47.1%	28.2%	17.6%	7.1%	100.0%	
	やや反対	度数	24	52	48	5	129	
		調整済み残差	0.1	3.5	-1.7	-2.6		
		行%	18.6%	40.3%	37.2%	3.9%	100.0%	
	やや賛成	度数	23	56	137	18	234	
		調整済み残差	-4.6	-2.1	6.4	-1.4		
		行%	9.8%	23.9%	58.5%	7.7%	100.0%	
	賛成	度数	6	11	19	20	56	
		調整済み残差	-1.6	-1.5	-1.5	7.0		
		行%	10.7%	19.6%	33.9%	35.7%	100.0%	
	合計		度数	93	143	219	49	504
	女性	反対	度数	49	33	21	2	105
			調整済み残差	7.7	0.7	-4.9	-3.1	
			行%	46.7%	31.4%	20.0%	1.9%	100.0%
やや反対		度数	51	84	82	11	228	
		調整済み残差	1.4	3.4	-2.1	-3.5		
		行%	22.4%	36.8%	36.0%	4.8%	100.0%	
やや賛成		度数	17	54	138	34	243	
		調整済み残差	-6.3	-2.9	6.3	2.3		
		行%	7.0%	22.2%	56.8%	14.0%	100.0%	
賛成		度数	4	7	15	18	44	
		調整済み残差	-1.8	-1.9	-1.0	6.8		
		行%	9.1%	15.9%	34.1%	40.9%	100.0%	
合計		度数	121	178	256	65	620	

N=1124 $\chi^2=281.39^{**}$, CramerV=0.29**

**p<.01, *p<.05

表 1 で見た有意性の効果をさらに詳しく検討するために、次に、表 2 の分析結果を見てよう。これは表 1 の分析を男女に分けて行ったものである。男女別に先ほどと同様、一貫型と矛盾型それぞれの度数を比較してみると、男性は 334:170、女性は 422:198 となっており、どちらも表 1 の結果と同様、矛盾型が一貫型の約半数となった。また、ここでも調整済み残差を見てみると、絶対値が 1.96 より小さいものとして男女の間で共通の要素は表中で■と示したものであるが、女性にはなく男性のみに見られたものとして□で示したものがあつた。この結果を、先ほどの一貫型と矛盾型という対立軸をもって見てみると、統計的に有意な差があるセルは、一貫型、矛盾型、共に女性の方に多いことから、矛盾型に関しては、男性よりも女性のほうが有意性により貢献していると言える。さらに矛盾型を詳しく見ると、マイナスの効果を持った有意なセルが、男性より女性に多く現れていることから、女性は矛盾型への偏りが少なく、一貫型への偏りが多いと説明できる。しかし男性の場合、矛盾型に有意なセルが少なく、女性のように矛盾型におけるマイナスの効果を明確に説明することはできない。すなわち、矛盾型の度数を有意に減少させているのは女性の効果であつて、男性ではないのである。

5. 考察

まずは、表 1 の分析結果の考察を行うと、一貫型よりも矛盾型の要素のほうが性別役割分業意識と母親(女性)の育児の役割に関して有意性において貢献しているということから、先行研究においても提示されていたような、育児や家事は女性のほうが向いているという伝統的な性別役割分業意識に賛成ないし同意するホンネと、男女平等を主張するといった態度に代表されるようなタテマエが、一定程度人々の中で同居していると考えられる。

次に、表 2 の分析によってこのホンネとタテマエの同居について、男女差は見られるのかという点について考察すると、こちらは矛盾型の要素において男性よりも女性のほうがマイナスの効果を持った有意なセルを多く持っていたという結果から、女性は一貫した性別役割分業意識を持つ傾向が高いといえる。しかし一方で、男性は(女性に比べて相対的に)一貫した意識を持ちにくいと思われるため、タテマエの意識に貢献する割合は女性よりも高いと考えられる。

なぜこのような傾向の違いが見られるのかを考える上で、有用であると思われる性差別主義に関する理論としてグリックとフィックス¹の両価値主義的性差別主義という概念を見ておこう(木村 2013,104-105)。これは、差別をする側とされる側の両者間において、恋愛や結婚などの親密な関係性が築かれるという点に着目し、そのような関係性を築くために、差別者が被差別者に対して敵意だけではなく、好意をも示すという両価値的な態度を有する必要があるとしている。ここでいう敵意(敵意的性差別主義)とは、性役割に従わない行動をする女性に対しては非難するなどの態度を示し、好意(慈善的性差別主義)とは、性役割に沿った行動をする女性に対しては、高く評価したり、守ってあげたいなどといった態度を示すことを意味している。このような敵意と好意の使い分けによ

¹ Glick, P. and Fiske, S. T. (1996) "The Ambivalent Sexism Inventory : Differentiating hostile and benevolent sexism," *Journal of Personality and Social Psychology*, 70 : 491-512 ; Glick, P. and Fiske, S. T. (2011) "Ambivalent sexism revisited," *Psychology of Women Quarterly*, 35 : 530-535

って、一見すると性差別的とは思われないように「巧みに」性役割を維持しているとする理論である。

今回の性役割意識のホンネとタテマエの二重構造に関して、男性のほうが女性に比べて相対的にタテマエに貢献している要因として、上で見たような両価値主義的性差別主義が一つとして挙げられるのではないかと思われる。もちろん、新・性別役割分業意識が男性の側によって一方的に作り上げられているといったことをここでは主張したいのではなく、このようなメカニズムが働くことによって、(本人にそのつもりがなかったとしても)新・性別役割分業意識が維持される可能性があるということを確認することが大切だと言いたいのである。

性差別や性別役割分業意識を議論する際には、原因が男性にある、ないし女性の側にあるといった安易な原因の擦り付け合いになりがちである。しかし、意識の問題である以上、意識が人々の相互作用によって作り出されるという点から言えば、単純にどちらかが原因であると断定することは難しいと思われる。それゆえ、ありきたりな結論ではあるが、男性女性の間において十分なコミュニケーションを取っていき、お互いの性別役割についてどうあるべきかを考えていくことが重要であると筆者は考える。

6 参考文献

- [1] 田淵晴子,2000,『女性に2重の負担を強いる「新・性別分業意識」の存在』中央調査報(No.512)<<http://www.crs.or.jp/backno/old/No512/5121.htm>>(1月25日閲覧)
- [2] 木村涼子ほか編,2013,『やわからかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかるジェンダー・スタディーズー人文社会科学から自然科学までー』ミネルヴァ書房

第 18 章 商店街のイメージに関する調査

鄭 秀慧

1. はじめに

中小小売商業者が消費者、地域社会のニーズに応え発展していくためには、各地域社会における商店街の健全な発展が極めて重要である。国では、商店街の発展を図るため種々の施策を講じているところであるが、施策の実効を期するためには、商店街の実態を把握することが必要である。経営環境が急激に変化していることを認識してから、商店街の活性化が地域経済にとって重要な課題の一つとなることが明らかになる。この商店街実態調査が各方面に広く活用され、我が国の商店街の発展のために役立つことができれば幸いである

今回、高槻市の商店街の利用頻度や商店街に対するイメージなどについて、本調査を実施することとした。

2. 仮説

仮説 1 商店街までの距離が近ければ近いほど、商店街のイメージが良い

仮説 2 若い人と比べたら、お年寄りのほうは商店街に対するイメージが良い

仮説 3 商店街までの距離が近ければ近いほど、買い物頻度が高い

3. データ・変数

3.1 データ

用いたデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は、高槻市に居住する 20 歳以上の男女対象に、2013 年に実施したものである。計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1233、回収率は 67.1% である。

3.2 変数

主に、Q14 最寄り商店街についてのイメージ、Q15 最寄り書店街への買い物頻度、Q16 最寄り商店街までの距離、Q64 性別、Q65 年齢、Q66 職業を使い、それぞれの質問・回答、回答の処理を以下に記す。

表1 q14 最寄り商店街のイメージ

		度数	パーセント
あなたは、最よりの商店街についてどのようなイメージを持っていますか	よい	131	10.6
	ややよい	384	31.1
	どちらともいえない	503	40.8
	やや悪い	141	11.4
	悪い	35	2.8
	無回答	40	3.2
合計		1234	100.0

表2 q15 商店街の買い物頻度

		度数	パーセント
あなたは、最よりの商店街へほどの程度買い物にいきますか	ほぼ毎日	116	9.4
	週に2~3日程	298	24.1
	月に2~3日程	390	31.6
	年に2~3日程	247	20.0
	全くいかない	156	12.6
	無回答	27	2.2
	合計	1234	100.0

表3 q16 最寄り商店街までの距離

		度数	パーセント
最寄り商店街までの距離	かなり近い	96	7.8
	近い	251	20.3
	普通	452	36.6
	遠い	341	27.6
	かなり遠い	73	5.9
	無回答	21	1.7
合計		1234	100.0

表4 q64性別

		度数	パーセント
男性		534	43.3
女性		679	55.0
無回答		21	1.7
合計		1234	100.0

表5 q65 年齢の度数分布

		度数	パーセント
年齢	20代	85	6.9
	30代	169	13.7
	40代	213	17.3
	50代	168	13.6
	60代	294	23.8
	70代以上	278	22.5
無回答		27	2.2

4. 分析

4.1

まず、最寄り商店街に対するイメージを従属変数で、最寄り商店街までの距離を独立変数として設定して、重回帰分析を確認した、以下のように示している。

モデル要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.419 ^a	0.175	0.175	1.319

a. 予測値: (定数)、q16 最寄り商店街までの距離。

分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	455.75	1	455.75	262.078	.000 ^b
	残差	2142.435	1232	1.739		
	合計	2598.186	1233			

a. 従属変数 q14 最寄り商店街のイメージ

b. 予測値: (定数)、q16 最寄り商店街までの距離。

係数^a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	1.344	0.1		13.465	0
	q16 最寄り商店街までの距離	0.477	0.029	0.419	16.189	0

a. 従属変数 q14 最寄り商店街のイメージ

以上のモデルようやくを見て、この表では、調整済決定係数 R2 は 0.175 である、これは従属変数である「最寄り商店街に対するイメージ」のうち、17.5%が投入した独立変数で説明されていることを示している。そして分散分析 F 検定の結果を見ると、有意確率が 0.00 となっている。つまり決定係数の値は統計的に有意である、母集団においても「最寄り商店街に対するイメージ」の予測に役に立つモデルであることがわかる。そしてほかの重回帰分析の結果を確認すると、分散分析での有意確率は全部 0.00 となっている、決定係数の値は統計的に有意である。

独立変数「最寄りの商店街までの距離」が 1%水準で有意なので、(変数を反転していれば)最寄り商店街までの距離が近ければ近いほど、商店街のイメージが良いと説明できる。

4.2

来街者の属性について分析する

		q14 最寄りの商店街のイメージ					合計
		良い	やや良い	どちらとも いけない	やや悪い	悪い	
q65 年齢	20代	6	26	37	10	4	83
	30代	22	42	69	24	9	166
	40代	15	67	99	27	5	213
	50代	15	56	68	21	6	166
	60代	28	90	117	38	6	279
	70代以上	43	94	103	20	4	264
合計		129	375	493	140	34	1171

		q14 最寄りの商店街のイメージ					合計
		良い	やや良い	どちらとも いけない	やや悪い	悪い	
q64 性別	男性	63	146	220	75	15	519
	女性	67	231	276	64	20	658
合計		130	377	496	139	35	1177

		q14 最寄りの商店街のイメージ					合計
		良い	やや良い	どちらとも いけない	やや悪い	悪い	
q66 職業	常時雇用の 勤め人	31	104	124	48	12	319
	臨時雇用、 パート、ア ルバイト	23	44	91	16	5	179
	自営業主	6	10	24	7	1	48
	自営業の家 族従業者	2	8	13	2	0	25
	経営者、役 員	2	5	12	6	1	26
	家事専業	18	69	76	25	7	195
	学生	1	7	6	0	0	14
	合計	83	247	346	104	26	806

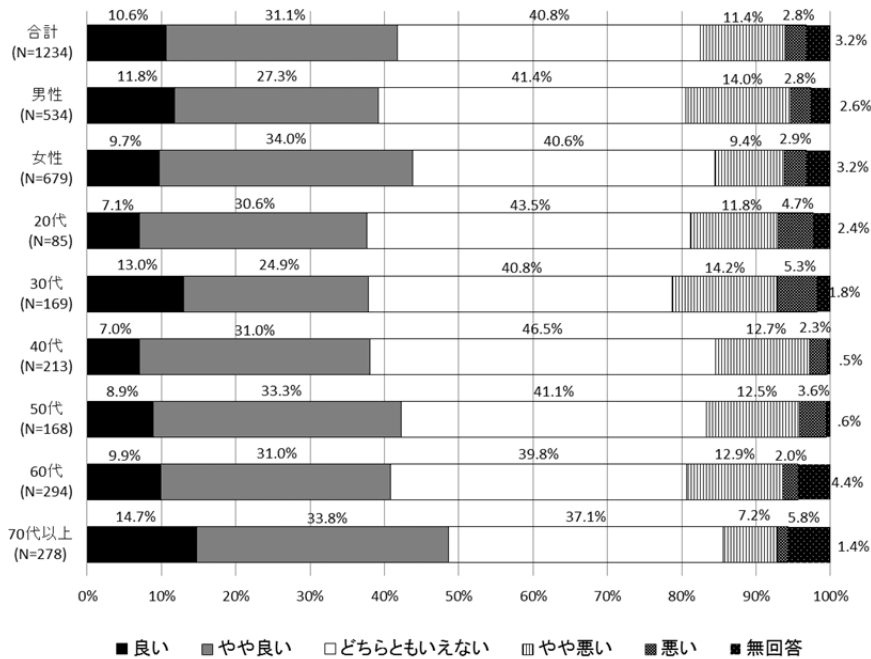


図 1 最寄り商店街のイメージ

図 1 より、最寄り商店街のイメージについてはやや良いとどちらともいえないが約 30% ~ 40% で拮抗していた。最寄り商店街においては肯定的評価（良いとやや良い）が半分以上占めていることがわかった。表 6 より、年齢が高くなればなるほど商店街に対するイメージが良いと占めている。

よって、仮説 2 若い人と比べたら、お年寄りのほうは商店街に対するイメージが良いことが成立である。また、表 8 からみると、常時雇用の勤め人は商店街に対して良いとやや良いと回答する人の人数は 135 人がいる、家事専業の人は次に良いとやや良いと回答する人は 87 人がいると示している。自営業の家族従業者と学生さんは商店街に対して良いとやや良いと回答する人は 10 人以下に占めている。予想してなかったが、家事専業の人は商店街に対するイメージが良いという人が意外に多いです。

4.3

仮説 3 商店街までの距離が近ければ近いほど、買い物頻度が高い

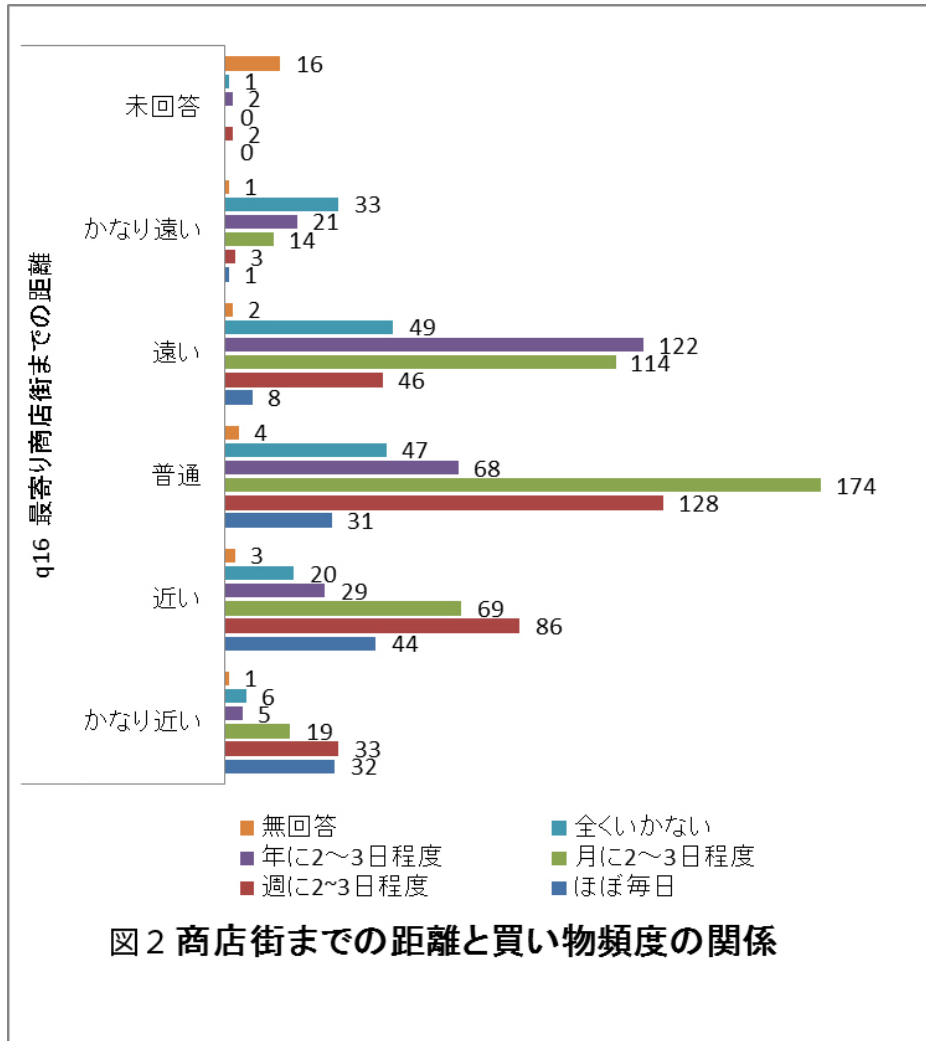


図 2 のグラフを見ると、商店街までの距離がかなり近い時、ほぼ毎日商店街を利用する人が 32 人、週に 2~3 日程度を利用する人が 33 人、合計 65 人である、全く利用しない人と年に 2~3 日程度の人合計 11 人と比べたら 54 人多いと示している。そして、商店街までの距離がかなり遠い時をとると、ほぼ毎日と週 2~3 日程度商店街を利用する人の合計は 4 しかない、つまり商店街までの距離が近ければ近いほど商店街の利用頻度が高いことがわかる。

5. 議論と考察

高槻商店街に対するイメージについて、41.7%の人が良いと回答している、33.5%の人は良く商店街を利用していると示している、問題となるのが商店街までの距離である、距離

が近ければ近いほど商店街を利用する人が多いである。商店街に対するイメージをアップして、利用頻度を増加したければ、商店街までの交通を改善し、交通便利になれば、来街者の人数が増えるのだろうか。

6. 参考文献

- [1] 関西大学 総合情報学部、2013、[平成24年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査]
- [2] 「地域における商業の活性化に関する条例」の制定・高槻市ホームページ

第 19 章 商店街発展における少子高齢化と 近所づきあいの関連性

北口 亜梨沙

1. はじめに

現在、日本の人口は減少し少子高齢化が進行しており、65 歳以上の人口が占める割合は 25% にも及び総務省の統計調査開始以来、過去最多となっている。今や、日本人口の 4 人に 1 人が高齢者という現状である。

また、技術革新によりインターネットが発達し、通信販売など現地に足を運ばずとも欲しいものが手に入る時代になった。しかし、都市の活性化には、商店街など直接人と触れ合う場が必要不可欠である。そのため、商店街の動向を知ることで、商店街の発展や都市の活性化につながると考えた。

2. 先行研究と仮説

2.1 先行研究

日本経営工学会論文誌の、堀川三好、野中大志郎、菅原光政著者による『地域型商店街における地域活動情報の活用について』という論文があった。そこでは、商店街活動が衰退傾向にあるという中で地域コミュニティ活動を調査し、コミュニティビジネスと関連付けている。商店街衰退の要因は、(1)消費者ニーズの変化、(2)商圏人口の低下、(3)商店街内部の問題、と 3 点にまとめられている。

2.2 仮説

高槻市は地域型商店街であることから、この調査対象に当てはまるといえる。今回、地方における商圏人口低下の要因の一つとして挙げられている少子高齢化は、本当に減少を引き起こしているのかという点に疑問を持った。また、商店街の人口の増加にはどのような要素が必要なのか仮説を立てた。

仮説 1. 「年齢が高くなればなるほど、商店街を多く利用している。」

仮説 2. 「近所づきあいへの意識が高ければ高いほど、商店街を多く利用している。」

3. データ・変数

3.1 データ

データについては、平成 25 年度に行った「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000 である。有効回収数は 1233 票、回収率は 61.7%となった。

3.2 変数

分析に使用した変数は以下の通りである。

Q65 年齢

「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」の6段階である。

Q15 商店街での買い物頻度

「1. ほぼ毎日」「2. 週に2～3日」「3. 月に2～3日」「4. 年に2～3日」「5. 全くいかない」

また、変数を以下のように反転し、数値が大きくなるほど満足度や頻度は高くなることを表すように操作した。

Q5_r 近所での世間話の頻度反転

「1. ほとんどない」「2. 月に1～2日」「3. 週に1～2日」「4. 週に3～4日」「5. ほぼ毎日」

Q6_r 近所づきあいを増やしたいか反転

「1. 減らしたい」「2. 少し減らしたい」「3. どちらともいえない」「4. 少し増やしたい」「5. 増やしたい」

Q9f_r 商店街満足度反転

「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」

Q15_r 商店街での買い物頻度反転

「1. 全くいかない」「2. 年に2～3日程度」「3. 月に2～3日程度」「4. 週に2～3日程度」「5. ほぼ毎日」

Q16_r 最寄りの商店街までの距離反転

「1. かなり遠い」「2. 遠い」「3. ふつう」「4. 近い」「5. かなり近い」

これらの変数で、Q15_r「商店街での買い物頻度反転」を従属変数にして重回帰分析を行い、さらに、Q15「商店街での買い物頻度」とQ65「年齢」ではクロス表分析も行い相関関係を調べた。

ここで、Q15「商店街での買い物頻度」とQ65「年齢」の度数分布表を載せる。

表1 q15 商店街での買い物頻度

	度数	パーセント
ほぼ毎日	115	9.5
週に2～3日程度	299	24.8
月に2～3日程度	391	32.4
年に2～3日程度	246	20.4
全く行かない	156	12.9
合計	1207	100

表2 q65 年齢

	度数	パーセント
20代	85	7
30代	169	14
40代	214	17.7
50代	167	13.8
60代	292	24.2
70代以上	280	23.2
合計	1207	100

4. 分析

4.1 クロス表

まず、仮説 1 を検証するために、クロス表でカイ 2 乗検定を行い関連性をみる。

表 3 q65 年齢 と q15 商店街での買い物頻度 のクロス表

		q15 商店街での買い物頻度					合計	
		ほぼ毎日	週に2～ 3日程度	月に2～ 3日程度	年に2～ 3日程度	全く行か ない		
q65 年齢	20 代	度数	0	5	26	24	28	83
		割合	0.0%	6.0%	31.3%	28.9%	33.7%	100.0%
	30 代	度数	6	22	63	44	32	167
		割合	3.6%	13.2%	37.7%	26.3%	19.2%	100.0%
	40 代	度数	13	34	80	54	33	214
		割合	6.1%	15.9%	37.4%	25.2%	15.4%	100.0%
	50 代	度数	15	38	56	41	15	165
		割合	9.1%	23.0%	33.9%	24.8%	9.1%	100.0%
	60 代	度数	35	92	86	46	26	285
		割合	12.3%	32.3%	30.2%	16.1%	9.1%	100.0%
	70 代以上	度数	43	104	69	34	20	270
		割合	15.9%	38.5%	25.6%	12.6%	7.4%	100.0%
	合計	度数	112	295	380	243	154	1184
		割合	9.5%	24.9%	32.1%	20.5%	13.0%	100.0%

$$\chi^2(df=20, N=1184)=164.726^{**}, **p<.01$$

Q15「商店街での買い物頻度」とQ65「年齢」のクロス表をつくった。クロス表でカイ 2 乗検定を行った結果、有意確率は 1%水準で有意であり、このクロス表の分析結果については意味があり十分に言及することができる。

表 3 から見てとれるように、買い物頻度が「ほぼ毎日」と答えた回答者は、年齢が高くなればなるほど増加している。20 代に至っては 0.0%であった。「週に2～3日程度」でも、年齢が高いほど回答数が多い。

また、「全く行かない」の回答は、20 代中では 33.7%と、他の選択肢の中で最も高い割合となっている。逆に 70 代以上の中では、7.4%と最も低い。「月に2～3日程度」「年に2～3日程度」「全く行かない」の回答数は、高齢になればなるほど減少していく。

よって、仮説 1 は支持され、年齢が高くなればなるほど、商店街を利用する頻度は増加している

といえる。また、相関係数をみると $r = 0.333$ なので、やや正の相関がある。

表 4 相関係数

	q15_r 商店街での買い物 頻度反転	q65 年齢
q15_r 商店街での買い物 頻度反転	1	.333**
q65 年齢	.333**	1

**：1%水準で有意，N=1184（両側）

4.2 重回帰分析

次に、商店街に買い物に行く頻度はどのような因子によって引き起こされているのかを見るために、以下のような重回帰分析を行った。

表 5 q15_r 商店街での買い物頻度反転の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	-0.035	0.195	
q5_r 近所での世間話の頻度反転	0.103 **	0.024	0.11
q6_r 近所づきあいを増やしたいか反転	-0.05	0.041	-0.03
q9f_r 商店街満足度反転	0.223 **	0.029	0.197
q16_r 最寄りの商店街までの距離反転	0.375 **	0.029	0.327
年齢(中央値)	0.019 **	0.002	0.26
調整済み決定係数		0.310 **	

** $p < .01$, * $p < .05$

表 5 より、調整済み決定係数(R²)の値は 0.310 である。したがって、従属変数の Q15_r「商店街の買い物頻度反転」のうちの 31.0%が、投入した従属変数によって説明されていることがわかる。

また、分散分析で F 検定を行った結果、有意確率が 0.000 であった。この結果は、1%水準で有意となる。よって、決定係数の値は統計的に有利であると示され、母集団においても Q15「商店街の買い物頻度」の分析に有効なモデルである。

Q5_r「近所での世間話の頻度反転」、Q9f_r「商店街満足度反転」、Q16_r「最寄りの商店街までの距離反転」、Q65「年齢」(中央値)において、回帰係数の有意確率が 0.000 なので、0.05 よりも小さく、この独立変数のモデルについては、言及することができる。しかし、Q6_r の有意確率は 0.224 であったため、0.05 よりも大きいので有効ではなく扱えない。

よって、近所の世間話の頻度が大きいほど、商店街に満足しているほど、最寄りの商店街までの距離が近いほど、年齢が高くなればなるほど、商店街の買い物頻度は高くなると言及できる。

また、将来の近所づきあいを増やしたいと考えることは、商店街の買い物頻度に影響を及ぼさない。したがって、仮説 2.「近所づきあいへの意識が高ければ高いほど、商店街を多く利用している。」は支持されなかった。

5. 考察

今回の調査で、年齢が高くなればなるほど商店街に買い物に行く頻度は大きくなることがわかった。これは、少子高齢化は商店街衰退を進行させているのではなく、むしろ商店街の繁栄につながるということがいえる。

また、上記の重回帰分析より、普段近所の人と世間話をする人ほど商店街に行く頻度が高くなっている。これより、人々は商店街でただ買い物をすることだけを目的に来ている訳ではなく、“付き合いの場”または“会話の場”として活用されていることが読み取られる。

しかし、今の付き合いに満足していることからか、将来の近所づきあいを増やしたいと考えることは、商店街へ買い物に行く頻度に影響しなかった。より親密になろうとする意識的な問題は、商店街発展への要因ではなかったことがわかる。

今回の調査で重回帰分析に使用した共変量の中で最も相関があったのが、Q16_r「最寄りの商店街までの距離反転」である。この結果から、商店街に近い場所に住んでいないとあまり行かない現状にあることが言える。これは、商店街でなくても代わりとなるスーパーや百貨店がすぐ側にあり、わざわざ行く機会がないのではないかと推測される。

これらより、地域型商店街を活性化させるためには、お年寄りに優しい街づくりの促進や、人づきあいの温かみをアピールする催しを開催することなどが有効なのではないかと考える。

6. 参考文献

- [1] 総務省 統計局, 2013, 「統計からみた我が国の高齢者(65歳以上)－「敬老の日」にちなんで－」, (2014年1月11日取得, <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi720.htm>).
- [2] 関西大学 総合情報学部, 2013, 「平成24年度社会調査実習報告書－高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査－」
- [3] 堀川三好 野中大志郎 菅原光政, 2012, 「地域型商店街における地域活動情報の活用について(事例研究)」, 社団法人日本経営工学会, 『日本経営工学会論文誌』

第20章 高槻市民の近隣住民との関わり合いについて

大谷 優奈

1. はじめに

近年、近隣住民との関わり合いが薄くなってきているとメディアで囁かれている。今回、高槻市と関西大学で合同アンケート調査を実施し、実際の程度の人々が近隣住民との関わりを大事にしているのか、またその人たちがどのような行動をしているのかを検証し、問題点を提示する。

2. 仮説

近隣住民との関わり合いの頻度についての指標として、近隣住民との世間話の頻度を変数として使用することにする。近隣住民との交流がスムーズな方が過ごしやすい環境を作ることから、「生活に満足している人ほど近隣住民と世間話をする頻度が高い。」という仮説のもと分析を行う。また、生活満足度以外にも要因を調べるために、後述するようにほかの変数も分析してみた。

3. データ・変数

3.1 データ

データについては、平成25年度市民意識調査として、高槻市と関西大学総合情報学部の合同で行った、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を利用した。調査対象者は、無作為に選ばれた、20歳以上の高槻市民である。対象者数2000人、有効回収数1,233人、回収率は、61.7%であった。

3.2 変数

今回使用する変数は

・q1_rは「q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。」を反転させている。

生活満足度の回答「1. 満足」、「2. やや満足」、「3. どちらともいえない」、「4. やや不満」、「5. 不満」を反転していて、「1. 不満」、「2. やや不満」、「3. どちらともいえない」、「4. やや満足」、「5. 満足」の5段階である。

・q4_rは「q4. あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。」を反転させている。

地域の役に立ちたいかの回答、「1. そう思う」、「2. ややそう思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまりそう思わない」、「5. そう思わない」を反転していて、「1. そう思わない」、「2. あまりそう思わない」、「3. どちらともいえない」、「4. ややそう思う」、「5. そう思う」の5段階である。

・q5_rは「q5. あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか。」を反転させている。

近所での世間話の頻度の回答「1. ほぼ毎日」、「2. 週に3～4日」、「3. 週に1～2日」、「4. 月に1

～2日」、「5. ほとんどない」、を反転していて、「1. ほとんどない」、「2. 月に1～2日」、「3. 週に1～2日」、「4. 週に3～4日」、「5. ほぼ毎日」の5段階である。

・q15_rは「q15. あなたは、最寄りの商店街へほどの程度買い物に行きますか。」反転させている。

商店街での買い物の頻度の回答、「1. ほぼ毎日」、「2. 週に2～3日程度」、「3. 月に2～3日程度」、「4. 年に2～3日程度」、「5. 全く行かない」を反転していて、「1. 全く行かない」、「2. 年に2～3日程度」、「3. 月に2～3日程度」、「4. 週に2～3日程度」、「5. ほぼ毎日」の5段階である。

・q22_rは「q22. あなたは、地域のボランティア活動などにどれぐらい参加していますか。」を反転させている。

ボランティア頻度の回答、「1. ほぼ毎日」、「2. 週に3～4日」、「3. 週に1～2日」、「4. 月に1～2日」、「5. ほとんど行かない」を反転していて、「1. ほとんど行かない」、「2. 月に1～2日」、「3. 週に1～2日」、「4. 週に3～4日」、「5. ほぼ毎日」の5段階である。

・「q47. あなたは、家族と1日平均何分ぐらい会話をしていますか。」

家族との会話時間への回答は、「1.30分未満」、「2.30分以上1時間未満」、「3.1時間以上1時間半未満」、「4.1時間半以上2時間未満」、「5.2時間以上」の5段階である。

・q21aダミー、q21bダミー、q21cダミー、q21dダミー、q21eダミーは「q21. あなたは、高槻市内で行われていた次のような行事に参加したことがありますか。」より、ダミー変数を作成している。

A. 高槻シティハーフマラソンの回答「1. ある」、「0. ない」を、「1. ある」、「2. ない」の2段階で変更している。

B. 高槻まつりの回答「1. ある」、「0. ない」を、「1. ある」、「2. ない」の2段階で変更している。

C. 高槻ジャズストリートの回答「1. ある」、「0. ない」を、「1. ある」、「2. ない」の2段階で変更している。

D. 高槻バルの回答「1. ある」、「0. ない」を、「1. ある」、「2. ない」の2段階で変更している。

E. 関西大学の行事(講演会や学園祭など)の回答「1. ある」、「0. ない」を、「1. ある」、「2. ない」の2段階で変更している。

・q71_medianは「q71. 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。」を中央値で記録している。

居住年数の回答「1.1年未満」、「2.1年以上3年未満」、「3.3年以上5年未満」、「4.5年以上10年未満」、「5.10年以上20年未満」、「6.20年以上30年未満」、「7.30年以上40年未満」、「8.40年以上50年未満」、「9.50年以上」を、「0.5. 1年未満」、「2.1年以上3年未満」、「4.3年以上5年未満」、「7.5. 5年以上10年未満」、「15.10年以上20年未満」、「25.20年以上30年未満」、「35.30年以上40年未満」、「45.40年以上50年未満」、「55.50年以上」の9段階で記録している。

の8つを利用し分析を行う。

以下に記述統計量と度数分布の表を載せる。

表1 記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
q1_r 生活満足度反転	1226	1	5	3.58	1.04
q4_r 地域の役に立ちたいか反転	1220	1	5	3.62	0.97
q5_r 近所での世間話の頻度反転	1222	1	5	2.33	1.23
q15_r 商店街での買い物頻度反転	1207	1	5	2.98	1.16
q22_r ボランティア頻度反転	1207	1	5	1.19	0.60
居住年数(中央値)	1215	0.5	55	29.86	15.56
q47 家族との会話時間	1139	1	5	2.88	1.44

表2 度数分布表

	マラソングダミー	高槻まつりダミー	ジャズダミー	高槻バルダミー	関大ダミー
0 (参加したことはない)	1107	488	779	1119	1095
1 (参加したことがある)	60	714	407	39	77

4. 分析

まず、仮説の「生活に満足している人ほど近隣住民と世間話をする頻度が高い。」を検討する。そのために「q1. 生活満足度」と「q5. 近所での世間話の頻度」でクロス表を作成した。ただし、ここで用いている変数は反転前のものである。

表3 q5近所での世間話の頻度とq1生活満足度のクロス表

	q1 生活満足度					合計	
	満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
q5 近所での世間話の頻度	ほぼ毎日	20	28	17	5	5	75
		26.7%	37.3%	22.7%	6.7%	6.7%	100.0%
	週に3～4日	38	62	33	12	3	148
		25.7%	41.9%	22.3%	8.1%	2.0%	100.0%
	週に1～2日	54	143	69	30	10	306
		17.6%	46.7%	22.5%	9.8%	3.3%	100.0%
月に1～2日	38	129	60	38	7	272	
	14.0%	47.4%	22.1%	14.0%	2.6%	100.0%	
ほとんどない	61	171	101	59	26	418	
	14.6%	40.9%	24.2%	14.1%	6.2%	100.0%	
合計	211	533	280	144	51	1219	
	17.3%	43.7%	23.0%	11.8%	4.2%	100.0%	

N=1219, $\chi^2=33.389^{**}$, CramerV=0.083**

** p < .01

結果より、世間話をする頻度に関係なく変数程度の人が生活にある程度満足していることがわかる。よって、世間話の頻度と生活満足度は強い関係性がないと考えられる。

次に、近隣住民との世間話に関係する要因を調べるため、独立変数として「q5.r.近隣住民との世間話の頻度反転」を、従属変数として「q1.r.生活満足度反転」、「q4.r.地域の役に立ちたいか反転」、「q15.r.商店街での買い物頻度反転」、「q22.r.ボランティア頻度反転」、「q21a.マラソングダミー」、「q21b.高槻まつりダミー」、「q21c.ジャズダミー」、「q21d.高槻バルダミー」、「q21e.関大ダミー」、

「q71_median.居住年数(中央値)」、「q47.家族との会話時間」の11個の変数を入力して重回帰分析を行った。

表4 重回帰分析(従属変数:近所での世間話の頻度反転)

	B	標準誤差	β
(定数)	-0.08	0.20	
q1_r 生活満足度反転	0.05	0.04	0.04
q4_r 地域の役に立ちたいか反転	0.16 **	0.04	0.12
q15_r 商店街での買い物頻度反転	0.18 **	0.03	0.17
q22_r ボランティア頻度反転	0.34 **	0.07	0.15
マラソングダミー	-0.34	0.17	-0.06
高槻まつりダミー	0.01	0.08	0.00
ジャズダミー	0.00	0.08	0.00
高槻バルダミー	-0.09	0.20	-0.01
関大ダミー	-0.07	0.15	-0.02
居住年数(中央値)	0.01 **	0.00	0.19
q47 家族との会話時間	0.11 **	0.03	0.13
調整済み決定係数		0.16 **	
N		1040	

** p < .01

結果より、1%水準を表す**がついている「q4_r.地域の役に立ちたいか反転」、「q15_r.商店街での買い物の頻度反転」、「q22_r.ボランティア頻度反転」、「q47.家族との会話時間」、「q71_median.居住年数(中央値)」が有意だといえる。有意な変数のなかで、各独立変数の効果の大きさを比較すると、「q71_median.居住年数(中央値)」が最も効果が大きいと言える。続いて、「q15_r.商店街での買い物の頻度反転」、「q22_r.ボランティア頻度反転」、「q47.家族との会話時間」、「q4_r.地域の役に立ちたいか反転」の順に効果が大きい。以上のことから、高槻市民の近隣住民との世間話の頻度とは生活満足度との関係性がなかったことに対し、居住年数の多さも効果が大きい、時間的、精神的に余裕のある方が世間話の頻度に関係性があると考えられる。しかし、時間的余裕だと考えられるイベントへの参加には影響力はあまりないようだ。

5. 議論と考察

良好な交友関係を気づくためには相手のいいところを見つけるなどの努力が必要であろう。近隣住民とは必然的にコミュニケーションとらなければならないことも多い。ボランティアの参加頻度など時間と心に余裕のある人でないと良好な関係が築けず、生活満足度との関係性が薄かったのだろう。また、頻繁に世間話をしている人も、増していない人もある程度生活に満足している人が多かったため、今回挙げた例以外にさらに良い変数があったのかもしれない。しかし、今回分析した変数はどれも標準化係数が低く、強く関連しているものがなかったのではかにより強い関連しているものがあるかもしれない。仮説は肯定されなかった。

6. 文献

[1] 『青年期における人間関係の悩みに関する検討』高井範

http://ci.nii.ac.jp/els/110006966919.pdf?id=ART0008875771&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1390293439&cp=

[2] 『良好な人間関係を保つために』島田涼子

http://ci.nii.ac.jp/els/110006284837.pdf?id=ART0008303642&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1390293497&cp=

第 21 章 在宅型テレワーク志向とパソコン熟練度

藤田 和夫

1. はじめに

テレワークという働き方を知っているだろうか。社団法人日本テレワーク協会（2010）によるとテレワークとは、「ICT（情報通信技術）を活用した場所や時間にとらわれない柔軟な働き方」のことをいう。

場所や時間にとらわれず、個々に合った働き方が可能となるテレワークは、ワーク・ライフ・バランスをはかり、多様な就業機会を生み出すとされている。今後、少子高齢社会の影響から、労働力不足が懸念される日本において、皆が働きやすい社会の実現が期待されている。国としても推進策をとるなど、注目すべき働き方といえよう。

総務省 情報通信国際戦略局 情報通信経済室（2010）によると、テレワークには雇用型（在宅型、モバイル型、施設利用型）と自営型に分類することができるが、今回は在宅型に注目したい。この在宅型は企業や官公庁などの組織に雇われている従業員が自宅で仕事を行う働き方のことをいうが、平成 25 年 6 月 14 日に閣議決定された『世界最先端 IT 国家創造宣言』において「週 1 日以上終日在宅で就業する雇用型在宅型テレワーカー数を全労働者数の 10% 以上にし、また、こうした取組も含めた女性の就業支援等により、第一子出産前後の女性の継続就業率を 55%（2009 年においては 38.0%）、25 歳から 44 歳までの女性の就業率を 73%（2011 年においては 66.8%）まで高める。」という記述がみられることから、在宅型テレワークが注目されていることがうかがえる。

しかし、在宅型テレワークを行うには、パソコンをはじめとする情報通信機器に不慣れでは、仕事を行うことは困難ではないだろうか。ましてや、仕事をひとりで行うには、相当のパソコンスキルや経験が求められると思われる。

そこで筆者は今回の調査で、パソコンの利用期間およびパソコンスキルが人々の在宅型テレワーク志向にどう影響しているのかを分析することにした。

2. 先行研究と仮説

2.1 先行研究

国土交通省都市・地域整備局 都市・地域政策課（2011）によって発表された「平成 22 年度テレワーク人口実態調査 - 調査結果の概要 - 」において、テレワークをしていない人が、自宅でテレワークをするための条件（仕事をするための自身の環境）として最も重要と考えているのが「自身のパソコンなど仕事のスキル」であった。このことから、自宅で仕事を行う上で、パソコンスキルが在宅型テレワーク志向に影響していることがうかがえる。

2.2 仮説

[仮説 1] パソコン利用期間が長い人の方が、在宅型テレワークに積極的である

[仮説 2] パソコンスキルが高い人の方が、在宅型テレワークに積極的である

3. データ・変数

3.1 データ

2013 年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」をデータとする。

なお、調査対象者は 20 歳以上の 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000、有効回収数 1233 票、回収率は 61.7% である。

3.2 変数

今回の分析では「Q38 パソコン利用の有無と利用期間」, 「Q39 自分のパソコンスキル」, 「Q58 子どもの人数」, 「Q64 性別」, 「Q65 年齢」, 「Q74 収入」の 6 つの変数を利用し、分析しやすいように、以下のように変数を操作した。

[従属変数]

- ・在宅勤務をしたいか

「Q67 在宅勤務をしたいか」の回答項目である「1. したい」「2. まあしたい」を「したい (=1)」、「3. あまりしたくない」「4. したくない」を「したくない (=0)」の 2 カテゴリーに分類した。なお、「5. 既にしている」は欠損値処理を行った。

[独立変数]

- ・パソコン利用の有無と利用期間

「Q38 パソコン利用の有無と利用期間」に中央値処理を行い、「1. 0 年」、「2. 2.5 年」、「3. 7.5 年」、「4. 12.5 年」、「5. 17.5 年」の順に並び替えた。

- ・パソコンスキル

「Q39 自分のパソコンスキル」を反転させ、「1. 低い」、「2. やや低い」、「3. ふつう」、「4. やや高い」、「5. 高い」の順に並び替えた。

- ・子供の有無

「Q58 子どもの人数」の回答項目である、「1. 1 人」「2. 2 人」「3. 3 人」「4. 4 人」「5. 5 人以上」を「子どもあり (=1)」、「0. いない」を「子どもなし (=0)」とした。

- ・性別

「Q64 性別」から「男性 (=1)」、「女性 (=0)」とし、男性を「男性ダミー」とした。

- ・年齢

「Q65 年齢」に中央値処理を行い、「1. 25 歳」、「2. 35 歳」、「3. 45 歳」、「4. 55 歳」、「5. 65 歳」、「6. 75 歳」の順に並び替えた。

- ・世帯収入

「Q74 世帯収入」の質問項目である「1. 100 万円未満」「2. 100 万円～200 万円未満」を

「1. 200万円未満」、「3. 200万円～400万円未満」、「4. 400万円～600万円」を「2. 200万円以上600万円未満」、「5. 600万円～800万円未満」、「6. 800万円～1000万円未満」、「7. 1000万円～1500万円未満」、「8. 1500万円以上」を「3. 600万円以上」とし、3カテゴリに分類した。また、この3カテゴリに分類した変数を利用し、「1. 200万円未満」を「低所得者(=1)」、それ以外を「その他(=0)」とし、低所得者を「低所得者ダミー」とした。

同様に「2. 200万円以上600万円未満」を「中所得者(=1)」、それ以外を「その他(=0)」とし、中所得者を「中所得者ダミー」、「3. 600万円以上」を「高所得者(=1)」、それ以外を「その他(=0)」とし、高所得者を「高所得者ダミー」とした。

[分析方法] ロジスティック回帰分析

4. 分析

ロジスティック回帰分析の結果から表1のようにまとめることができる。

Nagelkerkeの疑似R2乗値は0.065であった。また、モデル検定はオムニバス検定を行い、有意($\text{model}\chi^2(\text{df}=7)=21.361^{**}$)であったため、このモデルには意味があるといえる。

まず、「パソコン利用の有無と利用期間」が有意性検定5%水準で有意であることがわかった。つまり、パソコン利用期間が1段階増えるごとに、在宅型テレワークを1.04倍志向していることがいえる。

次に、「子どもの有無」が有意性検定5%水準で有意であることがわかった。つまり、子どもがいる人は、子どもがいない人に比べて約1.6倍($\text{Exp}(B)=1.641$)在宅型テレワークを志向していることがいえる。

その他の変数は在宅型テレワーク志向に影響していなかった。

表1 在宅型テレワーク志向に関するロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
パソコン利用の有無と利用期間	.044 *	.021	1.045
パソコンスキル	.177	.113	1.194
子どもの有無	.496 *	.233	1.641
男性ダミー	.064	.209	1.066
年齢	-.012	.009	.988
低所得者ダミー	-.168	.383	.845
高所得者ダミー	-.270	.225	.763
定数	-1.164	.505	.312
Nagelkerke R2	0.065		
$\text{model}\chi^2(\text{df}=7)$	21.361 **		
N=439			

**p<.01, *p<.05

5. 議論と考察

分析の結果、仮説 2 は有意と認められなかったが、仮説 1 においては有意性検定 5%水準で有意であった。ゆえにパソコン利用期間が長い人の方が、在宅型テレワークに積極的であるといえる。しかし、変数の値が 1 段階増加しても、約 1.05 倍 ($\text{Exp}(B)=1.045$) にしかならないという結果を考えると、大きな影響力はないといえるかもしれない。

また、「子どもの有無」が有意性検定 5%水準で有意となっていることを考えると、育児と仕事の両立のために、在宅勤務をしたいと思っている人が多い傾向にあることが推測できる。つまり、政府が女性の就業支援として進める在宅型テレワークは、育児などで仕事から離れざるを得なかった人たちにとって有効に働くことが期待できるだろう。

6. 参考文献

[1] 国土交通省都市・地域整備局 都市・地域政策課 (2011) 『平成 22 年度テレワーク人口実態調査 - 調査結果の概要 - 』

(http://www.mlit.go.jp/crd/daisei/telework/22telework_jinko_jittai_gaiyo.pdf)

[2] 『世界最先端 IT 国家創造宣言』平成 25 年 6 月 14 日』

(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/pdf/20130614/siryou1.pdf>)

[3] 総務省 情報通信国際戦略局 情報通信経済室 (2010) 『テレワークの動向と生産性に関する調査研究報告書』

(http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h22_06_houkoku.pdf)

[4] 社団法人日本テレワーク協会 (2010) 『テレワーク白書 2009』社団法人日本テレワーク協会

URL は 2014/01/25 確認

第 22 章 世代別のコミュニケーション意識について

田和 あかり

1. はじめに

近年、スマートフォンの普及に乗じてソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)が急速に広がりを見せている。そのことについては『平成 23 年度版 情報通信白書』を見ても明らかである。その理由について考えてみた。若者は昼間通勤・通学して忙しいが友人との交流も取ろうと考える。その結果、毎日が多忙になり、寝不足が続いたりぼうっとすることが多くなったりするために、休日も疲れがとれずに家で続くことが多くなるのではないかと。そして、それでもなお友人と話したいと感じた場合に、直接会いに行くよりも SNS を使う方がずっと早く交流できる。そのようなことから SNS は便利な交流手段として普及したのではないかと私は考える。反対に主婦や高齢者は、そもそも SNS を使用することを習得しないことも考えられるが、時間に縛られることが若者に比べて少ないと言える。その事から友人と交流する場合にも相手が近くに住んでいれば直接会いに行ったり、また地域のサークルやボランティアに参加することで人と交流するために SNS を若者ほど用いることがないのではないかと考える。このような考えからコミュニケーション方法と市民の活動状況について考えていこうと思う。

2. 先行研究・仮説

先行研究より、時間に追われる学生はとくにボランティアへの参加が見られないことが分かっている。さらに上記にも記した通り、若い世代ほど SNS を使用する傾向にある。このことから、若い世代は人と直接対峙して話すよりも SNS による交流をせざるを得ないのではないかと、また、直接的な関わりを持つことから離れているために、地域の人とのコミュニケーションが図れるような行事には興味がないのではないかと。これについて、世代別のコミュニケーションに関する意識調査として以下のような仮説を立てるものとする。

1. 高槻市民は、どのような人々がどのようなコミュニケーション方法を重視するか。

仮説:若年層ほど情報端末によるコミュニケーションを重視し、

年齢が上がるほど直接対面してのコミュニケーションを重視する。

2. 高槻市民は、どのような人々が行事に関してどのように感じているか。

仮説:若年層ほど地域の行事・活動に関心がない。

3. データ・変数

3.1 データ

2013 年に調査した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」をデータとして用いる。調査対象は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は

1233 票、回収率は 61.7%である。

3.2 変数

変数は以下の種類の項目、および回答を使用した。

- ・「Q21 あなたは、高槻市内で行われていた次のような行事に参加したことがありますか。」
「高槻シティハーフマラソン」「高槻まつり」「高槻ジャズストリート」「高槻バル」「関西大学の行事(講演会や学園祭など)」の 5 項目に対して回答は「はい」「いいえ」の 2 段階であり、分析中ではダミー変数(「はい」=1 「いいえ」=0)を使用している。
- ・「Q37 あなたは情報収集の手段として、インターネット上のやりとりをどれくらい重視しますか。」
これに対する回答として「1.重視する」「2.少し重視する」「3.どちらともいえない」「4.あまり重視しない」「5.重視しない」の 5 段階である。分析中では、「1.重視しない」「2.あまり重視しない」「3.どちらともいえない」「4.少し重視する」「5.重視する」の順になるように反転させたものを使用している。
- ・「Q46 あなたは情報収集の手段として、人と直接会って話をするをどれくらい重視しますか。」
これに対する回答として「1.重視する」「2.少し重視する」「3.どちらともいえない」「4.あまり重視しない」「5.重視しない」の 5 段階である。分析中では、「1.重視しない」「2.あまり重視しない」「3.どちらともいえない」「4.少し重視する」「5.重視する」の順になるように反転させたものを使用している。
- ・「Q64 あなたの性別はどちらですか」
性別に関する回答は「男性」「女性」の 2 段階である。分析中では、ダミー変数(「男性」=1 「女性」=0)を使用している。
- ・「Q65 あなたの年齢をお答えください」
年齢に関する回答は「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」の 6 段階である。分析中に使用した変数はこれらそれぞれの中央値を取ったものとする。
- ・「Q71 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか」
居住年数に関する回答は「1.1年未満」「2.1年以上3年未満」「3.3年以上5年未満」「4.5年以上10年未満」「5.10年以上20年未満」「6.20年以上30年未満」「7.30年以上40年未満」「8.40年以上50年未満」「9.50年以上」の 9 段階である。分析中に使用した変数はそれぞれの中央値を取ったものとする。

4. 分析

3.1 コミュニケーションについて

まず、仮説「若年層ほど情報端末によるコミュニケーションを重視し、年齢が上がるほど直接対面してのコミュニケーションを重視する。」についての分析を行う。以下は「インターネットでの情報収集を重視するかどうか」と「年齢」「性別」「居住年数」(表 1)、「人との直接交流での情報収集を重視するかどうか」と「年齢」「性別」「居住年数」(表 2)で重回帰分析を行った結果である。

表 1 インターネットでの情報収集を重視するかの重回帰分析結果

	B	SE	β
(定数)	5.338**	.135	
男性ダミー	-.342**	.075	-.121
年齢(中央値)	-.041**	.003	-.463
居住年数(中央値)	-.001	.003	-.015
調整済み決定係数		.229**	
N		1100	

**p<.01, *p<.05

表 2 人との直接交流での情報収集を重視するかの重回帰分析結果

	B	SE	ベータ
(定数)	4.289**	.142	
男性ダミー	.089	.059	.044
年齢(中央値)	-.011**	.002	-.175
居住年数(中央値)	.003	.002	.054
調整済み決定係数		0.24**	
N		1143	

**p<.01, *p<.05

表 1 において、有意確率が 5%水準を満たしている変数は性別と年齢である。この結果から、男性より女性の方がインターネットでの情報収集を重視していることがわかる。また、年齢が上がるほどインターネットでの情報収集を重視しなくなるという結果が出た。

表 2 において、有意確率が 5%水準を満たしている変数は年齢である。この結果から、年齢が上がるほど人との直接交流での情報を重視しなくなるという結果が出た。

4.3 行事参加について

次に仮説「若年層ほど地域の行事・活動に関心がない。」についての分析を行う。以下は「Q21.A 高槻シティハーフマラソンの参加状況」(表 3)、「Q21.B 高槻まつり」(表 4)、「Q21.C 高槻ジャズストリートの参加状況」(表 5)、「Q21.D 高槻バルの参加状況」(表 6)、「Q21.E 関西大学の行事への参加状況」(表 7)の各変数と「Q64 年齢」「Q71 居住年数」「Q65 性別」について、それぞれロジスティック回帰分析を行った結果である。

表 3 高槻シティハーフマラソンのロジット分析結果

	B	SE	Exp(B)
年齢(中央値)	-.032**	.010	.969
居住年数(中央値)	.026*	.011	1.026
男性ダミー	.594*	.274	1.811
定数	-2.337	.470	.097
Nagelkerke R2	0.041		
modelx ² (df=8)	1.673**		
N=1138			

**p<.01, *p<.05

表 4 高槻まつりのロジット分析結果

	B	SE	Exp(B)
年齢(中央値)	-.037**	.005	.964
居住年数(中央値)	.018**	.005	1.018
男性ダミー	-0.196	.123	.822
定数	1.994	.240	7.344
Nagelkerke R2	.077		
modelx ² (df=8)	10.112**		
N=1173			

**p<.01, *p<.05

表 5 高槻ジャズストリートのロジット分析結果

	B	SE	Exp(B)
年齢(中央値)	-.006	.005	.994
居住年数(中央値)	.006	.005	1.006
男性ダミー	-.248	.126	.781
定数	-.426	.228	.653
Nagelkerke R2	.008		
modelx ² (df=8)	13.053**		
N=1157			

**p<.01, *p<.05

表 6 高槻バルのロジット分析結果

	B	SE	Exp(B)
年齢(中央値)	-.044**	.012	.957
居住年数(中央値)	-.001	.013	.999
男性ダミー	.339	.338	1.404
定数	-1.341	.545	.262
Nagelkerke R2	.065		
modelx ² (df=8)	12.979**		
N=1129			

**p<.01, *p<.05

表 7 関西大学の行事のロジット分析結果

	B	SE	Exp(B)
年齢(中央値)	.000	.009	1.000
居住年数(中央値)	.007	.009	1.007
男性ダミー	-.412	.251	.662
定数	-2.740	.447	.065
Nagelkerke R2	.009		
modelx ² (df=8)	5.379**		
N=1143			

**p<.01, *p<.05

なお、表 5 高槻ジャズストリートの結果と表 7 関西大学の行事の結果においては、有意確率が 5%水準を満たすものがなかったため言及しないものとする。

表 3 高槻シティハーフマラソンの結果において、5%水準を満たして有意であったものは年齢、居住年数、性別である。このことから次のようなことがわかった。年齢において、値が 1 段階増加するごとに参加傾向は約 0.97 倍、すなわち約 3%減少する傾向にある。また、居住年数において、値が 1 段階増加するごとに参加傾向は約 1.02 倍、すなわち約 2%増加する傾向にある。性別においては男性が女性より約 1.8 倍、参加率が高い。

表 4 高槻まつりの結果において、5%水準を満たして有意であったものは年齢、居住年数である。このことから次のようなことがわかった。年齢において、年齢の値が 1 段階増加するごとに参加傾向は約 0.96 倍、すなわち約 4%減少する。居住年数において、居住年数の値が 1 段階増加するごとに参加傾向は約 1.02 倍、すなわち約 2%増加する。

表 6 高槻バルの結果において、5%水準を満たして有意であったものは年齢である。このことから、年齢の値が 1 段階増加すると約 0.96 倍、すなわち約 4%減少する。

5. 議論と考察

分析結果より、インターネットによるコミュニケーションであっても人との直接交流であっても若年層の方が重視することがわかった。さらに、今回の分析で調べたような行事であっても若年層の方が積極的に参加している。このことから、仮説が完全に誤っていることがわかった。

この結果について、人との直接交流におけるコミュニケーションにおいては従来からの方法であり、これを重視しないと考える人は少ないのではないかと感じた。そのため、質問を「どう考えるか」ではなく、「実際にどうしているか」という行動を質問した方が有効であったのではないかと考えた。

さらに、若年層の方が行事への参加率が高いということに関しては、第1章で述べたように若者は友人と遊ぶことも含めて多忙であるために、友人と遊ぶための内容の一つとしてこれらの行事への参加も増えたのではないかと考えられる。よって、若者の詰まった予定の中に組み込まれていたことが予想される。一方で、すべてに見られた訳ではないが、居住年数が長いほど行事への参加率も高くなる傾向があるようである。よって居住年数が長いことから、高槻市のことをよく知っている、または高槻市に愛着がある人ほど行事に参加することがわかった。つまり、これらの要因を掛け合わせれば、居住年数の長い若年層ほど行事に参加するのではないかと考えた。

従って、高槻市において、若年層ほどインターネットによる交流においても直接交流においても積極的であり、行事への参加も積極的であるという結果が出た。

6. 文献

[1]若年層の生活文化調査

http://ci.nii.ac.jp/els/110004627503.pdf?id=ART0007339115&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1369736072&cp=

[2] ソーシャルメディアの可能性と課題

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/pdf/n3020000.pdf>

[3] 国民生活白書

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h12/1110wp-seikatsu-s.pdf>

第 23 章 高槻市内における違法駐輪の影響と その対策の必要性

竹田 幹

1. はじめに

高槻市内の一部の地域では違法駐輪が目立つイメージがある。とくに高槻のセンター街ではそれが顕著に表れている。例えば、センター街のマクドナルドは違法駐輪のせいで店前に異常な量の自転車が並び、道の幅が狭くなっている状態をよく目にする。これに対し高槻市民はどのように感じているのか、そして違法駐輪の規制を強めるべきなのかどうかを調べることを目的とする。

2 先行研究と仮説

2.1 先行研究

江嶋啓太氏の「スプロール期に開発された高槻市の住宅地における違法・地域許容建築群の研究」において、自転車・単車の道路空間への突出に関して、「区画面積の大きな住宅地では前面道路に突出している例はごく少ないが、区画面積の小さな住宅では平均 19%の突出がみられる。」とある。本来はみだしてはならないスペースに約5分の1という値はかなり大きく感じた。

2.2 仮説

以上のことから違法駐輪がやや高い割合で行われていることから、これが何かしらの障害をもたらすものとする。そこでこれらを解決するきっかけとなるための仮説をあげる。

仮説『違法駐輪に対しあまりよくないイメージを持っている人たちほど、違法駐輪に対する政策の強化を望んでいる』

3 データ・変数

3.1 データ

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査(平成 25 年度市民意識調査)
調査対象は無作為に選ばれた 20 歳以上の高槻市民で、計画標本サイズ 2000 人、有効回収数 1233 人、回収率は 61.7%であった。

3.2 変数

変数として、「q17a 違法駐輪が交通の妨げになる」、「q17b 違法駐輪が美観を損なう」、「q17c 違法駐輪が高槻市のイメージを下げる」、「q18 違法駐輪への政策の強化が必要である」、「q64 性別」、「q65 年齢」、「q74 世帯収入」を用いた。なお、分析を容易にするために q17a、q17b、q17c、q18 は値の反転、q65、q74 は中央値の操作を行っている。また職業、学歴、性別をダミーとして設定している。

・q17a,q17b,q17c,q18 の反転

1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.ややそう思う、4.そう思う

・ q65 の中央値

1.20代→25、2.30代→35、3.40代→45、4.50代→55、5.60代→65、6.70代→75

・ q74 の中央値

1.100万円未満→50、2.100万円～200万円未満→150、3.200万円～400万円未満→300、
4.400万円～600万円未満→500、5.600万円～800万円未満→700、6.800万円～1000万円未
満→900、7.1000万円～1500万円未満→1250、8.1500万円以上→1750、9.わからない→欠損
値

・職業ダミー 「自営業」、「常勤の勤め人」、「その他職業」

・学歴ダミー 「初等学歴」、「中等学歴」、「高等学歴」

・性別ダミー 「男性」、「女性」

4 分析

4.1 違法駐輪に対するイメージ

まず、違法駐輪に対するイメージを度数分布で作成した。

表 1 違法駐輪が交通の妨げになる反転

	度数	パーセント
そう思わない	30	2.5
あまりそう思わない	278	23.0
ややそう思う	445	36.8
そう思う	457	37.8
合計	1210	100.0

表 2 違法駐輪が美観を損なう反転

	度数	パーセント
そう思わない	27	2.2
あまりそう思わない	261	21.6
ややそう思う	490	40.6
そう思う	429	35.5
合計	1207	100.0

表 3 違法駐輪が高槻市のイメージを下げる反転

	度数	パーセント
そう思わない	38	3.1
あまりそう思わない	333	27.6
ややそう思う	472	39.1
そう思う	364	30.2
合計	1207	100.0

違法駐輪に対するイメージは一様にそう思う、ややそう思うと感じている人が約 7 割をしめており違法駐輪をよく思わない人が多数であることがわかる。

4.2 違法駐輪に対する考え方と政策の必要性の関連性の抽出

次に仮説の分析として各々の違法駐輪に対するイメージと違法駐輪への政策の必要性のクロス表を作成した。

表 4 違法駐輪への政策強化が必要か反転 と 違法駐輪が交通の妨げになる反転 のクロス表

			違法駐輪が交通の妨げになる反転				合計
			そう思 わない	あまりそう 思わない	ややそ う思う	そう思 う	
			度数	度数	度数	度数	
違法駐輪への政策強化が必要か	そう思わない	度数	12	20	8	3	43
		強化が必要かの %	27.9%	46.5%	18.6%	7.0%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	13	189	105	27	334
		強化が必要かの %	3.9%	56.6%	31.4%	8.1%	100.0%
	ややそう思う	度数	3	56	260	127	446
		強化が必要かの %	.7%	12.6%	58.3%	28.5%	100.0%
	そう思う	度数	2	11	70	299	382
		強化が必要かの %	.5%	2.9%	18.3%	78.3%	100.0%
	合計	度数	30	276	443	456	1205

N=1205 $\chi^2=752.035^{**}$, CramerV=0.456^{**},**p<.01, *p<.05

表 5 違法駐輪への政策強化が必要か反転 と 違法駐輪が美観を損なう反転 のクロス表

			違法駐輪が美観を損なう反転				合計
			そう思 わない	あまりそう 思わない	ややそ う思う	そう思 う	
			度数	度数	度数	度数	
違法駐輪への政策強化が必要か	そう思わない	度数	18	15	9	1	43
		強化が必要かの %	41.9%	34.9%	20.9%	2.3%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	7	188	113	25	333
		強化が必要かの %	2.1%	56.5%	33.9%	7.5%	100.0%
	ややそう思う	度数	1	47	286	110	444
		強化が必要かの %	.2%	10.6%	64.4%	24.8%	100.0%
	そう思う	度数	1	9	80	292	382
		強化が必要かの %	.3%	2.4%	20.9%	76.4%	100.0%
	合計	度数	27	259	488	428	1202

N=1202 $\chi^2=983.991^{**}$, CramerV=0.522^{**},**p<.01, *p<.05

表 6 違法駐輪への政策強化が必要か反転 と 違法駐輪が高槻市のイメージを下げる反転 のクロス表

		違法駐輪が高槻市のイメージを 下げる反転				合計	
		そう思 わない	あまりそう 思わない	ややそ う思う	そう思 う		
		そう思わな い	度数	20	19		3
	強化が必要か の %	46.5%	44.2%	7.0%	2.3%	100.0%	
違法駐輪へ の政策強化 が必要か	あまりそう 思わない	度数	15	220	87	12	334
		強化が必要か の %	4.5%	65.9%	26.0%	3.6%	100.0%
	ややそう思 う	度数	2	81	291	70	444
		強化が必要か の %	.5%	18.2%	65.5%	15.8%	100.0%
	そう思う	度数	1	11	88	281	381
		強化が必要か の %	.3%	2.9%	23.1%	73.8%	100.0%
合計	度数	38	331	469	364	1202	

N=1202 $\chi^2=1047.281^{**}$, CramerV=0.538 ** , $^{***}p<.01$, $^{*}p<.05$

全ての表での共通点として駐輪へのイメージとそれへの対策の必要性が同じ回答である人の割合が大きい。中でも両方ともそう思うと答える人がどの質問でも最も度数が多い、もしくは 2 番目に多く違法駐輪に悪いイメージを持っている人が圧倒的に多いことがわかる。

また、これらのクロス表は全て有意であるため、違法駐輪に対するイメージが悪い人ほど政策を必要と感じ、悪いと思わない人ほど政策は特に必要でないと感じる傾向にあることがわかる。

4.3 違法駐輪への政策の強化の必要性を従属変数とした重回帰分析

次に政策の強化の必要性を従属変数として重回帰分析を行った。以下にその結果を示す。

全ての違法駐輪へのイメージが政策の強化の必要性と正の相関があり、その中でも「高槻市へのイメージを下げる」が政策の強化に対してベータ値が 0.456 と影響力が強いということがわかる。また年齢も有意となっており 0.94 わずかだが正の相関があるので、年齢が高いほど政策の強化が必要と感じる人が多い。

なお他の独立変数は有意にはならなかった。

表7 違法駐輪への政策の強化の必要性を従属変数とした重回帰分析

	標準化されていない係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
(定数)	.136	.130			1.044	.297
q7a 違法駐輪が交通の妨げになる反転	.214	.035	.207		6.155	.000
q7b 違法駐輪が美観を損なう反転	.143	.045	.133		3.203	.001
q7c 違法駐輪が高槻市のイメージを下げる反転	.466	.040	.456		11.744	.000
年齢(中央値)	.005	.001	.094		3.727	.000
常勤の勤め人ダミー	.138	.081	.076		1.710	.088
その他職業ダミー	.037	.077	.021		.486	.627
初等学歴ダミー	.087	.076	.025		1.145	.252
高等学歴ダミー	-.040	.040	-.023		-.983	.326
男性ダミー	.006	.039	.003		.148	.883
世帯収入(中央値)	-1.176E-05	.000	-.005		-.215	.830
調整済み R2 乗		.563				

a. 従属変数 q18 違法駐輪への政策強化が必要か

5 考察

上記の分析により、『違法駐輪に対しあまりよくないイメージを持っている人たちほど、違法駐輪に対する政策の強化を望んでいる』という仮説は支持されるということがわかる。また高年齢の人ほどその意識は高く、彼らに対して違法駐輪の存在が障害となっていることは間違いないだろう。違法駐輪に対して政策の強化がされることを市民は望んでおり、今後高槻市は違法駐輪への対策の強化を推し進めることでわずかながら市民の生活満足度の向上が期待できる。

6 参考文献

[1] 江嶋啓太・藤井遊也・森本信明,2011,『スプロール期に開発された高槻市の住宅地における違法・地域許容建築群の研究：その 1 違法・グレイな土地利用の実態』日本建築学会大会学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題

第 24 章 学生のバスのマナーとバスの満足感について

上田 規子

1. はじめに

近年、日本人のモラルの低下が問題視されている。公共交通機関内で、平気で大きな声を出して電話で話す人、そばに高齢者や体の不自由な人がいても、席を譲らない人。言い出せばきりがなが、テレビや雑誌で、このような悪いマナーについて取り上げられているのをよく見かける。

『「よくあることだから」やってもいいのか?』に記されている、2006年7月にNHK放送文化研究所で実施された「日本人のモラルに関する意識調査」では、日本人のモラルについて、77%の人が「低い」と答え、また、58%の人が「10年前と比べて、日本人のモラルが低くなった」と答えた。このように、日本人のモラルは悪化していると感じている人がほとんどであることがわかる。

では、日本人からもう少し視野を狭めてみるとどうであろうか。モラルはマナーと意味が並列しているものとして置き換え、調べた結果、日本人と同様に、若者のマナーに対する論文が多く見付き、その内容として若者のマナー向上を促すものがほとんどを占めていたことがわかった。つまり、日本人のモラルと同様に、若者のモラルが問題視されているということである。

「大学生の意識とマナー(特集 学生とマナー)」では、「近頃の学生のマナーはなっていない。」、「消費社会でわがままに育った大学生は、自己中心的で規律を欠いた行動を取り、マナー違反は日常茶飯事である」など、大学生のマナーに対する不満が述べられている。また、個人的な体験ではあるが、通学時に利用するバスで、若者のモラルを疑うことがよくある。席を譲ろうとする学生が少ない、乗り込もうとする人がいても、前に詰めようとしていないなど、確かに少し配慮に欠けていると思うことが多い。

しかしながら、このように感じるのは「最近の若者は・・・」という社会風潮から、目立って見える可能性はないだろうか。そこで、実際に高槻市では市民は若者のマナー、あるいは若者以外のマナーについて不満を感じているのか、また、もし不満を感じているのなら、それは生活にどう影響しているのかを検証したいと考える。

2. 先行研究・研究方法・仮説

2.1 先行研究

2012年に、日本教育社会学会大会発表要旨集録に掲載された「子どものマナーと作法：小中学生および保護者への質問紙調査を中心に」では、小中学生とその保護者のマナー意識調査が行われている。学生は、マナーを「身につけている」「大切に感じている」等、肯

定的な意見をもつ一方で、半数程の学生はマナーのことをやかましくいう社会は窮屈である、と意見していることから、中にはマナーは大切であるけれども、大切にすぎるがゆえに、不自由さを感じる学生もいることがわかった。また、「大人はマナーを守っている」という質問に回答した中学生は半数以下であったのに比べ、保護者は9割以上が「マナーを守っている」答えたことから、マナーを守っているつもりでも、他人視点でみると、守れていない大人がいる可能性が浮上してきた。

また、若者のマナーに関する論文は多くあるものの、学生の意識を高めるもの、または「気づかせる」からはじめるマナー教育」のような、マナーが悪い学生に対する教育指導論文がほとんどである。このような論文は、「若者はマナーが悪い」と前提条件に置かれたものであり、「若者はマナーを守っているか」という内容ではない。また、「子どものマナー」と作法：小中学生および保護者への質問紙調査を中心に」では、マナーに対する意識調査であるが、あくまで自己判断であり、実際の様子がわかりにくい。

以上2つの点を踏まえて、当研究では「他人からみて、若者はマナーを守れているか」「大人はマナーを守れているか」ということに重点を置いて研究を進めたいと考える。

2.2 研究方法

まず、多くの論文で取り上げられている内容の前提条件となる「若者はマナーを守っていない」ことが高槻市でも当てはまるかどうかを検証する。それに伴い、先行研究で浮上した問題点、「大人はマナーを守れているか」ということを検証する。これらは市民が自身の評価を行うのではなく、あくまで他人（若者、大人）のマナーに対する評価をしてもらうように質問を設けた。また、その結果を基に、若者、あるいは大人の市民のマナーが生活にいかに関与しているかを、クロス表で分析していきたいと考える。

マナーといえども、状況としては学校内、ビジネス、公共交通機関内、対象としては他人、友人など、タイプが様々である。今回はマナーが顕著に表れやすい公共交通機関に設定し、なおかつ、高槻市民により密着しているという点で、状況を高槻市営バス内と限定することにした。したがって、「生活にいかに関与しているか」は、「高槻市営バスへの満足感への影響」に置き換えて分析していく。また、バスへの満足感に影響すると考えられるいくつかの要因を含め、その中でマナーがどれほどの割合で影響しているかを重回帰分析によって分析する。

また、「若者」や「大人」という対象の年齢の差をコントロールするため、この調査では「若者」を「学生」に限定した。以下より、「若者」を「学生」に、「大人」を「学生以外の乗客」に置き換えて述べることにする。

2.3 仮説

研究方法をもとより、以下のように順を追って仮説を設定する。

仮説 A 学生は学生以外の乗客よりもマナーを守れていない。

対立仮説 A 学生以外の乗客は学生よりもマナーを守れていない。

仮説 B 1 学生のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響する。

対立仮説 学生のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響しない。

仮説 B 2 学生以外の乗客のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響する。

対立仮説 学生以外の乗客のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響しない。

仮説 C 学生のマナーは、学生以外の乗客のマナーよりもバスの満足度に影響する。

対立仮説 C 学生以外の乗客のマナーは、学生のマナーよりもバスの満足度に影響する。

3. データ・変数

3.1 データ

データについては、平成 25 年度に行われた、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を利用した。調査対象者は、無作為に選ばれた、高槻市に居住する 20 歳以上の男女である。対象者数 2,000 人、有効回収数は 1,233、回収率は 61.7%であった。

3.2 変数

変数は、主に以下の 3 種類の質問項目を使用した。

Q9_B バスに対する満足度

1. 不満
2. やや不満
3. どちらともいえない
4. やや満足
5. 満足 (反転後)

Q12 生徒・学生はバスでマナーを守っているか

1. そう思わない
2. あまり思わない
3. どちらともいえない
4. やや思う
5. そう思う (反転後)

Q13 生徒・学生以外の乗客はバスでマナーを守っているか

1. そう思わない
2. あまり思わない
3. どちらともいえない
4. やや思う
5. そう思う (反転後)

次に、満足度の要因として考えられる重回帰分析で用いる独立変数を述べる。

Q65 年齢

1. 若年層 (20~30 代)
2. 中年層 (40~50 代)
3. 高年層 (60~70 代以上) (中央値処理済)

Q64 性別

1. 男性
2. 女性

ここでは、女性ダミー変数を新たに作成し、重回帰分析に用いた。

Q11 バスの利用頻度

- 1.利用しない 2.年に1~2回 3.月に1~2回 4.週に1~2日 5.週に3~4日 6.ほぼ毎日
(反転後)

重回帰分析で用いるすべての変数は、数字が大きくなればなるほど満足度、あるいはマナーを守っているという見方が高くなるように、またはバスの利用頻度が高くなるようにコードを反転させている。

また、仮説 A の検証で用いる変数「市民のバスのマナー」は、変数、を足しあわせた数値をもとにしている。数値は 2~10 で表され、数値が大きければ大きいほど「マナーを守っている」と感じる人が多く、数値が小さければ小さいほど「マナーを守れていない」と感じている人が多いことを示している。

4. 分析

4.1 仮説 A の検証

まず、学生のマナーと学生以外の乗客のバスのマナーを足しあわせた数値により、高槻市民全体のバスのマナーについての結果を示す。

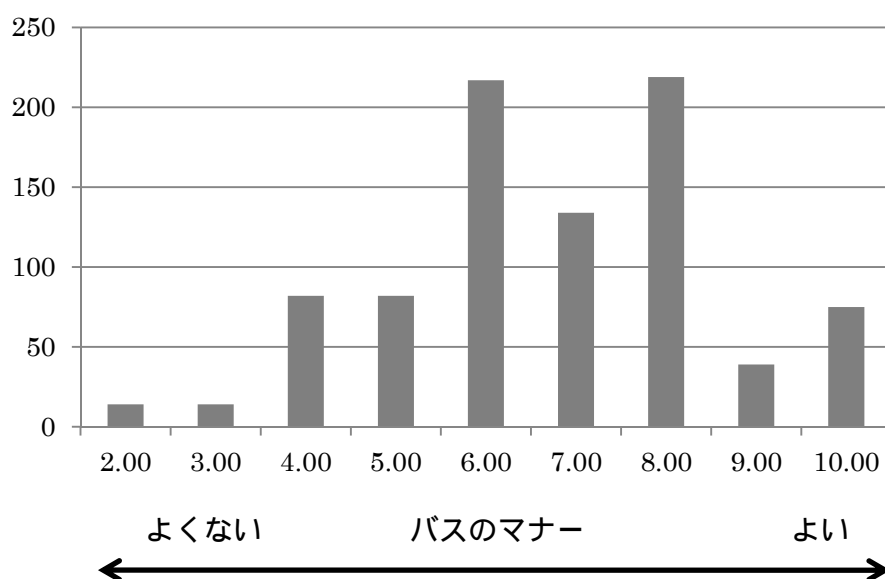


図1:市民のバスのマナー

図 1 から、5 以上の数値が多いとして、高槻市民のバスのマナーは、よいと感じている人が多いことがわかる。

ではここから学生・学生以外の乗客に分けて、結果を示す。

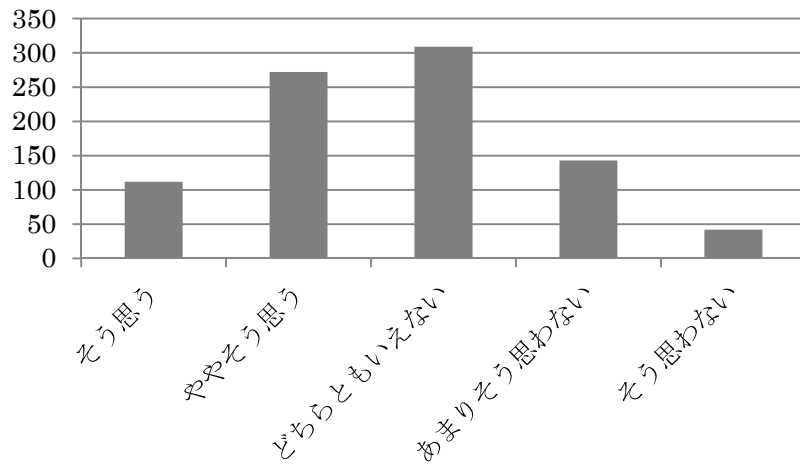


図2:学生のバスのマナー

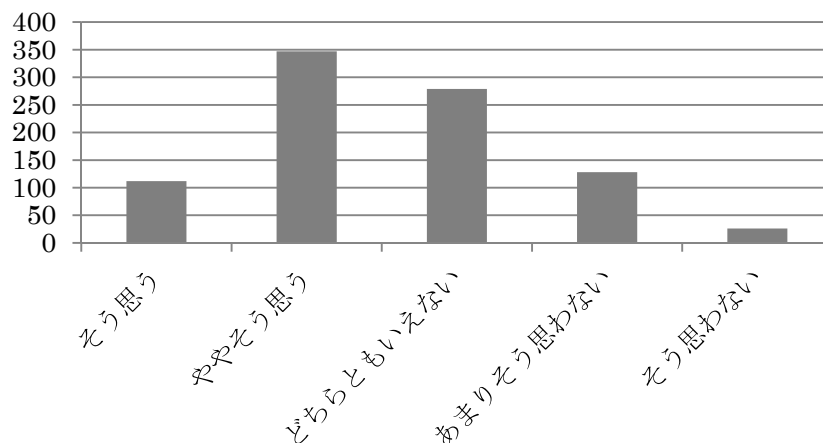


図3:学生以外の乗客のバスのマナー

全体的にみると、どちらもマナーを守っていると答えている人が多い。学生以外の乗客のバスのマナーについて、「守っている」と答えている人が多いが、学生のバスのマナーに対しては、やや「守っていない」と感じている人が多い。したがって、対立仮説 A は棄却され、仮説 A「学生は学生以外の乗客よりもマナーを守れていない」は支持されたことがわかった。

4.2 仮説 B の検証

次に、仮説 B 1、B 2 の検証を行う。

ここでは、クロス表を作成しカイ二乗検定を行った上で、学生のバスのマナー、あるいは学生以外の乗客のバスのマナーがバスへの満足度に影響しているかということを検証する。

表1: 学生はバスの中でマナーを守っているか と バスの満足度 のクロス表

		q/バス満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
学生は バスの中で マナーを 守っているか	そう思う	度数	67	26	4	11	2	110
		学生マナーの %	61%	24%	4%	10%	2%	100%
	ややそう思う	度数	87	111	28	34	12	272
		学生マナーの %	32%	41%	10%	13%	4%	100%
	どちらとも いえない	度数	65	119	60	46	19	309
		学生マナーの %	21%	39%	19%	15%	6%	100%
	あまりそう 思わない	度数	36	47	21	30	9	143
		学生マナーの %	25%	33%	15%	21%	6%	100%
	そう思わない	度数	7	17	9	4	5	42
		学生マナーの %	17%	41%	21%	10%	12%	100%
	合計	度数	262	320	122	125	47	876
		学生マナーの %	30%	37%	14%	14%	5%	100%

N=889 $\chi^2=88.428^{**}$, CramerV=0.159**, **p<0.01

表2: 学生以外の乗客はバスのマナーを守っているか と バスの満足度 のクロス表

		バスの満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
学生以外の 乗客は バスの中で マナーを 守っているか	そう思う	度数	62	26	6	14	3	111
		学生以外マナーの %	56%	23%	5%	13%	3%	100%
	ややそう思う	度数	106	146	42	42	9	345
		学生以外マナーの %	31%	42%	12%	12%	3%	100%
	どちらとも いえない	度数	67	89	48	56	19	279
		学生以外マナーの %	24%	32%	17%	20%	7%	100%
	あまりそう 思わない	度数	22	54	23	16	13	128
		学生以外マナーの %	17%	42%	18%	13%	10%	100%
	そう思わない	度数	6	6	5	5	4	26
		学生以外マナーの %	23%	23%	19%	19%	15%	100%
	合計	度数	263	321	124	133	48	889
		学生以外マナーの %	30%	36%	14%	15%	5%	100%

N=876 $\chi^2=84.811^{**}$, CramerV=0.154**, **p<0.01

表1、2ともに有意性検定は1%水準で有意であり、学生のマナーと学生以外の乗客のマナーはバスへの満足度に関係していることがわかった。

どちらも、「マナーを守れている」と感じる人がバスを満足に感じている傾向が顕著に表れており、次に行う重回帰分析で、乗客のマナーがバスへの満足度の要因に大きく関わっていることが期待できる。

以上の結果より、対立仮説 B - 1、B - 2は棄却され、仮説 B - 1「学生のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響する」、B - 2「学生以外の乗客のマナーの善し悪しの見方は、バスへの満足感に影響する」は支持された。

4.3 仮説 C の検証

ここでは、重回帰分析を用いて、学生のマナー・学生以外の乗客のマナーがどれほどバスへの満足度に関係しているかを検証する。

表3： バスへの満足度の重回帰分析

	B	SE	
(定数)	3.537 **	.196	
学生のマナー	-.114	.047	-.100
学生以外のマナー	-.199 **	.050	-.163
女性ダミー	.154	.079	.064
バス利用頻度	-.010	.033	-.010
年齢	-.116	.052	-.075
調整済み決定係数		0.067 **	
N		858	

**p<0.1, *p<0.5

バスへの満足度に関わる要因として、学生・学生以外の乗客のマナーを含め、性別、年齢、バスの利用頻度の5項目をあげた。その上で重回帰分析を行った結果、有意であったのは学生以外の乗客のマナーであった。対して、学生のマナーは満足度に影響していなかったことがわかった。

以上の結果により、仮説 C は棄却され、対立仮説 C 「学生以外の乗客のマナーは、学生のマナーよりもバスの満足度に影響する」が支持されることとなった。

また、有意であった、学生以外の乗客のマナーについて、標準化係数()に基づいて述べる。この標準化係数は、マイナスであることから、「学生以外の乗客の市民がバスのマナーを守っていないと感じられるほど、バスの満足度が上がる」ことがわかる。

5. 考察

今回の研究から、全国で若者のマナーの悪化が問題視されているのと同様に、高槻市では学生のマナーが、学生以外の乗客のマナーに比べ、あまり守れていないという結果になった。しかし、図 1、2 のように、学生と学生以外の乗客の市民のマナーの差は顕著に出ているわけではなかった。つまり、仮説 A 「学生は学生以外の乗客の市民よりマナーを守れていない」は支持されたものの、それが「学生はマナーが守れていない」という結論には繋がらないということである。したがって、はじめに述べたような「若者は学生のマナーが守れていない」という社会風潮は、高槻市では当てはまらないということがわかる。

また、4.2 で行ったクロス分析では、マナーは学生かどうかに関わらず、少なくとも市民のバスへの満足度に関係していることがわかり、マナーを向上させることによって、市民がもつバスへのイメージはよりよくなる可能性があると考えられる。

今回は学生のマナーとバス満足度を測定する目的で分析したが、重回帰分析を行った結果では、学生のマナーよりも学生以外の乗客のマナーの方が満足度に影響することがわかった。さらに新たな変数を用いて、学生以外の乗客のバスマナーとバス満足度を分析することが今後の課題である。

また、今回は他人からみた市民のバスのマナーについて分析を行ったが、これに加え、

学生を含む、市民自身が守っているマナーについて、自身の評価を行う質問を設けることで、学生と学生以外の乗客とのお互いに対する分析を行うことができ、より深くマナーに関する意識調査を行うことができるのではないか。今後は、今回の経験を生かし、これらの課題を解決できるよう、さらに突き詰めた調査を行いたい。

6. 文献

- [1] 酒井芳文,2006,『「よくあることだからやってもいい」のか? ~日本のモラルに関する意識調査から~』
- [2] 武内清,浜島幸司,2010,『大学生の意識とマナー』
- [3] 加野芳生,村上光朗,西本佳代,古賀正義,越智康詞,松田恵示,2012,『子どものマナーと作法
小中学生および保護者への質問紙調査を中心に』
- [4] 兒島尚子,2012,『気づかせるマナー教育』

第 25 章 地域づくりと地域への愛着

松田 孝紀

1. はじめに

日本は平均寿命の伸びや出生率の低下により少子高齢化が急速に進んでいる。人口は 2005 年をピークに下がり続けており、2015 年には人口の 4 分の 1 が 65 歳以上の高齢者となっている。それと同時に介護サービスの事業所の数も増えている。厚生労働省のデータの介護サービスの事業所数をみると、平成 16 年は訪問介護が 17,274 事業所、通所介護が 14,725 事業所であるが平成 18 年になると訪問介護が 20,948 事業所、通所介護が 19,409 事業所までに増えている。

また、日本は人口が都市に集中している国でもある。しかも年々、地方を離れる人が増えており地方の過疎化が進んでいる。

そこで私はすんでいる土地を離れる人は医療や介護などに不満があり出ていくのではないかと考え、人口の多い都市部での医療や介護の満足度と住み続けたさを調べたいと思う。

2. 先行研究と仮説

先行研究「老後も住み続けることができる地域づくり」に関する研究(高野大秋・玉井麻美・西尾幸一郎・水野弘之 2003)では福祉が充実しているスウェーデンでも、中山間地域では生活支援の手が届いておらず、高齢になると住み慣れたところから移るという事実があり、その土地にとどまってもらおうと老後も住み続けてもらう地域づくりに取り組んでいる。これは高齢者住宅作りやホームヘルプサービス、交通空間設備など高齢者の方はもちろん、これから高齢者になる人のために住みやすい地域を作ることである。

日本の人口の多い高槻市で高齢者の住みやすさ、その中でも医療、交通満足度と介護サービスが住み続けたいかの関連があるか今回調べていきたいと思う。さらに、実際に高槻市に長く住み続けている人は医療、交通満足度と介護サービスとも関連があるか調べていきたい。

仮説 1:高槻市に住み続けたいと思っている人と長く住み続けている人ほど医療満足度が高い。

仮説 2:高槻市に住み続けたいと思っている人と長く住み続けている人ほど介護サービスが頼りになると考えている。

仮説 3:高槻市に住み続けたいと思っている人と長く住み続けている人ほど市営バス運行本数の満足度が高い。

3. データと変数

3.1 データ

用いたデータは2013年に実施した20歳以上85歳未満の男女を対象に行った「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。計画標本サイズは2000、有効回収数1233(回収率61.7%)である。

3.2 変数

Q3.あなたは現在住んでいる地域にどのくらい住み続けたいと思いますか。

選択肢は「1.ずっと住み続けたい」「2.住み続けたい」「3.まあ住み続けたい」「4.どちらともいえない」「5.機会があれば引越したい」である。

Q9c.医療満足度

選択肢は「1.満足」「2.やや満足」「3.どちらともいえない」「4.やや不満」「5.不満」である。

Q10.高槻市営バス運行本数満足度

選択肢は「1.満足」「2.やや満足」「3.どちらともいえない」「4.やや不満」「5.不満」である。

Q44.高槻市内にある介護サービスは頼りになると思いますか。

選択肢は「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.どちらともいえない」「4.あまりそう思わない」「5.そう思わない」である。

Q71 高槻市に現在までどのくらいお住まいですか。

選択肢は「1.1年未満」「2.1年以上3年未満」「3.3年以上5年未満」「4.5年以上10年未満」「5.10年以上20年未満」「6.20年以上30年未満」「7.30年以上40年年未満」「8.40年以上50年未満」「9.50年以上」の9段階であるが「1.1~10年未満」「2.10~30年未満」「3.30年以上」の3段階を利用した。

この5つの変数を主に使っている。なお、5つとも無回答の答えは欠損値とし、処理して分析を行っている。

4. 分析

表1 地域に住む続けたいと医療機関満足度のクロス表

		医療満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
地域に 住み続け たいか	ずっと住み 続けたい	度数	131	110	41	17	1	301
		割合	43.7%	36.7%	13.7%	5.7%	0.3%	100.0%
	住み続け たい	度数	111	179	72	18	4	383
		割合	28.9%	46.6%	18.8%	4.7%	1.0%	100.0%
	まあ住み 続けたい	度数	56	129	75	40	9	309
		割合	18.1%	41.7%	24.3%	12.9%	2.9%	100.0%
	どちらとも いえない	度数	13	42	40	21	6	122
		割合	10.7%	34.4%	32.8%	17.2%	4.9%	100.0%
	機会があれば 引っ越したい	度数	21	31	20	18	7	97
		割合	21.6%	32.0%	20.6%	18.6%	7.2%	100.0%
合計	度数	332	491	248	114	27	1212	
	割合	27.4%	40.5%	20.5%	9.4%	2.2%	100.0%	

N=1212 X²=135.75** CramerV=0.167**

**p<.01 *p<.05

分析の結果、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。また表から医療満足度で「満足」と答えている人で 1 番割合が高いのは「ずっと住み続けたい」で、次に高いのは「住み続けたい」であった。反対に「不満」と答えている人で 1 番割合が高いのは「まあ住み続けたい」で次に高かったのは「機会があれば引っ越したい」であった。

表2 どのくらい住み続けているかと医療満足度のクロス表

		医療機関満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
高槻市に どのくらい 住み続けて いるか	1~10年	度数	41	56	59	22	3	181
	未満	割合	22.7%	30.9%	32.6%	12.2%	1.7%	100.0%
	10~30年	度数	106	153	67	41	8	375
	未満	割合	28.3%	40.8%	17.9%	10.9%	2.1%	100.0%
	30年以上	度数	182	278	118	49	17	644
		割合	28.3%	43.2%	18.3%	7.6%	2.6%	100.0%
合計	度数	329	487	244	112	28	1200	
	割合	27.4%	40.6%	20.3%	9.3%	2.3%	100.0%	

N=1200 X²=28.069** CramerV=0.108**

**p<.01 *p<.05

分析の結果、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。また、表からどの年数住んでいる人も医療満足度は「満足」、「やや満足」と答えている人が多い、反対に「やや不満」、「不満」と答えている人は少ない。

表3 高槻市に住み続けたいと介護サービスが頼りになるかのクロス表
介護サービスが頼りになるか

		そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまり そう思わない	そう思わない	合計
地域に 住み続け たいか	ずっと住み 続けたい	度数 19	81	134	33	14	281
		割合 6.8%	28.8%	47.7%	11.7%	5.0%	100.0%
	住み続け たい	度数 17	76	223	46	5	367
		割合 4.6%	20.7%	60.8%	12.5%	1.4%	100.0%
	まあ住み 続けたい	度数 8	49	195	39	9	300
		割合 2.7%	16.3%	65.0%	13.0%	3.0%	100.0%
	どちらとも いえない	度数 4	12	79	16	5	116
		割合 3.4%	10.3%	68.1%	13.8%	4.3%	100.0%
	機会があれば 引っ越したい	度数 0	12	53	12	13	90
		割合 0.0%	13.3%	58.9%	13.3%	14.4%	100.0%
合計	度数 48	230	684	146	46	1154	
	割合 4.2%	19.9%	59.3%	12.7%	4.0%	100.0%	

N=1154 X²=73.345** CramerV=0.126**

**p<.01 *p<.05

分析の結果、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。また表から介護サービスが頼りになるかで「そう思う」と答えている人で 1 番割合が高いのは「ずっと住み続けたい」で、次に高いのは「住み続けたい」であった。反対に「機会があれば引っ越したい」と答えている人で 1 番割合が高いのは「そう思わない」と答えている人であった。

表4 どのくらい住み続けているかと介護サービスが頼りになるかのクロス表
介護サービスが頼りになるか

		そう 思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう 思わない	合計
高槻市に どのくらい 住み続けて いるか	1～10年	度数 5	17	131	19	3	175
	未満	割合 2.9%	9.7%	74.9%	10.9%	1.9%	100.0%
	10～30年	度数 8	69	217	52	13	359
	未満	割合 2.2%	19.2%	60.4%	14.5%	3.6%	100.0%
	30年以上	度数 34	142	326	75	30	607
		割合 5.6%	23.4%	53.7%	12.4%	4.9%	100.0%
合計	度数 47	228	674	146	46	1141	
	割合 4.1%	20.0%	59.1%	12.8%	4.0%	100.0%	

N=1141 X²=35.493** CramerV=0.125**

**p<.01 *p<.05

分析の結果から、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。また表から介護サービスで頼りになるかの問いで「そう思う」、「やや思う」と肯定的な答えをした人は、年数の長さにかかわらず、否定的な答えをしている人より多いことがわかる。

表5 高槻市に住み続けたいと高槻市営バス運行本数満足度のクロス表

		運行本数満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いけない	やや不満	不満		
地域に 住み続け たいか	ずっと住み	度数	83	73	64	19	25	264
	続けたい	割合	31.4%	27.7%	24.2%	7.2%	9.5%	100.0%
	住み続け	度数	50	106	100	56	33	345
	たい	割合	14.5%	30.7%	29.0%	16.2%	9.6%	100.0%
	まあ住み	度数	29	69	75	62	31	266
	続けたい	割合	10.9%	25.9%	28.2%	23.3%	11.7%	100.0%
	どちらとも	度数	7	19	38	23	13	100
	いけない	割合	7.0%	19.0%	38.0%	23.0%	13.0%	100.0%
	機会があれば	度数	9	15	17	19	19	79
	引っ越したい	割合	11.4%	19.0%	21.5%	24.1%	24.1%	100.0%
合計	度数	178	282	294	179	121	1054	
	割合	16.9%	26.8%	27.9%	17.0%	11.5%	100.0%	

N=1054 X²=98.39** CramerV=0.15**

**p<.01 *p<.05

分析の結果から、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。地域にずっと住み続けたいかの問いで否定的な意見なほど市バス運行本数満足度で不満の値が多いことがわかる。

表6 どのくらい住み続けているかと高槻市営バス運行本数満足度のクロス表

		運行本数満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いけない	やや不満	不満		
高槻市に どのくらい 住み続けて いるか	1~10年	度数	14	31	39	36	19	139
	未満	割合	10.1%	22.3%	28.1%	25.9%	13.7%	100.0%
	10~30年	度数	52	82	103	58	34	329
	未満	割合	15.8%	24.9%	31.3%	17.6%	10.3%	100.0%
	30年以上	度数	112	167	147	83	66	575
		割合	19.5%	29.0%	25.6%	14.4%	11.5%	100.0%
合計	度数	178	280	289	177	119	1043	
	割合	17.1%	26.8%	27.7%	17.0%	11.4%	100.0%	

N=1043 X²=21.054** CramerV=0.1**

**p<.01 *p<.05

分析の結果から、有意確率 0.01 以下から関連ありとわかる。高槻市に長く住み続けている人ほど市バス運行本数満足度が高く、あまり長く住んでいない人は「不満」と答えている割合が多い。

5. 議論と考察

分析結果を簡単にまとめると、表 1 と表 2 はどちらも有意であったので仮説 1 は正しいことが証明された。同様に表 3、表 4 から仮説 2、表 5、表 6 から仮説 3 は正しいと証明することができる。

つまり、高槻市の老後も住み続けてもらう地域づくりはしっかりしているので住民は住み続けたいと考えまた、実際に長く住んでいることがわかる。今回調べたのは人口の多い

高槻市で調べたもので、そこでの地域づくりと住み続けているかと住んでいるかの関連性がわかったが、地域づくりの効果を調べるには今回の調査では不十分であると考えられる。なぜなら、老後も住み続けてもらう地域づくりがしっかりとできている状態ではしか調べていないからである。アフターだけでなくビフォーも調べなくては効果があったのか言い切るのは難しく思う。アフターの状態で地域づくりの効果は分かったが、完全な地域づくりの効果を調べるには地域づくりをする前とした後で比較しながら調べてたほうがよりよいのではないかと考えられる。

6. 参考

[1]厚生労働省、平成 18 年 介護サービス施設・事業所調査結果の概況

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service06/index.html>

[2] 高野大秋、玉井麻美、西尾幸一郎、水野弘之、2003, スウェーデンの中山間地域における「老後も住み続けることができる地域づくり」に関する研究：地域住民の手による協同組合の活動を通して

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110002555582>

第 26 章 政治への関心を持つ人の特性について

位田 智也

1. はじめに

近年の社会的変化として政治に関心のない人が増加している。1990 年代前半に自民党が分裂し、政界再編期を迎えた中、有権者は政党離れと選挙離れを起こした。政党離れは無党派層の増大となって表れ、選挙離れは投票率の低下という現象で表れた。今回の調査では、政治へ関心に向かわすためにはどうすればいいか、人々の特性が政治への関心に与える影響から調べる。

2. 仮説

2010 年に NHK が行った”社会や政治に関する世論調査”にて、社会への関心の高低と生活意識との関係から、精神的に余裕のある人ほど社会に対する関心が高いこと、生活について満足している人ほど関心が高く、不満があっても社会へ目を向けるわけではない”という結果が出た。

この結果から、時間的にゆとりを感じている人、夫婦間の会話が多い人ほど精神的に余裕があると考え、これらの人は政治への関心が高いと仮定する。

3. データ・変数

3.1 データ

平成 25 年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市郵送調査」を用いる。調査対象者は 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1233 票、回収率は 61.7%である。

3.2 変数について

Q3 地域に住み続けたいか

「1.ずっと住み続けたい」「2.住み続けたい」「3.まあ住み続けたい」
「4.どちらともいえない」「5.機械があれば引っ越したい」の 5 段階である。

Q4 地域の役に立ちたいか

「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.どちらともいえない」
「4.あまりそう思わない」「5.そう思わない」の 5 段階である。

Q15 商店街での買い物頻度

「1.ほぼ毎日」「2.週に 2~3 日程度」「3.月に 2~3 日程度」
「4.年に 2~3 日程度」「5.全く行かない」の 5 段階である。

Q22 ボランティア頻度

「1.ほぼ毎日」「2.週に3~4日」「3.週に1~2日」
「4.月に1~2日」「5.ほとんどない」の5段階である。

Q24 「広報たかつき」を読んでいるか

「1.よく読んでいる」「2.ときどき読んでいる」「3.ほとんど読んでいない」
「4.知っているが、読んだことはない」「5.”広報たかつき”が発行されていることを知らない」の5段階である。

Q43 政治へどれくらい注意をはらっているか

「1.とても注意をはらっている」「2.やや注意をはらっている」
「3.あまり注意をはらっていない」「4.ほとんど注意をはらっていない」
の4段階である。

Q45 時間的にゆとりを感じているか

「1.ほぼ毎日」「2.週に2~3日程度」「3.月に2~3日程度」
「4.年に2~3日程度」「5.全く行かない」の5段階である。

Q56 夫婦の会話時間

以下のような項目を反転させ、数値が大きくなるほど夫婦の会話時間が短くなるようにした。

「1.2時間以上」「2.1時間以上2時間未満」「3.1時間以上1時間半未満」
「4.30分以上1時間未満」「5.30分未満」の5段階である。

以上8つの変数について欠損値処理した上で分析を行った。

4. 分析

4.1 重回帰分析

まず、重回帰分析を行い、Q43「政治へどれくらい注意をはらっているか」と他の変数との関連性をみる。調整済み決定係数 (R^2) は0.074である。これは、従属変数であるQ43「政治へどれくらい注意をはらっているか」のうち7.4%が投入した独立変数で説明されていることを示している。

次に、分散分析をF検定で行うと、有意確率が1%未満のため1%水準で有意である。つまり、このモデルは統計的に有意であり、母集団においてもQ43「政治へどれくらい注意を払っているか」、すなわち政治への関心の予測に役立つモデルであることが分かる。

表1より、今回分析で使用した独立変数の中でQ4「地域の役に立ちたいか」、Q45「時間的なゆとりを感じているか」の2変数が有意確率1%未満のため、それぞれ1%水準で有意である。この2変数の値を比較するとQ4>Q45となり、Q4「地域の役に立ちたいか」が、Q43「政治へどれくらい注意をはらっているか」、すなわち政治への関心に本調査ではもっとも影響を与えていることがわかった。

また、Q56「夫婦の会話時間」は表より5%水準で有意である。値はQ4, Q45より小さい0.74であった。このことから、夫婦の会話時間は地域への貢献、時間的ゆとりの感じ方と比べて、政治への関心に与える影響が小さいことがわかった。

表1.政治への関心の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	.951	.219	
q3 地域に住み続けたいか	.005	.023	.007
q4 地域の役に立ちたいか	.152 **	.029	.189
q15 商店街での買い物頻度	.040	.023	.060
q22 ボランティア頻度	.046	.044	.037
q24 「広報たかつき」読んでいるか	.041	.035	.041
q45 時間的ゆとりに感じるか	.077 **	.024	.114
q56 夫婦の会話時間反転	.040 *	.018	.074
調整済決定係数		0.074 **	
N		807	

** p<.01, * p<.05

4.2 クロス集計表

仮説が正しいかどうかを検証するために、Q43 と Q45, Q56 のクロス集計表を用いて分析を行う。

表2. q43 政治へどれくらい注意をはらっているか * q45 時間的ゆとりに感じるか

		度数	q45 時間的ゆとりに感じるか				合計
			よく感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	
q43 政治へどれくらい注意をはらっているか	とても注意をはらっている	38	79	28	63	16	224
		17.0%	35.3%	12.5%	28.1%	7.1%	100.0%
	やや注意をはらっている	46	225	151	208	31	661
		7.0%	34.0%	22.8%	31.5%	4.7%	100.0%
	あまり注意をはらっていない	14	57	46	75	19	211
		6.6%	27.0%	21.8%	35.5%	9.0%	100.0%
	ほとんど注意をはらっていない	9	13	10	22	12	66
		13.6%	19.7%	15.2%	33.3%	18.2%	100.0%
合計		107	374	235	368	78	1162
		9.2%	32.2%	20.2%	31.7%	6.7%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1162) = 58.088, p < .01$

表2のクロス表より、政治へとても注意をはらっている人の17.0%が時間的ゆとりに「よく感じる」、35.3%が「やや感じる」と答えた。対して、政治へほとんど注意を払っていない

い人の 18.2%が時間的ゆとりを「まったく感じない」、33.3%が「あまり感じない」と答えた。これらのことから、政治へ注意をはらっている人ほど、時間的ゆとりを感じる傾向があるということがわかった。

表3. q43 政治へどれくらい注意をはらっているか * q56 夫婦の会話時間

		q56 夫婦の会話時間					合計	
		30分未満	30分以上1時間未満	1時間半未満	1時間半以上2時間未満	2時間以上		
q43 政治へどれくらい注意をはらっているか	とても注意をはらっている	度数	30	55	32	25	36	178
			16.9%	30.9%	18.0%	14.0%	20.2%	100.0%
	やや注意をはらっている	度数	112	134	95	57	78	476
			23.5%	28.2%	20.0%	12.0%	16.4%	100.0%
	あまり注意をはらっていない	度数	48	29	26	7	24	134
			35.8%	21.6%	19.4%	5.2%	17.9%	100.0%
	ほとんど注意をはらっていない	度数	17	10	9	5	4	45
			37.8%	22.2%	20.0%	11.1%	8.9%	100.0%
合計	度数		207	228	162	94	142	833
			24.8%	27.4%	19.4%	11.3%	17.0%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=833) = 26.415, p < .01$

次に、表3 クロス表より政治への関心と夫婦の会話時間の関係を見ると、政治へとても注意をはらっている人の 34.2%が1時間半以上を夫婦で1日に会話を行っていた。やや注意をはらっている人は 28.4%、あまり注意をはらっていない人は 23.1%、ほとんど注意をはらっていない人は 20.0%となった。このことから夫婦での会話時間が多い人ほど政治へ注意をはらっている傾向が強いことがわかった。

表4. q43 政治へどれくらい注意をはらっているか * q4 地域の役に立ちたいか

		q4 地域の役に立ちたいか					合計	
		そう思う	ややそう思う	いえない	思わない	そう思わない		
q43 政治へどれくらい注意をはらっているか	とても注意をはらっている	度数	76	83	46	16	4	225
			33.8%	36.9%	20.4%	7.1%	1.8%	100.0%
	やや注意をはらっている	度数	123	271	202	61	8	665
			18.5%	40.8%	30.4%	9.2%	1.2%	100.0%
	あまり注意をはらっていない	度数	17	84	68	34	8	211
			8.1%	39.8%	32.2%	16.1%	3.8%	100.0%
	ほとんど注意をはらっていない	度数	7	22	20	16	2	67
			10.4%	32.8%	29.9%	23.9%	3.0%	100.0%
合計	度数		223	460	336	127	22	1168
			19.1%	39.4%	28.8%	10.9%	1.9%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1162) = 76.562, p < .01$

さらに、4.1で行った重回帰分析の結果で 値が最も高かった Q4「地域の役に立ちたいか」と政治への関心のクロス表を分析した。クロス表より、政治へとても注意をはらっている人の 33.8%が地域の役に立ちたいかという問いに対して「そう思う」と答えた。やや注意をはらっている人は 18.5%、あまり注意をはらっていない人は 8.1%、ほとんど注意をはらっていない人は 10.4%であった。このことから、地域の役に立ちたい人ほど政治への関心が強いことがわかった。

5 考察

今回の分析では、「時間的にゆとりを感じている人、夫婦間の会話が多い人を精神的に余裕がある人と定義し、それらの人々が政治への関心が高い」という仮説を立てた。政治への関心を従属変数にし、様々な独立変数を用いて重回帰分析を行ったところ、仮説の時点では上がらなかった、地域貢献の意識が政治への関心に本分析では最も影響を与えていることがわかった。また、1%水準で有意であることから、確率的に偶然とは考え難く、意味があると考えられる。これらのことから、地域貢献を意識している人ほど、政治への関心が高いことがわかった。

2.で立てた仮説に対しては 4.1、4.2で行った重回帰分析、クロス集計の結果、時間的ゆとりが政治への関心に影響を与えていることがわかった。1%水準で有意あることから、確率的に偶然とは考え難く、意味があると考えられる。夫婦間の会話では他の 2 変数と比べて、 β 値、有意水準の面で劣るが、クロス集計表からも夫婦の会話時間が長いほど、政治への関心が高いことがわかった。これらのことから、仮説が立証されたと考えられる。

今回は独立変数を 7 個使用して重回帰分析を行った。年齢や、性別、本調査で使用したすべての変数で重回帰分析を行うこと。またクロス集計表を見ることにより、今回見つけた変数以外にも、政治への関心に影響を与える変数を見つけられることができると考えられる。今後、他の変数でも政治への関心に影響を与えるかどうかを分析をしていくことが今後の研究課題である。

6 参考文献

- [1]高橋幸市・村田ひろ子,2010,社会への関心が低い人々の特徴～「社会と生活に関する世論調査」から～
- [2]殿岡昭浪,1974,政治的関心と政治的知識 - 直接民主主義と日本人 -
- [3]佐藤哲也・杉岡賢治・内藤孝一,2003,インターネット利用者の政治意識

第 27 章 政治意識と市民生活の関連性

川合 智大

1. はじめに

我が国において、有権者の政治意識の向上を図ることは重要な課題の 1 つであり、その背後には様々な問題が潜んでいると言えよう。特に、若者を中心とした投票への不参加、政治への無関心は、以前より指摘されている問題である。その主な要因の 1 つとしては、近年の政府や政策、或いは政治そのものに対する不信感や無力感等が考えられる。

しかしながら、果たして本当にそれだけであろうか。政治意識の問題を考慮するにあたって、さらなる要因の検討、即ち第 2・第 3 の要因を検討する必要があるのではなからうか。取分け、より身近なところにその要因を見出すことはできないのだろうかと考えた。

そこで、政府や政党といった「あちら側」の要因ではなく、有権者自身の生活といった「こちら側」の要因に焦点を当てて、その関連性を調査することにした。

本稿では、高槻市民の政治意識と、市民生活の精神的または経済的な余裕度との関わりについて、先行研究の成果を手掛かりに検証する。

2. 先行研究と仮説

NHK 放送文化研究所の「社会への関心が低い人々の特徴～「社会と生活に関する世論調査」から～」(2011)の概要では、「精神的に余裕のある人ほど社会に対する関心が高いこと、生活について満足している人ほど関心が高く、不満があっても社会へ目を向けるわけではないことが明らかになった。」となっている。また、同研究の本文によると、「精神的余裕度」に続いて、「経済的余裕度」と「社会的関心」との相関も高いとされている。

以上の先行研究から、社会への関心と精神的・経済的な余裕度との間には関連があると推測できる。そこで、本稿の趣旨である政治意識との関連を明らかにするために、「政治的関心」を「社会的関心」を構成する要素の一つとして捉えることで、政治意識と精神的・経済的な余裕度との間にも何らかの関連性があると仮定することにした。従って、本稿における仮説は以下の二つである。

仮説 1：精神的に余裕があるほど、政治への関心が高くなる。

仮説 2：経済的に余裕があるほど、政治への関心が高くなる。

3. データ・変数

3.1 データ

分析においては、2013 年度に実施された「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。本調査は、無作為に選出した高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女 2,000 人を調査対象にした郵送調査であり、有効回収数は 1,233 (有効回収率は 61.7%)

であった。

3.2 変数

今回使用した変数は以下の 6 つである。

Q1 「生活満足度」

「1. 満足」「2. やや満足」「3. どちらともいえない」「4. やや不満」「5. 不満」の 5 段階であるが、後述する重回帰分析に備えて予め変数を反転しておいた。即ち、重回帰分析においては、値が大きくなるほど満足度が高い傾向を示すように調整した。

Q43 「政治関心」

「1. とても注意をはらっている」「2. やや注意をはらっている」「3. あまり注意をはらっていない」「4. ほとんど注意をはらっていない」の 4 段階であるが、「生活満足度」と同様の理由により変数を反転しておいた。これによって、値が大きくなるほど関心が高くなるといえる。

Q64 「性別」

「1. 男性」「2. 女性」の 2 段階である。ただし、これらは名義尺度であるため、重回帰分析で用いる際には、「1. 男性」「0. 女性」の「男性ダミー」として投入した。

Q65 「年齢」

「1. 20 代」「2. 30 代」「3. 40 代」「4. 50 代」「5. 60 代」「6. 70 代以上」の 6 段階である。しかし、これらはコードの区切りが等間隔ではないため、重回帰分析で用いる際には、それぞれの中央値にリコードした「年齢中央値」を投入した。

Q69 「最終学歴」

「1. 中学」「2. 高校」「3. 専門学校」「4. 短大・高専」「5. 大学・大学院」「6. わからない」の 6 段階であるが、「性別」と同様の理由によりダミー変数にリコードして投入した。作成したダミー変数は、「1=「2. 高校」+「3. 専門学校」」「0= その他」にリコードした「中等学歴ダミー」と、「1=「4. 短大・高専」+「5. 大学・大学院」」「0= その他」にリコードした「高等学歴ダミー」の 2 つである。「6. わからない」は欠損値として扱った。

Q74 「世帯収入」

「1. 100 万円未満」「2. 100 万円～200 万円未満」「3. 200 万円～400 万円未満」「4. 400 万円～600 万円未満」「5. 600 万円～800 万円未満」「6. 800 万円～1000 万円未満」「7. 1000 万円～1500 万円未満」「8. 1500 万以上」「9. わからない」の 9 段階である。ただし、重回帰分析で用いる際には、「年齢」と同様の理由により、それぞれの中央値にリコードした「世帯収入中央値」を投入した。「9. わからない」は欠損値として扱った。

以上の 6 変数を用いて、政治への関心と精神的・経済的な余裕度との関連性についての

分析を行った。なお、精神的な余裕度を測る指標としては「生活満足度」、経済的な余裕度を測る指標としては「世帯収入」の変数をそれぞれ用いた。

4. 分析

まず、クロス表を利用して Q1「生活満足度」と Q43「政治関心」との関連性を検討する。

表1 q43 政治へどれくらい注意をはらっているか と q1 生活満足度 のクロス表

		q1 生活満足度					合計
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	
q43 政治へどれ くらい注意をは らっているか	とても注意をは らっている	度数 61	94	38	21	12	226
		27.0%	41.6%	16.8%	9.3%	5.3%	100.0%
	やや注意をは らっている	度数 104	305	150	83	23	665
		15.6%	45.9%	22.6%	12.5%	3.5%	100.0%
	あまり注意をは らっていない	度数 29	84	65	26	9	213
		13.6%	39.4%	30.5%	12.2%	4.2%	100.0%
	ほとんど注意を はらっていない	度数 10	32	12	9	5	68
		14.7%	47.1%	17.6%	13.2%	7.4%	100.0%
合計	度数	204	515	265	139	49	1172
		17.4%	43.9%	22.6%	11.9%	4.2%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1172) = 29.980^{**}$, CramerV=.095^{**}

^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$

検定の結果、カイ 2 乗の値は 29.980 で Cramer の V の値は 0.095 であった。また、有意確率は 0.001 であり、1%水準で有意であった。

表 1 から、政治にとても注意をはらっている人の 27%が生活に満足しており、これは他の政治意識を持つ層と比較して、明らかに大きな割合を占めていると言える。さらに、やや満足している人も合わせると 68%以上にも及び、政治にとても注意をはらっている人の 7 割近くが自身の生活について前向きな評価をしていることがわかった。

逆に、政治にほとんど注意をはらっていない人の 7.4%が生活に不満を抱いており、これは他の政治意識を持つ層と比較して、大きな割合を占めていると言える。

また、政治にあまり注意をはらっておらず、尚且つその中で生活の満足・不満足についても言及していない人の割合が 30%に及んでいることから、自身の問題であるかどうかに関わらず無関心を貫く層が相当数存在すると言える。

以上のことから、生活満足度と政治への関心の間に関連性があるのは明確である。従って、「仮説 1：精神的に余裕があるほど、政治への関心が高くなる。」は支持された。

次に、Q74「世帯収入」と Q43「政治関心」との関連性をクロス表にて検討する。

表2 q43 政治へどれくらい注意をはらっているかと q74 収入のクロス表

		q74 収入								合計
		100万円未 満	200万円未 満	400万円未 満	600万円未 満	800万円未 満	1000万円 未満	1000万円 ～1500万 円未満	1500万円 以上	
q43 政治 へどれく らい注意 をはらっ ているか	とても注 意をは らってい る	度数 11	13	67	46	27	13	18	8	203
		5.4%	6.4%	33.0%	22.7%	13.3%	6.4%	8.9%	3.9%	100.0%
	やや注意 をはらっ ている	度数 33	55	168	116	77	53	41	16	559
		5.9%	9.8%	30.1%	20.8%	13.8%	9.5%	7.3%	2.9%	100.0%
	あまり注 意をは らってい ない	度数 13	23	57	36	25	13	5	1	173
		7.5%	13.3%	32.9%	20.8%	14.5%	7.5%	2.9%	.6%	100.0%
	ほとんど 注意をは らってい ない	度数 2	6	18	8	10	5	1	0	50
		4.0%	12.0%	36.0%	16.0%	20.0%	10.0%	2.0%	0.0%	100.0%
合計	度数	59	97	310	206	139	84	65	25	985
		6.0%	9.8%	31.5%	20.9%	14.1%	8.5%	6.6%	2.5%	100.0%

$\chi^2(df=21, N=985) = 27.790$, CramerV=.090

** $p < .01$, * $p < .05$

検定の結果、カイ 2 乗の値は 27.790 で Cramer の V の値は 0.090 であった。また、有意確率は 0.291 であり、有意ではなかった。

表 2 から、政治意識に関する全ての層において、200 万円～400 万円未満の世帯収入の人の割合が最も高く、層ごとの傾向の違いはあまり見られない。

ただし、政治にとっても注意をはらっている層のうち、1500 万円以上の世帯収入がある人の割合は 3.9% であり、これは他の政治意識を持つ層と比較して、若干大きな割合を占めていると言える。さらに、同じ層のうち、1000 万円～1500 万円未満の世帯収入がある人に関しても 8.9% を占めており、同様のことが言える。

以上のことから、このクロス表分析において、世帯収入と政治への関心の間に関連性を認めることはできず、「仮説 2：経済的に余裕があるほど、政治への関心が高くなる。」を支持する結果を得ることはできなかった。その一方で、ごく一部の高収入を誇る人たちにおいては、その限りではないと思われる。

続いて、Q1「生活満足度」と Q74「世帯収入」を含む複数の変数で、Q43「政治関心」をどの程度説明できるのかを検証するため、これらの変数を用いて重回帰分析を行った。

従属変数には、前述した通り予め重回帰分析用に調整しておいた「政治関心反転」を投入し、独立変数には、同じく調整済みの「生活満足度反転」「男性ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」「年齢中央値」「世帯収入中央値」を投入した。

表3 政治への関心の重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	1.673 **	.147	
生活満足度反転	.020	.023	.027
男性ダミー	.265 **	.046	.173
中等学歴ダミー	-.014	.097	-.009
高等学歴ダミー	.198	.102	.129
年齢中央値	.016 **	.002	.324
世帯収入中央値	.000 **	.000	.098
調整済み決定係数		0.143 **	
N		958	

** $p < .01$, * $p < .05$

分析の結果、調整済み決定係数が 0.143 であることから、従属変数「政治関心反転」の内 14.3%が、投入した独立変数によって説明されているとわかる。また、1%水準で有意な変数は「男性ダミー」「年齢中央値」「世帯収入中央値」の計 3 つである。

第一に、「男性ダミー」が有意であることから、女性よりも男性の方が政治上の出来事に注意をはらう傾向にあると言える。

次に、「年齢中央値」が有意であることから、年齢が高くなるほど、政治上の出来事に注意をはらうようになると言える。

最後に「世帯収入中央値」が有意であることから、世帯収入が増えるほど、政治上の出来事に注意をはらうようになると言える。

この中でも「年齢中央値」のベータ値 0.324 が特に高いことから、年齢の変化が政治意識に及ぼす影響は、投入した独立変数の中で特に高いものであると判断できる。

一方、「生活満足度反転」に関しては、有意確率が有意でないという結果になったため、生活に満足しているほど、政治上の出来事に注意をはらうとは言えないことがわかった。

この重回帰分析によって、「仮説 2: 経済的に余裕があるほど、政治への関心が高くなる。」が支持された。

5. 議論と考察

以上の分析結果から、「政治関心」と「生活満足度」・「世帯収入」との間には明確な関連性があり、仮説 1 及び仮説 2 は支持される形となった。

一つ目の分析はクロス表を使い各変数間の関連性を確認した。この結果から、政治に大きな関心を寄せながら生活に満足している人が予想以上に多いことがわかった。次の分析では重回帰分析を用いて、変数ごとの説明力を検証した。この結果から、年齢が政治関心に与える影響が特に大きいということがわかった。

仮説ごとに支持される分析方法が異なったのは、おそらく分析方法そのものの特性及び変数の特性の差異によるものだと考えられる。仮説 1 については、クロス表においてその有意性が示されたが、重回帰分析においては支持されなかった。このことから、政治関心と生活満足度とが関連しているのは確かだが、政治関心を生活満足度によって説明・予測することはできないということがわかる。逆に仮説 2 においては、クロス表でその有意性が否定されたにも関わらず、重回帰分析においては有意性が認められた。従って、政治関心を世帯収入によって説明・予測することが可能であることがわかった。

今回使用した変数及び分析は可能性のごく一部である。本稿の分析では、経済的な余裕度を世帯の収入で測る等、少々強引な解釈を行っている箇所が多々見られる。そのため、これらの力技が分析結果に何らかの「歪み」を与えた危険性を孕んでいる。また、重回帰による分析の際に用いた変数についても必要最小限であり、それ故に隠れた要因を見落としている可能性も否定できないため、本来ならより多くの要因を考慮すべきだったのは自明である。さらに言えば、利用した分析方法の種類少なにも問題があるように思える。今回利用したのはクロス表と重回帰分析の 2 種類のみであり、その他の分析方法には一切触れなかった。そのため、政治意識と生活の関連性を考える上で、より強力な結果を導き出せる手法を多面的に模索するのが今後の課題だと言えよう。

6. 文献

[1] 高橋幸市・村田ひろ子,2011,「社会への関心が低い人々の特徴～「社会と生活に関する世論調査」から～」,NHK 放送文化研究所,(2013 年 12 月 21 日取得,
<http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/052.html>).

第 28 章 高槻市営バスの利用要因

川口 千里

1. はじめに

現在、日本では全国的に広がっている交通網のほかに、各地域限定で広がる交通網が存在する。その中のうちの一つに市営バス(市バス)・コミュニティバスなどの地域限定で運行しているバスが全国各地で数多く存在している。高槻市にも高槻市営バスというものが存在している。こういった地域特有のバスをよく利用する人はいったいどのような人なのかということに興味を持ち、高槻市内のバスを利用する頻度は何に影響されるのかについて調べた。

2. 先行研究と仮説

何によってバスの利用頻度に差が生じているのかという疑問から仮説を立てる時に、先行研究を調べたところ、天野圭子・黒見敏丈によると地域のコミュニティバスを利用する要因として買い物があげられていたことから、商店街へ買い物に行く頻度や最寄りの商店街までの距離との関係があるのではないかと考えられ、また買い物に行くことは日常生活の中で時間的ゆとりを感じているのではないかと予測した。そしてさらに少子・高齢化が急速に進行している日本にとって高齢者・障害者などの交通弱者に対する人にやさしい交通システムである市バスは必要不可欠である(箕面市(2012),箕面市総合都市交通戦略)。このことから交通弱者である高齢者の方にとって市営バスは重要な交通手段というふうに考えられ、年齢が高い方がより市営バスを利用するのではないかと考えた。またバスに満足をしている人はより多くバスを利用するのではないかと考えた。よってこれらについて調べることにした。仮説は以下の通りである。

仮説 1：時間にゆとりがある人ほど、バスを利用する。

仮説 2：商店街へよく買い物に行く人ほど、バスを利用する。

仮説 3：年齢が高い人ほど、バスを利用する。

仮説 4：バスに満足している人ほど、バスを利用する。

3. 変数

3.1 データ

データについては、2013年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。母集団は20歳以上の高槻市民で、標本は母集団から無作為に抽出した。計画標本サイズは2000、有効回収数1,233、有効回収率は61.7%である。

3.2 変数

分析には、下に示した Q9_B, Q11, Q15, Q16, Q45, Q65 の計 6 個の質問項目を利用し、すべての変数において欠損値処理を行い、また Q9, Q11, Q15, Q45 に関しては、回答の反転処理を行う。Q65 の年齢に関しては中央値処理を行った。実際に使用した変数を以下に示す。

Q9.あなたは次の項目のようなお住まいの地域の交通や施設についてどのくらい満足していますか。

<B.バス> 1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

Q11.あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。

1. 利用しない 2. 年に1~2日 3. 月に1~2日 4. 週に1~2日 5. 週に3~4日
6. ほぼ毎日

Q15.あなたは最寄りの商店街へはどの程度買い物に行きますか。

1. 全くいかない 2. 年に2~3日程度 3. 月に2~3日程度 4. 週に2~3日程度
5. ほぼ毎日

Q16.最寄りの商店街までは近いですか、それとも遠いですか。

1. かなり近い 2. 近い 3. ふつう 4. 遠い 5. かなり遠い

Q45.あなたは日常生活の中で時間的ゆとりを感じますか。

1. 全く感じない 2. あまり感じない 3. どちらともいえない 4. やや感じる
5. よく感じる

Q65.あなたの年齢をお答えください。

1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代 5. 60代 6. 70代以上

以上が実際に使用した変数である。

以下に分析で従属変数として用いる「Q11 バス利用頻度」の度数分布表・グラフを載せておく。

表1: Q11 バス利用頻度の度数分布

	度数	割合
バス利用頻度	利用しない	301 24.8
	年に1~2日	292 24.1
	月に1~2日	318 26.2
	週に1~2日	150 12.4
	週に3~4日	82 6.8
	ほぼ毎日	69 5.7
	合計	1212 100

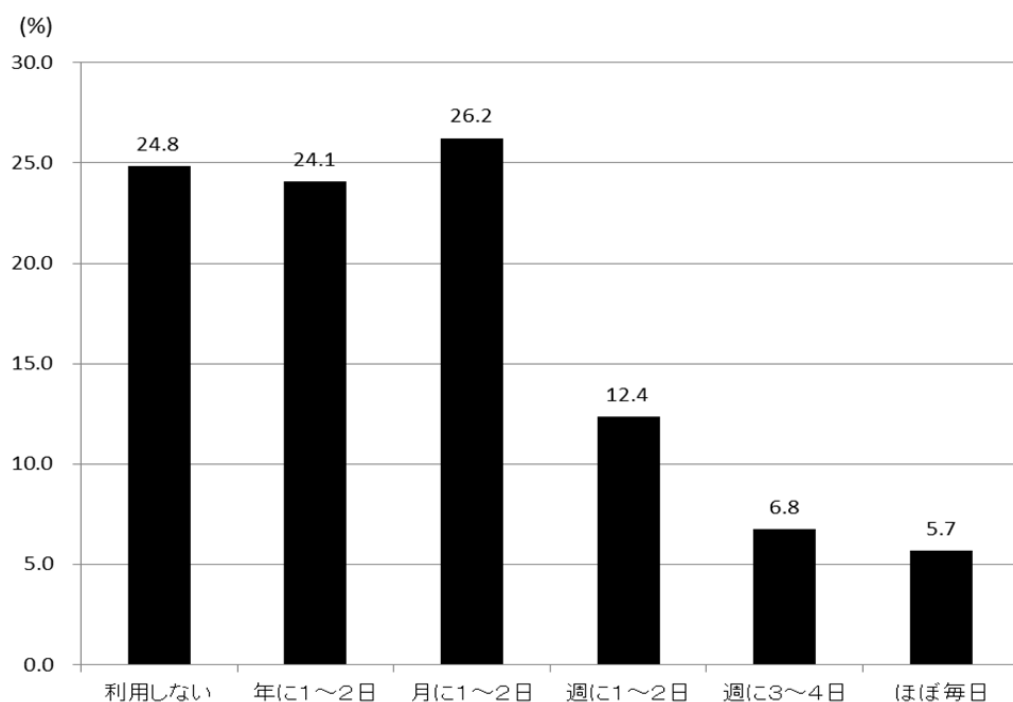


図1「バス利用頻度」

図1のグラフより「バス利用頻度」は「月に1~2日」という項目の割合が最も多く全体の約26.2%であった。また次に多いのが「利用しない」で割合は約24.8%であった。最も少ないのが「ほぼ毎日」で割合は約5.7%であった。

4. 分析

仮説に基づいて分析を行うため、従属変数を「Q11 バス利用頻度」とし、他の変数を独立変数として重回帰分析を行い、それぞれの独立変数が従属変数にどのような影響を与えているのかを考察する。

表2: Q11 バス利用頻度を従属変数とする重回帰分析

	B	SE	
(定数)	0.179	0.257	
商店街の利用頻度	0.173 **	0.041	0.141
最寄りの商店街までの距離	0.276 **	0.044	0.198
時間的ゆとり	0.025	0.040	0.020
バス満足度	0.151 **	0.035	0.127
年齢	0.138 **	0.029	0.154
調整済み決定係数		0.090 **	
N		1180	

*:5%水準で有意 **:1%水準で有意

表2の自由度調整済み決定係数($R^2=0.090$)より、表2の結果が表す独立変数の従属変数に対する説明力は9.0%である。また表2の結果を分析するに、バス利用頻度に有意に影響を与えている要素は、「商店街利用頻度」・「最寄りの商店街までの距離」・「バス満足度」・「年齢」である。「時間的ゆとり」はバス利用頻度に影響を及ぼしていない。

この結果から1%水準で有意であった、4つの変数についてさらに詳しく検討していく。

まずそれぞれの変数について標準化係数の符号をみていく。「商店街利用頻度」は符号がプラスであることから、商店街の利用頻度が高いほど、高槻市営バスの利用頻度が高いといえる。「最寄りの商店街までの距離」についても符号がプラスであることから、最寄りの商店街までの距離が遠いほど、高槻市営バスの利用頻度が高いといえる。「バス満足度」についても符号がプラスであることから、高槻市営バスに対する満足度が高いほど、高槻市営バスの利用頻度が高いといえる。「年齢」についても符号がプラスであることから、年齢が高いほど、高槻市営バスの利用頻度が高いといえる。

さらに変数同士を比較していく。それぞれの変数の標準化係数の大きさを比較すると、 $0.198 > 0.154 > 0.141 > 0.127$ となる。標準化係数は大きければ大きいほど、従属変数に及ぼす影響が強くなるため、この分析の従属変数である「バス利用頻度」に最も大きい影響を及ぼすのは、「最寄りの商店街までの距離 ($\beta=0.198$)」であり、次に大きいのが「年齢 ($\beta=0.154$)」、その次が「商店街利用頻度 ($\beta=0.141$)」、そして最も小さいのが「バス満足度 ($\beta=0.127$)」であった。

5. 議論と考察

4節の分析結果から2節で挙げた仮説のうち、「仮説1: 時間にゆとりがある人ほど、バスを利用する。」は棄却され、「仮説2: 商店街へよく買い物に行く人ほど、バスを利用する。」、「仮説3: 年齢が高い人ほど、バスを利用する。」、「仮説4: バスに満足している人ほど、バスを利用する。」は支持された。以下では、仮説2、3、4について考えていく。

今回の分析では、高槻市営バスの利用要因としては、「商店街利用頻度」・「最寄りの商店街までの距離」・「バス満足度」・「年齢」の4つの変数が挙げられた。また影響を及ぼ

す変数を影響の大きいものから順に並べると、「最寄りの商店街までの距離」、「年齢」、「商店街利用頻度」、「バス満足度」となることもわかった。

「最寄りの商店街までの距離」が遠いほど高槻市営バスを利用して商店街へ行くことが多くなり、高槻市営バスの利用頻度が高くなるのではないかと考えた。また「年齢」の場合は、交通弱者である高齢者の方がやはり高槻市営バスを利用する機会が多く、高槻市営バスの利用頻度が高くなるのではないかと考えた。「商店街利用頻度」が高いほど、高槻市営バスで商店街に行く機会が多く、高槻市営バスをよく利用するのではないかと考えた。また「バス満足度」が高いほど、あらゆる時に高槻市営バスを利用しようと考えて、高槻市営バスの利用頻度が高くなるのではないかと考えた。さらに、「バス利用頻度」に対する影響の大きさの比較から、高槻市営バスの利用には商店街が大きな影響を及ぼすのではないかと考えられる。

以上のことから今後はさらに高槻市営バスと商店街との関係を追求していくことと、さらに新たに変数を追加して高槻市営バスの利用要因を考えたい。たとえば、居住地域、勤務地などの地理的要因について考えることをし、職業、家族などの個人のライフスタイルを示す変数についても考え、それらの変数を分析に使用することでより高度な分析ができると考えられる。今後の研究課題としたい。

6. 文献

- [1]天野圭子・中山徹,平成 17 年度,「コミュニティバス運用の効果と可能性について - 先行事例の調査分析、および大阪府羽曳野市バスへの応用検討 - 」
- [2]天野圭子・黒見敏丈,2004 年 8 月,「コミュニティバスの利用実態に関する研究 - 岐阜県山県市のハーバスを事例として - 」
- [3]箕面市(2012),箕面市総合都市交通戦略 ~ 「鉄道・バスが便利なまち 箕面」総合都市交通戦略 ~

第29章 高槻市営バスの満足度に関する 要因についての分析

下仲 悠希

1. はじめに

今日の日本では、各市町村による市営バスの運行は市民にとっての貴重な移動手段となっている。高槻市においても、高槻市営バスは市街地から山岳部に至るまで市内の広い範囲にわたって走行しており、学生・サラリーマン・主婦・高齢者など幅広い層に利用されている。

そこで高槻市営バスに対する満足度について、「平成25年度 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いて分析を行ったところ(表1)、「満足・やや満足」の割合がおよそ56%、「不満・やや不満」の割合がおよそ20%で、満足している人の方が3倍近く多いということがわかった。しかし、満足していない人が2割程度いることも事実であり、これも放ってはおけない数字である。

本分析では、満足していない人に注目し、2割程度の満足していない人々はなぜ満足度を低く感じているのか、満足度を上げるためには何を良くすべきなのかを調べるために、満足度にはどのような要因が関係しているかを調査し検証した。本稿ではこの要件に対し、事前に実施された「平成25年度 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の結果を用いた分析について述べる。

2. 先行研究・仮説

2.1 先行研究

バスなどの公共交通機関に関する満足度についての調査はすでに様々なところで行われており、中野雅也、山中英生らによる「利用者の満足度を考慮した都市交通マスタープラン策定について」では、居住地域による公共交通の満足度の差が示されている。これより、居住地域はバスの満足度に影響を与えているだろうと予測される。また、高槻市と関西大学が共同で行った「平成24年度高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」では、性別による満足度の違いは見られなかったが、年齢ではわずかに相関がみられた。これらのデータをもとに、以下の仮説を提唱する。

2.2 仮説

1. 年齢によるバス満足度への影響

仮説:年齢が高いほど高槻市営バスへの満足度が高い

2. 居住地域によるバス満足度への影響

仮説:都市部地域に住んでいる人の方が郊外部地域に住んでいる人よりも高槻市営バスの満足度が高い

3. バスの利用頻度によるバス満足度への影響

仮説:バスの利用頻度が高い人ほど高槻市営バスへの満足度が高い

また、上記以外に、バス満足度に影響を与えている他の要因の探索も同時に行う。

3. データ・変数

3.1 データ

データは、2013年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に在住する20歳以上85歳未満の男女、計画サンプル数は2000人、有効回収数は1233票、回収率は61.7%である。

4. 変数

変数は以下の9つの質問項目、および回答を使用した。また回答は以下のように操作し、分析時には数字が大きいほど、従属変数のバス満足度が高くなるようにコードを反転させている。

- ・「Q2. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。」
回答は、「1. 非常に悪い」、「2. やや悪い」、「3. どちらともいえない」、「4. まあよい」、「5. 非常によい」の5段階である。
- ・「Q8. あなたは高槻市という地域についてどのようなイメージを持っていますか。」
回答は、「1. 悪い」、「2. やや悪い」、「3. どちらともいえない」、「4. やや良い」、「5. 良い」の5段階である。
- ・「Q9. あなたは、次の項目のようなお住まいの地域の交通や施設についてどのくらい満足していますか。それぞれお答えください。」
「B. バス」
回答は、「1. 不満」、「2. やや不満」、「3. どちらともいえない」、「4. やや満足」、「5. 満足」の5段階である。
また、度数分布は表1のとおりである。
- ・「Q9. あなたは、次の項目のようなお住まいの地域の交通や施設についてどのくらい満足していますか。それぞれお答えください。」
「C. 医療機関」
回答は、「1. 不満」、「2. やや不満」、「3. どちらともいえない」、「4. やや満足」、「5. 満足」の5段階である。
- ・「Q11. あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。」
回答は、「1. 利用しない」、「2. 年に1～2日」、「3. 月に1～2日」、「4. 週に1～2日」、「5. 週に3～4日」、「6. ほぼ毎日」の6段階である。
- ・「Q64. あなたの性別はどちらですか。」
回答は、「1. 男性」、「2. 女性」の2段階である。
なお分析時には「男性=1」、「女性=0」としてリコードし、男性を基準としてダミー変数を投入した。
- ・「Q65. あなたの年齢をお答えください。」
回答は、「1. 20代」、「2. 30代」、「3. 40代」、「4. 50代」、「5. 60代」、「6. 70代以上」の6段階である。
なおコードの区切りが等間隔ではないため、分析時には中央値でリコードした。

・「Q70. あなたのお住まいの地域はどこですか。()内の小学校区を参考にしてお答えください。」
 回答は、「1. 檜田地区(檜田小学校)」、「2. 高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・
 安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)」、「3. 高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・
 竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)」、「4. 五領地区(五領・上牧小学校)」、「5. 高槻西
 地区(群家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)」、「6. 如是・富田地区(芝生・
 丸橋・寿永・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)」、「7. 三箇牧地区(三箇牧・柱本
 小学校)」の7段階である。

なお分析時には「高槻北地区(略), 高槻南地区(略)=1」、「檜田地区(略), 五領地区(略), 高
 槻西地区(略), 如是・富田地区(略), 三箇牧地区(略)=0」としてリコードし、都市部地域を基準
 としてダミー変数を投入した。

表 1 バス満足度の度数分布表

	度数	パーセント
満足	314	26.0
やや満足	380	31.5
どちらともいえない	273	22.6
やや不満	167	13.8
不満	74	6.1
合計	1208	100.0

4. 分析

2章に記した仮説を検証するために、従属変数にQ9のB「バス満足度反転」を用い、独立変数に
 Q2「居住地域の暮らしやすさ反転」、Q8「高槻市のイメージ反転」、Q9のC「医療機関満足度反転」、
 Q11「バス利用頻度反転」、Q64「男性ダミー」、Q65「年齢(中央値)」、Q70「都市部地域ダミー」を
 用いて重回帰分析を行った。その結果を以下に示す。

表 2 バス満足度の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	
(定数)	.190	.221	
年齢 (中央値)	.007 **	.002	.096
男性ダミー	.172 **	.061	.072
都市部地域ダミー	.258 **	.062	.108
q11 バス利用頻度反転	.074 **	.022	.089
q9c 医療機関満足度反転	.383 **	.034	.324
q2 居住地域の暮らしやすさ反転	.117 *	.048	.072
q8 高槻市のイメージ反転	.163 **	.042	.115
調整済み決定係数		0.237**	
N		1170	

**p<.01, *p<.05

表 2 より、バスの満足度のうち 23.7%が、投入された独立変数によって説明されていることがわかる。また、この分析は有意確率が 1%水準で有意であり、決定係数の値は統計的に有意で、母集団においても「バスの満足度」の予測に役立つモデルであるといえる。

この分析結果から、年齢が高くなるほどバスの満足度が高くなることがわかり、仮説 1 は支持されたといえる。また、女性に比べて男性はバスの満足度が高いといえ、性別がバス満足度に影響していることがわかった。さらに、都市部の地域に住んでいる人の方が、郊外部の地域に住んでいる人よりもバスの満足度が高いといえ、仮説 2 も支持されたといえる。仮説 3 についても、バスの利用頻度が高くなるほど、バスの満足度が高くなることが示されたので、仮説は支持されたといえる。

そしてこれら以外の要因を探索するために他の変数を投入し分析を行った結果、医療機関の満足度、居住地域の暮らしやすさ、高槻市のイメージの 3 つの変数が 5%水準で有意となった。つまり、医療機関の満足度が高いほどバスの満足度が高くなる、居住地域が暮らしやすいと感じている人ほどバスの満足度が高くなる、高槻市のイメージが良いと感じている人ほどバスの満足度が高くなる、といえることがわかった。

5. 考察

本分析結果から、年齢によるバス満足度への影響はあるといえ、それは年齢が高くなるほど満足度が高くなる傾向にあることがわかった。その理由としては、高齢者の方がバスを日常の移動手段という認識で利用している場合が多く、反対に低年齢層は通勤・通学などで仕方なく利用している、という背景が影響しているのではないかと推測される。それをわざわざ得ない人にとってはあまり心地よいものではないが、自分の移動の補助、効率化として肯定的にとらえることができる人であれば、良いものだと思えられ、捉えられることも増えると考えられる。

都市部地域に暮らしている人の方が郊外部地域に暮らしているひとよりも満足度が高いことはある種自然であると考えられる。都市部のほうがバスの運行本数が多く、停留所の数も多いため、利用者にとっては欲求が満たされやすい環境にあるからである。郊外部ではまだ整備が行き届いておらず、30分に1本バスが来る程度のところもあり、その状況下では満足と感じるのは難しいのでは、と考える。バスの利用頻度についても同様で、利用頻度が多いということは利用する機会が多いということであり、言い換えれば利用可能な機会が多いということもできる。つまりそれだけ良い運行環境にあるため満足度に差が出ると考えられる。

また、男性の方が女性よりも満足度が高い傾向にあることが示されたが、これについての原因はわからなかった。高槻市営バスは車内が混雑していることが多くあり、もしかしたら男性の方が混雑している状況に対しての耐性が強い傾向にあるということがあるのかもしれない。しかしこれについては憶測の域を出ないため、別に検証してみる必要があるだろう。

そして本分析によってこれら以外に影響があるとわかったものは、医療機関の満足度、居住地域の暮らしやすさ、高槻市のイメージであった。居住地域の暮らしやすさについては、暮らしにくいと感じていることはその地域の交通機関が整備されていないことが一つの要因と考えられるため、先に記したことと同じ理由が当てはまると考えられる。高槻市のイメージに関しては、高槻市に対して良いイメージをもっている人は高槻市営バスについてもよいイメージをもっており、それが満足度に影響しているのではないかと推測される。

そして最後に、医療機関の満足度であるが、これは今回の分析において標準偏回帰係数(β)の値が最も大きく、バスの満足度に対して与える影響が最も大きいということが示されている。医療機関に満足している人がバスに満足しているというのは、直接的に考えればあまり関係がないのではないかと考えてしまうが、医療機関をよく利用する年齢層を考えれば、それは主に高齢者であり、先に記したとおり高齢者の方がバスの満足度は高くなっているため、それに付随して医療機関の満足度が高い人のバス満足度の割合が高くなっているのではないかと考えられる。

以上のことから、高槻市営バスの満足度に主に影響を及ぼしているのは年齢であり、低年齢層の満足度を高めることが、約20%の「不満・やや不満」と感じている人々の満足度を高めることにつながるのではないかと考えられる。また、「不満・やや不満」と感じている人々が満足度を低く感じている要因としては居住地域があげられ、郊外部での交通整備を進めることが高槻市営バス全体の満足度を高めることにつながると考えられる。

6. 参考文献

- [1] 中野雅也, 山中英生: 用者の満足度を考慮した都市交通マスタープラン策定について～徳島都市圏を対象にして～
- [2] 関西大学総合情報学部, 高槻市, 平成24年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力をお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた20歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

平成25年 8 月



政策財政部 政策推進室 広報広聴課
〒569-0067 高槻市桃園町2-1
TEL 072-674-7306

関西大学 総合情報学部
〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL 072-690-2151

予告はがき

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行います。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活ともの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、無作為に選ばれた20歳以上の市民の方です。この調査票に、封筒宛名のご本人様ご自身で、回答をご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

* ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

* ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

* お忙しいところ誠に恐縮ですが、9月6日(金)までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

* この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 政策財政部 政策推進室 広報広聴課
関西大学 総合情報学部

tel : 072-674-7306

tel : 072-690-2151

<<最初は、関西大学総合情報学部からの質問です。>>

まずは、あなたの日常生活についておたずねします。

Q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
非常によい	まあよい	どちらともいえない	やや悪い	非常に悪い

Q3. あなたは、現在住んでいる地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q4. あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q5. あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか。

1	2	3	4	5
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	ほとんどない

Q6. あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。

1	2	3	4	5
増やしたい	少し増やしたい	どちらともいえない	少し減らしたい	減らしたい

Q7. あなたは、現在のお住まいの地域で親しくしている人の数が、どちらかといえば多い方だと思いますか、それとも少ない方だと思いますか。

- | | | | | |
|----|------|-----------|-------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 多い | やや多い | どちらともいえない | やや少ない | 少ない |

Q8. あなたは高槻市という地域についてどのようなイメージを持っていますか。

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 良い | やや良い | どちらともいえない | やや悪い | 悪い |

Q9. あなたは、次の項目のようなお住まいの地域の交通や施設やについてどのくらい満足していますか。それぞれお答えください。

A. 電車

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

B. バス

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

C. 医療機関

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

D. 図書館

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

E. 市役所

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

F. 商店街

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 |

Q10. あなたは、高槻市営バスの運行本数についてどのくらい満足していますか。

- | | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 | 知らない |

Q11. あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。

- | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4日 | 週に1~2日 | 月に1~2日 | 年に1~2日 | 利用しない |

Q12へ

Q14へ

Q11で1~5を選んだ方におたずねします。

Q12. 生徒や学生は、バスへの乗車中、マナーを守って行動していると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q13. 生徒や学生以外のバスの乗客は、マナーを守って行動していると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q14へ

Q14. あなたは、最寄りの商店街についてどのようなイメージを持っていますか。

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 良い | やや良い | どちらともいえない | やや悪い | 悪い |

Q15. あなたは、最寄りの商店街へはどの程度買い物に行きますか。

- | | | | | |
|------|----------|----------|----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ毎日 | 週に2~3日程度 | 月に2~3日程度 | 年に2~3日程度 | 全く行かない |

Q16 .最寄りの商店街までは近いですが、それとも遠い
ですか。

- | | | | | |
|-----------|----|-----|----|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| かなり
近い | 近い | ふつう | 遠い | かなり
遠い |

Q17 .高槻市内の路上に駐輪されている自転車に対して、
以下の項目についてそれぞれどのように思いますか。

A . 交通の妨げになる

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

B . 美観を損なう

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

C . 高槻市のイメージが下がる

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q18 .高槻市内の路上に駐輪されている自転車に対して、
今まで以上に規制の強化が必要だと思いませんか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q19 .あなたは高槻市内にある看板が周囲の風景に調和
していないと感じることがありますか。

- | | | | | |
|-----------|-----------|---------------|-------------|--------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく
感じる | やや
感じる | どちらとも
いえない | あまり
感じない | まったく
感じない |

Q20へ

Q21へ

Q19で1または2を選んだ方におたずねします。

Q20 .看板が周囲の風景に調和していないと感じ
る理由として、あてはまる番号すべてにマルをつけ
てください。

- 1 . 看板の色
- 2 . 看板の大きさ
- 3 . 看板の形
- 4 . 看板を設置している場所・位置
- 5 . その他 ()

Q21へ

右上のQ21へ

Q21 .あなたは、高槻市内で行われていた次のような行
事に参加したことがありますか。

A . 高槻シティハーフマラソン 1 . ある 2 . ない

B . 高槻まつり 1 . ある 2 . ない

C . 高槻ジャズストリート 1 . ある 2 . ない

D . 高槻バル 1 . ある 2 . ない

E . 関西大学の行事
(講演会や学園祭など) 1 . ある 2 . ない

Q22 .あなたは地域のボランティア活動などにどれぐら
い参加していますか。

- | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ
毎日 | 週に
3~4日 | 週に
1~2日 | 月に
1~2日 | ほとんど
ない |

<<ここからは、高槻市からの質問です。>>

広報についておたずねします。

Q23 .あなたは、市政の動きや市内の行事・イベントな
どを何によって知りますか。あてはまる番号すべてにマル
をつけてください。

- 1 . 市の広報紙 (広報たかつき)
- 2 . 市のホームページ
- 3 . 市のケーブルテレビ番組
(行政番組「情報BOX ワイドたかつき」)
- 4 . 3以外のテレビ
- 5 . 新聞やラジオ
- 6 . 自治会等の回覧や配布文書
- 7 . 家族や知人
- 8 . その他 ()
- 9 . 特に情報を得ていない

【高槻市からの質問】

Q 2 4 . 現在、「広報たかつき」は毎月 2 回、10 日と 25 日に発行しています。あなたは、「広報たかつき」を読んでいますか。

- Q25
- 1 . よく読んでいる
 - 2 . ときどき読んでいる
 - 3 . ほとんど読んでいない
 - 4 . 知っているが、読んだことはない
 - 5 . 「広報たかつき」が発行されていることを知らない
- Q 2 9 へ

Q 2 4 で 1 または 2 を選んだ方におたずねします。

Q 2 5 . 「広報たかつき」の中で関心をもって読むコーナーの番号すべてにマルをつけてください。

- 1 . 市政に関する記事
- 2 . 行事・イベント・講座・教室のお知らせ
- 3 . 保健等のお知らせ
- 4 . スポーツ等のお知らせ
- 5 . フォトニュース
- 6 . 伝言板
- 7 . その他 ()
- 8 . 特にない

Q 2 6 . 「広報たかつき」の紙面は読みやすいですか。

- | | | | |
|----------------|------------------|------------------|----------------|
| 1
読み
やすい | 2
まあ読み
やすい | 3
やや
読みにくい | 4
読み
にくい |
|----------------|------------------|------------------|----------------|

Q 2 8 へ

Q 2 7 へ

Q 2 6 で 3 または 4 を選んだ方におたずねします。

Q 2 7 . 読みにくい理由として、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|-------------|---------------|
| 1 . 字が多い | 5 . 読みたい記事がない |
| 2 . 写真が少ない | 6 . レイアウトが悪い |
| 3 . 文章表現が悪い | 7 . カラーでない |
| 4 . 文字が小さい | 8 . その他 () |

Q 2 8 へ

Q 2 8 . どの程度の期間、「広報たかつき」を保存していますか。

- 1 . 1 ヶ月未満
- 2 . 1 ヶ月以上 3 ヶ月未満
- 3 . 3 ヶ月以上 6 ヶ月未満
- 4 . 6 ヶ月以上
- 5 . 保存していない

右上の
Q 2 9 へ

Q 2 9 . 高槻市のホームページをご覧になっていますか。

- 1 . 定期的に見ている
 - 2 . 必要などきのみ見ている
 - 3 . ホームページがあることを知っているが、見る方法がない
 - 4 . ホームページがあることを知っていて見る方法もあるが、見たことはない
 - 5 . ホームページがあることを知らなかった
- Q 3 2 へ

Q 3 0 へ

Q 2 9 で 1 または 2 を選んだ方におたずねします。

Q 3 0 . 市のホームページをご覧になるときに使う機器として、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- 1 . パソコン
- 2 . スマートフォンや携帯電話
- 3 . タブレット型端末
- 4 . その他 ()

Q 3 1 . 市のホームページでよく見る情報として、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- 1 . 市営バス案内
- 2 . 公共施設の案内
- 3 . 妊娠・子育ての情報
- 4 . イベント情報
- 5 . 図書館の情報
- 6 . 教育に関する情報
- 7 . 高齢者向け(サービス・制度・保険・施設)の情報
- 8 . 健康と病気・保健所に関する情報
- 9 . 税金に関する情報
- 10 . 戸籍や住民票など行政手続きに関する情報
- 11 . ごみ収集や水道など生活に関する情報
- 12 . 高槻市の歴史や観光に関する情報
- 13 . 街フォト・こちら部長室などのコーナー
- 14 . その他 ()

次ページの Q 3 2 へ

Q32. あなたは、J:COM チャンネル(11ch)を通じて発信している行政番組「情報BOX ワイドたかつき」をご覧になっていますか。

- 1. 更新されるたびに毎回見ている
- 2. 毎回ではないが、たいていは見ている
- 3. ときどき見ている
- 4. ほとんど見ていない
- 5. 知っているが、見たことはない
- 6. 放送されていることを知らなかった

Q32で1～3を選んだ方におたずねします。

Q33. 「情報BOX ワイドたかつき」は30分番組で、毎日4回放送していますが、一番良く見る時間帯はいつですか。

- | | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 午前 | 昼の | 午後 | 午後 |
| 9時00分 | 12時15分 | 6時00分 | 10時15分 |
| から | から | から | から |

この下の左側にあるQ34とQ35に回答して、その後、右側にあるQ36に回答してください。

Q34. 「情報BOX ワイドたかつき」について、インターネット配信があれば視聴しますか。

- | | | |
|-------|--------|--------|
| 1 | 2 | 3 |
| よく視聴 | ときどき視聴 | 視聴 |
| すると思う | すると思う | しないと思う |

Q35. あなたが市から提供してほしい情報として、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- 1. 市が現在実施している事業・施策の進み具合がわかる情報
- 2. 今後の市政の方向がわかる事業・施策などの計画
- 3. 予算や決算など市の財政状況がわかる情報
- 4. 市の窓口や各種制度などに関する情報
- 5. 市の施設の紹介や案内などの状況
- 6. 催しや講座・教室などの案内情報
- 7. 教育に関する情報
- 8. 福祉に関する情報
- 9. 消費生活など暮らしに関する情報
- 10. 人権問題に関する情報
- 11. 道路など都市基盤に関する情報
- 12. 商工業など産業に関する情報
- 13. 子育てに関する情報
- 14. 保健に関する情報
- 15. スポーツに関する情報
- 16. 歴史・文化財に関する情報
- 17. 市民文化・ボランティア活動などの情報
- 18. 市内の出来事・地域の話題
- 19. その他 ()
- 20. 特になし

次に、市政全般についておたずねします。

Q36. 次のa～tは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、あなたが、最近良くなってきたと思うもの(マルはいくつでも) また、あなたが、今後力を入れてほしいもの(マルは3つまで)をそれぞれ選んでください。

力を入れてほしいもの(3つまで)		
良くなってきたもの(いくつでも)		
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 地球温暖化対策	7	7
h. 公園の整備や自然・緑の保全	8	8
i. 街並み・景観の整備	9	9
j. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	10	10
k. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	11	11
l. 下水道の整備	12	12
m. 水の安定供給、上水道整備	13	13
n. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	14	14
o. 身のまわりの生活道路の整備	15	15
p. 交通安全・災害防止対策	16	16
q. 公営住宅の建設や住宅融資制度	17	17
r. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	18	18
s. 安全・安心のまちづくりへの取り組み	19	19
t. 子育て支援	20	20
u. 特になし	21	21

<<ふたたび関西大学総合情報学部からの質問です。>>

Q37. あなたは、情報収集の手段として、インターネット上でやりとりすることをどれくらい重視しますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|----------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 重視する | 少し重視する | どちらともいえない | あまり重視しない | 重視しない |

Q38. パソコンを利用していますか。利用しているとすれば、どれくらいの期間、パソコンを利用していますか。

- | | | | | |
|------|-----------|------------|-------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5年未満 | 5年以上10年未満 | 10年以上15年未満 | 15年以上 | 利用していない |

Q39. あなたは、ご自身のパソコンのスキルについてどう思われますか。

- | | | | | |
|----|------|-----|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 高い | やや高い | ふつう | やや低い | 低い |

Q40. 高槻市にもっと大学が増えると良いと思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q41. 関西大学は、キャンパス・施設等の一般開放による地域貢献をしていると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q42. 関西大学は、公開授業など生涯学習による地域貢献をしていると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q43. あなたは、政治上の出来事にどれくらい注意をはらっていますか。

1. とても注意をはらっている
2. やや注意をはらっている
3. あまり注意をはらっていない
4. ほとんど注意をはらっていない

Q44. 高槻市内にある介護サービスは頼りになると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q45. あなたは日常生活の中で時間的ゆとりを感じますか。

- | | | | | |
|-------|-------|-----------|---------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく感じる | やや感じる | どちらともいえない | あまり感じない | まったく感じない |

Q46. あなたは、情報収集の手段として、人と直接会って話をするのをどれくらい重視しますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|----------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 重視する | 少し重視する | どちらともいえない | あまり重視しない | 重視しない |

Q47. あなたは、家族と1日平均何分ぐらい会話をしていますか。

1. 30分未満
2. 30分以上1時間未満
3. 1時間以上1時間半未満
4. 1時間半以上2時間未満
5. 2時間以上

Q48. 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して、どのように思いますか。

- | | | | |
|----|------------|------------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 賛成 | どちらかといえば賛成 | どちらかといえば反対 | 反対 |

Q49. あなたが生活する地域では、一般的に、ひとりの子どもを育てるための金銭的負担は大きいと思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q50. あなたが生活する地域では、子育てしやすい社会環境が整っていると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q51. あなたが生活する地域では、子育てをしている家庭の子どもを預けあうなど、育児における助け合いがよく行われていると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q52. 育児は母親の役割であると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 5 3 . あなたは、現在、結婚なさっていますか。

- | | | |
|--------------------|--------------------|---------|
| 1
既婚
(配偶者あり) | 2
既婚
(離別・死別) | 3
未婚 |
|--------------------|--------------------|---------|

Q 5 4 へ

Q 5 8 へ

Q 5 3 で「1 . 既婚 (配偶者あり)」と回答された方におたずねします。

Q 5 4 . 配偶者の家事の取り組みに対して、満足ですかそれとも不満ですか。

- | | | | |
|---------|---------------|---------------|---------|
| 1
満足 | 2
やや
満足 | 3
やや
不満 | 4
不満 |
|---------|---------------|---------------|---------|

Q 5 5 . 配偶者の育児の取り組みに対して、満足ですかそれとも不満ですか。

- | | | | |
|---------|---------------|---------------|---------|
| 1
満足 | 2
やや
満足 | 3
やや
不満 | 4
不満 |
|---------|---------------|---------------|---------|

Q 5 6 . 夫婦で1日平均何分くらい会話をしていますか。

- 1 . 30分未満
- 2 . 30分以上1時間未満
- 3 . 1時間以上1時間半未満
- 4 . 1時間半以上2時間未満
- 5 . 2時間以上

Q 5 7 . 配偶者の現在の職業はどれにあたりますか。
(複数の職業に就かれている場合は、主なもの1つにマル)

- | | |
|--------------------|------------|
| 1 . 常時雇用の勤め人 | 5 . 経営者、役員 |
| 2 . 臨時雇用、パート、アルバイト | 6 . 家事専業 |
| 3 . 自営業主 | 7 . 学生 |
| 4 . 自営業の家族従業者 | 8 . 無職 |
| 9 . その他 () | |

右の段の一番上にあるQ 5 8 へ

Q 5 8 . 現在、何人のお子さまがおられますか。

- | | | | | | |
|----------|---------|---------|---------|---------|---------------|
| 0
いない | 1
1人 | 2
2人 | 3
3人 | 4
4人 | 5
5人
以上 |
|----------|---------|---------|---------|---------|---------------|

Q 5 9 へ

Q 6 0 へ

Q 5 8 でお子さまが「0 . いない」と回答された方におたずねします。

Q 5 9 . できればお子さまを持ちたいとお望みですか。

- | | |
|--------|---------|
| 1 . はい | 2 . いいえ |
|--------|---------|

この段の下部にあるQ 6 3 へ

Q 6 0 . あなたのお子さまの中で、一番下のお子さまの年齢はおいくつですか。

- | | | | | |
|---------------|-------------------|--------------------|---------------------|----------------|
| 1
3歳
未満 | 2
3歳以上
6歳未満 | 3
6歳以上
12歳未満 | 4
12歳以上
18歳未満 | 5
18歳
以上 |
|---------------|-------------------|--------------------|---------------------|----------------|

Q 6 1 . お子さまとの外泊の頻度はどれくらいですか。

- | | | | | |
|-----------------|--------------------|--------------------|----------------|----------------|
| 1
月に
1回以上 | 2
半年に
2 ~ 3回 | 3
1年に
1 ~ 2回 | 4
数年に
1回 | 5
全く
しない |
|-----------------|--------------------|--------------------|----------------|----------------|

Q 6 2 . あなたが現在利用している保育施設・事業について、総合的に満足していますか。お子さまが複数の場合は、一番下のお子さまの利用時についてお答えください。

- | | | | | | |
|---------|---------------|------------------------|---------------|---------|------------------------|
| 1
満足 | 2
やや
満足 | 3
どちら
ともい
えない | 4
やや
不満 | 5
不満 | 6
何も利
用して
いない |
|---------|---------------|------------------------|---------------|---------|------------------------|

Q 6 3 へ

Q 6 3 . あなたの世帯の人数を、あなたも含めてお答えください。

人

執筆者紹介

李容玲	(り ようれい)	はじめに・第1章	(関西大学非常勤講師)
松本渉	(まつもと わたる)	第1章	(関西大学総合情報学部准教授)
吉崎雅基	(よしざき まさき)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
木村太一	(きむら たいち)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
藤原邦彦	(ふじわら くにひこ)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
壺井章賀	(つぼい あきのり)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
千貫綾佳	(せんがん あやか)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
吉井実南	(よしい みなみ)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
細見晶歩	(ほそみ あきほ)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
宮本明実	(みやもと あきみ)	第9章	(関西大学総合情報学部生)
竹田友香	(たけだ ゆか)	第10章	(関西大学総合情報学部生)
岡本香帆里	(おかもと かほり)	第11章	(関西大学総合情報学部生)
中村佳世	(なかむら かよ)	第12章	(関西大学総合情報学部生)
高宮智仁	(たかみや ともひと)	第13章	(関西大学総合情報学部生)
木村イチン	(きむら いちん)	第14章	(関西大学総合情報学部生)
勝又隆行	(かつまた たかゆき)	第15章	(関西大学総合情報学部生)
篠原舞	(しのはら まい)	第16章	(関西大学総合情報学部生)
田中隆介	(たなか りゅうすけ)	第17章	(関西大学総合情報学部生)
鄭秀慧	(てい しゅうけい)	第18章	(関西大学総合情報学部生)
北口亜梨沙	(きたぐち ありさ)	第19章	(関西大学総合情報学部生)
大谷優奈	(おおたに ゆうな)	第20章	(関西大学総合情報学部生)
藤田和夫	(ふじた かずお)	第21章	(関西大学総合情報学部生)
田和あかり	(たわ あかり)	第22章	(関西大学総合情報学部生)
竹田幹	(たけだ みき)	第23章	(関西大学総合情報学部生)
上田規子	(うえた のりこ)	第24章	(関西大学総合情報学部生)
松田孝紀	(まつだ こうき)	第25章	(関西大学総合情報学部生)
位田智也	(いだ ともや)	第26章	(関西大学総合情報学部生)
川合智大	(かわい ともひろ)	第27章	(関西大学総合情報学部生)
川口千里	(かわぐち ちさと)	第28章	(関西大学総合情報学部生)
下仲悠希	(しもなか ゆうき)	第29章	(関西大学総合情報学部生)

平成 25 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 平成 26 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—平成 25 年度—』(関西大学総合情報学部[編集], 高槻市・関西大学総合情報学部[発行])があります。本報告書の 3 章～29 章が省略されたものになります。